

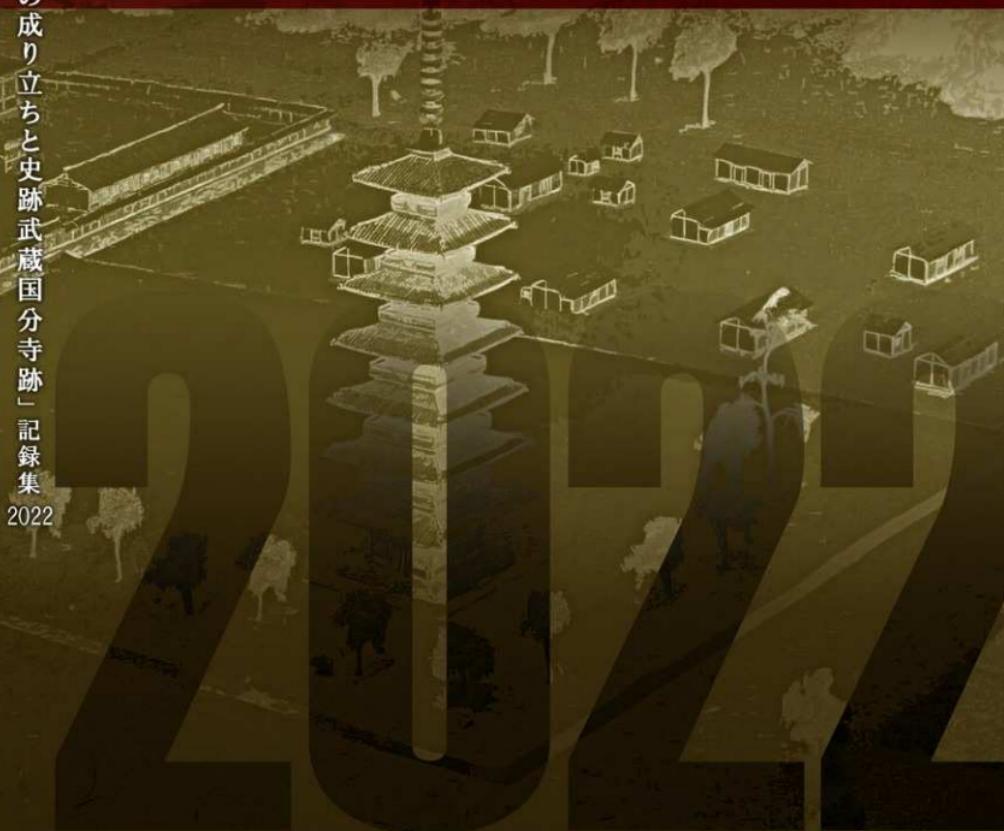
歴史講座

「武藏国分寺の成り立ちと  
史跡武藏国分寺跡」記録集

武藏国分寺跡 史跡指定100周年記念

歴史  
講座

「武藏国分寺の成り立ちと  
史跡武藏国分寺跡」記録集



2022



## 序 文

武藏国分寺は大正11年(1922)に国の史跡として指定を受けてから、令和4年(2022)で100周年を迎えました。JR中央線の前身である甲武鉄道が明治22年(1889)に新宿一立川駅間で開通し、同年に国分寺駅も開業すると、現在の国分寺市域は今日にいたるまで首都近郊の住宅都市として発展を遂げて参りました。都心に程近い立地であるため早くから宅地開発が進むなかで、約100年前に史跡の指定に尽力した方々、その後、史跡の保護に御理解と御協力を頂きました地権者の皆様をはじめ、史跡の価値を語り継いでこられた方々など、多くの関係者の支えがあつて広大な史跡地は守られてきました。今や武藏国分寺跡は、国分寺市が誇る貴重な歴史遺産でもあります。

国分寺市教育委員会では、武藏国分寺跡を今後さらに100年後の未来へと継承してゆくため、令和4年度に史跡指定100周年を記念した様々な事業を実施いたしました。その一つが、ふるさと文化財課と公民館課(もとまち公民館)が連携して6月15日から10月19日の間に開催した歴史講座「武藏国分寺の成り立ちと史跡武藏国分寺跡」です。そこでは、国分寺市域の形成に関わる地形発達史、野川流域の旧石器・縄文時代の遺跡、武藏国分寺の伽藍配置が今日的理得を得るまでの研究史、東山道武藏路の調査とその特質、100年前に武藏国分寺跡が史跡指定された背景などをテーマとした5回連続の座学と、実地を歩くフィールドワークを含めて全6回の企画を立てました。講演会のうち2回は市の職員が担い、3回は近在で御活躍の外部有識者を講師にお招きし、定員をはるかに超える多くの皆様から参加の御応募をいただきました。

また、市教育委員会は、市内泉町に所在する東京都公文書館と10月21日から12月20日までを会期とする共催企画展「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～」を開催いたしました(会場は東京都公文書館)。展示では、江戸時代から大正時代に至るまでの武藏国分寺跡の様子を概観したうえで、史跡指定が実現した歴史的背景を探り、さらに指定の前後にどのような動向があったかを初公開となる公文書を援用しながらとりました。公民館講座の第5回目「武藏国分寺跡の史跡指定とその背景」は、この共催企画展を御担当された東京都公文書館職員の西木浩一氏によるものです。

さらに、令和5年1月22日には東京都教育委員会と市教育委員会の共催で、「第48回東京都遺跡調査・研究発表会」を国分寺市いずみホールで開催いたしました。発表会では、市の職員が近年の武藏国分寺跡の発掘調査成果と、令和4年9月30日付けで市重要史跡として文化財指定しました中藤新田分水跡の事例報告を行い、加えて国分寺市史跡武藏国分寺跡保存整備委員の酒井清治氏(駒澤大学名誉教授)に「武藏国分寺の史跡指定に尽力した郷土史研究者「稲村坦元」の事績」と題する公開講演を行っていただきました。

本書は、講演会や共催企画展を直接御覧いただけなかった方々にも成果の共有をはかるべく、これら令和4年度中に行なった主要な講演会の記録をまとめたものです。とりわけ西木浩一氏と酒井清治氏による2つの講演は、武藏国分寺跡が国の史跡に指定された100年前の歴史的背景を探る意味で貴重な内容を包括しています。編集・発行に際して御協力を頂きました関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、本書が武藏国分寺跡を未来へ繋いでゆくための礎となりましたら幸いです。

令和5年(2023) 3月31日

国分寺市教育委員会  
教育長 古屋 真宏

## 例　言

1. 本書は、令和4年度に国分寺市教育委員会が開催した武藏国分寺跡史跡指定100周年記念事業のうち、東京都公文書館と国分寺市教育委員会（教育部ふるさと文化財課・公民館課）が連携して実施した連続歴史講座と、東京都教育委員会と国分寺市教育委員会が共催して実施した第48回東京都遺跡調査・研究発表会の公開講演の記録をまとめたものである。

2. それぞれの行事の詳細は、以下のとおりである。

### (1) 東京都公文書館・国分寺市教育委員会連携企画

「武藏国分寺の成り立ちと史跡武藏国分寺跡」（もしまち公民館連続歴史講座 全6回）

第1回 令和4年6月15日「国分寺市の地形形成と古代の環境」

野口 淳（金沢大学古代文明・文化資源研究所客員研究員）

第2回 令和4年7月6日「国分寺市域における東山道武藏路の様相」

増井有真（国分寺市教育委員会）

第3回 令和4年7月27日「野川流域の旧石器・縄文時代」

中山真治（日本考古学协会会员）

第4回 令和4年9月7日「武藏国分寺調査・研究抄史」

依田亮一（国分寺市教育委員会）

第5回 令和4年10月5日「武藏国分寺跡の史跡指定とその背景」

西木浩一（東京都公文書館課長代理（史料編さん担当）・認証アーキビスト）

第6回 令和4年10月19日（野外実習）「史跡武藏国分寺跡を歩く」

渡邊典子（国分寺市教育委員会）・国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア

### (2) 東京都教育委員会・国分寺市教育委員会共催「第48回東京都遺跡調査・研究発表会」

令和5年1月22日

公開講演「武藏国分寺跡の史跡指定に尽力した郷土史研究者「稻村坦元」の事績」

酒井清治（駒澤大学名誉教授）

3. 本書の編集は、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課課長新出尚三の監修のもと富山宏水が行い、早川勝義・松崎亜希子・高橋 彩・中野 純・平塚恵介・野田悠真・江里口省三・奥山陽子・酒井美帆・高橋由見江・山下加奈子の協力を得た。

4. 本書は、上記2(1)の第1～6回の講座、および(2)の公開講演の音声記録・配布資料・パワーポイントデータ等をもとに編集し、各講演者により校間を行った。ただし、必ずしも講演順の目次立てとはしておらず、さらに読み物としての体裁を整えるため、当日の発表内容に一部手を加えているところがある。また、使用する用語も各報告者ごとに異なる場合がある(例:史蹟・史跡など)、本書全体で敢えて統一は図っていない。

5. 本書を作成するにあたり、下記の方々や諸機関から御協力・御高配を賜った(順不同・敬称略)。  
瀧澤明日香・高木謙一・安部玄将・鈴木徳子・中沢沙織・野口 舞・平田 健・石井香代子・  
山本典幸・大谷 薫・山口慶一・武笠多恵子・小林 裕・寺西朗平・塚田清啓・橋本 型・  
小西絵美・佐藤悠登・舟木太郎・山崎太郎・宮本由子・中島一成・中根聖可・深澤靖幸・藤野一之・  
東京都公文書館・東京都教育庁地域教育支援部管理課・東京都埋蔵文化財センター・  
国分寺市もとまち公民館・国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア

# 目 次

序文	
例言	
目次	1
史跡武藏国分寺跡 100 年のあゆみ	2
講師紹介	8
① 国分寺市域の地形形成と古代の環境 ..... 9 ●	
野口 淳（金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員研究員）	
② 野川流域の旧石器・縄文時代 ..... 43 ●	
中山真治（日本考古学協会会員）	
③ 国分寺市域における東山道武藏路の様相 ..... 87 ●	
増井有真（国分寺市教育委員会）	
④ 古代武藏国分寺の伽藍—今日的的理解に至った経緯— ..... 125 ●	
依田亮一（国分寺市教育委員会）	
⑤ 武藏国分寺跡の史蹟指定とその背景 ..... 143 ●	
西木浩一（東京都公文書館課長代理（史料編さん担当）・認証アーキビスト）	
公開講演	
⑥ 武藏国分寺跡の史蹟指定に尽力した郷土史研究者「稲村担元」の事績 ..... 167 ●	
酒井清治（駒澤大学名誉教授）	
⑦ フィールドワーク 「史跡武国分寺跡を歩く（野外実習）」 ..... 190 ●	
渡邊典子（国分寺市教育委員会）	
国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア	
⑧ こくぶんじジュニア歴史検定 ..... 192 ●	
⑨ 史跡整備事業 ..... 198 ●	
⑩ 武藏国分寺跡史蹟指定 100 周年記念事業（文化財関連行事） ..... 203 ●	

# 史跡武藏国分寺跡 100年のあゆみ

今から約1300年前の奈良時代は、伝染病の流行、飢饉、大地震、政治の混乱によって社会不安が続き、人々は苦しみの中にありました。そこで、聖武天皇は、仏教の力によって国の混乱を鎮めるために、天平13年(741)に国分寺建立の詔を発布し、当時の60余年に建立された国分寺の一つが武藏国分寺です。

その武藏国分寺跡は、大正11年(1922)に国史跡の指定を受け、令和4年は100周年の節目にあたります。多くの方々のご協力によって大切に保存されてきた武藏国分寺跡が、歴史学習の場、日常の憩いの場として、地域の方々や来訪者の方々にとって、さらに魅力的な場所として未来へ継承するために、今後とも史跡の保護・調査・整備・活用を進めます。



『江戸名所図会』  
国分寺伽藍旧跡  
(国立公文書館所蔵)



大正 11 年  
東京府調査  
〔僧寺七重塔・金堂・西僧坊跡〕



昭和 39 ~ 44 年  
僧尼寺主要堂塔他調査  
〔尼寺尼坊跡〕



東京都指定有形文化財  
武藏国分寺跡出土の  
綠釉花文皿



武藏国分寺跡創建期瓦



鬼瓦

## ○史跡地公有化事業着手

### ●環境整備僧寺中枢部

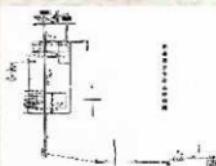
### ◆追加指定④(僧寺中門西方)

### ◆追加指定①(僧寺東僧坊)

### ◆追加指定②(尼寺南東部)

### ◆追加指定③(僧寺南門西側)

国分寺建立の詔 741	M36	T8	T9	<b>国史跡 指定 1922</b>	S31	S39	S40	S46	S49	S51	S54	S57	S61	H4	H10
	■基礎分布調査			■東京府調査					■寺域確認調査 (S49 ~ 60)				■整備に伴う先行調査 及び寺域確認補足調査 (S61 ~ H 3・13・14)		
		■東京府史の記念物天然 紀念物勝地調査票記入			■日本考古学協会仏教遺跡調査 特別委員会発掘調査 (S31・33)										



明治 36 年  
礎石分布調査による  
主要建物・伽藍配置の復元



昭和 31 年度  
本格的発掘調査の開始  
〔僧寺金堂跡〕



昭和 39 ~ 44 年  
僧尼寺主要堂塔他調査  
〔尼寺七重塔跡〕



昭和 47 ~ 48 年度  
市立四中学校建設に伴う  
第 1 次調査 (修理院推定地)



大正 11 年(左)と令和 2 年(右)の史跡武藏国分寺跡(僧寺中枢部)

武藏国分寺跡は史蹟名勝天然紀念物保存法が大正 8 年に制定された翌年より東京都が調査を行い、大正 11 年に国史跡の指定を受けます。指定後の調査報告書には、「現存国分寺跡中規模尤も雄大なるものにして、大正 11 年 10 月内務省より史蹟の指定受けたり。」と記されています。

これまでに 11 回(下記年表中①～⑪)の追加指定により、府中市域の参道口を含めて、約 165,000 m<sup>2</sup>を越える範囲の保護と活用を図っています。平成 22 年度には東山道武藏路跡が附指定され、僧寺・尼寺・古代の官道が一体となった全国でも稀有な史跡となりました。



昭和 49 ～ 60 年度  
寺域確認調査  
(僧寺伽藍地区面溝南東隅)



平成 15 年度  
市立歴史公園武藏国分尼寺跡  
開園



平成 30 年度  
市立歴史公園武藏国分寺跡  
(僧寺中枢地域) 開園



令和 4 年度  
僧寺金堂跡前の史跡指定標柱



H14 H15 H16 H17 H18 H20 H21 H22 H23 H29 H31 R2 R3 R4 2022

■僧寺地区整備に伴う遺構確認調査 (H15～24)

■僧寺地区  
事前遺構確認調査

■尼寺地区整備に伴う遺構確認調査 (H 4～7)



昭和 61 ～平成 3・13・14 年度  
整備に先行する調査及び寺域確認補足調査  
(僧寺伽藍中枢部区画施設南辺)



平成 4 ～ 7 年度  
尼寺地区史跡整備に伴う確認調査  
(尼寺金堂跡発掘調査)



平成 15 ～ 24・令和 2 年度  
僧寺地区史跡整備に伴う確認調査  
(僧寺金堂跡発掘調査)



東京都指定有形文化財  
銅造觀世音菩薩立像

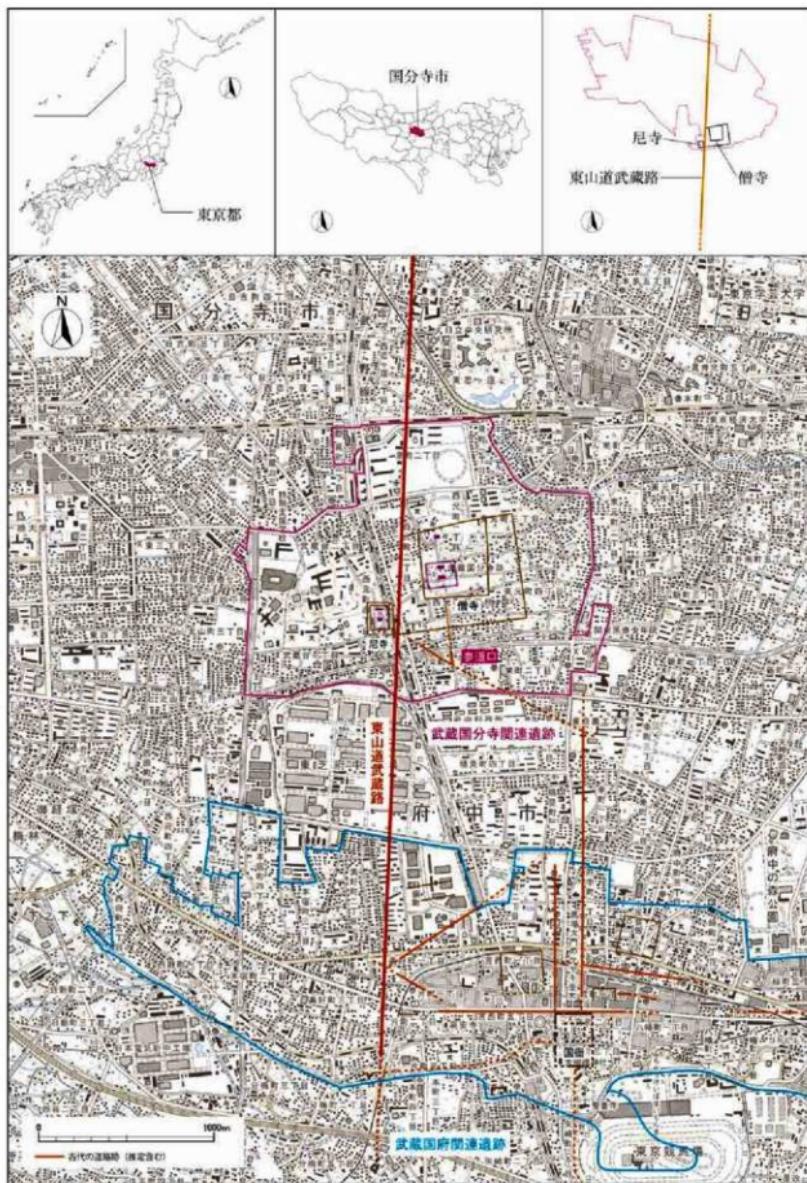
大正11年(1922)10月12日に  
史跡指定を受けた国分寺跡

史跡指定100周年

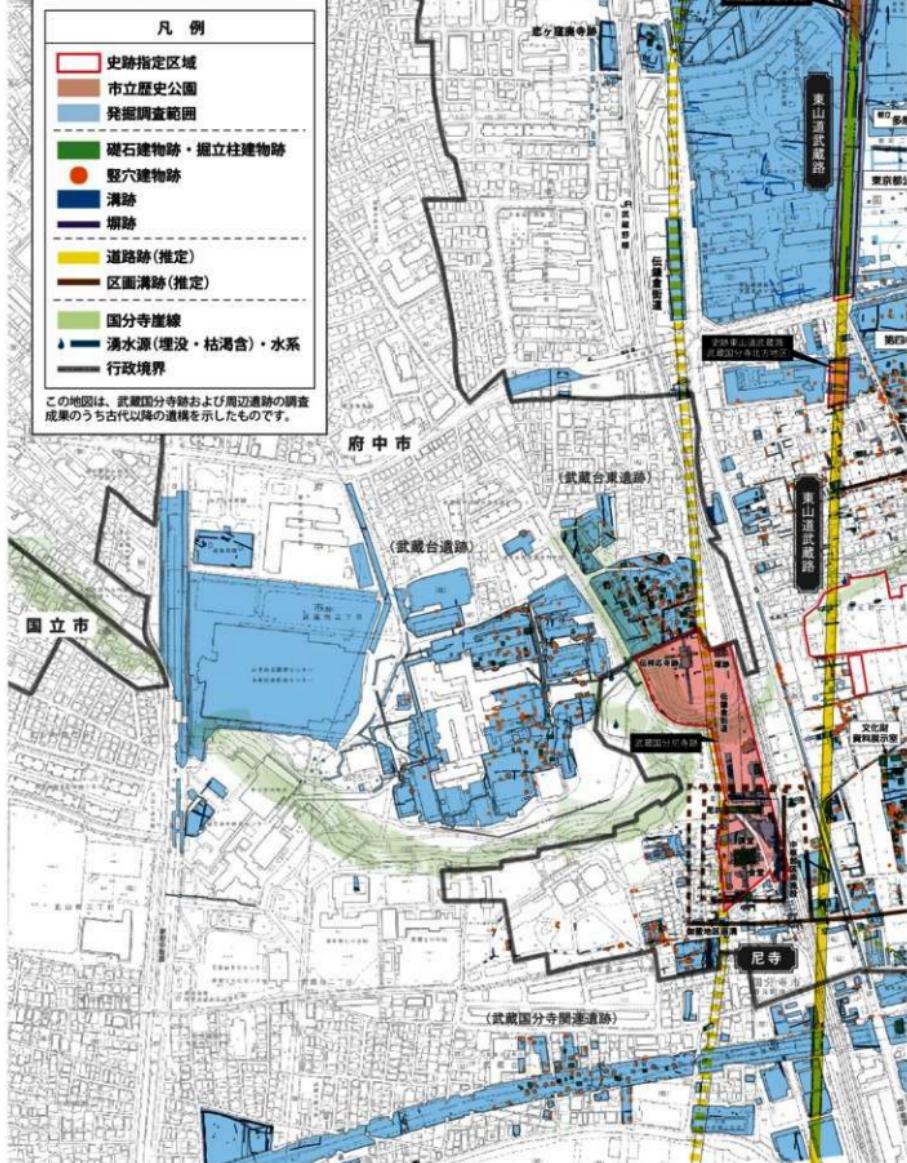
武藏国分寺跡と同じく、令和4年  
(2022)に史跡指定100周年を迎えた  
全国8箇所の国分寺跡

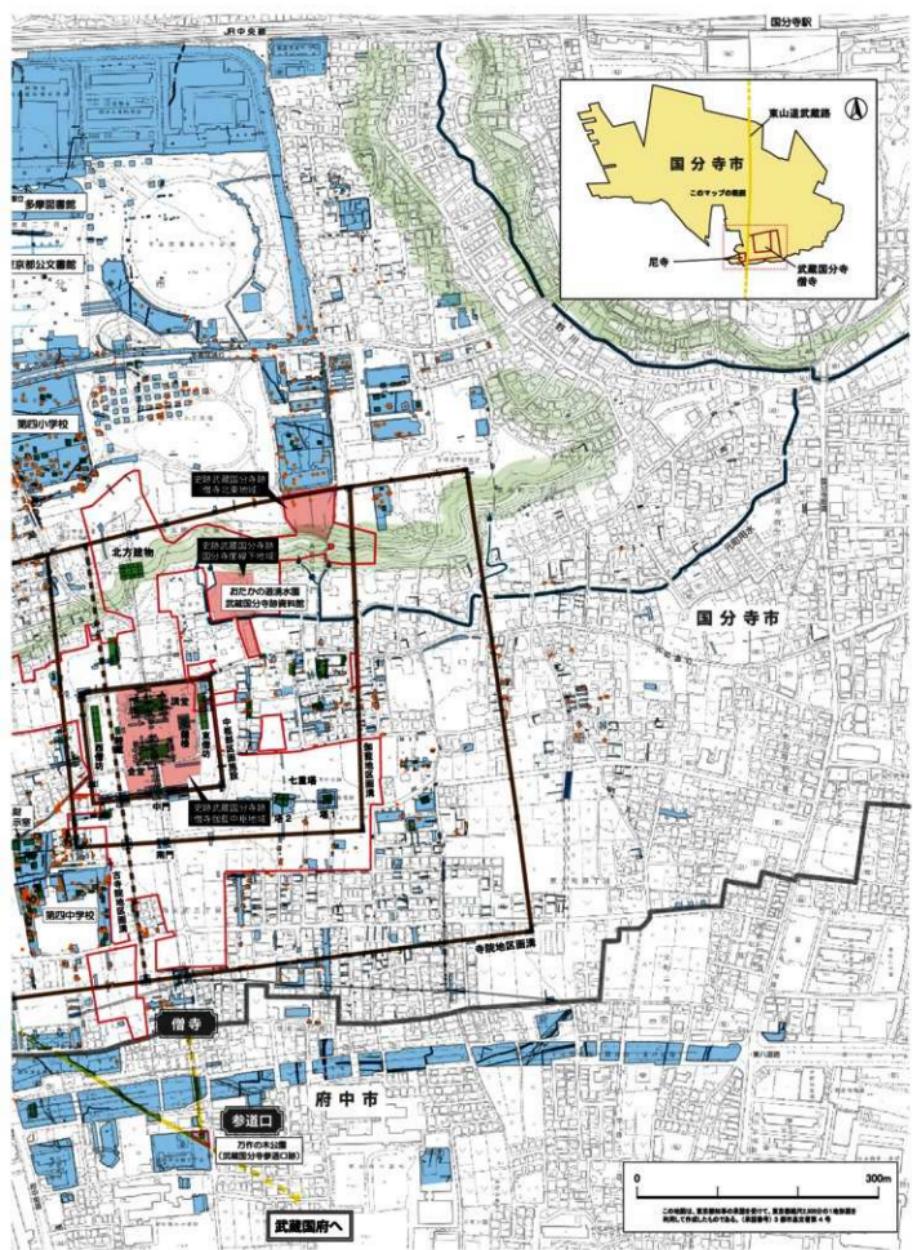


- 東海道**【史跡】武藏国分寺跡（東京都国分寺市）
- 東海道**【史跡】伊勢国分寺跡（三重県鈴鹿市）
- 東海道**【史跡】三河国分寺・三河国分尼寺跡（愛知県豊川市）
- 東海道**【史跡】甲斐国分寺跡（山梨県笛吹市）
- 東海道**【特別史跡】常陸国分寺・常陸国分尼寺跡（茨城県石岡市）
- 東山道**【史跡】陸奥国分寺跡（宮城県仙台市）
- 山陽道**【史跡】備中国分尼寺跡（岡山県総社市）
- 南海道**【史跡】土佐国分寺跡（高知県南国市）
- 西海道**【史跡】筑前国分寺跡（福岡県太宰府市）



## 武藏国分寺跡全体図





## 講師紹介



野口 淳 (のぐち あつし)

金沢大学古代文明・文化資源学  
研究所客員研究員  
日本考古学協会会員

おもな著書···  
『武藏野に残る旧石器人の足跡・  
砂川遺跡』新泉社、2009年  
ほか

武藏国分寺跡の周辺には、僧寺・尼寺の建物や東山道武蔵路など人が作り出したものだけでなく、当時の地形や景観に関する証拠も地中に埋もれています。発掘調査の成果からパズルのピースを見つけ出し、つなげていくと武藏国分寺の当時の姿がよりリアルに見えてくるでしょう。



増井 有真 (ますい ゆうま)

国分寺市教育委員会  
ふるさと文化財課  
文化財保護係長

おもな著書···  
『古代道路を掘る—東山道武蔵路  
の調査成果と保存活用—』  
2017年

東山道武蔵路は、史跡武藏国分寺跡を理解する上で重要な道路遺構であることから、平成22年に附として史跡に追加指定されました。国分寺市内の東山道武蔵路の調査では、平地・斜面地・湿地などの地形を攻略するための復路や、寺院の変遷に伴う道路の再整備の様相が明らかになっています。古代律令国家が目指した新しい日本の姿を象徴する古代道路の実態を市内の調査成果から紹介します。



中山 真治 (なかやま まじ)

三鷹市スポーツと文化部  
生涯学習課  
日本考古学協会会員

おもな著書···  
『考古学の地平I—縄文社会を集落から読み解くー』(共編著)  
六一書房、2016年ほか



依田 亮一 (よだ りょういち)

国分寺市教育委員会  
ふるさと文化財課  
史跡係長

おもな著書···  
『国指定史跡武藏國分寺跡発掘  
調査報告書Ⅱ(遺物編)』(共編著)  
2018年

国分寺市には国史跡武藏国分寺跡以外にも、多くの貴重な遺跡があります。国分寺市内に源流をもつ川流域には、有数な旧石器・縄文時代の遺跡が知られていて、これまで数多くの調査が行われてきました。ここでは調査研究史と、主な遺跡の特長について探っていきます。



西木 浩一 (にしき こういち)

東京公文書館長代理(史料編  
さん担当)・認証アーキビスト

おもな著書···  
『みる・よむ・あるく東京の歴史  
全10巻(共編著)吉川弘文館、  
2021年ほか

令和2年に市内泉町へ移転し、リニューアルオープンしました東京都公文書館には、明治元年から昭和18年にいたる東京府・市の公文書が多数保管されています。関東大震災や戦災から免れ、今日まで伝来してきた貴重な史料群から、武藏国分寺跡がこの史跡として指定を受けた歴史的背景について御紹介いたします。



酒井 清治 (さかい きよじ)

駒澤大学名誉教授  
国分寺市史跡武藏国分寺跡  
保存整備委員会委員

おもな著書···  
『古代関東の須恵器と瓦』同成社、  
2002年。『新府中市史 原始・古  
代 資料編 3 考古資料編2』(共  
著)府中市、2021年ほか

武藏国分寺跡を史跡指定するため、遺跡をくまなく踏査して詳細なレポートをまとめた東京府の職員に福村担元という人物がいました。福村は信頼につきながらも仏教史や考古学に精通し、その後、東京と埼玉をまたにかけ数多くの史跡や文化財の保護に奔走しました。100年前の史跡指定に深く関わった福村の事績を追いかながら、一人の地域史研究者の姿勢を学びます。

# ① 国分寺市域の地形形成と古代の環境

金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員研究员 野口一淳

今日の話の内容ですが、図1はランドサット衛星画像です。普通は平らに写るのですが、国土地理院が持っている地形の標高のデータと重ねると3Dになります。立体的になるので、奥多摩のほうが高くなっていますが、そういうものを作ることができます。

画面のちょうど真ん中が国分寺市ぐらいです。本日は国分寺市周辺の地形の成り立ちについて話をいたします。

最初に用語の簡単な整理をしておきます。

「地形」と「地質」と「境界」と「景観」という用語は、似ているようなのですが、少しずつ違うので、ご説明いたします。「地形」というのは読んで字のごとく、地面の、地表面の起伏とか凸凹、坂道だったり谷があったりというものになります（図7）。もっと大きなものだと山とか川とか平地、平野みたいな名前がついています。ただ、

その「地形」というのも実は最初からそのようにあるわけではなくて、この後説明する「地質」と「境界」の条件によって作られるものです。人類の歴史の中ではあまり変わらないのですが、長い時間で見ると、実は結構変わっていたりします。というものだとまず覚えておいてください。

次に「地質」です。地質というのは地面の下の地層や岩石の種類と、その性質であると辞書に書いてあります。どうしたことかというと、人間で例えると、地形というのは皮膚の状態です。鼻が高いとか、ほっぺたが丸いなどというもので、地質というのは皮膚の裏側、例えば筋肉とか骨格などに相当します。かつては「地質学」と呼んでいたのですが、今では「地球科学」の分野とされます。地球全体の構造、成り立ち、状態などを研究する学問の中に含まれています。例えば地形に関わるところでいうと、地層、岩石の硬さ、硬いところ

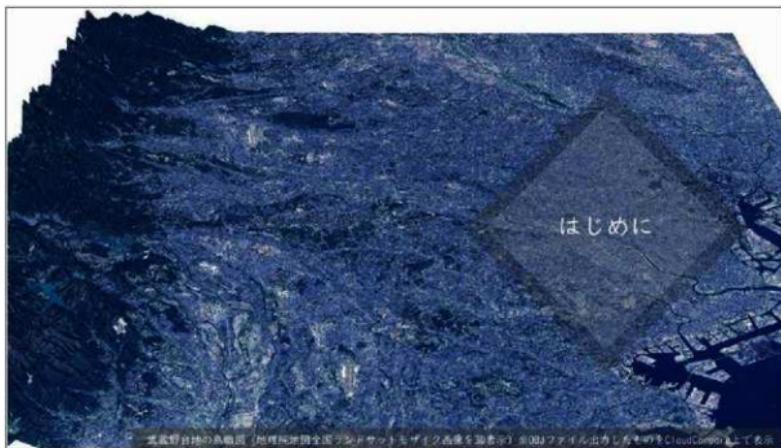


図1 武藏野台地の鳥瞰図

ほど削られにくいので、なかなか谷にならず、高いまま残り、柔らかい地層のところはどんどん削られるので、谷が深くなっていくというのがあります。

それから立川断層というのが、武藏村山市から立川市を通って段差になっていますが、地震などが起きたときに地形が変わったりする。その変わるものというものが地質の構造で決まっているのですが、「地質」には、そういうものも含まれています。

次に「環境」です。「環境」というのもいろいろな意味があるのですが、大きく見て、ここでは人が暮らす地域を取り巻く状態、条件の全般的なものとしておきます。もっと狭い意味でいと、例えば森とか川などの自然環境をいと理解されることもありますが、さらに気象条件(気候環境)、地面の上を流れている水や、地下水などの水環境もあります。

それから植生もありますし、それらが生えている場所の土壌、土の状態も一体につながっています。そこに暮らしている昆虫など様々な動物、生き物も環境に含まれます。

「地形」や「地質」、「地形」に関しては、最近では私たちが大規模な土地開発を行った結果として的人工地形もありますが、地球全体で見ると「地形」や「地質」というのは基本的に自然の状態です。「環境」は前提としてそこにあるだけでなく、私たち自身が取り巻く条件に働きかけ改变すること

で、人工的な環境条件がどんどん広がっています。特に都市部だと人工的な環境条件が多く、もうかれこれ何十年も言われていますが、都心部は周りよりも気温が高いヒートアイランド現象があり、最近だと都心部がヒートアイランドにより集中豪雨が降りやすいということもわれたりします。この辺りの気候とか水環境は、人の活動によつても変わってくる。「地形」や「地質」に比べるともっと短いスパンで変化しています。

最後に、「景観」という言葉が出てきます。「景観」というと、環境とはほぼ同じと受け止められることがあるのですが、ここではもうちょっと踏み込んで、まず辞書を見ると、「景観」というのは日常の中の風景や景色と書いてあります。風景や景色が「環境」と何が違うかとすると、その風景や景色を見ている人がいないと「景観」が成り立たないということです。ですので、「環境」というのは、例えば人が住んでいても「環境」はあるのですが、「景観」といったときにはそこに人が暮らしていて、例えばそこに山があるとか、ここは日陰で涼しくて気持ちがいいとか、そういう見ている、そして感じているという、環境との相互作用の中で生じる概念だと理解しておいてください。ということで、「景観」は「環境」以上にその自然の要素だけではなくて、人工的な要素、あるいは人間がどう認識するのかということがより強く影響するということになってきます。

今日のテーマは、昔の環境です。非常に古い時



地図や写真が残されていない、もっと昔の環境や景観を知るには?  
どのような手がかりがあって、何を調べたら分かるのか?

図2 三鷹市・調布市下原・富士見町遺跡の発掘調査 2004～07年

代の環境や景観というのをどうやって知るのか、ということに関わってきます。私は、もうかれこれ15年間くらい前に、三鷹市と調布市の境にある明治大学附属中学校、高等学校の建設前の発掘調査を担当していて、図2はそのときの写真です。

これを見て分かることおり、地面の下をどんどん掘っていって、一番深いところで3メートルぐらいたまで掘ったのですが、明治高校の場所だと大体3万年前ぐらいの地層に到達します。つまり地面を下へ下へと掘って行くと、昔の地形とか環境の情報がそこに埋もれているということになります。現在の地形とか環境というのは、例えば写真

とか地図を見て調べたり、あるいは現地に行って直接体験することができますが、昔の環境とか景観というのはそういう調べ方ができないので、基本的には、考古学と地理学や地質学の研究者で、共同で研究を行います。考古学者は人間の活動の痕跡を発掘して調べます。地理学や地質学者はこの地層の中からサンプルを取って、顕微鏡で観察したり、いろいろな分析をして、どういう植物が生えていたのかを知るために花粉を探したり、あるいは水が流れていたかどうかというのを調べるために珪藻という小さなプランクトンの一種を探したり、あるいは富士山や箱根火山が噴火して



図3 講師自己紹介



図4 文化財・文化遺産の3D記録



図5 銅造觀世音菩薩立像 3D画像

降ってきた火山灰が入っているかどうかということを調べたりして、専門分野ごとに分担して、昔の環境や景観を復元するということをやっています。

それらを全部合わせて今日は「地形」・「地質」・「環境」・「景観」から見て、国分寺市と、それから武藏国分寺について考えてみます。地質と遺跡の発掘から見えてくる地層や堆積、そして考古学の成果から何が分かるのかが主題です。

ところで、本題に入る前にちょっとだけ自己紹介させてください（図3）。

私の専門は考古学の中でも一番古い旧石器時代

です。大学院生の頃は、国分寺市にお世話になつて、多摩療育センターの西側の多摩蘭坂遺跡から出土した石器を分析するお手伝いをしていました。

その後、日本以外、南アジア、パキスタンやインドなどで旧石器の遺跡の調査をしていました。

その時に現地の人から考古学の発掘調査だけではなくて、文化遺産の記録とか保存の協力もしてほしいという要望もあり、3D計測など最新のデジタル技術にとづく文化遺産保護の取り組みも行っています（図4）。興味ある方いらっしゃいましたら、図3で示した本も書いたりしておりますので、図書館等で探していただけたらと思います。

図4右は、3D計測による文化遺産保護の取り組みの一例です。世界遺産の遺跡を3D化したり、その技術を現地へ伝えたりしています。

文化財の3D計測の取組みは、実は今年から国分寺市でもやっていまして、武藏国分寺跡資料館で展示されている武藏国分寺跡から出土した銅造觀世音菩薩立像も3D化しています（図5）。ふだんはガラスケースの中に入っている都の指定文化財なので、簡単に手に取って見ることなどでき



図6 国分寺崖線の鳥瞰図

ないので、裏側とか頭のてっぺんとかどうなつているのか見てみたいなと思ってもできません。こういうものを3Dにして、インターネットで見られるようにするためのお手伝いもしております。

では話を戻します。日本列島は全国各地に遺跡がたくさん見つかるのですが、これらのデータを集め、地図の上にいろいろと分布図を作ることで、過去、どこに人が住んでいたのかとか、どういう暮らしをしていたのか、もっと広い範囲で考える取り組みも進めています。

2020年に『多摩のあゆみ』第179号で、「赤色立体地図で見る東京の4万年」という短い文章を書かせていただきまして、東京の遺跡分布で旧石器時代から江戸時代までどういうことが分かるのかということをまとめました。この成果についても後で取り上げます。

それでは、国分寺市をめぐる地形・地質・環境・景観の話に入りたいと思います。図6は衛星画像ではなくて飛行機から撮った航空写真ですが、普通の写真と違って、国分寺崖線と府中崖線が立体的に見えます。これも図1と同じように国土地理院が作っている標高のデータと合わせて立体的に見えるようにしています。こういうように、現在

ではもう全部住宅とかビルになっているのですが、よく見ると地形が見えてきます。現地に行くときは、坂道がどこにあって、どちらに登って、また下るのは何でだろう、ということに注意してみてください。それは実は連続で見ると谷が入っているとか、台地がどこまで続いているのかを理解する手掛かりになります。たとえば、恋ヶ窪から国分寺駅へ一旦谷に降りて、また登ったりするのは、そこに「恋ヶ窪谷」があるからです。そして、何でそこに谷があつたり、坂があるのかというのは全部理由があるのですね。そのあたりをまず説明していきたいと思います。

最初は地形と地質です。最初に確認したことのおさらいですが、地表面の起伏、凹凸とその形や地面の下の地層や岩石の種類と性質ということを最初に見ていきたいと思います。先ほど見た航空写真とか衛星画像（図1・6）で見ると、建物がびっしりあるのでなかなか状態が分かりません。ですので、図7は起伏に関するデータを取り出して、色分けをしたものです。青っぽい、水色っぽいところほど標高が低くて、緑、黄緑、黄色、茶色という、順を追ってどんどんと標高が高いというのを示す、よく地図帳で見る色分けをしたもの

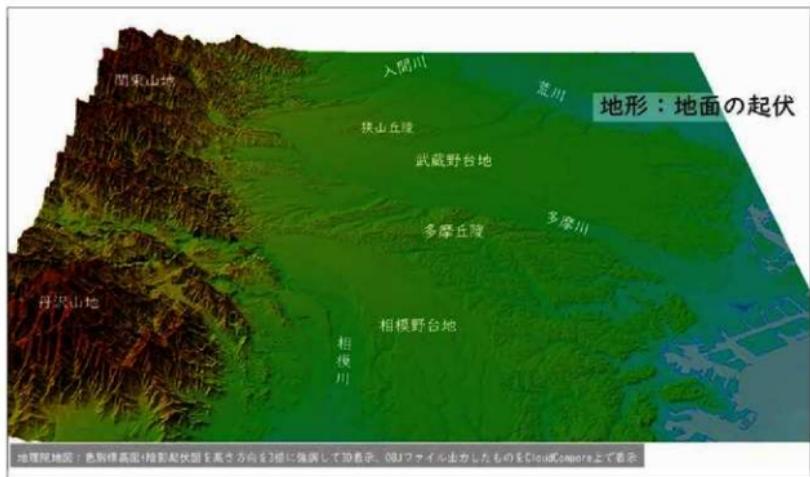


図7 武藏野台地の鳥瞰図

になります。

国分寺市、ちょうどここにありますね。国分寺市の南側は、周りよりちょっと色が緑から青っぽくなっている。ここは多摩川が流れている場所になります。その南に行くとまたちょっと高くなつて、かつ皺々です。国分寺がある側、武蔵野台地よりも皺が深いあたりは多摩丘陵です。今、多摩ニュータウンができるまで本来の地形が分かりにくくなっていますが、実際にはこのような形で、国分寺市とか府中市がある側と地形が大分違うというの分かります。

多摩丘陵を越えると、またちょっと平らなところがあつて、相模野台地と呼ばれている地形です。大和市とか綾瀬市とか南のほう、藤沢市とか。北は相模原市などの範囲です。さらに西側はどんどんと茶色くなっていく、山になります。関東山地です。奥多摩と言つたほうが分かりやすいかもしません。青梅線とか五日市線で山登りに行くようなところです。南よりの谷が相模川、それより南が丹沢山地になります。

こうやって見ると、山地の東端は結構直線的になつていています。そこより東側が急に真っ平になるのではなくて、ます傾斜が変わります。色の変化が緩やかになっていく。さらに二段階で緑が

濃い部分、つまり台地と、水色の部分、つまり平地となります。例えば川崎市の武蔵小杉よりも南側、大田区の南側などが平地あたります。さらに東側、千代田区の東端から中央区、さらに南と東は江戸時代以降の埋立地もあるようなところです。北側に見えているのは荒川低地です。高島平などです。このように関東平野の南部は、大きく見ると三段階ぐらいに区分されます。標高別の色分けに凹凸・起伏のデータも加えると、よりはつきり見えると思います。

今、三段階、山地、台地、低地と言いましたが、こうやって見てみると、もう1つ気づくことがあります。山地はとにかく高いとか、斜面が急なだけでなく、ぎざぎざで、細かい凹凸とか谷がたくさん入っています。同じ視点で台地の範囲を見ると、多摩丘陵から横浜にかけての丘陵、それから北側の狭山丘陵が標高は山地ほど高くないけれども皺々で、凸凹が激しい地形になっています。それに比べると、武蔵野台地とか相模野台地というのは、全体にべたっと平らな状態になっています。

何でこのような差が出てくるのかということをこれから考えます。実は、皺々が強いところほど古い地形なのです。新しい地形は平らでつるつるです。どういうことかというと、古いところとい

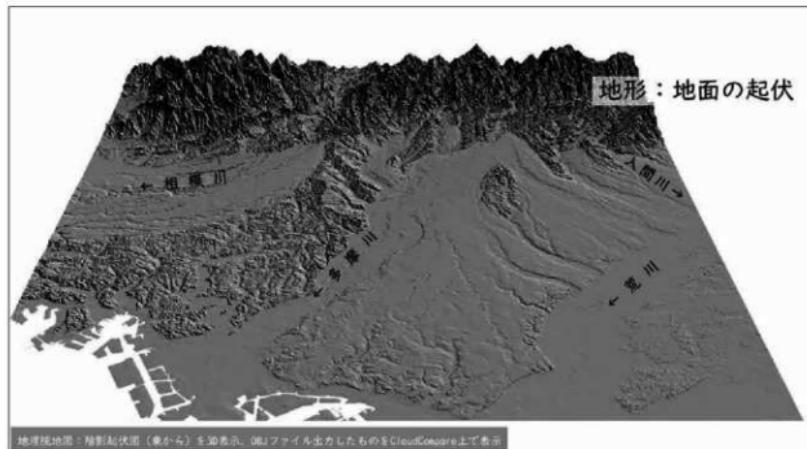


図8 地形：地面の起伏

うのは長い間風雨にさらされて、雨が降るとその水が流れ地面を削ったり浸食したりするので、その期間が長ければ長いほど凹凸がどんどん大きくなっています。そのような視点で見ると山地が一番古く、次に多摩丘陵と狭山丘陵、台地は少し新しいのだなというのが見えてくると思いません。それらに対して、低地はもっとずっと新しいということになります。

凹凸を示す地図の向きを変えて、東から西を臨んでみます（図8）。山地の裾が直線状になっていることがもっとよく分かるのではないかと思います。ここに川を入れてみると気づくことがあると思うのですが、山から川が放射状に流れ出しており、例えば多摩丘陵が多摩川と相模川の流れの間に挟まれる形で広がっているように見えると思います。

それに対して、荒川は多摩川や相模川、入間川など台地の西側の山地から流れてくる川とは異なる方向に流れています。このように国分寺市を含む武藏野台地、南の多摩丘陵、相模野台地は、荒川とか利根川が作る地形とは違って、関東山地とそこから流れ出す川でできているということが見えてきます。ここまでが地形のお話です。

次に、地質についても考えます。地形データは

国土地理院というところが飛行機を飛ばしたり、衛星を使ったりしてデータを集めて地図を作っています。地質データは、産業技術総合研究所の地質研究センターが調べています。例えば道路工事とか建設現場のときに地層を調べたり、ボーリング調査をしたりします。あるいは山中を歩き回って、斜面にどういう岩石があるのかというのを調べて、それを地図に落としていくという、すごく地道な作業をされて、日本全国の地質図というのを作っています。

そのデータを先ほどの陰影図に重ねるところなります（図9）。今日は地質のお話ではないので、あまり細かいことは触れませんけれども、ぱっと見て、まず山地は色とりどりに分かれているに対し、台地とか丘陵とか低地は全体的に同じ色になっているのが分かると思います。これどういうことかというと、山地は地面の下の地質もまちまちなのです。地形も凸凹して複雑であるとともに、地質も複雑です。丘陵や台地、低地は、大体その範囲全体が同じ地質になっています。ここで見ると狭山丘陵だけちょっと違う地質になっていますね。多摩丘陵と狭山丘陵は、地質で見ると実は同じです。同じような条件のところが周りより高く削り残されていて、凸凹の強い地形になって

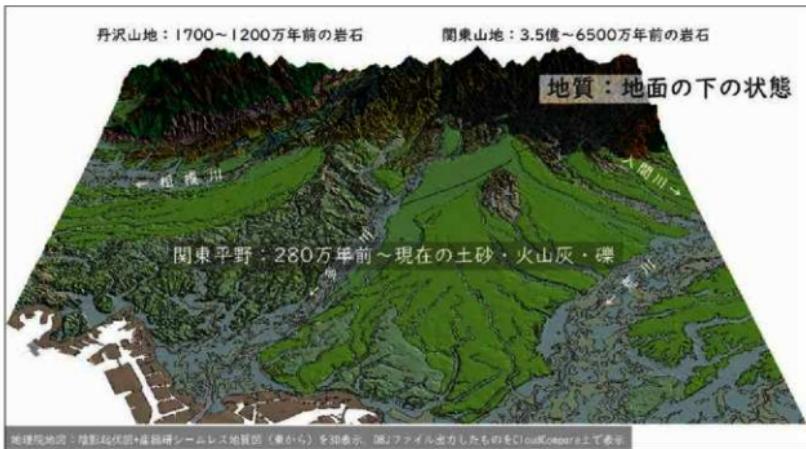


図9 地質：地面の下の状態

います。

相模川より北側、多摩川とか入間川の上流を含む関東山地は、実はとても古い地質です。3億5,000万年前から6,500万年前ぐらいの岩石でできています。恐竜とか古生物が好きな人だとピンとくるかもしれないのですけれども、中生代と呼ばれる時代です。両生類から爬虫類が進化して恐竜になって、絶滅する時代範囲の地層でできています。陸ではなくて、海の底にたまたま泥や砂が長い時間と圧力がかかって岩になったものが中心です。中には南の海で作られたサンゴ礁の痕跡、サンゴ礁が変化した石灰岩も含まれています。それがプレートテクトニクスにより、何億年もかけてアジア大陸の端っこに積み重なって、なおかつ盛り上がって陸上で貝の化石なども見つかったりします。

南の丹沢山地はもう少し新しくて、1,700万年前から1,200万年前ぐらい、哺乳類の時代のものです。実は丹沢山地というのは、海底火山の名残なのです。南の海にあったものが、関東山地と同じように海底のプレートに乗って動いてきて、海底火山の塊が丸ごと日本列島にのし上がってきたものになります。ですので、関東山地側は砂や泥が固まった岩石が多いのですが、丹沢山地側は溶

岩とか火山灰が固まったもので、地質の違いとでてきた年代が違うというのが分かります。

さらに南にある塊が箱根です。箱根山はまだ現役の火山です。箱根から西に行くと富士山がありますし、南に行くと天城山などあって活火山です。丹沢はもうとっくに活動が終わってしまった名残なのですけれども、南から次々に火山が来て日本列島にぶつかって、重なっています。今後何百万年もたつと、例えば大島は海の上にある火山島ですが、本州にいずれ付け加わることになります。

それに対して、東側の関東平野はもっと新しいです。一番古いところ、多摩丘陵とか狭山丘陵の一一番古い地層が280万年前ぐらいで、それ以降、現在までの地層です。基本的には山が削られ土砂となって、川が運んできてたまたものです。図9の緑色と薄緑色の範囲です。関東山地など、山地は硬い岩です。そこを雨が降って少しづつ削って、石とか砂利、砂になったものが平地側にどんどんたまっていきます。武藏野台地も、多摩丘陵も、相模野台地も、山から流れてきた土砂が堆積したもののです。

このプロセスは今も続いている、台地や丘陵は大体たまるのは終わってしまった場所なのですが、多摩川の低地とか、相模川の低地とか、荒川

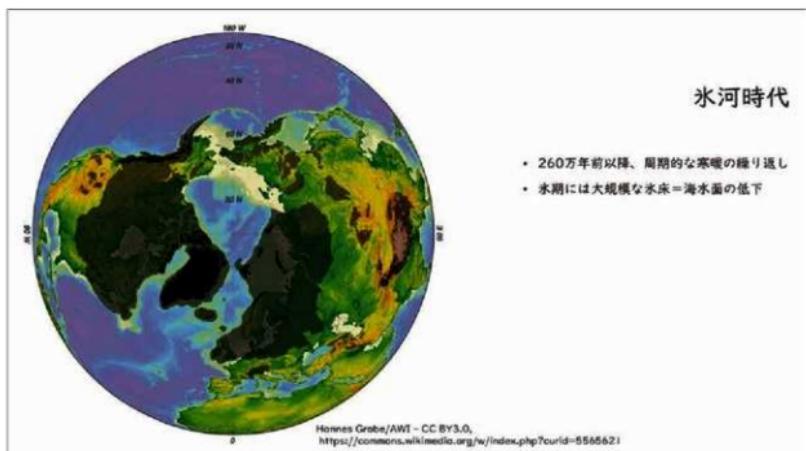


図10 氷河時代

の低地は、今でもどんどん、毎年土砂がたまっていく。少しずつかさが増えていく場所になっていきます。

ということで、西側に山地があって、その東側の真ん中に台地や丘陵があって、さらに東側が平地、平野になっています。山地というのは非常に古くて、しかも硬い地層からできていて、そこからどんどん削られてきたものが東側にたまっているのです。

では、続きまして国分寺市の地形の成り立ちを見ていただきたいと思います。

ここまで地形・地質の状態に加えて、それがどうやってしていくのか、つまり地形や地質がでていく過程、歴史までをお話をしました。地形発達史とも言います。その時間軸は数十万年から数億年前という、人類の歴史とはスケールが全然違います。

ここからは、人類の歴史と重なる範囲と言うことで、もう少し身近になってきます。ただし、私は旧石器時代を専門に研究しているので身近に感じているのですが、それでもまだ数万年という時間軸なので、皆さんからしてみると全然身近ではないかもしれません。

前提知識を共有したいと思います。丘陵や平野ができた時代というのは、実は氷河時代でした(図10)。今から260万年前ぐらい、その時期を境に地球全体が繰り返し暖かくなったり寒くなったりを、十数万年の間隔で繰り返すようになりました。この時代全体のことを氷河時代といいます。

よく誤解されていて、氷河時代はずっと寒い時代だったと思われているのですが、そうではなく暑かったり、寒かったりを繰り返していました。地球科学的には、現在も氷河時代です。現在は、気候は暖かいし普通に暮らしているではないかと思うのですが、いずれまた、すごく寒い時代が来ます。私たちはまだ、暑い寒いを繰り返す時代の中の、ちょうど良い暖かさの時代に生きているのです。

何でそういうことが起こるかというと、実は地

球が太陽を回る軌道が真円ではなく、ちょっとゆがんで楕円なためです。この楕円形の軌道上を、11万年ぐらいの周期で太陽により近いところを回るようになる時期と、遠いところを回る時期が繰り返し、少しずつ振り子のように動いています。太陽からの距離が遠い時期は当然ですけれども、太陽から受ける熱エネルギーが少なくなるので気温が下がります。

ほかにも、周期的に気候が変動する要素があります。地球の自転軸も安定せず、コマを回したときの終わりころのようふらふらとします。これは、先ほどの楕円形の公転軌道上の変化よりもっと短い間隔、4万年とか2万年といった単位で変動します。自転軸の傾きが大きくなると、冬に太陽の光の射す角度が浅くなるので、より寒くなります。

一方で、夏は太陽の位置が真上により近くなるので、暑くなります。その繰り返しの中で、地球が公転軸上で太陽から一番遠く、かつ自転軸上で傾きが最大のタイミングに来る冬がものすごく寒くなる。現在は、そのような条件の中では、人間にとって住みやすい非常によい状態です。太陽からのエネルギーを最もよく受け取れて、かつ夏と冬の気温差もそれほど大きくない、最近では地球温暖化の影響もあり、夏は暑くて大変言うのですが、実は氷河時代の地球全体の気候がより厳しい時期に比べれば全然マイルドな時期ということになっています。しかし、だからと言って地球温暖化を放置してよいということではなく、自然の気候変動の影響が甚大なだけに、それに入為の変動が追加されないように対策する必要があります。

さて、氷河時代の寒さの厳しい時期に入るというような大規模な変化が起こると、何が起こるかというと、日本列島では東京周辺で年間の平均気温が7度ぐらい下がると言われています。夏でも最高気温が20度ぐらいしかならないとか、冬の間はずっと氷点下というような変化が起こるのが、氷河時代の中でもとくに寒い時期ということになります。

そうすると図10の中で北極海を取り囲むように網掛けになっている範囲、現在のカナダ、アメリカ合衆国の北部、グリーンランド、アイスランド、イギリスとアイルランド、北欧諸国、ドイツ・ポーランドからロシアにかけての広い範囲、さらにチベットなど、一番寒い時期には巨大な氷床に覆われました。現在でもグリーンランドや南極の写真を見ると、全面氷になっていると思います。このような状態は南極とかグリーンランドにしかないと思ってしまうのですが、実は氷河時代の一番寒い時期は、カナダのほぼ全域からアメリカの五大湖の辺り、ヨーロッパでは北欧諸国、イギリス、アイルランドの全域と、ドイツ・ポーランドの北半分ぐらい、そしてバルト三国からロシアの北半分も全部氷で丸々閉ざされてしまいました。地球全体が寒すぎるので、平常時なら海から蒸発して雲になって、それがまた雨になってと循環をしている水の一定量が、氷となって固定されてしまうということになります。循環している水に対する氷の割合が増えると、海水量が減ってしまいます。これによって海退が起こります。今から2万年前ぐらいが最近では一番寒かった時代なのですが、その頃は、例えば東京湾では、海面は現在よりも150メートルぐらい低かったと言われています。

それによって何が起こるかというと、東京湾がほとんど陸になってしまふのです。その時代は、

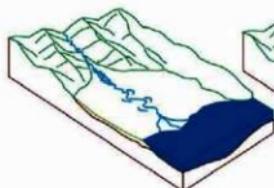
例えば日本列島と朝鮮半島は地続きまではいかないのですが、限りなく幅数キロの水路だけを残して近づいてきます。本州と九州と四国は、「古本州島」と呼ばれる全部1個の島になりました。北海道は本州とはくつかなかったのですが、代わりにサハリンとつながって、さらにサハリンは今のロシアと地続きになるので、北海道・サハリン半島になっていました。朝鮮半島と中国の間に黄海という海があるのですが、ここは浅かったので全部陸になりました。このように、日本列島とその周囲の地形には大規模な変化が起きました。

そしてこのような変化は1回限りではなく、大体十数万年ごとに一番寒い時期、そこからまた暖かくなって今のような状態になるというのを繰り返しています。海水面の変化が起こると、図11のように、海進、海退が起こります。暖かい時期には氷が溶けて、海の水が増え、標高が低いところは海になってしまうので、海岸線が内陸に侵入します。これを海進といいます。寒い時期には氷が増えて海の水が減るので海岸線が沖合側に退き、逆に海退が起こります。

そして、まず海進が進むと、山を削って流れてきた川が土砂を海に運搬します。山地の端に扇状地ができ、河口には氾濫原ができます(図11-2)。これが続くと、河川の下流部が延長し、その先にどんどんと山から来た土砂が流れ込んで埋め立てられていきます。これが平野ができるいくプロ

## 台地=扇状地の発達史

1. 扇状地・河成平野の形成



2. 海面上昇（海進）期



3. 扇状地・河成平野の拡大期

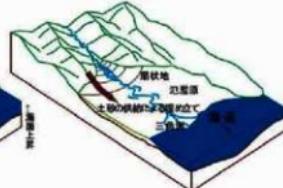


図11 台地=扇状地の発達史

ロセスです。もっとも最近の海進の時期、縄文海進は今から8,000年前ぐらいがピークだったのと、現在の多摩川の河口付近は全部海になっていましたし、荒川や江戸川（旧利根川）沿いではもっと内陸まで海が入り込んでいました。武蔵野台地の北、狭山丘陵より北の埼玉県の志木市とか富士見市、ふじみ野市あたりには貝塚があって、貝の貝殻が残されています。武蔵野台地のすぐ北側は海になっていたということになります。

関東平野に残された一番北側の貝塚は栃木県にあります。つまり、群馬とか栃木の南端まで東京湾が入り込んでいたのが8,000年前ぐらいで、この状態から少しづつ埋め立てられた範囲が平野になったというのが今の関東平野の状況です。

ということで、私たちの身の回りの地形のうち平野というのは非常に新しくて、1万年、8,000年よりも新しいということになります。東京の下町低地や多摩川の河口付近などはさらに新しく、500～1000年くらいの間にできた地形です。

では、武蔵野台地はどうなのかというと、実は1回前の一番寒かった時期よりも前の、今と同じぐらい暖かかった時期（およそ13万年前）と、その後にできた地形です。図12を見てください。武蔵野台地は、関東山地から流れ出した地形ということが分かるでしょう。実は、武蔵野台地は扇

状地なのです。いまから16万年前、もう1回前の最も寒かった時期に古多摩川の谷ができ、その後13万年前頃に地球全体が暖かくなると、どんどんと平野が広がりました。武蔵野台地の主要な部分はそうしてできた地形です。

扇状地としての武蔵野台地の中でも最初の頃の地層を探していくと、板橋区の成増というところで、昔、地層がそのまま露出していて、そこには、貝の化石が入っていました。13万年前の暖かかった時期に、縄文海進と同じように海が内陸まで入って来て、人間がつくった貝塚ではないけれど、貝化石の地層をそこに残したのです。その後、徐々に海退が進み、山地から運搬されてきた土が埋めたのが武蔵野台地ということになります。

さらに武蔵野台地の中の海進の痕跡を探ると、府中市郷土の森の博物館にも貝の化石の地層が展示してあります。あれは16万年前よりもっと古い時代に暖かかったときの痕跡で、多摩川の下流、府中～調布あたりの河床で見つかる貝化石層はおよそ100万年前ころのもので、実は多摩丘陵は、その後に作られた扇状地の名残なのです。そして武蔵野台地より古いので、その後の浸食が進んだことにより起伏の激しい地形となっています。

ところで、何で多摩丘陵や狭山丘陵のような古い地形のほうが武蔵野台地より高いのかといいう

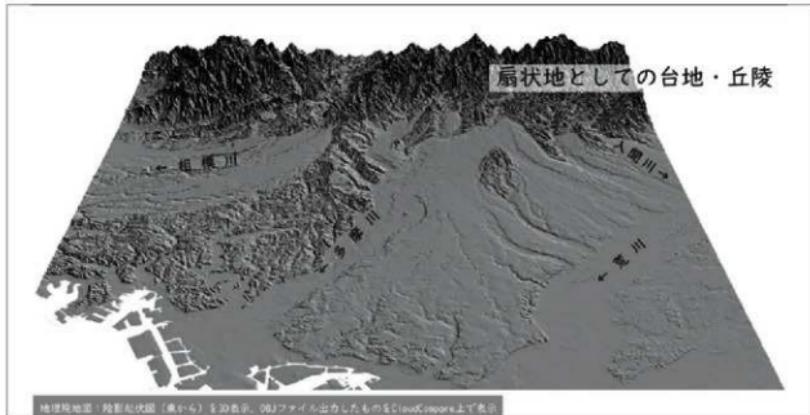


図12 扇状地としての台地・丘陵①

と、実は、関東平野全体というのは、長い目で見るとどんどん沈んでいるのです。地盤沈下がずっと続いている。地盤沈下するところに利根川とか荒川、多摩川などの大きい川がどんどん土砂を運んでくるというのをずっと続けてるので、古い時代の扇状地のほうは現在ではちょっと高いところにあるという状態になっています。

多摩丘陵の次に古いところが武蔵野台地で、多摩丘陵よりは一段低いのですが、多摩川低地とか荒川低地よりは高くなっています。

丘陵や台地の成り立ちは、先ほどの山地とはまた違うタイムスパンです。山地の地形は、数百～数億年のオーダーで形作られましたが、丘陵と台地は十数万～数十万年という、大分短い期間です。全体として山から流れてくる土砂がたまるプロセスは同じですが、どの時期にどの川がどこに向かって流れていたのかが変わってきます。

次に、武蔵野台地の中を見ていきます（図13）。カラフルな図ですが、これは日本大学の遠

藤邦彦教授らがフィールドで調べてきた結果で、色の違いが武蔵野台地の中でも形成された年代の異なる地形の範囲を示します。

中央付近～東側の紫と茶色のところが一番高く、次に南側では赤っぽい色のところが二段目に高く、黄緑色は一番低い段になっています。これは多摩川の流れが一定ではなく、扇状地の中を、十数万年の間に行ったり来たりをしていて、流路が移動してきたところは川の勢いで削られ谷になります。削られた後に土砂がたまると段丘ができます。土がどんどんたまってくると、そこは水が流れにくくなるので、多摩川がまた流れを変えます。川の流れが移動した先が削られ、その後にまた山地から運ばれた土砂で埋まっていくということをどんどん繰り返します。どうも多摩川は、最初は台地の南寄り中央付近を流れていたものが、やや南や北に振れ、現在では黒目川や柳瀬川が流れているあたりに移動したり、その後また南のほう、現在の多摩川に沿った立川から府中、調布に

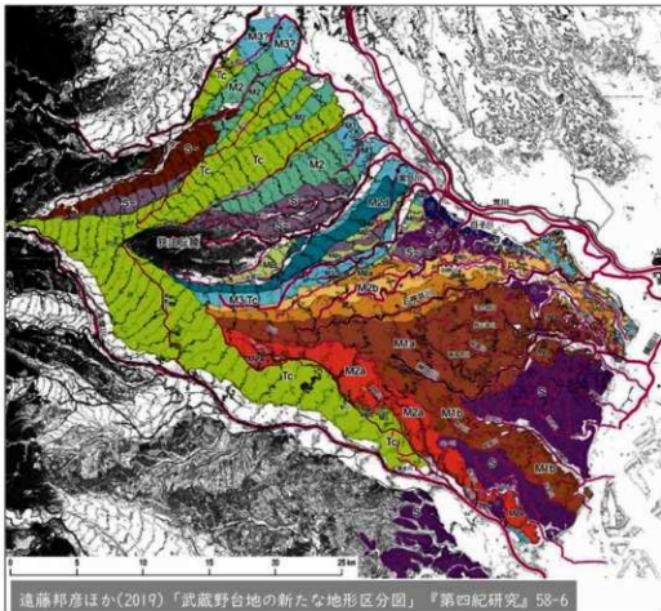


図13 武蔵野台地の地形区分（遠藤邦彦ほか2019「武蔵野台地のあらたな地形区分」『第四紀研究』58-6；図4）

かけてのところを流れました。またその前後には狭山丘陵の北側にも流れていたことがあったようです（黄緑色の範囲）。その後、氷河時代が終わるころには、多摩川はほぼ現在の位置を流れるようになっていました。そうした多摩川の流れの変化と、それに伴う地形の成り立ち、その順番を、地層の年代を調べることによって解明したものが図13なのです。

この色の違いをはつきりとイメージするためには、多摩川からスタートして、ここ国分寺に向かって北上するルート沿いの地形を思い出してみましょう。多摩川のすぐ北、府中市内の京王線より少し南のところ、競馬場の位置する範囲が一番低い地形で、図13では白い範囲です。そこから北へ向かうと崖線があります。競馬場のすぐ北の坂を上ると大國魂神社、武藏国府があります。そこから府中駅を越えて、府中街道をずっと北上すると、しばらくの間、武藏国分寺のあたりまで大きな坂はありません。つまり、武藏国府と武藏国分寺は同じ地形の上にあることになります。図13の黄緑色の範囲です。しかし、ここから都立武藏国分寺公園や西国分寺駅に行くためには、また急な坂を上らなくてはいけません。国分寺崖線の坂で、ここで地形が変わります。そのまま坂を上って、北へ進むと、恋ヶ窪駅、国分寺市役所の手前でいったん坂を下り、また上ります。ここは野川の源流部の谷です。

次に少し東へ移って、国分寺街道を北上してみましょう。府中駅の北から出発して、野川を渡るまでは大きな坂はありません。そこからJR中央線の手前で国分寺崖線の坂を上ります。中央線のアンダーパスをくぐると早稲田実業のあたりから北は、また平らな道になります。

ところが地形を詳しくみると、国分寺市から小金井市、小平市に入る辺りで緩やかな坂があつて上っています。その先の小平市内は、地名が示すとおり平らに見えるのですが、小平市役所の辺りは、またがくんと坂になって下がっています。ここは実は、ずっと東へ行くと仙川へと続く谷の最

上流部です。そこからさらに北に行くと、今度は東村山市や東久留米市に入る辺りで下り坂に当たります。

そこからさらにずっと北に進むと、いくつかの坂を上り下りしながら、全体として地形は低くなっています。いま辿ってきた経路から柳瀬川を渡らずに北東へ移動していくと、清瀬市から埼玉県に入って新座市、志木市とずっと行くと、荒川に至るまで何回も坂を下りることになります。つまり武藏野台地は、真ん中が高くて南北両側が低くなっています。一方、別の方向軸では、西側が高くて東側が低くなっているのです。国分寺市は、この地形の中の黄緑色の面と、赤っぽい色の面の、大体この2つの範囲にあたります。お隣の府中市は、多摩療育センターのところだけが高くて、それ以外は基本的に黄緑色の範囲で、多摩川沿いだけが白になっています。こうした地形の違いは、先に見た通り、多摩川の流路の移動とともに順番に形成された新旧の地形です。国分寺市と府中市は隣り合っていますが、その成り立ちは少し違うということになります。

ところで、先に多摩川が武藏野台地の中を移動して最終的に現在の位置を流れようになったと説明しました。しかし現在でも、野川や石神井川、黒目川など、台地の中にも川があります。これらの川は実は名残川と呼ばれるものです。元は多摩川が流れていた跡に、小さな川が痕跡的に残っているものになります。こうした名残川がどのようにできるのかについては、早稲田大学にいらっしゃった久保純子先生が研究されています（図14）。各図の左側は多摩川のような大きな河川です。たとえば、多摩川は今では小河内ダムがあるので流量は大分減っていますが、つい最近も下流で大水害が起つたりしています。あのとき、川の水が堤防を越えて洪水にならなかったところ、府中とか日野の辺りでも、河川敷にあったサッカーフィールドとか野球場は削れなくなってしまったりしました。これは水と、それから一緒に流れてくる石、大きな岩石と一緒に流れてくるので、それ

がやすりのようになって地面を削っていってしまうのです。こうして、多摩川の本流が流れているところはどんどんと削られて、削った後に流れてきた石が埋まるというのをずっと繰り返しているのです。

ところで、武藏野台地の辺りは箱根とか富士山からたくさん火山灰が降り積っていました。最近は大分落ちていますが、縄文時代より前は、かなり頻繁に噴火していました。多摩川の本体が流れているところは、降ってきた火山灰も一緒に押し流されてしまいますが、多摩川の流路が移動した後の範囲は、火山灰が降ってきたものが積み重なって少しづつ高くなっています。その結果、各図の右側のように、台地の側は少しづつ高くなっているどんどんと差ができるのです。

ただし、多摩川が昔流れていた跡というのは谷状の地形でへこんでいるので、台地の中の湧き水を集めて細い川が流れるようになります。すると火山灰は軽いので流されて溜まりません。けれども多摩川と違って、下の地面までは削れないで、大きくて深い谷は作れない。でも周りの台地に火山灰が積もった分は削り続けるので、そういうところだけ谷になって残るのであります。つまり、石神井川、黒目川など台地内の川は、地面の下を削るだ

けの水量やエネルギーはないのですが、後から降り積もってきた火山灰とか土のような軽いものは流してしまうので、谷状の地形が残っているということになります。

ところで台地全体を見ると(図15)、石神井川とか野川など、今も川が流れているところだけでなく、ちょうど小平市とか小金井市、国分寺市の北側の辺りが一例なのですが、川が流れていない谷があります。これは先に見た名残川のさらに名残です。名残川に水を供給していた湧き水が枯れてしまうと、降ってきた火山灰とか周りから流れ込んできた土砂がたまって、少しづつ埋まっています。そうなると、地表面にはもう川は流れません。ですが、実はその地下にはまだ地下水が流れています。

もう30年ぐらい前(1991年)、JR武藏野線の新小平駅が台風などによる集中豪雨で、トンネル駅が水に浸かってしまって、2ヶ月にわたって武藏野線が走れなくなったりました。新小平駅の周辺は、現在では地上に川は一切流れていませんが、地下にはかつて流れていた多摩川の名残の地下水がずっと流れ続けていて、台風の集中豪雨の後に、水量が予想よりも多くなってしまったのでトンネルが損傷を受けたのです。この

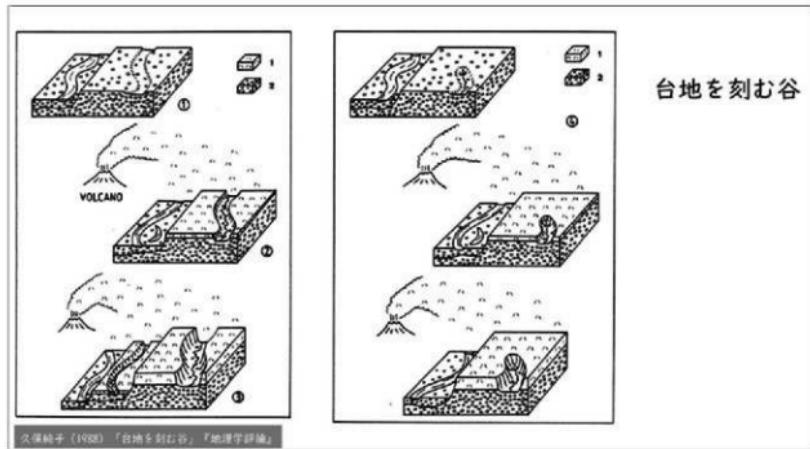


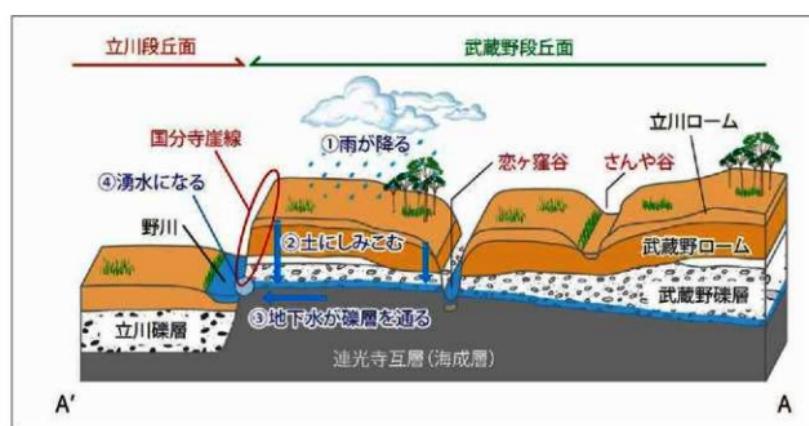
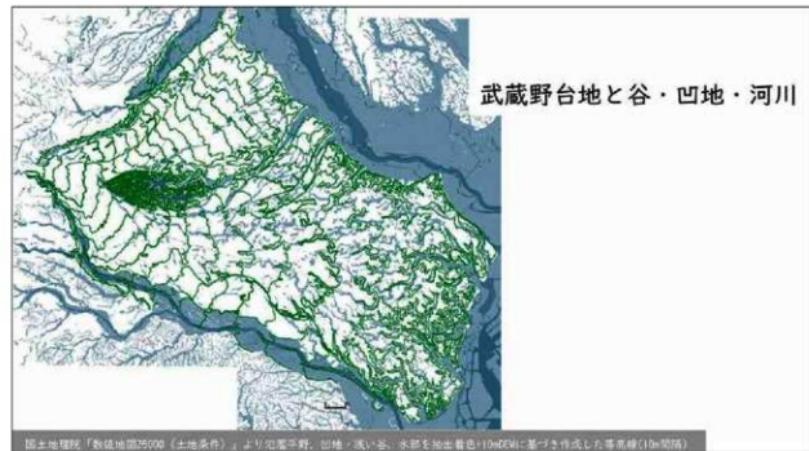
図14 台地を刻む谷

ような地面の上で見える谷と、地下を流れる地下水が、多摩川の名残であるというが、実は台地の中にはたくさんあります。

そうした川や谷は、図15を見ると、放射状に流れています。台地の中を南北に流れたりするような川は1つもありません。なぜなら、これらの川や谷は、関東山地から流れ出した多摩川の名残川なので、過去の多摩川の流れに沿っているのです。

ここまで、武藏野台地全域の地図で平面的に説

明してきました。ここで、見たことがある人も多いと思いますが、地形と地質の断面の模式図を見てみましょう（図16）。まず、地下に武藏野礫層とあります。礫層というのは、実は昔の河原の跡です。今でも多摩川に行くと、例えばバーベキュー場のある府中市郷土の森のあたりの河原は石です。大きいものはサッカーボールぐらい、小さいものはソフトボールぐらいの石がたまっています。そこからずっと上游に行くと、河原の石のサイズはどんどん大きくなります。そして礫層と



いうのは、そうした河原が後から埋まってしまったものなのです。国分寺市のあたりでは、武藏野疊層には10メートルぐらい掘らないと到達しないのですが、それが実は10万年前から5、6万年前頃の多摩川の河原ということになります。その後、先に見たように、4万年前に多摩川が移動してきたときに、武藏野疊層とその地下の地層まで削ってできた河原が、このもとまち公民館の下にも埋まっています（立川疊層）。公民館近辺だと、多分3メートルぐらい掘ると当たります。武藏野疊層のほうが古い河原なので石が腐りかけていて、スコップなどでカンカンとやると簡単に崩れてしまうような、腐れ縁といわれるような石です。それに対して、公民館付近を掘って出てくる立川疊層の疊はまだ新鮮で、現在の多摩川の河原で拾えるような石とあまり変わらない、ただ表面はちょっと色が変わっているものです。

ところで、疊層というのは石ころが積み重なっているだけなので、実は隙間がいっぱい空いています。疊層の上のほうのローム層（赤土）はびっしり詰まっているのですが、疊層は隙間だらけなのでここを地下水が流れます。ということで、地下にかつての多摩川の名残が今でも流れ続けているということになります。

そんな中で、国分寺崖線のところは、南側が

新しい谷で武藏野疊層がすばっと切れているので、ここから水が流れ出やすい条件になっていまます。国分寺の真姿の池のところからスタートして、ずっと小金井、三鷹、調布、世田谷、ずっと国分寺崖線沿いに湧水があります。水が湧くところをよく見ていくと、崖の中腹だろうが、あるいは一番下のほうだろうが必ず疊層が見えます。真姿の池の辺りだと、もうほぼ下の段の地面に近いところに武藏野疊層が見えていますが、世田谷区の成城学園に辺りに行くと、実は武藏野疊層はちょっと高いところにあります。

つまり水が湧くところというのは、疊層です。これを、昔の人はよく知っているので中世や江戸時代の井戸を発掘すると、必ず疊層の中かその下まで掘っています。

図17は先ほどの図6と同じ地形を強調した航空写真で、国分寺市を中心とした範囲をアップしています。ちょうど国分寺駅のあたりから西側は国分寺崖線が西南西に湾曲しています。北へ入り込んでいる谷が見えますが、そこに日立製作所中央研究所の池があります。野川の源流の湧水です。また国分寺駅の南側にも、殿ヶ谷庭園や周辺に湧き水がいくつもあります。

また、国分寺駅より東側でも国分寺崖線が弓なりの地形になっていますが、ここもずっと湧水が



図17 国分寺崖線

続いています。先ほどの断面模式図（図16）の状況がずっと続いているので、崖線から水が湧いて、その水を集めて野川が流れています。

さてここでもう一度、海進・海退と地形の形成についてみていきます（図18）。まず、海退の時期（1→2）には、海岸、海平面が下がるとともに川の傾斜が急になります。海退が進むと河口の位置はどんどん海側に伸びてきますが、それに、沖に行けば行くほど海底は深くなっています。このため、川の傾斜が急になります（2）。川の傾斜が急なほど水のエネルギーが強くなるので、川底は下流側からどんどん削られて深くなります。

一方で、上流、山の中では逆に谷が埋まっています。下流に向かってどんどん水が流れしていくときに斜面が崩れて、その岩で谷が埋まるのです。

一旦下がった後にもう一度海面が上昇すると、川の傾斜がまた緩やかに戻っていきます。緩やかになると下流側はどんどんと埋まっていくのです。川の勢いが弱くなり、石のような大きなものはもう流れなくなってしまって、どんどん傾斜が緩くなっていくと下流側で砂利、砂、泥などもっと細かいものもたまるようになり、最終的に河口には干潟ができたり、三角州ができたりします。これをずっと繰り返していく中で、途中の中流部分で谷が下

がった痕跡が段丘として残されます。

ところで、図16では武蔵野疊層・立川疊層の下に連光寺互層とあります。国分寺市の辺りでは地中深く十数メートル掘らないと出てこない地層ですが、多摩川を渡って南側の多摩丘陵に行くと、これがもっと標高の高い位置にあります。多摩丘陵から続いている地層が武蔵野台地の地下にあるのです。しかし多摩川の北側では、地層の上部がいったん多摩川により削られ、その上に疊層、ローム層が堆積しています。

ところでこの地層（連光寺互層）が削られずに残ったところがこの近所にあります。府中市の浅間山です。多摩川が削らずに残った地形です。あの山の北側のほうに今でも小さい湧き水があり、草が生えているので普段はめったに見えないのでですが、草が枯れている時期などに見ると、ローム層とは違うタイプの地層が見えます。

このように、国分寺市をはじめとする武蔵野台地の地形と環境は、地下の地質と、多摩川の流れとその変化によって形作られてきました。その中で注目しておきたいことが、崖線沿いのところには湧水ができるけれども、それよりも北側のほうは、雨水は基本的に谷の中を流れたり、あるいは地中に浸透してしまって、台地の上を流れないということになります。地図を見ると水路が描かれ

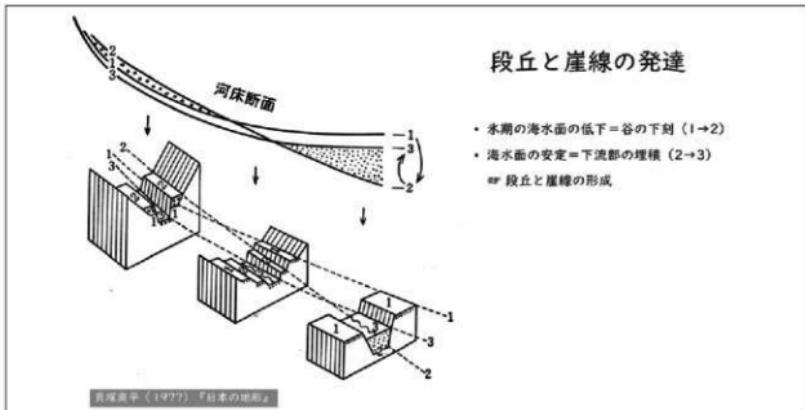


図18 段丘と崖線の発達

ているところもありますが、これはよく調べてみると、人工の水路です。恋ヶ窪分水などです。逆に何で玉川上水など分水を引いたのかは後でまた説明しますが、水がないから人工で引いてきたということになります。自然の環境ではかなり水に乏しい。それに対して野川沿いというのは水が豊かですということになります。

武藏野台地全体で見ると、扇状地というのは山梨とか富山県の出身の人はよくご存じかもしれないですし、あるいは行ったことがある人はご存じかもしれないけれども、扇状地というのは、真ん中の部分、扇の中央(扇央)は、本当に水が乏しいです。

図19みたいに扇央部分では水がみんな地下に集まってしまいます。ところが扇状地の傾斜が緩やかになるところ、扇の端と書いて扇端と呼びますが、その扇端で今度水が湧いてくるのです。

実は、武藏野台地全体で水が湧くラインというの

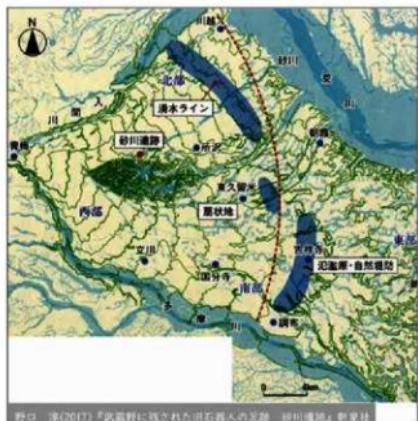


図19 武藏野台地の水環境



図20 国分寺崖線と湧水

があります。標高40メートルラインと呼んでいますが、大体40メートルぐらいの高さのところは崖線ではなくても水が湧くのです。具体的にどこかというと、吉祥寺の井の頭池、それから杉並のほうへ行くと善福寺池というのがあります。それから、さらに北に行くと石神井川、石神井公園のところの池、富士見池など。池となっているのは大体みんな湧水です。さらに北に行くと、黒目川のところの湧水群があります。

これ面白いぐらいに、扇状地のトップから円を描くと、それに近いところにずらっと湧水が並びます。逆にここより北側と西側というのは地表面を水が流れづらい場所になっていて、ただ、この崖線のところだけは特例的に水が湧くということになっています。図20は、一昨日ちょうど天気がよかつたので写真撮ってきました。真姿の池のところなのですが、今ぐらいいの季節だと結構水がわあっと流れています。

国分寺にお住まいの皆さんには、こういう、まさに「景観」・「景色」を見ているので、武藏野台地や国分寺崖線沿いというのは水が豊かな場所だと認識していると思うのです。でも実は、北のほうの人たちからすると全然違うのです。狭山丘陵の北の所沢市というのは、さっきのこの地図(図19)でいうと、本当に水が少なくて井戸も深いです。

昔は所沢には嫁をやるなと言われて、お嫁さんが水汲むのにとても苦労する、とか、所沢の火事は土で消す、水がないから土でとにかく消すしかない、などと言われたりしたのです。実はそれは所沢だけを揶揄して言っているのではなく、所沢や狭山やあるいは立川市でも砂川地区など、大体みんな共通する条件なのです。

これは、ここまでのお話で理解していただけたかと思うのですが、十数万年から数万年かけて武藏野台地ができていったときの条件、「地形」と「地質」によって決まっているので、ある意味人間からしてみるとどうしようもないという前提になっています。ですので、国分寺市

というのは武蔵野台地の中でも、真ん中から西半分の地域で見ると、例外的に恵まれている場所ということではあります。ただし、国分寺市全体ではなくて、あくまでこの崖縁沿いであって、それ以外のところとはちょっと違いますよという感じになってきます。

ようやく、もう半分以上時間が過ぎたのですが、考古学の話に入っていきます。

武藏野台地とか、東京全体の中にどこに遺跡があるのか、ということです。私の考古学の研究で

やっている遺跡分布のデータを用いて少しお話を  
していきます。

これちよと小さくて、見づらくて恐縮なのですが、東京都は都が各区市町村からの報告を受け、東京都がどこに遺跡があるというのを全部地図に登録されています（図21）。これはインターネットで閲覧できるので、興味ある人は見てください。現時点で6,292の遺跡が登録されています。

遺跡数が多いところは、自治体で言うと八王子市、町田市、多摩市、それから大田区、世田谷区

東京都全遺跡 現在までのところ6,292遺跡が登録されている

図21 東京都全遺跡（自治体別・時代別集計）

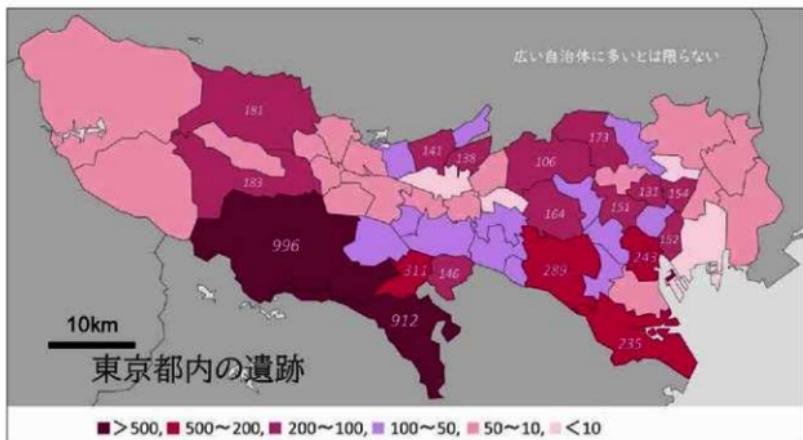


図 22 東京都内の遺跡（自治体別遺跡数）

## 東京都全遺跡(島しょ部除く) 概要までのところ6,292遺跡が登録されている

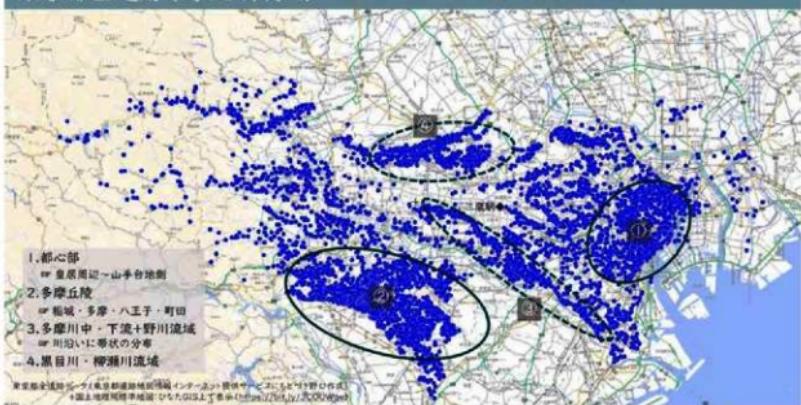


図23 東京都全遺跡 島しょ部除く

## 東京都全遺跡(島しょ部除く) どこに遺跡がない? / 少ない?

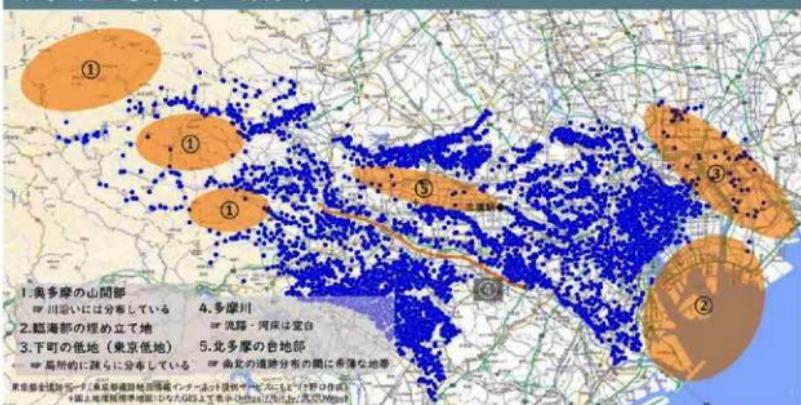


図24 東京都全遺跡 分布の空白・過疎範囲

です。区市町村別で色分けしてみたものが図22になります。町田市、八王子市はやはり圧倒的です。市が広いから遺跡が多いだけではなくて、面積で割った密度も多いです。つまり丘陵に一番遺跡が多いということが分かります。

次に多いのは多摩川の下流です。世田谷区、大田区ですが、区域全体に遺跡があるのではなく、どちらも区の南側に偏っています。次に遺跡の多いところは、台地の東側の港区や、北東側の荒川の低地に面している練馬区、板橋区などです。

国分寺市とか小金井市、立川市辺りは、実は遺跡数は少ないです。多ければいいというわけではないのですが、東京都全体では丘陵と武蔵野台地の東側に多い一方で、水が乏しい台地の真ん中から西側は少なくなっています。なお、武蔵野台地の西側で遺跡数が多く色が濃くなっているのは青梅市とあきる野市ですが、ここは武蔵野台地の範囲から外れています。

次に、全部の遺跡を点で落とすと図23・24のようになります。

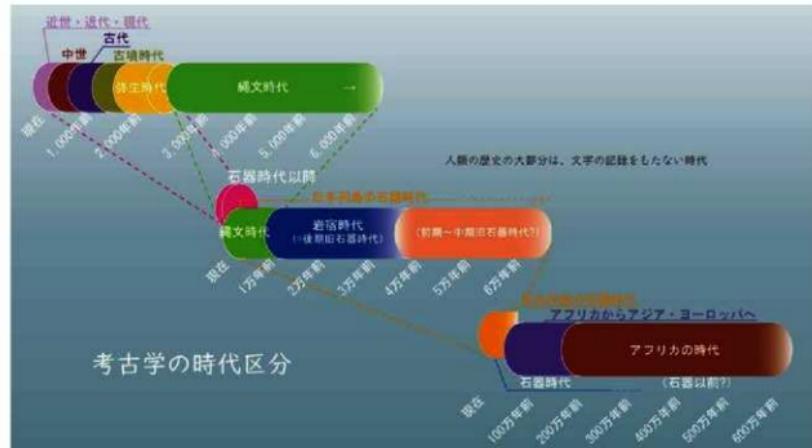


図25 考古学の時代区分

自治体単位の遺跡数の図より、分布の傾向がはつきりしてきたかと思います。国分寺市なども野川沿いのところだけに遺跡があることが分かると思います。小金井市、国分寺市の北側から小平市にかけての範囲は本当に空白というか、ぼつぼつしか遺跡がありません。そこからさらに北側の湧水がある、東久留米市や東村山市に行くとまた遺跡が増える。これが「環境」の条件です。「地形」と「地質」によって「環境」が決まり、そうするとその「環境」を人間は変更することが難しいので、暮らしの場所は「環境」の条件に規定されるということになります。

集中しているところ、①東側の都心部、次が②多摩丘陵、③多摩川沿い、そして狭山丘陵の東側の④黒目川、柳瀬川沿いです(図23)。逆に遺跡がないところ(図24)は、①関東山地(奥多摩)の山です。それから②埋め立て地は遺跡がないです。これはちょっとと考えれば分かるのですが、昔はそこに土地がなかったから住んでいないところです。それ以外に③東京低地も遺跡が少なかったりします。それから④多摩川の、現在、川が流れているところはやはり空白です。川には人は住めないということです。

これを整理すると、東京都には遺跡がたくさん

あるのですが、どこにでもあるわけではなく、遺跡がまったくないところ、密なところとまばらなところがありますよということになります。こうした遺跡分布のパターンには理由があって、基本は「地形」や「環境」によるものです。海岸部、臨海部は昔、海や湿地だったので人が住めないという条件、山は急斜面でとても人が住める場所ではないといった条件が決まってくるわけです。

遺跡分布を考えるときには、もう1つ問題がある、「昔から遺跡がなかった」という場所と、もう1つは「遺跡があるのだが地面の下なので見つけられない」場所を見分けなければなりません。国分寺市内でも烟が多い地域だと、烟を歩いていると土器とか石器が拾えたりなどの経験や、あるいはそういう話を聞いたことある人はいらっしゃると思います。しかし、今の国分寺駅前や西国分寺の団地などは、歩いていても絶対土器など拾えないですね。でも遺跡はあるのです。そういうところは発掘をしないと分からないので、遺跡が見つかりづらいという問題があります。次に時代別に整理をしてみます。

日本の考古学が扱う時間軸は、図25のようになります。古い方から旧石器時代、縄文時代、弥生時代となっています。年表を等間隔に作成する

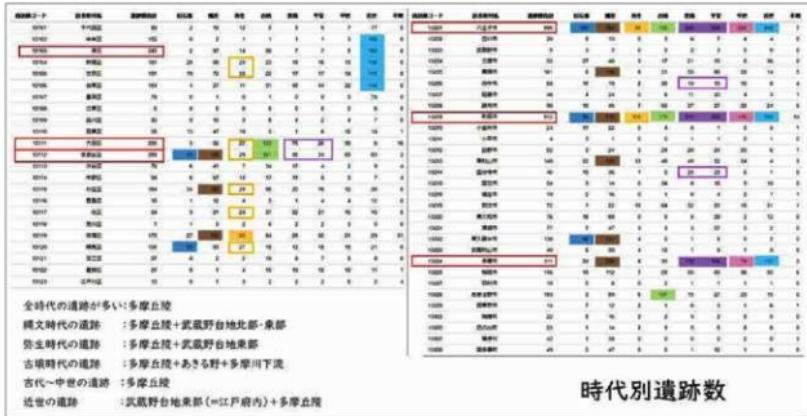


図 26 東京都自治体別・時代別遺跡数

と、実は旧石器時代というのがとても長くて、縄文時代も長く、弥生時代以降はかなり短くなります。この時代区分に沿って作った自治体ごとの遺跡数の一覧（図 26）を見ると、先ほどの全時代の遺跡が多いところ（図 21）と一致しない部分が見えてきます。例えば旧石器時代の遺跡が多いところを図 26 に青色の網掛けで示していますが、全体の遺跡数が多いところを示す赤枠と必ずしも一致しません。例えば練馬区は全体の遺跡数はそれほど多くないのですが、旧石器の遺跡が多いです。

縄文時代の遺跡が多いところも、赤枠からはずれています。こうやって見ると、多摩丘陵の八王子市や町田市は遺跡数が多いだけでなく全時代の遺跡が多くありますが、ほかのところは時代によって遺跡の多い少ないの傾向が異なるのです。

次に時代別の遺跡分布を見ていきます。図 27 は、旧石器時代の遺跡分布です。国分寺市をはじめ、野川流域には遺跡が多いです。一方で、例えば東京低地には一切ありません。なぜかというと、この範囲は縄文海進後に形成された地形のため、旧石器時代の地層が残っていないか、または地中深くに埋没しているのです。

次、縄文時代の遺跡分布（図 28）を見ると、旧石器時代と似ていますが、数が増えています。

国分寺市周辺と野川流域にも遺跡がたくさんあります。

ところが弥生時代の遺跡分布を見ると、図 29 のように様相が大きく変わります。国分寺市だけではなく、お隣の小金井市をはじめ、野川流域には弥生時代の遺跡はほとんどないです。国分寺市内では 1 か所、花沢西遺跡で土器が見つかっています。府中市にはあるのですが、見つかっているのは競馬場のある低地だけです。がらっと遺跡分布が変わったのが分かると思います。分布の違いは、旧石器時代と縄文時代では台地の縁辺とか川沿いです。ただ、縄文時代になると旧石器時代より遺跡が増え、山の中にも遺跡の分布が広がります。

ところが弥生時代になり、遺跡分布が大きく変わる最大の理由は、水田稲作を始めるので、水田が作れる平地と水田を維持するための農業用水を確保する必要が生じるからです（図 30）。

ここで今、もしかすると何人かの方は、『でも国分寺は野川沿いで湧水があるし、野川に沿った、低い土地もあるから水田を作れたのではないか』と思われた方もいるかもしれません、その疑問はちょっとまだ胸にとどめておいてください。

先に、もっと後の時代を見ていきます。古墳時代になると東京低地にも遺跡分布が広がりま

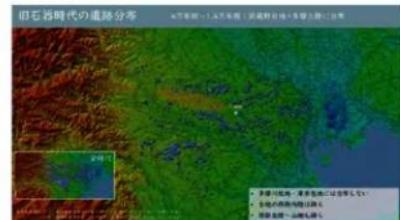


図 27 旧石器時代

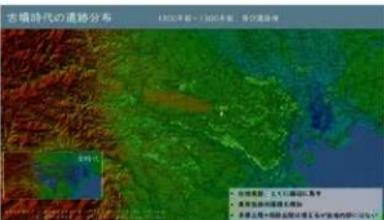


図 31 古墳時代

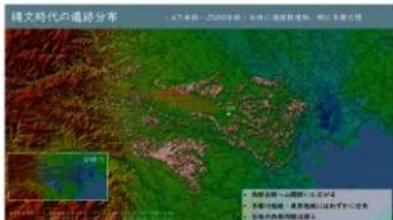


図 28 繩文時代

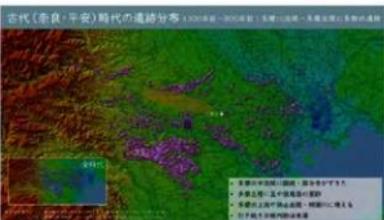


図 32 古代（奈良・平安時代）

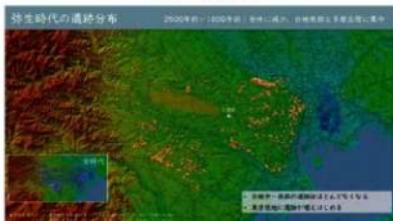


図 29 弥生時代

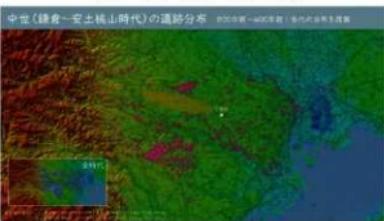


図 33 中世（鎌倉～安土桃山時代）



図 30 遺跡分布の変遷：旧石器～弥生時代

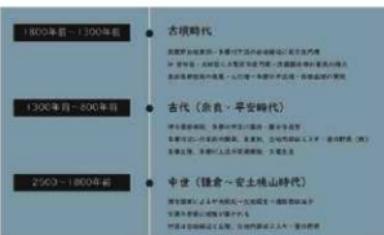


図 34 遺跡分布の変遷：古墳時代～中世

す（図 31）。足立区や葛飾区などにも古墳時代の遺跡が出てきます。また多摩川の下流沿い、狛江市から世田谷区、大田区にかけて遺跡が増えます。古墳好きな人はこの理由を知っていると思います。世田谷区から大田区にかけて 100 メートル級の前方後円墳が幾つかあって、この「多摩川台古墳群」に武藏国の南部の有力な首長がいたということで、その周りにも遺跡が多数あるのです。

古墳だけではなく集落も多数あります。弥生時代からさらに様相が変わってきました。しかし、相変わらず国分寺市には遺跡がほとんどありません。武藏国国分寺跡で古墳時代前半期の土器がわずかに見つかっているほかは、国分寺崖線に横穴墓があるだけです。

ところがその直後、奈良・平安時代になると、また大きく様相が変わります（図 32）。国分寺市

にも、遺跡が一気に増えました。理由は明白で、府中市に武藏国府ができ、国分寺市に武藏国分寺ができたので、国府で働いたり、国分寺にお勤めをしたりする人とか、その人たちのために、いろいろなものを作る人たちが住む場所ができたのです。同時期に、瓦の窯が町田市などにありますよと、ちょっと前にプラタモリに国分寺市ふるさと文化財課の依田係長も出演されていましたが、窯が作られた場所で瓦が必要だったのではなく、相模国分寺とか武藏国分寺のお寺に瓦を供給するために作られたのです。窯を作るためには燃料になる木材も粘土も必要なので、それらが豊富な多摩丘陵に作られたのです。国府と国分寺、さらにそれを結ぶ東山道という官道を軸にして、遺跡分布ががらっと変わるのが奈良・平安時代です。

その後、中世（図33）になると遺跡はまた減っています。これについては、また後で理由を説明します。

整理すると、古墳時代は武藏野台地の東側とか多摩川の下流に前方後円墳ができる、その周りに

も古墳や村ができます。ところが奈良・平安時代になると、前時代の古墳の分布とは別に、武藏国府と武藏国分寺、東山道武藏路を軸にして遺跡分布が、がらっと変わります。それは古代国家、律令国家ができる、その体制を支えるために遺跡の分布が変わったということです。

ところが中世、鎌倉時代以降になるとまた遺跡分布が変わります。これはなぜかというと、国府や国分寺に集中していたものがなくなっていて、武藏野台地の中でも小さな領主に分かれ、例えばこの辺りだと国立の城山のところに「三田氏館跡」という館がありますし、野川の下流側には調布市に「泊江入道館跡」があります。小さな館とかお城が点々とあって、そこに有力者がいて、その周囲に人が集まるような形に変わっていきます。一旦、奈良・平安時代に集中したものがまた分散するという状況です（図34）。

最後に江戸時代です。江戸時代の遺跡分布は非常に分かりやすく、都心部に集中しています（図35）。

さてここまで各時代を通して遺跡分布の様相を見てきました。その上で、武藏国分寺周辺の変化とは別に、国分寺市の北や小平市辺りはずっと遺跡がないということが、各時代を通じて確認できました。この理由はなぜかかというと、やはり水がないからということに尽きます。

図36は江戸時代の前半の天保の武藏国絵図です。中央に東西に走る線は青梅街道で、途中に村

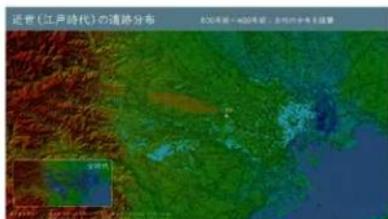


図35 近世（江戸）時代



**なぜ武藏野台地中西部に遺跡がないのか？**

弥生時代以後、水田耕作が生業の中心になると遺跡分布は水路+耕作通地を中心移る。初期には丘陵や台地東部の谷と荒川・多摩川の他の地が利用され、古代~中世にはこの地の小河川の利用が減少する。

水路の乏しい台地中央部~西部の内陸部は魏晉時代までの謙らな遺跡分布も途絶え、近世村落が拓かれるのは玉川上水が開削される江戸時代中期以降である。

図36 天保武藏国絵図（多摩川～野川流域付近）

がほとんどない区間にボツンと田無宿（現西東京市）があって、その西には小川新田（現小平市）があるのでですが、本当に点々としか村がないのです。だから江戸時代になってもしばらくの間、この地域には人が住んでいなかった、ということになります。これは本当に水がないからで、逆に今は東京のベッドタウンになり、いっぱい人が住んでいますが、その前の段階、つまり玉川上水ができる前は人が暮らしていなかった。それが玉川上水ができると水が引かれることで、それなりに人が住めるようになった。玉川上水から野火止用水を作り、恋ヶ窪の分水を作つて水を分けていくことで人が住める範囲が広がったので、何々新田といふ地名がたくさんあります。そうした新田村落は、この絵図より後の時代に新しく作られた村になります。その時期に人の動きも多くなり、例えば国分寺市の中藤新田は、狹山丘陵のふもとに住んでいた人が移り住んで開いたものだったり、逆に多摩川沿いの人が台地の内陸に入ってきて開いた新田があったりします。江戸時代の中期以降のできごとです。

それ以前は本当に図37のように、万葉集などにも、ひたすら武藏野は草ばかりという歌が収録されています。あるいは馬が放たれている放牧場



図37 万葉集の時代からながらく草原だった武藏野で、水田などない、すすき野原だという場所だったので遺跡がないのです。古代の人にとっての武藏野台地の「景観」というのは、馬が駆け巡っている、すすき野原というイメージだということです。

ここで先ほどの疑問に戻りましょう。野川には水が流れているのだから、弥生時代、古墳時代にも水田は作れるはずだから、本当は遺跡があるのではないか、調査できていないだけではないのか、見つかっていないだけではないのか、と思われたかもしれないで、ここをもう少し掘り下げてみたいと思います。

みなさんの中には、野川に愛着を持っている人もたくさんいると思うのですが、野川流域は本当に水が豊かだったのか、ということを考え直してみます。図38を見ると、やはり弥生時代は国分

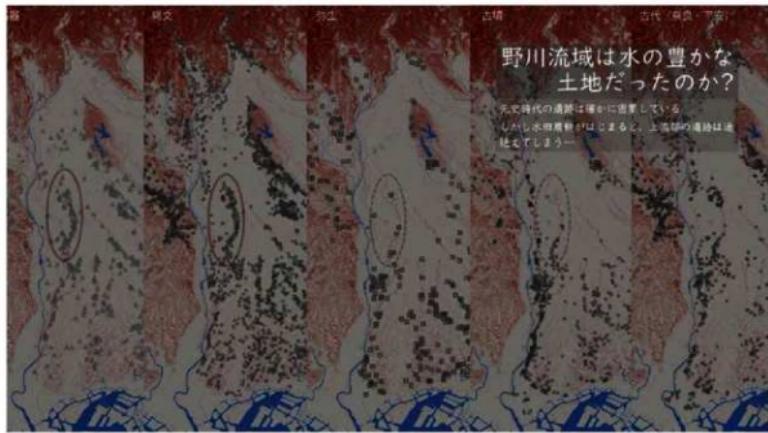


図38 赤色立体図で見る野川・多摩川流域の遺跡分布の変遷  
(野口 淳 (2021) 「赤色立体図で見る東京の四万年」『多摩のあゆみ』179)

寺市に限らず、三鷹までの野川上流域で遺跡がほとんど無くなっています。ゼロではないのですが差ははっきりしていて、旧石器時代のほうが多いのです。旧石器時代は弥生時代より日本全体の人口はずつと少なかったにもかかわらずです。弥生時代、古墳時代は旧石器時代や縄文時代より、日本全体ではもっと人口が増えているのに、野川流域には住まない。これはやはり理由があります。原因是、野川の水量なのです。もしかすると、野川はいつも水が流れていると思われているかもしれませんが、野川沿いに住んでいる人はご存じのとおり、冬の間は、実は水の流れが非常に少なくなります。真姿の池の辺りはそれでも水が湧いているのですが、もうちょっと東側、東京経済大学から小金井の方へずっと行くと、冬は草がぼうぼうに生えていて、水が全然流れていなかつたりします。

これなぜかというと、野川沿い、国分寺崖線の湧水は季節差がものすごく大きいことによります。今はもう都市化が進んでしまったのですが、図39で引用しているのが、東京都消防研究所が、昭和43年に出したレポートに記録された野川流域の湧水量です。今みたいに水道が整備されていない時代には、消防が火を消すのに地下水を重視していたので、都の研究所が各地の湧き水の量や井戸の水量などを調べていました。この記録によると、湧水量の季節差がとても大きいことが分かります。例えば真姿の池の周辺は3月の湧水量が1分当たり10リットルから50リットルなのに対して、8月は20リットルから720リットル、2~14倍です。年間を通じた湧水量は安定していないくて、冬は本当に水が少なく、夏にはたくさん湧いているのです。日立製作所中央研究所周辺も同じです。春先と夏で、湧水量は5~30倍ぐらいの変動がある。だから国分寺崖線に沿った湧水は1年中、水がぼこぼこ湧いているところだというイメージを持たれているかもしれません、記録を取ってみると季節差が激しいのです。

何で夏により多くの地下水が湧いているかとい

うと、台地に降った雨水が地下に染み込んで流れ出す時に、6月以降梅雨が来て、台風が来て地下水が増え、国分寺崖線の湧き水も増えるのです。その後、冬にはほとんど雨が降らなくなるので、春先はほとんど水が湧かなくなります。春先に水が少なくて夏に水がいっぱいあるというのは、水田稲作にとっては致命的なのです。水田で稲を育てたかったら、逆でないと困ってしまう。春に水がいっぱいあって、5月前半ぐらい、田植の時期に田んぼに水が張れて、逆に夏は稻が育てて収穫になる頃は水を抜いてしまうので、むしろ水が多くなると稻が腐ってしまうので困ります。

ということで、実は野川流域は、一見すると水は豊かだけれども、水田稲作が始まってからは暮らしにくい土地になってしまったということになります。縄文時代や旧石器時代の人たちは、狩りや木の実を集める狩猟採集の暮らしをしていましたので、冬、水が多少少なくとも稲作をするわけではなくて、自分たちが飲めるだけの水だけあれば生きていける。だから野川沿いにはいっぱい人が住んでいるのですが、弥生時代になると、自分たちが水を飲めても稲が育たないと食べていけないので、「環境」は変わらないけれど、そこに暮らす人々にとっても「景観」としては適していないので、多摩川の下流の方などに移ってしまうのです。

これに関連するデータが、実は江戸時代の歴史書を見ると分かります。玉川上水が引かれる前の、『武藏田園簿』に村高の田んぼと畑の比率の数字がまとめられています。要は年貢を取るための記録なのです。(図39右) これを見ると、現在の調布市のあたり、深大寺村と佐須村の間ではっきり分かれています。佐須村よりも下流側は田んぼの比率が半分かそれ以上になっています。野川の源流部では、湧水量の季節差が大きいのですが、深大寺よりも下流に来ると流域の各地から水が集まつてくるので、水田ができるのです。ところが大沢(現三鷹市)、小金井、貫井(現小金井市)、恋ヶ窪、国分寺(現国分寺市)は、田んぼの比率が3分の

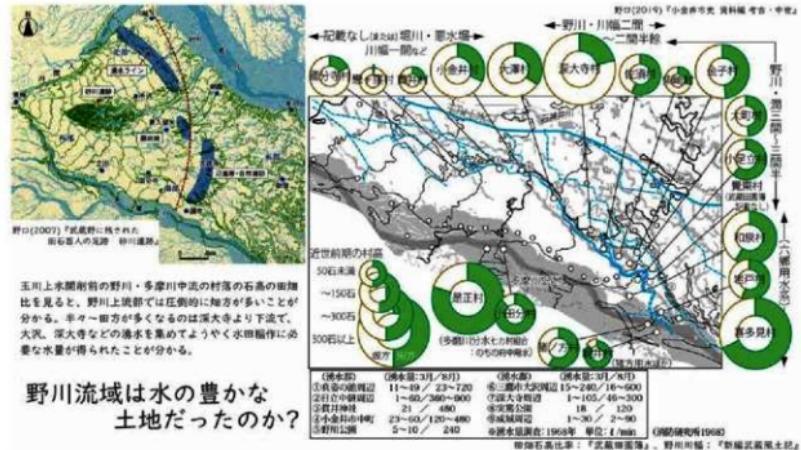
1以下で、とくに野川源流部の恋ヶ窪に至っては田んぼはほとんどありません。ですので、この辺りの村は、主に畑とわずかな田んぼでなりわいを立てていたということが分かります。

そして、例えば深大寺村の辺りでは文書が残っていて、玉川上水ができるだから分水を引いてほしいという請願を代官所に出しています。

実際に後には、貫井、恋ヶ窪など各所に玉川上水から分水が引かれ、少しずつ水田が増えています。

明治初期の迅速測図（図40）を見ると、そうした水田が野川沿いに描かれています。

もう一つ興味深いことは、実は深大寺よりも上流側は、江戸時代の人々は野川を「川」と認識していないかったということです。江戸時代の後半に『新編武藏風土記稿』という当時の地理、地誌の本があるのですが、その中の各村ごとに地形（山・川）の記載があるので、どのように書かれているかを拾っていくと、深大寺村よりも下流側には必



## 野川流域は水の豊かな土地だったのか?

図39 野川流域・多摩川中流域の江戸時代の村高と田・畠比率  
(野口 淳 (2019)「小金井の地理的環境と遺跡」『小金井市史 資料編 考古・中世』より)



図40 明治初期の国分寺村（迅速測図）

ず、川という項目に野川とあって、川幅が何間と書いてあるのです。ところが、大沢村よりも上流側には野川という名前は出てこなくて、代わりに堀川とか悪水堀と書いてあるのです。この場合いつも水が流れていれば川と書くのです。江戸時代の人は、堀というのは水路があるのだけれども雨が降ったら水が流れる、それが堀川です。さらに悪水堀というのは用水に使えない、水はけのためにつくられたものです。

つまり、江戸時代の人は深大寺より下流は川だと認識していて、それが野川で国分寺、小金井、三鷹の辺りは堀・水路はあるけれど川ではなくて、雨がいっぱい降ると水が流れるだけの排水路だよねと認識されていたということになります。ここにより多くの水が流れるようになるのは、やはり玉川上水からの分水が来てからですし、実は現代では雨水を集めた流域下水道で水も流したりしていますね。ということで、実は江戸時代以前の水環境は現在の私たちが見ている、または想像しているものとは大分違っていたということになります。だから、狩猟採集で生計を立てていた旧石器時代、縄文時代の人たちは野川流域に集まっていたけれど、水田稲作をはじめた弥生時代、古墳時代の人たちはこの地域からいなくなってしまった。古代には、国府・国分寺が造営されて、政治社会的な背景で人が集まってきたけれど、それがなくなった中世になるとまた人が減ってしまいます。奈良・平安時代は政治的な力でもって、国府や国分寺にいろいろな物資を集めましたから、ここで田んぼが作れなくとも多くの人が暮らしていたということになるのです。

図40は、明治時代の初め頃の地図です。まだ鉄道が通る前の国分寺周辺の迅速図という、当時の陸軍が日本全国を測量した地図ですが、国分寺村の中心は崖線の下にあります。また、恋ヶ窪から日立製作所中央研究所に続く谷のところには田と書いてあります。ここにわずかに田んぼがあるのです。ところが崖線の上は畠になっているのです。また野川より南側も畠ですね。野川沿いの

田んぼは、殿ヶ谷戸庭園の下から貫井の辺りへと、細く川沿いにだけ、昭和40年ぐらいまで田んぼはあったと思うのですが、結局、玉川上水から水が来ても、それぐらいしか田んぼは作れなかったということになります。

逆に図39の多摩川低地の村々、是正村（現府中市是政）、小田分村（現府中市小柳町付近）などを見ると、田んぼの比率が高くて8割とか9割くらいあります。また、地図上の丸の大きさといふのは村高自体の大きさなのですが、田んぼが多くて多摩川に近いところは村自体も大きいです。こういう差というのは明治時代の前半ぐらいまでずっと続いている、この後鉄道ができたり、道路が整備されたりしてくると、今のような町並みに変わっています。つまり今、私たちの見ている「景観」は非常に新しくて、まだ100年ちょっとぐらいなのですね。

以上、野川流域の地形の成り立ちと、4万年にわたる人類の暮らしの歴史を概観しました（図41）。旧石器時代、縄文時代は狩猟採集の暮らしなので、水場沿いに暮らしながら、台地の広い範囲で狩りをしたり、木の実などを集めたりしていました。特に国分寺市域では、西国分寺駅の東にある多喜窪遺跡とか、JR中央線の北側の恋ヶ窪遺跡には縄文時代の大規模な村ができたりしますが、およそ二千年前、この地域でも水田稲作が始まると人がいなくなってしまう。古代国家ができると、国府、国分寺と官道ができるので人工的に人が集まるようになるのだけれども、それらが衰退し、なくなってしまうと集中していたものがばらけてしまう。もう一度元に戻ってくるのは江戸時代の半ばに玉川上水ができるからということになります。

そこには、自然状態の環境の条件と、技術や経済や政治などの人為的条件があり、その歴史的な変化が鍵となっています。自然状態の環境では、野川と国分寺崖線の湧水は、狩猟採集の暮らしには十分だが、水田稲作になると不足します。つまり自然環境だけでは水田の時代になると、暮らし

の維持が難しくなるのです。

ということで、国府、国分寺という政治的なセントラルや、玉川上水のように人工的に水環境を変える土木技術、井戸を作ったり水路を作る、あるいは政治権力が物資を集めることでようやく人が住むようになります。国分寺の辺りという人はがいっぱい住むためには、外部からの何か資源とか物資を持って来ないと暮らしづらい場所だったのだなということになります。それが江戸時代後半以降に変わってきたということです。

最後に、古代の国分寺の造営と地形について、発掘の成果から少しお話をさせていただきます。武藏国国分寺跡の周囲は、かなりあちこちで発掘を

していまして、既に700回以上の調査が行われています（図42）。国分寺の成り立ちや変遷に関する発掘調査成果については、この講座の別の回で取り上げられると思いますので、今日は国分寺と崖線の間のところに注目をして、お話をしたいと思います。

どこの話かというと、金堂・講堂などの僧寺伽藍地区の北側、後世の国分寺や武藏国分寺跡資料館があり、元町用水とか真姿の池の湧水が流れている辺りの過去はどうだったかということです。

図43は資料館にあるジオラマ模型です。僧寺伽藍地区の北側に細く水路が書かれて、水が流れているように見えます。地面もちょっとだけ低く

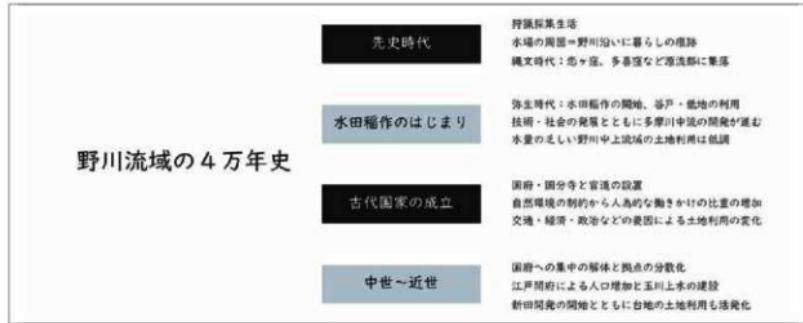


図41 野川流域の4万年史



図42 武藏国分寺跡とその周辺



図43 武藏国分寺跡復元ジオラマ  
(部分: 武藏国分寺跡資料館展示) 2

作っています。回地があって、そこを水路が流れているようになっていて、水色の水路以外もちょっと黒っぽい色になっていて、湿地として作ってあるようで、なかなかよくできているなと思います。それでは、実際にこのあたりを発掘調査してみると、何が出てくるのでしょうか。

実際に現地に行くと、伽藍中枢地区の北側で、この水路が書かれているところは、1メートルぐらいたくなっています。資料館に行くときも手前の道から、「おたカフェ」のところで下がりますよね。1メートル弱くらい高低差があります。この低くなっている谷の部分を令和2年に国分寺市で発掘調査をしたところがあります。僧寺伽藍中枢地区の北西端の北にあたります(図44)。

ここで発掘調査の結果を上空から見てみると、草が生えているところが現在の地面です。回地の中は周囲より黒土が厚く堆積していて、1メートルくらい掘った下が奈良時代の地面です。建物を建てる柱穴があり、また穴を掘って瓦を積んで壁を補強した遺構もあります。今でもこのあたりは回地で周囲より地面が1メートル低いですが、奈良時代、平安時代はさらに低かった。1.5メートルから2メートルぐらいたくなっていることが分かります。

そこに古代の人は溝を掘っています。図45のとおり、断面が逆台形になる溝を掘っているのです。この溝の埋まり方がとても興味深くて、ある時期、もう溝として保たれなく埋まってしまうのですが、その埋まっている地層の上のほうに富士山から降ってきた火山灰が入っていることが分析

で分かりました。これは延暦・貞觀の大噴火といわれる青木ヶ原樹海ができるときの大噴火の火山灰で、9世紀の初め頃、西暦800年から802年の間に延暦の大噴火、貞觀の大噴火が846年頃だったと考えられています。その時期の火山灰がここにあったのです。

どういうことかというと、国分寺を作ったときの瓦などが出ているので、国分僧寺の造営の時に溝を作ったことは間違いない、そしてしばらくの間はこの溝に流れ込む土砂などを浚って埋まらないように維持していたのでしょう。伽藍中枢地区には金堂・講堂などの建物があって、堀があつて、さらに周りの区画溝がありました。そうした、国分寺の造営で作り上げた人工的景観を、一生懸命、毎日維持していたわけです。そういう係の人がいて、泥がたまつたら浚渫していましたでしょう。ところがある時期から、それをしなくなったから溝はどんどん埋まってしまった。いつから維持できなくなったり、正確な年代までは分からぬのですが、少なくともその溝を埋める土の上の方に9世紀前半の火山灰が入っているので、平安時代の初め頃には、もうこの溝は使われなくなつてかなり埋まってしまったのだな、ということは分かるわけです。

そうすると、その頃の武藏国分寺の周辺は、奈良時代に最初に作ったときと変わってきているということになります。溝だけではなく周りもどんどん埋まっている。周りより少し回んでいたお寺の北側が、だんだん埋まり始めていく。国分寺を造営する時には一段高い地形にさらに基壇を作って、そこに伽藍中枢の建物を作る。一段低いところには別に建物を作っている。排水のための水路もある。つまり個別の建物だけでなく、また伽藍中枢だけでなく、僧寺とその周辺の土地を造成、整備することを、おそらく国分寺の創建期から区画分けをして、ここは低い土地で鍛冶公房の場所、ここは伽藍の範囲といった計画を作った。そして、造営後もそれを維持していたのだけれども、だんだん時代が進むにつれて、それがで

きなくなっていたといったことが見えてきます。また、なぜ高いところの伽藍中枢だけでなく、低いところを整備するのかというと、1年中ではないのですが、水が湧いてくるときがあるので、それを流す排水路を作る必要があったのだろうと考えられます。水路を作ったり、作業場とか池とかを作ったりするのですが、それは人為的な「景観」です。ところがそれが維持できなくなってしまって自然の環境条件では、そうした人為的な景観を維持することが難しかった。ここから武藏国分寺は創建の時代から衰退していくまでの間に、建物の配置や規模だけでなく、周囲の

景観・景色もどんどん変わっていったのだということが分かってきています。

次に、伽藍中枢地区よりもずっと東側の発掘です（図46）。ここでは黒土の地層の下から、古代の水路の跡が見つかりました。写真の中央に見えている石は立川礫層、つまり4万年前の多摩川の河原です。その上に、立川ローム層、つまり旧石器時代の地層ではなくて、縄文時代と古代の地層がのっています。これはどういうことかというと、旧石器時代が終わって縄文時代がはじまる頃までは、それなりに水が流れていたので、火山灰や土がたまらなかった。しかしその後、湧水の量に変

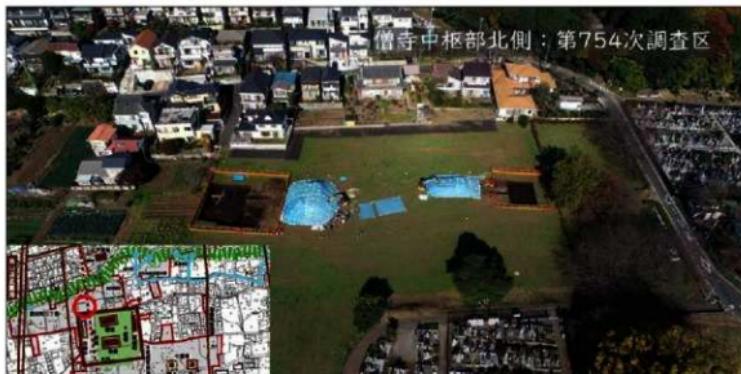


図44 僧寺中枢部北側・上空から（第754次調査）

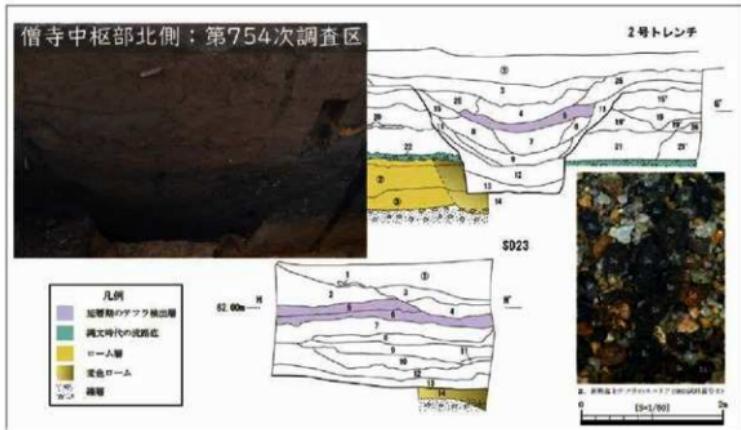


図45 僧寺中枢部北側の溝状造構（第754次調査）

化があったのか、黒土で埋まりはじめます。黒土の層の下の方から繩文土器が出土したりします。

この河原の跡は、現在では黒土で埋まっています。元町用水を除くと、地表に水は流れていません。では、いつ頃に埋まりはじめたのでしょうか。実は黒土の一番底から国分寺の時代の瓦が出てきます。旧石器時代にできた河原の跡を湧水が流れ続け、繩文時代ぐらいまで流れていたのだとして、その後も自然状態で水が流れ続けていたのか、先ほどの伽藍中枢の北側の構のように、人工的な排水路として保っておくということまでやっていたのかどうか、これから発掘を通して確認しなければいけないところということになります。

ここで指摘しておきたいのは、この地点でも、伽藍中枢北側と同じく、9世紀の火山灰を含む地層が、凹地と水跡を広く覆っています。そして、江戸時代以降の元町用水は、ここが埋まった後にもう一度掘り直している。つまりここは元町用水につながるものではなくて、古代の前半には埋まってしまったものになります。埋まってしまった後に、もう一度元町用水を掘って、水が流れるようにしているということです。

このように、伽藍中枢のすぐ北側から、ずっと東の方まで、国分寺崖線の崖沿いに湧水を集める自然の水路があって、それが古代になって国分寺が造営される時期になると人工的な水路が整備され、その維持が行われる一方で、平安時代のある時期以降には、そうした人工的な水路の維持が困難になり、火山灰などで埋まり始めてしまうらしい、ということが見えてきています。

つまり、武藏野台地の南端、国分寺崖線の湧水とそれを集める野川の源流域という、地形と自然の環境条件に加えて、国分寺造営に関わる政治・社会的な背景の下での人為的な環境・景観の創出があり、しかしそれが社会の変化によってまた変わっていくという、ダイナミックに変化する環境と人間社会の関係史です。

最後に、東山道武蔵路について触れて終わりにします。東山道武蔵路が崖線を降りたすぐ南側の

地点ですが、道路の路盤の整地が、昔の多摩川の河原のところまで達しています（図47）。

この調査で分かったことは、東山道武蔵路について、崖線の一番近いところまで整地をしているらしいということです。東山道武蔵路の路面は、現在の地表面とほぼ同じか、その直下にあったということになります。この地点の北側は結構、急な斜面です。では、どうやって東山道があの崖を下っていたのだろうということが疑問になってきます。崖線には、西側の鎌倉街道のような切通しの痕跡が見当たりません。

図48は東山道武蔵路に沿った地形の断面図です。北側と南側に急な崖があります。赤い線は現在の府中街道です。自動車が走れるように崖線は切通して、斜面の下側は盛り土をし、崖線本来の急斜面を緩やかな坂にしています。東山道もそのようにしようと思ったら、例えば斜面の下側に盛り土の痕跡が出てきてほしいのですが、そうではなく、崖に近いところまで、盛り土ではなく地面を平らにしているらしい。北側もかなり急傾斜なのですが、牛に引かせる牛車などは、あのような急な坂をどうしたのでしょうか。たとえそのような急傾斜でも、真っすぐ作らないといけないという、規定があったのでしょうか。この辺りの「地形」とか「景観」から、国分寺・東山道を考えるためにデータが発掘調査から見えてきています。今後、この辺りの「地形」や「景観」について注目して、史跡を歩くときなどには、どこに建物があったということだけでなく、ぜひ周りの「地形」や「景観」も見ながら想像して歩いてみていただけたらよいのかなと思います（図49）。

ということで、時間いっぱいになってしまいましたけれども、私のお話をこれで終わりにさせていただきたいと思います。長時間、ご清聴ありがとうございました。

事務局 ありがとうございました。3億5,000万年前の関東平野全体の話からどうやってまとめるのかなと思って、2時間でなんと昭和の泉町一丁目までたどり着くことができました。本当にあり

伽藍地区東側：第730・738次調査区



図46 僧寺伽藍地区東側で検出された水路跡（武藏国分寺跡第730・738次調査）

崖線を下る東山道：第704次調査区



図47 国分寺崖線下の東山道武藏路（武藏国分寺跡第704次調査）

崖線を下る東山道

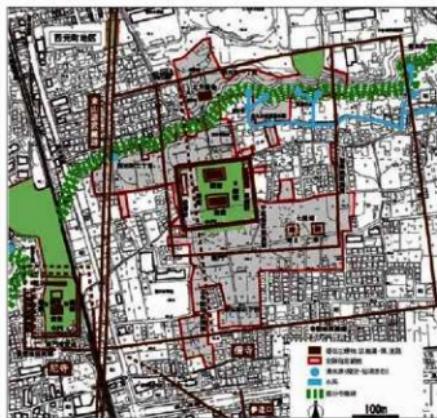


図48 武藏国分寺付近の東山道武藏路に沿った地形の断面形状

## 武藏国分寺の景観と土地利用史

### 自然地形と環境

数万~数十万年スケールの地形発達史

- 先史時代から現代までの国分寺の基盤
- 人為的な改変が困難な前提条件として考慮
- 数百年スケールでの実例的事象

### 人為的な景観の構築

国分寺伽藍配置や街道の計画性

- 設計図と実際の地形に合わせる  
④国分寺の共通性と「武藏国分寺」の独自性
- 時系列の中での変化  
④地域的慣習（災害等）と國家的情勢  
いつ、どのような行為が行なわれたか／  
または行なわれなかったか

図49 武藏国分寺の景観と土地利用史

がとうございます。短い時間、5分程度なのですが、どうしてもこれだけは質問したいという方、いらっしゃいましたら手をお願いいたします。

聴講者 先生、今日はどうもありがとうございます。国分寺跡の礎石なのですが、私たちはチャートだと言っているのです。多摩川の上流だと思うのですが、それがどの辺とか、どうしてできるものかなと、専門的なお話を伺えればと思います。

野口 分かりました。チャートというのは岩石の種類の1つで、どういう石かというと深い海の底、深海にプランクトンとかの死骸が降り積もって、それが長い時間と圧力をかけて岩になったもので、普通の泥や砂が集まった砂岩というものに比べるとプランクトンの死骸なので、少し硬くてガラスとまでは言わないけれども、光沢を持っている石、ということになります。

チャートがどこにあるかというと、多摩川沿いにあります。秋川沿いにはチャートはあまり多くないです。近いところでチャートが多いのは多摩川か入間川です。おそらく、多摩川のほうが川筋1本で国分寺まで運んで来られるので可能性が高いのではないかでしょうか。

次に、あのサイズのチャートがどこまであるかが課題で、現在の河原でいくと、あのサイズのものは青梅市の「釜の淵」という、青梅市郷土博物館がある辺りまで行かないとい、取れないのではない

いでしょうか。ただし注意しなければいけないのは、小河内ダムができてしまったので昔ほど川の勢いがなくなっています。それでもやはりあの礎石のサイズを確実に入手しようと、最低でも青梅市ぐらいまで行かないといけないだろうと思います。運がよければ台風の後などに、羽村とか昭島ぐらいまで流されてきたの入手したかもしれません

いですけれども、その代わり運べないですよね。ですので、これはあくまで個人的な想像ですが、最低でも青梅、実際にはもっと先の鳩ノ巣などから切り出して、持ってきている可能性はあるのではないかと思います。

事務局 ありがとうございました。

## ② 野川流域の旧石器・縄文時代

日本考古学协会会员 中山真治

国分寺の遺跡というと皆さんは、市の名前による武藏国分寺跡というのが有名で、奈良時代、平安時代を中心とした時代の古代の遺跡ですね。

武藏国分寺自体の調査も国内でも早い頃から知られていて調査が行われているので、非常に有名になっていまして、国の史跡に早い段階からなっているのですが、それ以前の時代、旧石器時代、縄文時代という時代の遺跡も調査が、同じ頃から進められているということをお話しさせていただきたいと思います。

この辺は東京の近郊ということもあって、やっぱりすごく研究者が来やすいですから、古くから調査が行われたり、幅広いいろいろなことを知られているということを、今日お話ししたいと思います。

ちょっと駆け足になってしまふかも知れないのですが、旧石器時代、縄文時代という時代ですね。

考古学的な調査でしか分からない時代ですよね。それ以降の奈良時代とか平安時代になれば文献の資料とか出てくるのですが、どうしても考古学的な発掘調査をしなければ何が何だからない時代ですね。そういう中でどういうふうに調査が行われてきたかというのを具体的にこの野川流域の遺跡の場合でみていきたいと思います。

話の流れとしては1番目に野川流域の地形とか地質、遺跡のことちょっと概観して、2番目に野川流域の遺跡の調査とか研究史のお話をさせていただきます。3番目に旧石器時代の遺跡の調査、4番目は縄文時代の遺跡の調査ということで話を進めていきたいと思います。

野川というのは国分寺市域からずっと東に、今の世田谷の二子玉川ぐらいまで20キロにも満たないような川なのですが、いろいろな歴史の情報というかそういうものが詰まっていて、遺跡がす

### 野川流域の旧石器・縄文時代

武藏国分寺跡史跡指定100周年記念連続歴史講座「国分寺市の成り立ちと史跡国分寺跡」  
2022/7/27 於・国分寺市もとまち公民館 中山真治（日本考古学协会会员）



野川公園付近を流れる野川

図1 野川流域の旧石器・縄文時代

ごくたくさんあるということで知られています。特に旧石器、縄文時代の遺跡の調査というのが密度が高く、恐らく全国的にも、高密度で調査されているということでは日本有数の研究が進んでいる地域の1つになります(図1)。

地形的には、この国分寺とか北多摩地区の大半は大体武藏野台地の台地部にあたります(図2)。

丘陵というのは大体今の多摩川の南、多摩ニュータウンとかある辺り、それと奥多摩のある山地で構成されています。東側の23区のほうは台地があって、東京湾に面する低地があつたりするのですが、野川の場合は武藏野台地の一番南の端っこになります。ちょうど多摩川の左岸、北側になる場所で、特徴的な地形は河岸段丘ということですね。皆さん、普通に生活していると、国分寺のほうの駅に行ったりするときに、ちょっと急な坂になっていて、結構辛いなと思うこともあると思うのです。上り坂がきつかったり、これが河岸段丘の特徴で、多摩川が昔削った、侵食した跡ですね。

野川という川自体がもともと多摩川の本流が流れていた流路の跡がそのまま水が残って、崖下から出る流水を集めて今の野川になったと言われています。地学的いろいろな研究が進んできまし

て、そういうことが推定されるようになったのです。

遺跡としては旧石器時代（時代的には後でお話しますけれども）大体3万7,000年から8,000年前と言われているのが、この付近では一番古い遺跡になります。大体今から1万6,000年から2,300年前と言われている、縄文時代の遺跡がありますが、弥生時代とか古墳時代の遺跡があまりないのですね。その後に国府とか国分寺とかできる奈良時代以降になると、集落が形成されるのが特徴なのですが、特徴的に言えば、弥生、古墳時代の集落遺跡、村の跡がほとんどない、というものがこの地域の特徴です。

もちろん下流域に行けば、そういう遺跡があるのですが、この国分寺とか上流地域に関して言えば、そういう時代のものではなくて、それは何に原因するのかなというところを皆さんいろいろ考えていただければと思います。

多摩川は、山地からそのまま直接流れて来る。

ところが、武蔵野台地の川というのは特徴がありまして、台地の真ん中辺りというか、途中から流れ出します。野川とか石神井川とか、神田川なんかもそうですけれども、これが特徴ですね。

普通の川とはちょっと違う。これは、武蔵野台



図2 武蔵野台地の地形

地の場合、台地に伏流水があるところで出てくるのです。湧き出してくれるところが今この辺でも見られる湧き水になって集まって、小さい川を作っているのですね。

昔の海の海岸線が段丘みたいに埋没していたりするのではないかとか、地質の専門の先生がいろいろなことを言っているのですけれども、実のところよく分からぬ。特徴的な地形で、武蔵野台地自体が青梅のほうから来る緩やかな扇状地と言われて、東や北西に向かって傾斜している地形です。今は多摩川が一番南端を通っています。多摩丘陵との境をなしているところですが、多摩川も、いろいろな方向に流れています。北のほうに行っている時代もあれば、今のところに来るまでにかなり動いているらしいです。

ただし、本日のお話しさせていただく旧石器、縄文時代は恐らく今の多摩川の位置とあまり変わらない位置にあり、段丘の形もほとんど今とあまり変わらない景観であったと言われています（図3）。

武藏野台地というのは多摩川が形成した地形の上に火山灰が積もっているのですね。関東地方だと富士山とか箱根の火山が長い間に噴火して、それが風成堆積といって、風で運ばれてたまつた、

火山灰が堆積しているのがこの私たちの住んでいる土地の特徴、関東ローム層という言い方をします。その関東ローム層の中に旧石器時代の遺跡が眠っていたり、その上にある黒土層も実は火山灰の一種で、そこから縄文時代の遺跡が出てきたりしています。

この後お話する遺跡というは大体野川に沿ったところで段丘が2つあります。武藏野段丘というのは今から6万年ぐらい前に形成されたと言われていて、ちょうどこの市域の北側ですね。

南側の一段低いところが立川段丘です。10～15メートルぐらいの高低差があって、3万年前2万年ぐらいの間に形成されたと言われています。

旧石器時代、縄文時代の遺跡は、大体野川に沿った形で分布しているのが分かります。これはひとえにやっぱり湧水点がある。今でも水が枯れてないところがいっぱいありますよね。こういうところは意外と東京でも少ないのでないかと思うのですが、今でも水量が多いところに結構特徴があるようなのです（図4）。何万年も同じところに水が湧いていたりするっていうのはちょっと驚きですよね。私たちはそういうところにまだずっと生きているというのも、またすごいのですけれど

## 国分寺崖線と野川 多摩川の河岸段丘と名残川ー野川

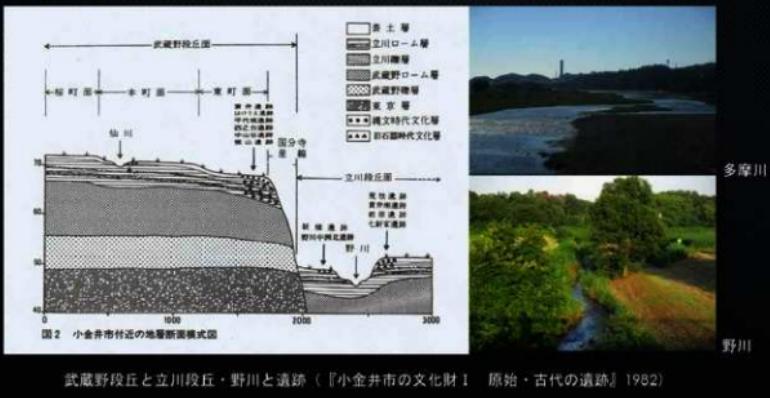


図3 国分寺崖線と野川

も。

武藏野台地の湧水というのは主に国分寺崖線のような、崖の下から湧いている。その下にも、立川段丘という一段下の段丘があって、その下に多摩川の沖積低地があるのです。立川段丘から南側にはローム層が堆積していない、すごく若い地形です。だから多摩川の砂利とか粘土が堆積していて、そういうところは旧石器、縄文の遺跡を見つからないのです。弥生とかそれ以降の古代の遺跡はあります、主に旧石器、縄文人が住んでいたのは立川段丘とか武藏野段丘の上に住んでいます。なおかつ、湧水が得られやすいようなところに点々と分布しているのが、大雑把なこの地域の古い時代の遺跡の特徴になります。2番目として野川流域の遺跡の調査、研究史を簡単にお話しさせていただきたいと思います（図5）。

遺跡の調査も実は明治時代から始まっています、現在の令和までに1期、2期、3期、4期と大体私のほうで調査・研究史を分けました。昭和の戦前期までは、今のような大規模な調査とか、行政が調査を行っていませんでした、大学の先生とか特別な研究者が調査する、一般的な市民はあまり知られていないような調査が行われているんですね。最も有名なのは市内の国分寺村・石器時代遺跡です。

今の本町遺跡、国分寺駅の東側のところに当たるのですが、この遺跡が実は中央線（甲武鉄道）が明治時代、明治22年に開通したときに、その工事の際に見つかった遺跡ということで、全国的に有名ですね。これは現在、北口の市街地のところでビルの下になってしまっています。

国分寺市が解説板を線路の脇のところに立てているのですが、そこが遺跡のちょうど南側になるのですかね。その後、国分寺市でも組織的な調査を行っていまして、（図6左上）地図のように縄文時代中期の集落があったということが分かつてきました。それは明治時代の先輩方の研究者のおかげで、同図右が非常に有名な図でして、スケッチが残されているのです（同図右）。これは考古学者の鳥居龍蔵先生が調査して、大野雲外と

いう方と何人かで出かけていって、どうやって伝え聞いたのか分からないのですけれども、中央線（甲武鉄道）を作るときに切り通しになっていましたが、その時に石器とか土器とか出てきて、中央の学会に伝わったのです。

それで駆けつけて遺物を探すというか、表面に落ちている土器とかそういうのを探して、先史時代の遺跡じゃないかということで、石器時代の遺跡ということを認識するのです。ここで一番大きいのは、ちょっとこれ見づらくてすみません（図7）。大正時代になってから書かれた本なのですが、国分寺の遺跡を私たちが掘ったと、鳥居龍蔵さんが書いていて、発見した遺物がどういうところに入っているかという観察をちゃんとしているのですね。当時はそんなに層位の観察というのではありませんとやってなくて、珍品を拾い集めるみたいな、まだそういう時代だったのです。だから今みたいに科学的な層位的というか、層を上から剥いでいく、どの時代がどの層になるとか、そういう科学的な研究があまり行われない時代に、客観的にちゃんと見ようとした遺跡なのです。

それがこの国分寺にあったというのがすごく驚きですね。

今、私たちが「遺物包含層」といって、地面を掘るとその層から土器とか石器とか出てくるのです。それを鳥居龍蔵さんは、今でも使う「遺物包含層」という表現、それを使ったのが、この遺跡が最初です。そこはだから遺物を包含している、含んでいる、あるいは「遺物包含地」という言葉を方をするのですね。

この時代はまだ発掘調査を組織的にやってなく、大森貝塚の調査とともに既にありました、今のように科学的な調査は進んでいません、遺跡というものは畠を歩いたり、普通に地面の上にある土器を拾ったりする時代だったのです。しかし偶然中央線の線路で削ったところを、ちゃんと観察していました。そこに土器が入り込んで、食い込んでいることが分かった。今は常識なのですが、当時の縄文人の生活面が先ほど言ったように火山

## 武藏野台地と湧水 現在の湧水



図4 武藏野台地と湧水

## 2 野川上～中流域の遺跡調査・研究史

第Ⅰ期 明治～昭和時代戦前期（1894～1944年）

国分寺村石器時代遺跡（1894年）、志ヶ淵遺跡、貫井遺跡等の発見。（1923年頃）

彌文時代の遺跡の立地と湧水の関係に着目

第Ⅱ期 昭和戦後～高度経済成長期前半期（1945～1968年）

甲野勇、吉田格氏らの指導による中高生の発掘調査（小規模の調査）

第Ⅲ期 高度経済成長期後期～昭和時代末（1969～1988年）

東京都等の行政主導の調査と自治体専門職員配置による継続的な調査体制（遺跡調査会組織）の確立

野川遺跡の調査以降（野川流域の河川改修等の事前調査最盛期）

開発に先立つ記録保存の原則

第Ⅳ期 平成時代～令和時代（1989年～現在）

調査に民間の発掘支援業者の活用を開始



図5 野川上～中流域の遺跡調査 研究史

### 国分寺村石器時代（本町）遺跡（国分寺市）「遺物包含層」の認識



本町遺跡の  
住居跡分布  
(国分寺市  
ほか2022)



大野延太郎  
(雲外)による  
スケッチ  
1894

垂井土—遺物  
包含層（地）  
の認識



本町遺跡解説板（国分寺駅北口東側）

図6 国分寺村石器時代 本町遺跡

灰とかいろいろな腐植土がたまって、だんだん地面がかさ上げしていくのです。それを観察した遺跡ということで非常に有名になりました。まだこの当時は、住居跡は認識されていないのです。

ただ、この後、貝塚の調査とか進んでくると、堅穴住居というのは土の中に、上から順番に掘っていくと面的に残っているということが、認識されるのです。しかも面白いのは、上の黒土層というのは現代とか近世、近代の人の生活している畑、今の現代人が畑を作る層。耕作土とか耕土という言い方をするのです。ローム層というのは、この時代もう認識されていたのですね。この時代まだ旧石器のことは全然分かっていないのですが、赤土と黒土との間のちょっと茶色くなる、色が変わる層があるのである。これ私たちは今「II層」とか「漸移層」とかいうのですが、ちょうど黒土から赤土になるとこに縄文時代の遺物が出たというものが、このときに認識されているというのは、非常にちゃんと見ているのですね。これはもう国分寺市の遺跡の研究史の中で一番大きいし、これは全国的なそういう遺跡を観察するための、一番方法論的なものを示した遺跡、ということではすごく評価されるのだと思います。それが明治の27年です。遺跡としては今の本町遺跡のほかに、恋ヶ

窪遺跡も同じで、それ以降に発見されています。

恋ヶ窪遺跡は今の日立の中央研究所辺りから今の西側辺りですね。西武国分寺線が走っているところをちょうどまたぐような形で大正の頃、学会に知られるようになりました。

もう一つ、同じ頃に貫井遺跡、お隣りの小金井市にある遺跡なのですが、こちらも大正時代から昭和の戦前期にかけて、何度か調査されているのですね。前田武四郎さんという実業家で、今のNEC、日本電気の前身を作った方なのですね。この方が三楽荘という別荘を貫井南町のところに作りました。この国分寺崖線には明治から昭和にかけて、都心から近いため、別荘地として流行するのですが、殿ヶ谷戸庭園とか滌浪泉園は、当時の別荘の跡ということですね。別荘を作るところは大体風光明媚な崖の面で、湧水があつたりするところを選ぶのですね。そして、そういうところには遺跡が当然あるのです。

前田武四郎さんが別荘を作ったときに、発掘したのが図8です。実業家ですから、いろいろな考古学的知識を多分ある程度知っていたのですね。自分のところの敷地から出たものをちゃんと繪葉書にして配布しています。先ほどの鳥居龍藏さんにもその話が伝わって、調査が行われるようにな

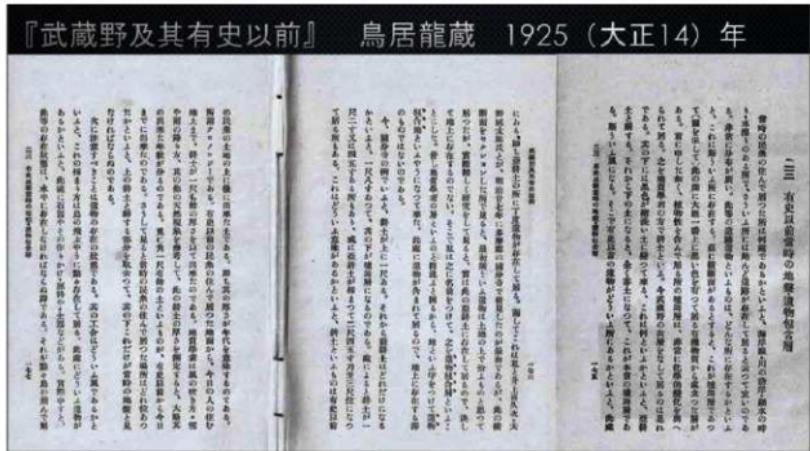


図7 武蔵野及其有史以前 鳥居龍藏

りました。貫井遺跡は、戦後はいろいろ高校生が発掘したり、あるいは学校建設のときに調査をしたり、開発に伴う調査がずっと行われて、今では50軒以上、住居跡が出てきています。『科学朝日』にも紹介されたり、縄文時代の代表的な遺跡ということで、非常に早くから有名になった遺跡です。

図9は南梶野遺跡、今の小金井市と三鷹市の境、国際基督教大学敷地のちょうど西側になります。

これは戦後になってからの調査ですが、戦前は皇国史觀による神話とかが歴史の中心だったと思うのですが、戦後はそういうものが否定されると

いいますか、生の歴史を学ぼうということで科学的な調査、考古学的な調査によって歴史を学ぶという機運が出てきます。全国的に有名なところだと登呂遺跡の発掘とかを契機にして、考古学者が科学的な調査をやりましょうということで始めるのですが、当時は大学の先生がはじめに音頭を取って、同じように高校の先生や中学の先生が発掘調査をリードしていくことになります。

地域で発掘調査をしてみようという機運が出てくるのが昭和の戦後、昭和21年以降です。こういうのは全国的に広まるのですが、有名なところ



図8 貫井遺跡

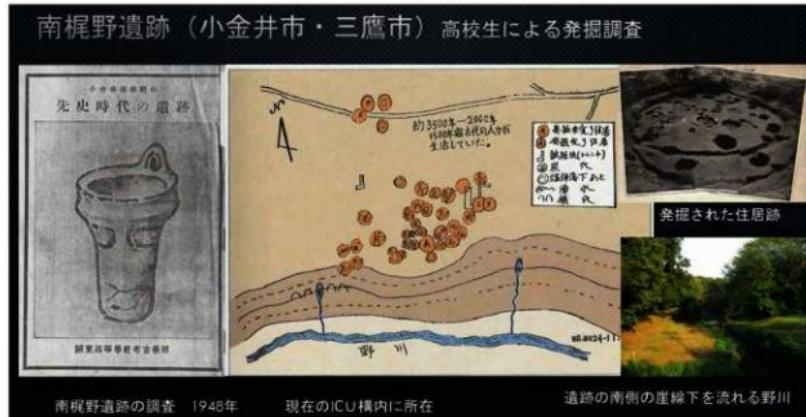


図9 南梶野遺跡

だと南梶野遺跡で、高校生たちが掘っているのです。今の発掘レベルからすると非常に稚拙な感じもするのですけれども、発掘報告書も残されていて、今、野川公園でこういう状況ですね。（同図右下）こういうところに縄文時代中期の集落があったということが分かり、それを自分たちで掘つてみようというのは、当時の中学生、高校生で、そういうのが歴史教育の一環だという認識があつた時代ですね。

もう1つ、国分寺の考古学的な歴史の中で一番大きいのは熊ノ郷遺跡と殿ヶ谷戸遺跡、いずれも旧石器時代の遺跡で、昭和20年代に発見された遺跡です。

実は熊ノ郷遺跡というのは、皆さん教科書で旧石器時代を勉強するときに、岩宿遺跡は必ず出てきましたよね。歴史の教科書で。あれが最初に日本で見つかった旧石器時代の遺跡、昭和24年群馬県で関東ローム層（赤土）の中から遺跡が出るぞということで、いち早く有名になった遺跡なのですが、実は熊ノ郷遺跡のほうが、あまり知られてないのですが、1年ぐらい前に発見されていたのです。星野亮勝さん、という地元の市長になつた方なのですが、郷土史に造詣があり、ローム層の断面に石が出ていたり、石器が出ていたのを早々に気がついているのですね。それを中央の大

学の先生に報告しているのですが、その先生が報告を怠っていました、岩宿に先を越されてしまった、という苦い経験があるのですね。だからもし熊ノ郷のほうが最初に発見されていたら、教科書には熊ノ郷が載っていたと思われます。

戰前まで関東ローム層の赤土のあんな硬い層の中に、人類が住むような痕跡はないと言われていましたが、岩宿とか熊ノ郷遺跡の発見を基に、全国各地で発掘されるようになりました。殿ヶ谷戸北遺跡は今の東京経済大学の西側付近のですが、ちょっとこの前写真を撮ってきたのですが（図10）、住宅の中に埋もれてしまって、多分この東側辺りかなと思うのですが、1960年代の写真を見ると全然違いますよね。まだ何にも住宅が建っていない。やっぱり1960年に調査しているのですが、この頃が高度成長期で、国分寺駅の辺りを中心になど化が進んだ時期と考えていいと思うのです。その直前の貴重な調査です。これもいろいろな本に載っています、甲野勇先生という東大を出られた先生で、人類学とか考古学の当時の第一人者だった方が、たまたま最初都内に住んでいたのですね。それが今の国立市に来られてから、この辺の遺跡を積極的に掘るようになった方です。

去年国立市の博物館で展示会をやっていたのですが（生誕120年　甲野勇　くにたちに来た考古



図10 熊ノ郷遺跡 殿ヶ谷戸北遺跡など

学者)、縄文時代の研究で有名な先生です。この方が発掘をリードして、国分寺ですと先ほどの熊ノ郷とか殿ヶ谷戸、あるいは恋ヶ窪遺跡とか、そういうところも積極的に調査をしています。

後継者として吉田格先生という方がいまして、この方もずっとこの武藏野台地、主に関東を中心に武藏野台地の野川流域、恋ヶ窪遺跡とか貫井遺跡とか、大体国分寺とか小金井とか、この周辺にすごく力を入れて調査にあたられたのですね。この先生も亡くなってしまったのですが、私も学生のときにいろいろお世話になり、国分寺・小金井・青梅・三鷹とか多摩地域の調査団長をずっと率いられてやってこられ、私も一緒に調査をやらせていただいた先生です。

図11にある『先史文化』というのは高校生たちが出した貫井遺跡とか恋ヶ窪遺跡などをまとめたレポートになります。一番右側にある「武藏野を掘る」というのが今の遺跡のガイドブックみたいな感じで、甲野先生が書かれたものです。これも昭和35年ぐらいの刊行なのでもう60年以上前の本なのですが、この辺の旧石器、縄文から奈良時代、平安時代の遺跡までを紹介していまして、今、読んでもなかなか面白い本ですね。こういったものが戦後の1950年代、60年代に刊行されました。

ただ、今、私たちがやっているような調査よりはすごく小規模な調査で、1週間とか2週間で終わってしまうような調査です。逆に言うと遺跡を壊さない。目的としては、今の調査というのは開発を前提にして、遺跡がなくなってしまうための事前調査なのですね。当時の方は本当にちゃんと目的意識を持って、ここに遺跡があるから、どういうふうに埋まっているのだろうとか、そういうのを探ろうということでやっている、いわゆる学術調査を行っています。そういう意味では同じ調査でも全然質が全く違うのです。

今はいろいろな市町村、国分寺市もそうですが、展示施設がありますよね。どこの市に行っても1か所、2か所必ず遺跡を紹介したり、歴史を紹介する施設はあると思うのですが、この当時あまりないのです。1950年代から60年代ぐらいというのは、まだ遺跡とか遺物を展示、紹介するところはなく、唯一この地域にあったのは、小金井市に武藏野郷土館というのがございました(図12)。

これは私も小学生の頃興味があつてよく行ったのです。今、江戸東京たてもの園になって、時々昔の調査した遺物を夏場になるといつも展示しているのですが、これが唯一の展示場所でした。これもなかなか面白いユニークな博物館でした、地



図11 野川流域遺跡関係図書

元の国分寺とか、この辺の野川とか多摩地区の遺物があつて、これも甲野先生が博物館を作ろうとうところをリード、指導していまして、学芸員としては先ほどの吉田先生が中に入つて実際に実務を執られたということで、そこの調査も結構やっていたのですね。だから武藏野郷土館の調査としても、この辺の野川とかで積極的にやられていたので、非常に教育施設とか研究施設としては、当時は最先端の施設でした。以上が前段の研究史です。

3番目としては旧石器時代の遺跡の調査ということで、旧石器時代の遺跡は、先ほど日本で確認されたのが昭和24年の岩宿遺跡以降なのですが、どういう時代かというところですね（図13）。

今、通説になっているのは大体第4紀という、地質でいうと第3紀、第4紀なんていう大きい区分があるのですが、第4紀という人間が活動するようになった時代の話で、関東ローム層が堆積している地層を、地質学での研究がまず進められてきました。人工的な遺物である石器とか、礫がどういう形で入ってくるかというところが問題になつてきています、何年前の石器なのか、そしてどういうふうに石器が変わってきたのか、などが興味の対象になってきました。

それが本格的に始まったのが、2項目にある小田静夫さんという、元東京都の学芸員の方で、野川遺跡という、今の調布市の野川公園のところにあるのですが、今まででは旧石器の遺跡というのではなくて、ある時代の1枚1枚の層は調査しているのですが、それが重なつて出てくることが分かった遺跡、が野川遺跡という遺跡ですね。

驚くことに、立川ローム層は大体3メートルぐらいのローム層の堆積があるのです。その中に約10枚ぐらい、文化層という言い方をするのですが、石器が出土する、人が生活した跡が10枚ぐらい重なつて出てきたのです。それは当然古いほうからだんだん人が入れ替わって、自然に埋没したもののが重なつていてるのですね。それが重層的にたくさん出てくるのがこの野川流域で、日本の

旧石器の編年研究的な場所がこの野川流域の遺跡だったのです。

3番目としては遺跡の面的な広がり、遺構といふ言い方をしますけれども、人間が残した石器を作った跡を、ユニットあるいはブロックと言い、そういうものがそっくり残っているのです。石をたたいて割つて飛び散つた跡があり、どういうふうに石をそこで剝いで、どういうふうに持ち出したかということがある程度分かるようになってきたのですね。それが1970年以降の調査になります。

また疊群といいまして、蒸し焼きみたいなバーベキューを作つた跡、がいっぱい出てくる。旧石器の遺跡というのは大体石器を作つた跡と、バーベキューをやつた跡が主な痕跡になります。

ないことはないのですが、堅穴住みみたいなものはほとんど確認できません。この野川流域に関して言えば、そういうものはほとんど出てこない。ほかの時代と比べても非常に生活の痕跡が少ないので、当然木で作ったものとか、有機物はみんな腐ってしまうのです。当然遺体なんかも残っていない。これがヨーロッパの遺跡だと骨角器が残つてたりするのですが、そういう可能性がほとんどないですね。

4番目として、南関東最古の文化層が発見されました。いわゆる立川ロームX層というところに出てくるのですが、年代測定で、大体3万7,000年とか8,000年と言われています。東北の石器の捏造事件がありましたよね。もっと古い遺跡だとして捏造されてしまったのですけれども。

やっぱりこの野川流域を中心としたX層の石器というのは、この地域では一番古いくことになっています。もっと古い時期の石器なんかはこの地域以外にも出ているのですが、しっかり旧石器から縄文時代まで年代的にたどつていけるものがそろつてゐるのが、この野川流域の遺跡になります。

断片的に古い石器が出たりするところがあるのですが、それを明確に捉えられるのがこの地域の特徴になります。

旧石器の遺跡分布の特徴は、小河川に沿っているんですね。先ほど言ったように、直接山地から流れてくるのではなくて、武藏野台地の途中から湧き出るようなところの川、その小河川のところに帯状に点々とあるのです（図14）。

ですから非常に川に依存する時代、暮らしだったということが分かります。大きい川のところより、割と小河川、野川とか石神井川とか神田川とか、そういうところで密に見つかっています。特に野川の流域というのは、調査する事例が多かつたというのもあるのですが、非常に密度が濃いの

ですね。旧石器の遺跡の中で武藏野台地の中でも、恐らく何らかの条件がよかつたというのが1つ考えられます。そういうことをまず見ておいていただけるとよいかと思います。

そもそも旧石器時代の石器が含まれている層は火山灰、いわゆる関東ローム層というのですが、関東地方の北とか西には火山があるんですね（図15）。東側はないのですが、伊豆諸島からずっと関東の南から北を取り囲むように火山がありますよね。そこから時々噴火しているのです。

昨日でしたか、九州の桜島が噴火しましたが、



図12 武藏野郷土館

### 3 旧石器時代遺跡の調査

- 1 第四紀と火山灰（関東ローム層）の編年研究（テクロクロノロジー）の進展—地質学と考古学の連携
- 2 小田静夫氏による「野川以降」の旧石器時代の重層的な文化層の確認と編年の確立
- 3 遺跡の面的な遺構の広がり—石器製作跡（ユニット・ブロック）と隣群の検出
- 4 南関東最古の文化層の発見（X層—約37,000～38,000年前）
- 5 主要な遺跡（多摩丘陵・武藏台、野川中州北、野川遺跡他）



多摩丘陵遺跡（X層）の石器

図13 旧石器時代遺跡の調査

そういうものが噴火して、火山灰が堆積して形成されたのが大体関東平野といわれているのです。

もう1つは広域火山灰、関東地方、富士山とか箱根の火山から飛んできた火山灰以外にも、実は九州から飛んできているのですね。今から2万5,000年ぐらい前に始良火山、最近噴火した鹿児島湾、桜島の北側の鹿児島湾から飛んできた火山灰が堆積しているのです。これを私たちはAT火山灰なんて言うのですが。こういうものがこの辺の野川の遺跡を掘っても、実はよく出てくる。何が出てくるというと火山ガラス、そこから飛んできた火山ガラスの粒がよく見えるのです。そういうものが2万5,000年前に降ってきた層が、こういうところにある。

図16が遺跡でいうと多摩蘭坂遺跡の断面なのですが、これ大体3メートルぐらいあります。一番下が立川ローム層のXa層、Xb層、Xc層で、ここから旧石器時代の石器が出ています。ここが今一番古いのですね。先ほど言ったような3万8,000年という値が出たのは大体この辺で、ここから下はみんなが掘っているのですが、全然石器が出てこないのです。まだ掘り足りないのでないかという人もいるのですが、ここまでいくと結

構危ないから掘れないのですね。安全基準からすると、人が入って手で掘ると崩れてしまったりするから、なかなか掘らせてもらえないというのがあるのと、ビルを建てたりするときは掘るのでしようけれども、そんなに掘る必要はないということになってしまふと、あまり掘れないのですよね。だから私なんか思うには、まだ堀りが足りてないのかなと思っているのです。もっと掘れば出てくるのではないかという期待もあるのですが、出てこないです。ここが一番今のところ最古の石器が出てくる場所です。これは野川流域だけじゃなくて、南関東全体の流れの中ではそうなっています。

火山灰は火山の噴火によって積もったというのが常識だったのですが、実はよっちゅう火山が噴火しているわけでもないのに、こんな3メートルたまってしまうのですね。計算上だと1年に1ミリぐらいの計算になってしまうのですよ。そんなにたまるわけないということで、実は再堆積した火山灰も含まれているらしいということも分かっています。積もった火山灰が再び風で飛ばされたりしてきたものがたまたものだという考え方方が最近の考えです。

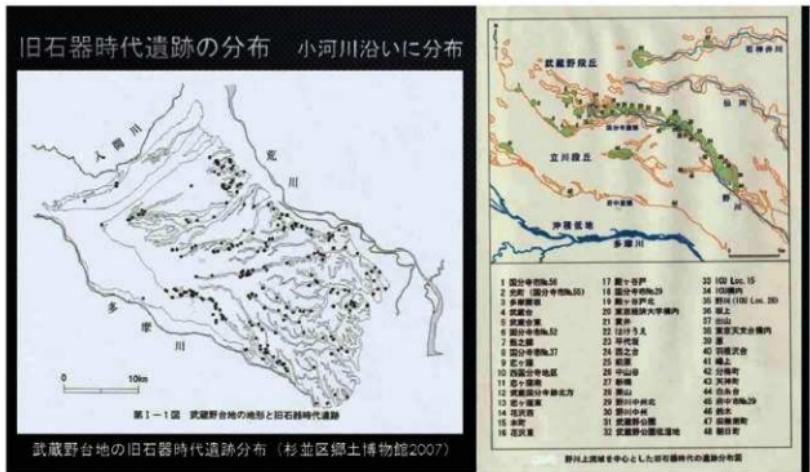


図14 旧石器時代遺跡の分布

もう1つは、当然日本は雨が多い気候ですので、木が生えたり草が生えたりしますよね。それによって有機物がたまるのです。葉っぱが落ちたりして、腐葉土が形成されてきたので、こういう厚さになってくるだろうと、そんなことが言われています。

図17は見づらくて申し訳ないのですが、火山

灰が6メートルぐらいあるところもあるのですが、上部の立川ローム層というところから上のほうが旧石器時代の石器を含む層になります。武藏野ローム層から下というのは今のところ石器が見つかってないところになります。

府中市の武藏台遺跡（図18）、これは今の多摩総合医療センターがあるところですね。昔の府中

## 日本列島の火山と火山灰 火山灰に覆われた関東平野



図15 日本列島の火山と火山灰

## 立川ローム層と石器文化層 火山灰中に重層的に埋もれた文化



図16 立川ローム層と石器文化層

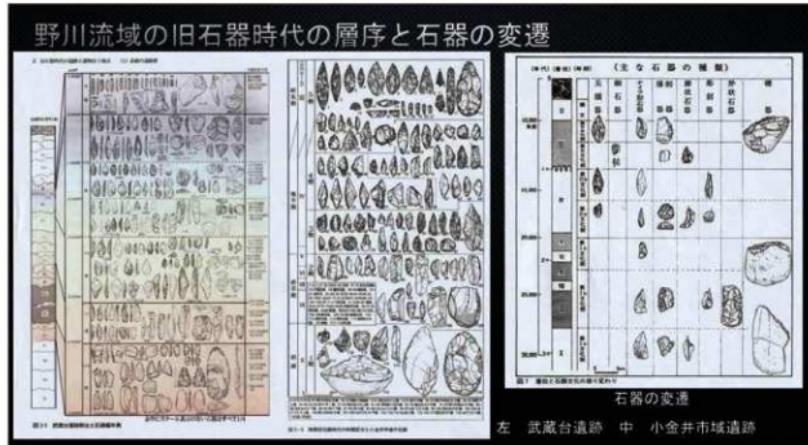


図 17 野川流域の旧石器時代の層序と石器の変遷

病院があったところなのですが、その建替えに際して出てきた石器ですね。先ほど言ったように、ローム層というものは酸性土壌なので大体腐ってしまうのですね。木製品とかそういうものは、出てくるものは本当に石器と石しかないという状況なのですが、それを並べたものが図 17 の右になります。いわゆる X 層のところには大型の斧が出てくるのですね。石斧が出てきます。これは縄文時代の石斧にも似ているのですが、楕円形のようなもので、これがまとまって出てくるのが府中の武藏台遺跡とか、国分寺市で言えば多摩蘭坂遺跡というところで、見つかっています。そこで、そういう遺跡を作った大きな工房みたいなものがある、というのは分かっています。特徴があるのが、刃の部分は結構磨いたりしているのです。今までには、新石器時代になってから刃の部分を磨く磨製石器が出たのではないかというのが通説だったのですが、1970 年代に小平の鈴木遺跡とか多摩蘭坂遺跡とか、そういうところで局部磨製石斧、一部を磨いた石器が出てきてしまったのですね。これは結構ニュースになって驚きました。

日本の旧石器の特徴というのは、ナイフ形石器というのがありますよね。槍先みたいな尖っている石器です。これは X 層の時代から一番最後の縄

文時代に続く時代まで連続とあるのですね。2 万年の間ずっと、ちょっとずつ形を変えながらも続いているのです。旧石器時代の最後になってやっと、槍先型の尖頭器という両面調整の、いわゆる槍の形をしたものが出でてくるのですね。縄文時代に移る頃には。

また黒曜石とかチャートという地元で取れる石とか、黒曜石なんかは遠くの石を持ってくるのですが、そういうものを中心にして作られているのが非常に多いですね。特徴的なのは小さい細石刃という細かい石器があります。これは全世界的に出てくるのですが、旧石器時代の終わりに出てくる、組み合わせて使った石器と言われています。

これは今のカミソリみたいな感じの鋭い刃を持つのですが、細かい小さい刃を骨とか何かに埋め込んで使う石器ですね。これもナイフ形石器と同じように動物を突いたりするための道具と言われています。

武藏台遺跡、これは先ほど言ったように、石斧の工房のような遺跡ですね。大体国分寺崖線の一番南の端っこに集中して出てくるのですが、そこで石斧を作ったり、折れてしまったものを再生したり、そういう手入れをする、メンテナンスをする遺跡ですね。当時は、立川段丘は離水して、多



図 18 武藏台遺跡



図 19 野川中州北遺跡

摩川は今の多摩川と同じようにずっと南のほうに行っているので、下が水没しだったということはないと思うのですが、恐らく狩りなんかをするときに非常に見通しがよかったのですよね。武藏野段丘の縁辺にそういう一つの生活の拠点を作ったのではないかと思います。

図 19 は小金井の野川の中洲北遺跡ですね。今 の武藏野公園、府中市と小金井市の境になるのですが、ここからは 3 枚、旧石器から縄文時代の植 物化石層が出てきました。ここでは旧石器時代の

道具では有機物が残っていまして、なかなかこう いうものは残らないのですが、大体 3 万 2,000、 3 万 3,000 年前の層と 2 万年ぐらい前の層と 1 万 3,000 年ぐらい、3 枚の層が重層的に出てきました。それを分析すると中には花粉が入っていました。自然の流木とかいろいろな材が入っているのですね。

そういうものを樹種同定といって、プレパラ トにして作って観察すると、木の種類が分かるの です。そしてその辺の植生とかの環境が分かるの

で、気候も推測できる。これはたまたま野川の水に浸かっていたのですね。長い間1万年以上も前から水に浸かっているところというのは、こういうものが腐らずに残っているのです。だからローム層がそのまま堆積してしまって乾燥した台地上ではこういう遺跡にはならないのです。木なんかは全部腐ってしまうのですが、これはカラマツがたまたま残っていた状況です（図19右上）。大雑把に言いますと、旧石器時代の2万年ぐらいが最寒冷期と言つて今より全然気候が寒いのですね。今の信州の高原とか、あるいは北海道ぐらいの寒さのところで、こういう割と亜寒帯とか寒帯に生える針葉樹、松の仲間、トウヒとか、こういうものがこの辺りでたくさん出てくるのです。こういう種子も野川中州北遺跡では出てきました（同図下中央）。東京の平地にも今の高山地帯に生えているようなものが生えていたことが分かります。

この遺跡は礫群がたくさん出てくるのですね。あとはナイフ形石器とか、ちょっと時代を下ると尖頭器なんかも出てくる（図20）。

図21は多摩蘭坂遺跡の例なのですが、細石刃という世界的にヨーロッパからアジアにかけて見られる細かい黒曜石を、大きくても3センチぐらいにたたき割って作ったカミソリのようなもの

で、こういうふうに骨とか木に着柄して使った槍というか、投げ槍、そんなものも出てきました。

ここで注意するべきは、黒曜石はこの辺では採れないのです。多摩川の流域では、どこから運んでくるか、これは縄文時代も旧石器時代もずっと通しての話なのですが、大体長野県の今の中信高原、霧ヶ峰の辺り、あるいは伊豆箱根とか、神津島から運んで来ているのですね、実は。ほかにもいっぱい産地が関東の周りにあるのですが、主だった産地は大体神津島が信州の霧ヶ峰の和田岬が多い。これは細石刃の前の時代のナイフ形石器の時代からずっと連続と行われていて、遺跡によって個性があつたり、恐らく季節的なものもあると思うのです。寒いときは信州のほうが寒いから、恐らく神津島のほうに採りに行っているのだとか、夏の間は涼しいから信州のほうに採りに行けるのかなということがあるのですが、研究者の中では、交換で黒曜石を調達したのか、あるいは武藏野台地の人々が直接出向いていて、採集した、という考え方もあるし、いろいろまだその辺のところは、学会としては統一的な見解はないのですね。ただ事実としてそういうところから、石材が持ち込まれて、この場でこっちへ来てから石器を作っているというのが分かっています。



図20 野川中州北遺跡2



図 21 多摩蘭坂遺跡

#### 4 縄文時代遺跡の調査

野川流域では縄文時代（16,000～2,300年前）の全時期にわたり途絶なく居住が行われたわけではない。縄文時代の生業は従来は狩猟、漁労、採集といわれているが、近年は植物栽培（農耕）も視野に入る。

- 1 草創期の遺跡（定住的ではない居住痕跡）
- 2 早期前半の集落遺跡（武藏台、はけうえ遺跡他）  
　　豊穴住居の構築と土器の普及
- 3 中期の「大規模環状集落」遺跡（恋ヶ窓、多宜庄、中山谷遺跡他）  
　　集落の立地条件は湧水点  
　　中期～多摩地域は列島で最も繁栄した中部高地～南関東の遺跡密集地の一つ  
　　豊穴住居跡が数多く時期細分が可能（新地平編年）－集落の変遷が追いついて  
　　豪華な土器文化と施肥堅穴のゴミ捨場  
　　打製石斧と植物栽培について（最近の土器植物種実痕研究など）
- 4 中期末～後期初頭の集落遺跡  
　　集落の小規模化、柄鏡型數石住居跡
- 5 後期前半の集落遺跡（武藏野公園、野川中州北遺跡他）  
　　野川沿いの低地に生活拠点集約化（低地の作業場等）
- 6 希薄な晚期遺跡  
　　後期後葉以降、野川流域では生活痕跡が未確認



図 22 縄文時代遺跡の調査

4番目として縄文時代の遺跡の調査というところに入りたいと思います（図22）。

縄文時代、皆さん、教科書でも旧石器時代の次に来る、ということも多分ご存じだと思うのですが、今の通説では年代測定の技術が進んだこともあり、今まで1万年から1万2,000年前と言われていたのですが、最近の年代測定はもっと古くなりまして、1万6,000年ぐらい前から縄文時代が開始されたのではないかと言われるようになります。

また、なので、全体的に見ても1万3,000年ぐらいいの時間幅がある時代になります。概に縄文時代と1つの時代にくくられるかどうかも、なかなか問題があるのですけれども。縄文時代の生業というのは狩りをしたり、漁業をしたり、植物を採集したりしている時代と習ったと思うのですが、最近ではいろいろな栽培植物も見つかっていまして、そういう意味では縄文時代に、農耕が行われていたのではないかという考え方もある（昔から

そういう説も出てきたのですが）なかなか受け入れられなくて、教科書的にはまだ採集とか狩猟をやっている時代というのが今の位置づけです。

私はもうちょっと一步進んだところで考えてみたいなどうことで、最近の研究の成果も入れて今回お話ししたいと思っています。

日本列島の縄文文化というのは、既に昭和の10年頃からもう土器に「型式」というのを、いわゆる「タイプ」、いろいろな流行ですよね。土器の流行、形の流行、これを「型式」というのですが、「スタイル」とか「様式」とか、いろいろな言い方があると思うのですね。これを漠然と研究者が図23のような編年表というものを作ったのです。これは要は日本列島、ずっと北海道の北の端から九州、沖縄を含めて、縄文文化というのがあるという前提なのです。日本列島を通して見られる日本独自の文化を縄文時代という言い方をすると、縄文時代とか縄文文化とすると、当然さつき言ったように1万6,000年ぐらい前から2,200、2,300年前まで続くわけですよね。当然違いは出てくるのです。しかも地域が分かれていると違った文化が当然あると思うのですね。それを簡単に

まとめたのがこの表になります。

表の中に漢字（主として遺跡名）がいっぱい書いてあります。これは土器の「型式」を表しています。囲ってあるのはまとまり、横が地域になって、縦が時間軸です。一番上が一番古くなっています。下に行くにつれて新しい時代。旧石器時代との境は上、弥生時代との境は下となります。土器の編年研究という言い方をします。土器の特徴を並べて、これだけのいろいろな文化の総体が縄文文化という言い方するのですが、これは何を基準にするかというと、土器を基準にします。土器というものは一番時代とか地域を反映するのですね。石器とかほかのものは意外と機能とか使い方によって同じようなものを作ってしまうので、あまり地域性が出てこないのです。地域の特徴というのはやっぱり土器に一番反映されているので、土器を基準に年代とかそういう時間軸を決めましょうというのが、縄文時代の研究では1つの決まりみたいになっています。

私たちのいる関東が実は一番確認が進んでいまして、遺跡の調査も一番多いのですね。研究者もいっぱいいるということで、非常に細かく「型式」

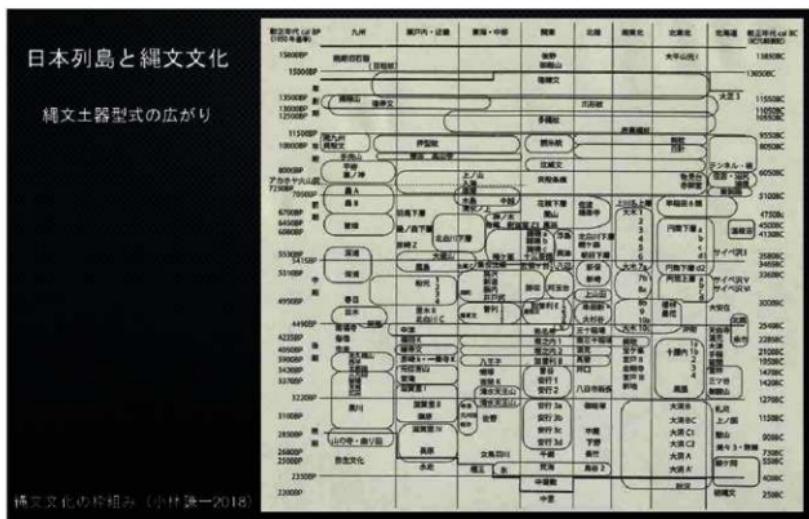


図23 日本列島と縄文文化

が認識されています。そこだけ細かいというのは、1つは研究が進んでいるから細くなる、というのをちょっと頭に入れておいてください。

具体的に言うと、野川流域には縄文時代の遺跡が多い、という話をしましたよね。ただ、これがずっと草創期の1万6,000年前から2,200、2,300年前の晩期まで万遍なくあるわけではないですね。多い時代、少ない時代というのがあって、これを落としたのが図24です。

最も特徴的なのが草創期はすごく少ないのである。これは関東だけじゃなくて全国的に少ない時代で、それを縄文時代と言っていいかという問題もあるのですが、非常に旧石器時代に近く、すごく流動的と言われています。定着していない。最も縄文時代らしい石器が出てくるのは早期のはじめです。堅穴住居が出てくるのがこの頃です。草創期から堅穴住居はあるのですが、堅穴住居がしっかり出てくるのがこの時代。あとは土器がたくさん作られるようになるんですね。

土器が普通に生活に使われるようになったのがこの早期になります。実は早期の最初の頃の遺跡がこの野川流域にいっぱい出でています。これは集落、村の形としては結構まとまった形で、住居跡が20、30軒出てきたりするので、関東の早期の

村は安定していてたくさん人が住んでいたのかなということが最近の研究の定説になっています。特に多いのが国分寺から府中の武藏台にかけての辺りですね。こちらの辺りというのが非常に多い地域ということで注目されています。野川流域全体を見ても、この時代の遺跡というのはすごくたくさんあります。

次の画期になるのは、前期という時代はあまり遺跡がないので、図の中で前期を省略してしまっていまして、前期に続く中期の時代になると最も遺跡が増えます。これが一番特徴的な時代で、この辺で縄文といったら中期だろうというぐらいの遺跡は密度が濃いですね。調査が多いというのもあるのですが、大体中部地方、中部高地から関東南部にかけては、全国的にみても有数な中期の遺跡の密集地帯です。

中期の終わりから後期になると遺跡がずっと減ってしまうんですね。

これはいろいろな説があって、気候が寒冷化する時期がこの時期にちょうど来るんですね。それがいろいろな生活スタイルを変えさせたのではないかとか、あるいは中期の初めの頃にあまりにも人口が増えすぎてしまって、逆に矛盾をきたしてしまい、維持できなくなってしまったという説が

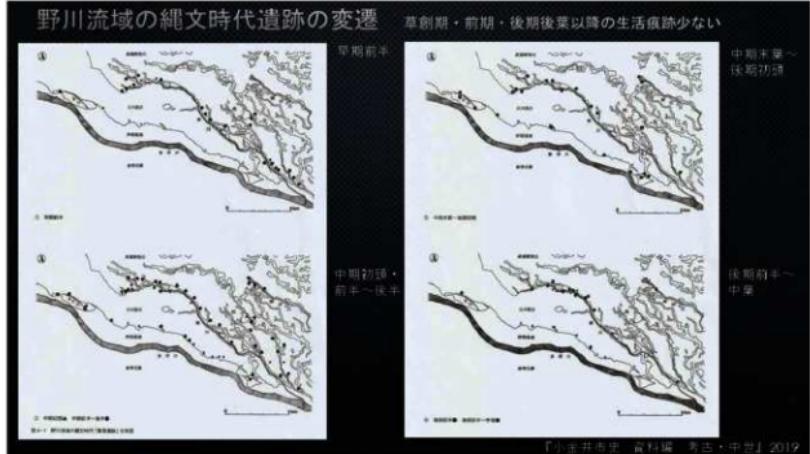


図24 野川流域の縄文時代遺跡の変遷

あるのです。人口が増えすぎて食料が不足してしまい、逆にかえって自分たちが自己崩壊みたいにしてしまう。だから人口を減らしたのではないかという説もあります。それが中期の終わりから後期の初めになります。

また復活してくるのが、後期の前半から半ば、またボツボツと人がえてくる、村ができるてくる時代で、この頃になると多摩川とか野川沿いの割と低いところに村を作るようになるのですね。中期の頃は割と高台、武藏野段丘とか乾燥したところに村を作るのですが、後期になるとジメジメしたような環境にも入り込んでくるのが特徴です。

縄文時代は長いので、草創期（旧石器時代の次の時代）は、旧石器時代で使っていたのと同じような形の尖頭器なんかをまだ使っています（図25）。まだ狩りをずっとやっているのですね。旧石器から縄文時代になったからって急に生活が変わったというわけではないのです。

もう1つ大きいのは、土器を作り始めるのです。

旧石器時代にはなかった、隆起線文土器（図26）といって、野川流域だと無いのですが、無紋のものと古い土器が見つかっているのですね。この辺だと武藏野市の御殿山遺跡とかそういうところに行くと、もうちょっと古い時代のものが見つ

かっています。

土器がない草創期の遺跡も出てくるので、土器がまだ特殊だったという時代であるというのも1つの特徴です。土器は誰でも持っていて、誰でも使っていたというわけではなさそうですね。でも、この隆起線文土器という時代になると、かなり土器が普及してくるのですね。

土器というと普通西アジアなんかだと農耕が開始されて、それに伴って土器が必要になったという説があるのですが、日本の研究者はそういうことではなくて（農耕とは関係なく）土器が発明されたというのが1つあります。

日本は日本で発明され、大陸は大陸で、いろいろなところで土器の発明が同時に行われていただろうという多元説が1つの定説で、ある1か所から土器が発明され、流布してきたというのは今あまり考えられないというか、そういう考え方方が主流になってきています。なので日本の土器が古くなっても全然問題ないであろうというのが研究者の統一見解になっています。

旧石器時代と違うのは、さっき言っていた尖頭器よりは小さい小型の石器（石鏃）が出てきますね。弓矢の登場です。

弓矢が出てくるのが縄文時代になってからで



図25 縄文草創期1 武藏台遺跡野川中州北遺跡ほか(府中市・小金井市)

## 縄文草創期2 野川中州北遺跡・東京天文台構内遺跡ほか



図26 縄文草創期2 野川中州北遺跡・天文台構内遺跡ほか（小金井市・三鷹市）

## 縄文早期1 武藏台遺跡・武藏台東遺跡（府中市）早期の大規模集落



図27 縄文早期1 武藏台遺跡・武藏台東遺跡（府中市）

す。それが特徴と言われています。土器はまだ数がないですけれども、こういう隆起線文土器とか、爪形文土器、このようなものが出でます。土器はやっぱり壊れやすいので、野川の遺跡だとなかなか形になっているものがないので、図27右下は参考です。だいたい底が丸かったり、尖っているものが多いです。割と模様は単純なのですね。口のところがまだ平で、そんなに大きいものはまだないですね。こういうものを住居の炉の中に

突き刺して使ったり、煮沸するための道具。

最初、土器は何のために必要だったかっていうのは、旧石器時代にあまり利用されてなかつたドングリみたいな堅果類を食べるようになり、煮沸し、アクを抜いたりするための道具だという方が通説になっています。そのためにこういう早期になると先が尖った土器がたくさん作られるのですね。

武藏台遺跡の例なのですが、早期の初め頃の村



図28 縄文早期2 はけうえ遺跡（小金井市）

が作られました。20軒でも30軒でも出てくるのですが、全てが同時に営まわれていたわけではなく、何代か世代交代はしているんですね。作り替えをしたりして住んでいるのですが、いわゆる堅穴住居が出ています。この時代の堅穴住居というのは周りに小さい柱穴で柱を持って、真ん中に炉があるのですが、縄文時代らしい住居が最初に出てくるのはこの時代になります。

石器は主に植物性のいろいろな木の実をすり潰したり、加工する道具が多いです。鐵が出てくるので狩りも少しやっていたのですけれども、どちらかというとこういう植物質のものを加工して食べるような食品が多かったというのが一般的な説になります。

こういう遺跡が府中、国分寺、小金井ずっとつながっていて、遺跡としてはかなり密にあります。

だから安定していたことが分かる時代になります。草創期だとこんなにはっきり出てこない。堅穴住居とか出てこない。小金井市のはけうえ遺跡だと国分寺崖線の斜面にまで住居を作っているので（図28）、どうも見晴らしがいいとか、水はけがいいとか、そういう目的を持っているんですね。こんな斜面のところにはあまり作らないように思われるのですが、そういうところを好ん

で住居を作ってみたりしています。特徴はここは滝浪泉園という庭園になっているのですが、今でも水が湧いているところで、近代に入って別荘地なのですが、そういうところ、池があって湧水が集まっているところに村が営まれるんですね。これは早期だけじゃなくて、次にご紹介する中期の遺跡でも同じような傾向があります（図29）。先ほど言ったように、中部・関東は遺跡がすごく多いといった話をしたと思うのですが、日本列島で言うと今の伊勢湾から、能登半島の西ぐらい、県でいうと石川県から愛知県ぐらいから北というか東にはすごく中期の遺跡が多いです。そこから西のほう、関西のほうに行くと全然遺跡が見つからないのです。だから単純に言ってしまうと、東日本のほうが縄文人にとっては暮らしやすい環境が整っていたということが言えるんですね。いやいや、そうじゃないよという人もいるのです。

西のほうに行くと火山灰が降っていないので、土の堆積がよく分からないのです。地面の下に深く埋没している遺跡が結構あるのです。縄文の遺跡が10メートル下から見つかったとか、そういうことがよく言われているので、東日本のほうが遺跡が発見されやすかったのではないかというのが一つの考え方なのですが。いずれにしても東日本、

特に中部地方から関東、東北、北海道、この辺りはすごく縄文の遺跡が多いと、中期の遺跡が非常に多いですね。図30を見ていただくと分かると思うのですが、特に中部高地も関東も（この辺り野川を含めた場所なのですが）中期のときに圧倒的に遺跡が増えるのです。遺跡も増えるし、竪穴住居もすごく増える時代が特徴になります。

国分寺はここ、すごいですね。密集しているのですね。こういうところは恐らく全国的にもそんなにないと思います。恋ヶ窪遺跡だけで住居跡が

200軒とか、そのぐらいになってしまって、全てを発掘していないのですが、掘ってしまったら多分1,000軒ぐらい出てきてしまうのではないか。

それほど国分寺辺りには人が住み続けたということなのです。

ただ、中期といつても実際は数百年（約900年）あるので、一時期にそんなにたくさん住んでいるわけではないのです。「縄文都市」みたいな形にはなっていないことは間違いないのですが、いずれ

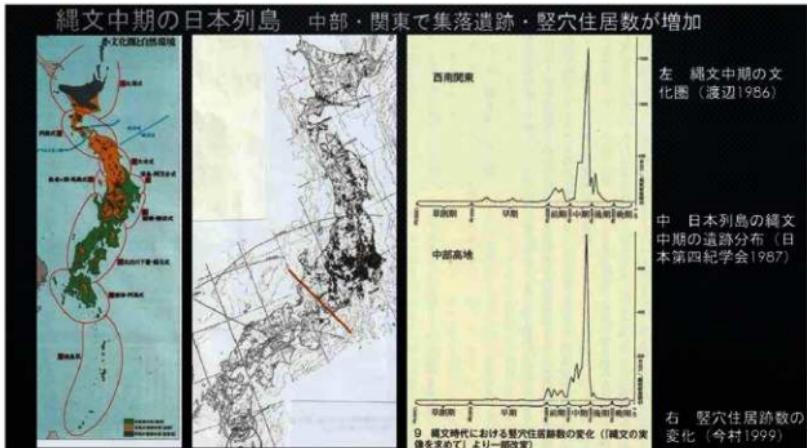


図29 縄文中期の日本列島



図30 野川流域の縄文中期集落遺跡

にしても、野川流域ですか、特に国分寺のちょうど恋ヶ窪とかこの辺を中心に遺跡が密集する場所になります。

国分寺市とか、この辺だと住宅開発が古かったりするので、もう遺跡が埋没してしまって表面からは見えないですね。これは逆に東京でも南のほう、ニュータウンの開発などが遅れて始まったところは一遍に調査する事例が増えました。特に1980年代から90年代になると、八王子とか多摩ニュータウン方面だと丸々この台地とか丘陵を剥いでしまう調査が増えたのです。そうするとともともとあった集落の全体像がよく分かるのです。縄文時代の特徴を言いますと、環状集落という言い方をするのですが、大体直径が100メートルぐらいの範囲にドーナツ状に竪穴住居の跡がぐるっと発見されます。図31右は私が作った当時の想像される復元図です。真ん中がちょうどぼっかり空洞になっていて、ここは恐らく縄文人が村を作るときに木を伐採したりして、オープンな場所を作るのでですね。それがちょうど遺跡だとこういう形になります。周りは恐らく、放っておくとこの辺りは大体雨が多いから森になってしまうのですね。だからかなり櫛蒼とした森があつて、そこを切り開いて村を作ったというイメージになります。

す。

後でお話ししますが、住居も同時には3軒ぐらいしかなくて、これもいろいろ学会の中で、研究者の中で問題になって、住居がもっとたくさんあったのではないかという人もいれば、私なんかだと2、3軒がいいところで、それ以上いるとやっぱり食料が不足してしまったりするので、住めないと思うのです。人が多すぎてしまうと今度食料が枯渇してしまったりするので。そういう意味では分散して居住していたというのが一つの考え方になります。だから、見かけ上遺跡が多いというのは分散して居住していることによって、たくさん住んでいるように見えてしまう、騙されてしまうというか、見かけ上で言うと多いように見えるけれども、実はそんなに多くなかったのではないかな、というのが一つの最近の考え方になります。

中期の遺跡、縄文らしい集落としての特徴は、比較資料として加曾利貝塚という千葉市にある有名な国の史跡の貝塚で、環状貝塚なのですね(図32)。

貝塚が環状になって2つ眼鏡状貝塚なんて言われるのですが、こういうふうに直径100メートルぐらいの円が2つ重なって、並んだような形で出てきます。武藏野台地の遺跡でも、三鷹にある五

### 縄文中期の集落の景観 大規模集落でも同時に存在する住居は少ない



図31 縄文中期の集落の景観

中遺跡ですが（同図右）、やっぱり環状、大体ドーナツ状に分布して真ん中が広場みたいな形で残るのですね。ですから昔貝塚と言っていた遺跡も、恐らく武藏野台地なんかと同じように下に住居の跡が埋まっているのです。だからこの貝というのは、住居が埋まった跡にごみとして捨てられたものが堆積したということが最近の研究で分かっています。もう1つは埋葬の場であったということも言えます。姥山貝塚（同図中央下）という、千

葉の貝塚なのですが、竪穴住居の中に遺体が埋葬されているのですね。だからごみ捨て場であったと同時に、埋葬する場であったというのも、実際どちらも事実だったのですね。翻って、武藏野台地の遺跡も人骨こそ出ないだけれども、そういう埋葬されたこともあったのではないか、というのが予想されます。

いろいろな説があって、竪穴はどういうふうに使われていたのだろうというところが問題になる



図32 大規模環状集落と貝塚



図33 縄文中期の竪穴住居跡と土器廃棄

のですが、中期の場合なんかそうですが、めちゃくちゃ土器が出てくるのです（図33左上）。

完全に掘ってしまうと、最後はこういうふう（同図右上）に壁、周溝と炉の跡と柱穴、柱の跡が最後、掘り上がったときはこうなってしまうのですが、そこに行くまでがすごく大変なことで、まず表面を重機とかで掘りますよね。そうすると周りの土の色とは違う黒々とした円形のエリアが現れて、その中に土器のかけらや石器のかけらがいっぱい出てきます。最初は小さいものでてくるけれども、どんどん土を剥いでいくうちに、大きい完全な形を残すような土器が、いっぱい捨てられているのが、出てくるのです。これがこの地域の特徴です。

大体中部地方から関東にかけては、こういう出方をします。最初に見つかった遺跡が吹上貝塚という遺跡なので、こういうものを研究者は「吹上パターン」という言い方をするのですが、この現象は何だという話で、すごく議論になっています。

これは多分、図33に炉の跡がありますよね。炉の中には土器を埋め込んだりしていることが分かるので、当時住んでいた人はこの炉を使っていました人たちなのですが、これをこの土器を捨てたのはその人たちかというと、実は、ある程度住居の中に土が堆積してから捨てているのです。だから

恐らく住居に直接住んだ人が捨てたものではないことが、分かってきています。

ということは周りに住んでいる、同じ村の中に住んでいる人が、前住んでいた人の古い堅穴を利用してごみ穴にしていたということが分かるのですね。それをうまくごみ穴として活用していく、結果的に環状の集落ができるということが分かつてきました。でもすごい量なのです。中期の人たち、すごいバイタリティで土器をパンパン作っては捨てているという感じなのです。

もう1つは移動するときに大きい土器を持って行けないので、そこに捨てていったという説もあるのですね。そういうことで、私も今でもいろいろなことを探って、研究しているのですが、なかなか結論は出ないです。皆さんいろいろな考え方があって様々です。

図34国分寺の遺跡の例です。国分寺というか、これが有名な多喜窪遺跡のA地点（同図左）。これはちょうど府中街道と今、武藏野線が走っているところで、それを西側に、これ府中市になるのですが、武藏台東遺跡とあって、こういうふうにやっぱり2つの遺跡が並ぶような事例もあります。こういう場合は例えば東側が西側に、結構頻繁に移動していた可能性があります。

だからずっと同じところにべたっと人が住んで



図34 国分寺市付近の縄文時代の遺跡

いたというよりは、いろいろなところを人が移動していたというのが、どうも縄文時代の、特に中期の人の生活の在り方だと思います。特に婚姻関係とか持つときに、ずっと中にいるわけにいかないですよね。今でもそうですけれども、やっぱりほかのところと交流する中でいろいろ交わって、情報を得たり、世代交代するとき、食料が不足してしまったり、そういうこともあるので、恐らく分散するような居住形態を取っていたということ

ですね。だから1か所にべたっとして住んでいるような定住、固定的というか、土地に縛られ、1か所に縛られたような生活をしていたのではないという考え方が恐らく成り立つと思います。

これ武藏台東遺跡（図35）でもいっぱい土器も出てきて、先ほども申しましたように、床面から使われた時の状態で出てくるものはほとんどないですね。大体がごみとして、住居の覆土というか、埋土の中から出てくるのです。だからあると



図35 武藏台東遺跡（府中市）



図36 恋ヶ窪遺跡・恋ヶ窪東遺跡（国分寺市）

きにはこれを季節的にまとめて捨てたのではないかという人さえもいるのですね。物送りとか儀礼的なもので捨ててしまったのではないか、使えるものを含めてそういうことをしていたのではないかという考え方もあるのですが、なかなかそこは難しいところがあります。

それにしても、100 個体とかすごい数捨てているのが、国分寺の遺跡なんかでもあるし、この辺の遺跡では普通に出てきます。

図 36 右の恋ヶ窪東遺跡は本町四丁目公園ですね。公園内に敷石住居跡が復元してあり今でも見られます。

恋ヶ窪遺跡（同図中央）これは国分寺市の中でも一番有名な、特徴ある遺跡です。今、住宅街になってしまっています。個人宅であったり日立の研究所になってしまったりしています。しかし、これが恐らく何もない山の中で突然発見されていたら、すごいことになっていたと思います。

ニュースになって、国の遺跡にしようとか、本来ならばそういうレベルの遺跡です。恐らくこの野川流域の中で最大規模の遺跡です。今だけでも 200 軒ぐらい見つかっているのですかね。これ掘ると本当に 500 軒ぐらいの住居が出てきてしまうと思います。しかも、ちょうど 2 つ図が分かれて

いますでしょう。実はこれすごい至近距離で、これは恋ヶ窪の谷で、恋ヶ窪遺跡というのは谷の西側に広がっていまして、東側は恋ヶ窪東遺跡というまた別の集落の名前がついているのです。これも中期の集落で、ここもすごい数の住居が出ています。しかし残念ながら今、都営住宅を建て替えるときに壊されてしまって、復元した住居跡が 1 軒残っている（本町四丁目公園）だけですが、こういう形で恋ヶ窪の谷の周りというのは、中期の拠点になっていたのですね。すごく環境的には良いところだったということが分かる場所です。

これは多喜窪遺跡（図 37）という、1986 年の調査、これもやっぱり中期の前半から後半の時期で、この時期の特徴は中央に広場みたいのがありました。そこには住居は絶対作らないという、どうも約束みたいのがあって、そこは何も作らない。あるいはお墓みたいのを作ることが多いですね。貯蔵穴みたいな穴を掘ったり、穴のことを「土壙」という言い方をするのですが、これはお墓の穴だったり、貯蔵するための穴だったりする可能性がある。そういうものが出てきます。

多喜窪遺跡というのは、その典型的な遺跡です。有名なのは、図 38 多喜窪遺跡の一号住居跡の一括遺物です。残念ながら地元になくて、今、東



図 37 多喜窪遺跡 1 (国分寺市)

京国立博物館とかに展示されているのですが、これが造形的にすごく立派な土器ということで、早いうちに国の重要文化財になっています。これ1個だけじゃなく、石器とか土器とか全部一括で指定されているんですね。こういう出来のいい土器というのは、関東・中部地方に分布しています。長野県の土器（同図右下）なのですが、こういう優品というか、美術品ではないのですが、美術品として扱ってもいいようなものがたくさん出てくるのです。多喜窪の土器は、最初に見つかったの

で、重要文化財の価値が認められたという土器になります。

私たちこういう土器のことを通称「多喜窪重文タイプ」と言うのですね。

図39はお隣りの小金井市の場合です。これもすぐ西が国分寺で、ずっと野川の流域で点々と遺跡がつながっています。同じような遺跡がいっぱいあるのですね。遺跡の規模としては大体国分寺崖線より上の武藏野段丘面のほうが、割と長期的に居住している遺跡が多いです。先ほどの恋ヶ窪



図38 多喜窪遺跡2 (国分寺市)



図39 小金井市の縄文時代の遺跡と時期

遺跡もそうですね。それに対して立川面という下面の遺跡というのは割と小規模というか、短期間に居住したような遺跡が多くて、使い分けみたいなのが多分あったようです。

ただ、面白いのは、一番大事なところ、連続と住居跡が多い遺跡、例えば貫井とか中山谷とか貫井南とか、たくさん住居が連続とある時期と、そうではないところもあるんですね。中期の遺跡の特徴はこういうところでありまして、大きい集落が割と継続的に続くところと、1回しか住まなかつたような遺跡が、大体等間隔というか、大遺跡の間に分布するんですね。その意味というのは今のところよく分かってないのですが、少なくとも中期の遺跡は全部人がばと住んでいるわけではない、ちょっとしか使われなかつた村もあつたというのが1つの特徴です。

また、湧水の問題とかもあって、水がよく出なかつたからそこは住めなかつたとか、そういう環境要因もあるかと思うのですが、そんな単純ではなくて、社会的な要因があつて、いろいろ1つのところに住み続けるとなかなか社会的な環境もうまくいかなくて逃げてしまつたとか、そういうことで、先ほど言ったように、ある程度分散するような居住をしていて、あるいは集落間でいろいろな人間が移動していた可能性があります。だから、べたつと1つの村に住んでいるのではなくて、隣同士行き来していたり、婚姻関係があつたり、そういうのが成り立つていたというのが通説です。

何でそういうのが分かるかというと、いろいろな他の地域の土器が結構頻繁に交換されたりするのです。ですから、例えばこの野川流域だけじゃなくて、もっと広い範囲のところから人が出入りしているというのが分かるのです。それを1つぽかっと窓を開けて、その一部を垣間見ているようなのが図40左の表になります。だからこの地域以外からも人が出入りして、その一部がこういう形になっているのが想像されます。

関東の中期は堅穴住居が多いことと、土器がたくさん出ることで、細かく編年ができるのですね。

私たちの仲間内でやつた編年で、「新地平編年」という言い方をしているのですが、中期のここにあるように約900年間を、大体30期ぐらいに分けることができました。先ほど言ったように、住居跡が重なつてゐるのをひも解いていくと、どちらが、より古いとか新しいとか分解していくことによって、年代差の序列ができるのです。その中の土器を全部振り分けていくと、特徴的な土器をひとまとまりにしていくと、こういうふうに土器が並ぶのですね。

この表の数字ですが、これは今C14年代測定という科学技術の進歩があつて、測定が可能になつています。土器に付着している炭化物とか炭化材みたいなものを、年代測定にかけて出された値です。こういうものを全然信用できないという人も一部にはいるのですが、参考にはなるのです。

それを私どもの仲間内でやつたりしたところ、どうも1つの「型式」、細かい「型式」が大体30期ぐらいに分かれたのです。そうすると約30年ぐらいが1つの単位かなということが結論として出来ました。もちろんもっと短い「型式」、早く変わつちやう「型式」もあれば、もっと長い「型式」もあるのですが、平均ずっと30年。ということは私たちが今生活すると大体親子30年ぐらいで一世代ですよね。一世代で1つの「型式」が大体交換するようなイメージかというか、今までこういうこともあまりよく分からなかつたのですが、何となく見通しがついたのかなと。

ですから、それで分解していくと実は細かい30年間がありますよね、一時期に対し例えば2軒とか1軒しかないところもあるのです。だから全体として同時期に住んでいる人たちというのは意外と少ないということが分かったのです。それが累積して長い間の「遺跡の重なり」で、たくさん住んでいるように見える、そういうふうに私たちが見てしまつていうことです。900年も住んでいれば当然たくさん土器は出てくるので、結論的にはそうですね。そういうことが1つ分かってきました。

貫井遺跡（図41）、冒頭に言った古い調査で、戦前からもうずっと、大正時代から知られている遺跡で、これも道路や学校を作ったときに調査されているのです。これも小規模な環状集落になっています。遺跡のすぐ南西に貫井神社があって、そこにやっぱり湧水があり、それが今でもずっと絶え間なく出ているのですが、それによってこの集落が維持できたという典型的な武藏野台地野川流域の遺跡です。

図42 が中山谷遺跡で、こちらも小金井の遺跡

なのですが、この遺跡も恋ヶ窪遺跡ぐらいのスケールが大きい遺跡でして、たくさん住居が出ていているのですが、何分にも住宅街なので全部発掘されてしまいません。これは中期後半の堅穴住居で、建て替えている例です。中期後半になるとこういう埋甕の祭祀、お祭りが行われていたっていうのがよく分かる。埋甕の祭祀というのは、建て替えるときに土器を再利用して埋めるのです。それを建て替えるたびにやるのです。これ縦に実際並んでいます。入り口のほうがあつて。最初に小さ



図40 小金井市の縄文土器と編年



図41 貫井遺跡（小金井市）

い住居があって、それを建て替えるときにもう1個外側に土器を埋設して広げていくので、これは恐らく住居を建て替えたり拡張するときに使う、儀礼に伴う痕跡だと言われています。この地域の遺跡では普通にたくさん出ます。中にはこれは幼児骨とか子どもの骨を入れたのではないかとか、胎盤を収納したのではないかとか、そういういろいろな出産儀礼に関わる遺物じゃないかという説もあります。それもちょっと決着はついてないのでも、いろいろな考え方がありますが、これはよく見られるそういう1つの現象というか事例です。

これ面白いのは底部に穴を開けているのです。あえて意識的に土器の底に穴を開けて、空気抜きみたいなのをつけて、魂を抜こうとしたのではないかとか、いろいろな説があります。大体、出入り口のところの床下に埋めているのは縄文時代の中期の埋甕の特徴です。こういうのは近世の胞衣容器なんかでも似たようなものがあるので、それと同じだという考え方もあり立つのですが、こういうものが出てきます。

図43は貫井南遺跡ですね。これは立川段丘にある遺跡で、珍しく野川の流れに沿って、立川段丘面から水が湧いているところがあつて、その周りに発達した集落です。これも大体中期の前半か

後半で、比較的住居もたくさん出てきた遺跡です。これも先ほどの多喜窪と同じように、住居があるのですが、真ん中に土壇群があつてお墓が出たのです(図44)。こういうふうに穴を掘って、恐らく遺体があったのですが骨が残ってなくて、墓標みたいな石と耳飾りが出てきて(同図中央)、恐らく頭がこの辺にあって耳飾りを装着した状態で埋葬されたお墓ではないかと考えています。こういうのが出てくる。

縄文時代の特徴というのは、住居があつて、村があつて、真ん中に墓地を作るというのが1つの特徴だと言われているところなのです。縄文時代どの時期でもそういうふうにやっているとは限りませんが中期のときはそういうのが割と流行しています。小金井の遺跡だとこれ耳飾り(同図右上)を入れているのですが、多喜窪の場合は矢尻、石鎌(同図右下)とか大型の石さじ、こういうものを入れている事例が幾つかありました。これは恐らくその死者、亡くなった人がそれを携帯していた、持っていた道具じゃないかと言われて、副葬品の1つとして考えています。こういうものが出ています。

中期も後半になって、中期の終わりから後期の初頭になると、柄鏡形住居(図45)が特徴的で、



図42 中山谷遺跡(小金井市)

先ほど見ていた堅穴にはこういう長い入り口はなかったですよね。この頃になると、柄鏡、和鏡の柄鏡の形のような住居が出てきて、これがすごく多いです。これは中部から関東にかけてすごく普通に見られる住居で、なぜか出入口部に長い入り口を作って、そこを中心に、ローム層なのですが石で囲って、周りに石を環状に並べたりしますので。あるいは全面に石を敷いた例もあるのですが、これもちょっと謎の住居です。石を敷いたところで結構地面が冷えたりしますよね。そんなに暖か

くなるわけでもないのに、なぜこういうことをするのだろうというのが 1 つにあって、もう 1 つは意識的に後から土器とか石器を並べている事例があつたり、あとは火を焚いたりした跡があるので。火を焚いたというのは何かそういう儀礼、お祭りをやつた跡のような痕跡を観察することができるんですね。

図 46 が 1 つの例で、これは府中の武藏台遺跡、やっぱり住居の中に土を焼いて、石棒という石器、それを焼いて分割して入れてあるというお祭りを



図 43 貫井南遺跡 1 (小金井市)

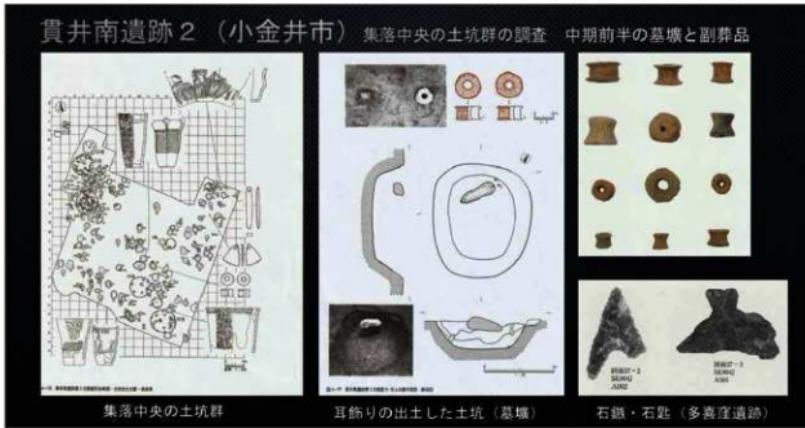


図 44 貫井南遺跡 2 (小金井市)

やった跡です。そもそも石棒というのは実用的な石器じゃなくて、祭祀的な意味合いのあるもので、中期の終わり頃から後期の初めになるのですが、こういうのがたくさん見つかっています。この国分寺の周りとか国立の緑川東遺跡でもそうですが、これが特徴的な、どうも石棒を使ったお祭りが行われていたという時代です。石棒自体が本来垂直に立てられていたのではないかという説もあるのですが、この辺の遺跡で見つかるときは立っている、ということはほとんどなくて、寝かされた状態で出てきます。だからもともとそういうふうに寝かして使う道具だという考え方もあり立つのですが、なかなか一番最初に使われていた状態が出ないので。遺跡というのは最後に放棄されたというか、残された最後の状況しか出てこないので、私たち現在の人がどういうふうに想像するか、難しいところがございます。最後の状態(同図右)、これが4本の石棒、これは野川から外れるのですが、国立市の緑川東遺跡です。これも国の重要文化財になった遺跡で、石棒が4つ並んでいたのですね。何の意味があるのかというものが今、研究者の中ですごく話題になっていて、こういうものがすごくたくさん出るのがこの地域になります。これもいろいろまだ研究の余地があるという

か、全然分からぬ部分がいっぱいあります。

図47は遺物ですね。縄文時代のさっきの土壙墓、お墓が出てくるようなものが多くて、女性の耳飾りとかペンダントみたいなものとか、翡翠でできたものとかあります。縄文時代の住居以外の施設だと、これは草創期とか早期からずっと連続とあるのですが、落とし穴ですね。こういう動物、イノシシとかシカを狩るための落とし穴なんかも、図48左は日影山遺跡という西国分寺駅の東側のところの遺跡なのですが、こういう動物を狩るような落とし穴が出てたり、あるいは集石土壙といって、屋外炉です(同図右)。住居の中で火を焚くこともやっていたのですが、これも恐らく調理をする場として、旧石器時代からずっと連続とあるのですが、こういう施設がいっぱい出てきます。これは村の外、住居がない村外れなんかにいっぱい出てきます。時代的にも縄文は早期からずっと連続と出てくるのです。

もう1つ打製石斧というものは中期の特徴でして、多摩川で拾える川原石、珍しい石ではない普通にある砂岩とかそういうゴロゴロしている石をたたき割って作る打製石器の1つで、これがめちゃくちゃ多いのがこの武藏野台地、特に野川流域の遺跡の特徴です(図49左)。例えば住居

柄鏡形敷石住居跡1 中期末葉～後期前半に盛行 野川流域では部分敷石多い



図45 柄鏡形敷石住居跡1

柄鏡形敷石住居跡 2 中期末葉—石棒を用いた祭祀の始まり



図 46 柄鏡形敷石住居跡 2

縄文時代の装身具（土製・石製） 环状耳飾・耳栓・垂飾・大珠ほか



図 47 縄文時代の装身具（土製・石製）

縄文時代の様々な施設 落し穴、集石土坑ほか



図 48 縄文時代の様々な施設

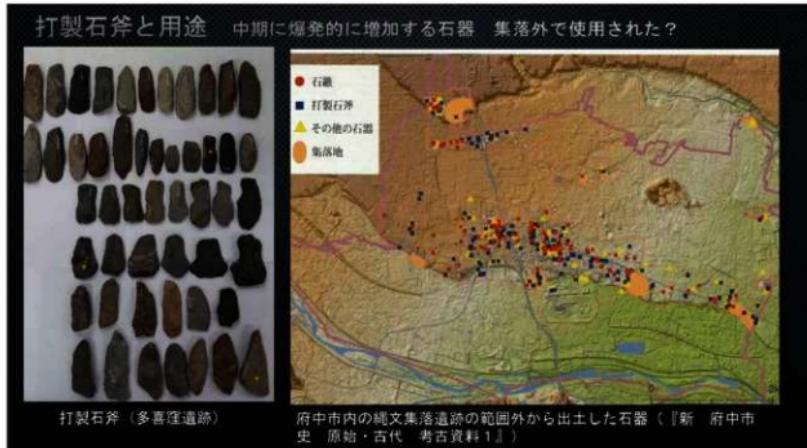


図49 打製石斧と用途

1軒掘ると100本出たりとか、1,000本単位で出る遺跡もあるのです。これは何だというのは昔から、戦前の時代からすごく問題になって、これは1つは、名称は斧というのですが、斧ではなくて、土掘り具というものが間違いない話なのですが、何のために土を掘ったのかという話で、一般的には堅穴住居を掘ったり、長芋を掘ったりするときに使った道具ではないかと言われているのです。府中の例なのですが（同図右）、実は集落遺跡、村のあるところから外れのところまでいっぱい出てくるのですね。ということは考え方としては、村の中で使われたものではなくて、村の外で使われたものだというが1つ成り立つと思うのですが、そういう意味では、そこへ持って行って何をやっていたか、という話ですよね。私がちょっといろいろ考えているのは、冒頭で申し上げたように、縄文時代に農耕があったのではないかという話でいくと、そういうものを使って畑、焼畑農耕があったという説もあるのですが、そこまで言えるような根拠になるようなものが全くないのと、遺跡の外に行ってしまうとなかなかそういう痕跡、畑の痕跡とかが発掘できないのです。類推するしかないのですが、農耕的なものが行われていた、それを起耕する、草を取ったり耕すための道

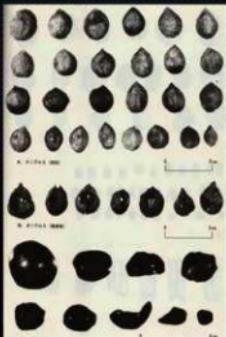
具というのも1つ成り立つかなというのが、あくまで私の考え方です。いやいやそんなことはないよという人も多分いると思うのですが、でも遺跡の、集落と言われているような村の、外から出てくるものが圧倒的に多い、1つの根拠になるのかなというのを示した図になります。

実は、もう1つ、どういうものを食べていたのか、という話です（図50）。遺跡から出てくる、中期の遺跡というのは酸性土壌が多いので、ほとんど残らないのですが、こういった炭化したクルミとかトチの実とか栗とかそういうのが出てきます。こういうものは条件のいい、水に浸かったところから出てくるのです。そういうところでないと出てこない。

最近注目されているのは、エゴマとかツルマメ、ヤブツルアズキなんていうものも知られるようになっています。これは炭化した、炭になったものもあるのですが、実は圧倒的に多いのは土器の圧痕からです。（図51）圧痕調査というものが、この15年ぐらい前から始められたのです。最初、土器にそんなものがついているというのを、全然分からなかったのですよ。私も全然そんなの知らないくて。これに気がついた人がいて、土器にどうも変な穴があるので、その型をシリコンとかで

## 縄文時代の食物 1 堅果類の利用 クリ・オニクルミ・トチノミほか

	Grid	Scientific Name	No.	%	Quantity
X	H-4	Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Carex (7)	✓ ✓ H	1	
		Hordeum	✓ ✓ ✓ H	1	
		Oryzopsis	✓ ✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Silene	✓ ✓ H	1	
		Salix (7)	✓ ✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Foxglove	✓ ✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
<b>Dwelling 1</b>					
19-35	E-1	Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Juglans	✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Phragmites	✓ ✓	1	
		Bromus	✓ ✓ H	1	
		Oryzopsis	✓ ✓ ✓ H	1	
		Fragaria	✓ ✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
<b>(E) 2nd lower Bayonet</b>					
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	
<b>(E) Non-bayonet</b>					
		Broad Leaf	12	100	
		Fragaria	✓ ✓ H	1	
		Uncertain	✓	1	



### 検出された炭化材 (中山日遺跡 中部)



現代の栗畠（小金井市貫井南町）  
オニグルミとトチ  
(武蔵野公園低湿地道路 後期前半)



オニグルミ

図50 紋文時代の食物1

## 縄文時代の食物2 植物種実圧痕と栽培植物

エゴマ・ツルマメ・ヤブツルアズキほか 渡来植物? 栽培による大型化



ダイズ圧痕の付いた中期前半の土器（府中市清水が丘遺跡）



現生のツルマメ

### 種実压痕のレプリカ（府中市内遺跡）

エゴマが練りこまれた中期後半の土器（X線写真）

図51 紋文時代の食物2

取ったのです。そうしたらどうも植物の圧痕ではないかということになって、それを見ていくと同定といって、現在の種類に対してどういうものと同じものか、というのを調べていくうちにだんだん分かってきたのですが、そこにエゴマ、あるいはツルマメという大豆の原種ですね。あとヤツルアズキというのは小豆です。そういうものが非常にたくさん出てくるようなことになりました。

の遺跡から出土した土器を見ていくと必ず出てくるのです。なので、どうも豆とかそういうものを利用していたのではないか、ということがだんだん分かつてきました。

栗とかクルミというのは野生に生えているものも当然あるのですが、保護する形で食べていたというのと、もう1つはこういうふうにエゴマとかツルマメとかも利用していたということが考えられます。面白いのは、これはもともと、中国とか



図 52 土偶

朝鮮半島から渡來した植物ではないかと言われていたのですが、実は日本に在來的にあったのではないかということが浮上してきています。

食べられないのですが、漆もそうですよね。漆も実は中国から輸入されていたというのが一般説なのですが、中国より全然古い7,000年以上前の漆が日本から出てきたりしているのです。

漆の利用もこういうものと同じように始まっているので、大陸から栽培植物と漆が一緒に入ってきたのか、あるいは土器の発明みたいに、世界中で同時に同じようなものが発生しているのか、いろいろな考え方があります。

種子を意図的に粘土を練るときに入れたという人と、入れたのではなくて、普通に生活している中にいっぱい置いてあるから（蓄えてあるのですね）恐らく、それが混ざってしまったのではないかという考え方があります。そこは研究者でも意見が分かれるところでして、偶然入ってしまうものも当然あるし、意図的に入れたのではないかという考え方もあります。多分そこはまだ分析している事例が少なかったりするので、なかなかまだ結論は出でないところです。

あと土偶ですね。土偶が中期、さつきの石棒と同じように中期の代表的なお祭りの道具なのですが、こんなものが出てきます（図 52）。中期、後期、

一番古い土偶は草創期とか前期とか、古いものもあるのですが、野川の流域だと大体中期と後期のものが見つかっています。中期のものはバラバラに壊されるということで、土偶自体がお祭りのときに壊すことを目的に作られた、というのは通説になっているのです。

図 53 は私が発表したもので、この野川流域とか多摩の地域というのは、先ほど言ったように、いろいろなところと交流しているのです。いろいろな地域の人と。最も近いのは今のが長野県から山梨県、神奈川を含む南関東の地域にこういう同じような文化圏があって、そこで特徴的な土器が作られています。中期前半なのですが、こういう顔面装飾を持つものとか、動物の文様ですね。さつきの多喜窯の土器も蛇の頭がついている土器とか、そういうものが非常に流行するのです。そういう共通する文化圏があったのが、ちょうど勝坂式の土器の文化圏ということになります。

村と村の関係、隣り合っている村同士でも人が動くけれども、恐らくこういう遠隔地同士での交流というか、そういう流れも多分あった、行き来があったということは想像できます。

有孔鶴付土器というのもそうなのですが（図 54）、これは中期に特徴的なもので、ほかの深鉢土器は煮沸のための土器なのですが、これは煮沸



図53 勝坂式土器文化圏



図54 有孔鋤付土器

をしないで、中がすごく、水が漏れないように表も中も磨かれているのです。恐らく酒道具、お酒を作るため、お酒を発酵させるための道具じやないかと言われているのですが、こういうものが出てきます。人の顔が描いてあったり、ほかの土器とはちょっと違う特殊な文様が描いてあるので、これもお祭りのときの道具じやないかと言われています。割と中部地方からこの野川流域といいますか、多摩地区に分布している特徴的な土器で、さっきの土偶のお祭りもそうなのですが、共

通の祭祀が行われていた、お祭りの共通なシンボル的なものではないかというのが特徴になります。土器を見ても、中期だけじゃないのですが、早期には西日本とか東北、関東とか、いろいろなところと交流が行われています（図55）。早期からずっと後期もあるのですが、特に中期の場合非常にいろいろなところの土器がいっぱい入っているのですね。だから、1か所にべたっと住んでいるというイメージよりは、やっぱり人がよつちゅう動き回って、情報のネットワークみたいな

ものがあったというのが分かってきています。

それはなぜ分かるか、もう1つちらですね(図56)。黒曜石の存在です。これ旧石器時代からずっと使っていると先ほど申し上げたのですが、縄文時代も連続とあって、やっぱり産地がいっぱいあるのです。縄文時代に至っても中部地方のものがあつたり、神津島のものがあつたり、これは交互に、時期的に入れ替わったりするのです。だからこれも何らかの原因があつて、産地に行って取り

近くしてしまったから、ほかのところに行ってみようとか、そういう情報が常に流れているのですね。そういうことを共有している集団が中期の構成員だったのです。こういうことを知つていて、流通するための機構がもう出来上がつていていたのですね。今みたいに携帯電話とかないですが、恐らく正確な情報は村伝いに伝わっていく、そういうネットワークになつていたんですね、この時代は。時期的には最初に中部系が多くて、中期になると



図55 土器にみる地域間交流



図56 黒曜石の原産地と流通

とちょっと神津島が増えて、また、後の時代になると中部が増えるという、移り変わりです。そういうふうに変化していく。

翡翠（図57）も同じように中部地方からの黒曜石のルートに乗ってきたと言われているのです。国分寺だと恋ヶ窪遺跡なんか結構いいのが出ているのです（同図右上）。これも今の糸魚川の付近しか採れない石材です。ほかの地方では絶対採れないので、意識的にというか、意味があって運ばれてきているのですね。これは威信材とかいろいろ言われているのですが、希少な石材、希少な石を使ったお宝ですよね。そういうものが、特に多摩地区は比較的優品が多いですね。

多摩ニュータウンの遺跡もそうだし、この地域には割と、しっかりした形で、大珠という垂飾りですね。これがたくさん残っています（同図左下）。

だから1つの縄文時代の中でも、特に多摩地域、この野川を中心とした辺りが拠点的な集落というか、情報センターの中心的な部分を担っていた可能性はあります。ちょっと外れてしまうと意外と翡翠は持てなかつたりする集落とか多いのですよ。ちょうどこの多摩の辺りというのは割とこういうものが集結しているので、そこから発信するようなセンターみたいなものがあったのではないか

かと。恐らく恋ヶ窪遺跡なんかがそういう中心的なことを担っていた村じゃないかなと私は考えているのですね。

図58は後期になると、台地の上にあった集落がみんな野川の下のほうに居住を移してしまいます。これはなぜかと言うと、気候の変動が1つに考えられています。気候が寒冷化てきて、いろいろな植生が変わってきたので、人口が増え過ぎてしまったという話もさっき申し上げたのですが、そういうことも関係してくるのかなということです。もう1つは見ていただいたように、古い時代は豆類を使ったり、あるいは栗とかクルミを食べていたのですが、後期になるとアグ抜きをしなければいけないトチの実を使うようになりますね。トチって結構アグ抜きをするのが大変なのですが、今でも救荒食になるとと言われているのです。困ったときの保存食になるとと言われていて、それをたくさん取るのです。たくさん取ったものを加工する場所、それを水でさらす場所が必要なのです。それは野川だけじゃなくて、埼玉県とかいろいろなところで、そういうトチを水でさらす遺構というのが見つかっているのです。さらし場という遺構が。それが見つかったのが武藏野公園の辺り。これが結構しっかりと出てきました。ほか



図57 ヒスイの原産地と流通

に野川以外だと、東村山の下宅部遺跡とか、そういうところでも近場では出ています。だから小さい河川というのはそういうアグ抜きをする必要のあるもの、アグ抜きをするための場所を確保するために、そういうところに人が降りてきて生活を始めたというので、中期なんかとちょっと違った生活になってきているのは間違いないです。

逆に言うと中期ではそういう生活する作業場みたいなものは全然見つからないですね。中期の場合は先ほど言ったように、お墓とかそういうものはいっぱい出てくるのですが、ごみ捨て場とか、なぜかこういう食料を加工する場所とか、どこにあったか実はよく分かってないのです。

後期のほうは情報量が多くて、野川中州北遺跡（図 59）も後期の集落、これドングリの貯蔵穴というか、そんなものがあるのですね。栗とかクルミを貯蔵する貯蔵穴なんかも、割と後期のほうはたくさん出てきます。後期の場合は 1 か所に出てくる住居の数が大体 2、3 軒でとどまっていて、中期みたいに後の時代にいっぱい継続的に住むようなことはないのです。

一方では、漆の製品とかよく残っていて、そういうものがたくさん出てきます（図 60）。中期の時代にはなかったような、残りようもなかった木製品ですね。私が調査して出てきたのですが、漆

の櫛が出てきたのです（同図下中央）。これ歯が欠けてしまっているのですが、黒漆と赤漆を交互に塗り分けているような、こういう漆の櫛が出てきました。だから漆の木なんかも野川の周りに植えていたんですね。漆の木の管理なんかをしているのです。

野川の場合は漆の木とか出てこなかつたのですが、先ほど言った東村山の下宅部遺跡なんかは漆の木とかも出てきて、漆の木を加工したいろいろな材もいっぱい出てきているのです。縄文時代の後期になると、漆の木を管理するような生活が行われていて、それを加工する技術もみんな身につけているんですね。当時の人は、今の私たちよりすごいです。漆の加工の仕方とか全部熟知しているのですね。職的な集団がいたのか、集落の構成員が全員知っていたのかという話は、なかなか難しいのですが、漆をこれだけ色を塗り分けたり、難しいですよね。乾燥させてしまったりすると駄目だとか言いますよね。だからすごく高度な技術を持っていた人たちが住んでいたということですね。そんなことも分かりました。

もう 1 つ違いは、後期は住居の中にごみを捨ててのではなくて、野川の川辺のところに捨てたりしていました。そういうごみ捨て場の在り方なんかも全然違っていますね。そういう 1 つの解みた

## 後期の遺跡 野川に臨み分散する小規模集落 住居と低地の作業場が近接



武藏野公園付近の後期前半の遺跡（『小金井市史 通史編』）

図 58 後期の遺跡

いなもの、時代の流行みたいなものがあったり、いろいろ違いがあつて面白いです。図60右下はアキを抜くための種みたいなものだと考るのです。他に事例がない。結構珍しい遺物になります。

後期から晩期になると、遺跡がほとんど見つかなくなってしまいます(図61)。周りにはいっぱいあるのです。多摩地区にまだ調査のはうとが町田のほうに行くと遺跡があるのですが、野川はほとんどというか、全然生活痕跡がなくなつて

しまいます。これは疑問です。全然土器も1片も拾われないというか何もないのです。ただ周りを見渡してみると、配石遺構といつて、これは大体東北地方とかにも広がっている東日本のお祭りの形、縄文時代の特徴的な祭祀遺構というものが結構多摩地区、ほかの地域にあるのですが、野川の流域では作られなかつたのですね。

だからやっぱり住みづらくなつてしまつたのですかね。何らかの暮らしにとつてはあまり条件が



図59 野川中州北遺跡（小金井市）



図60 武藏野公園低湿地遺跡（小金井市）



図 61 希薄な縄文後期後葉～晩期

よくなかったというのは1つ言えるかなと思います。周りにはお祭りをやった遺構とかが幾つか多摩の中でも見つかっていて、こういうのは結構東日本各地にあるのです。たまたま野川というはそういうところとしては利用ができなかった場所になるので、これはちょっと私が研究していく中の今後の課題ですね。

最後になりますが、こういった野川流域の旧石器、縄文時代の遺跡があるのですが、これをどうやって保存していくかという問題ですよね。国分寺は本当に湧水が東京の中では一番ちゃんと残っている場所ですよね。国分寺の古代の遺跡を含めて、こういう湧水も保存されているし、場所によっては縄文時代の遺跡とか旧石器時代の遺跡もまだ埋もれている可能性があるので、極力そういうものを壊さないように守っていきたい、というのが私の希望です。

開発が悪だというのは何なのですけれども、本當になるべく後世の人たちに残していく。私たちはそういう努力をしなければいけないのかなというのは1つあると思います。環境が悪くなっていくといろいろ住みづらくなってしまうので、少しでも緑とか湧水をはじめとした自然や文化財を残したいというのが、やっぱり一番大きいので

はないでしょうかね。

あと市史刊行物が最近割と出ていまして、国分寺の市史は今から30年以上前に、立派なのが出ているんですね。最近だと、府中市史とか小金井市史も出ているので、もし皆さんご興味があれば、そういうのを閲覧して、見ていただければなということがあります。2、3年前に出たものなので、まだ買うこともできるし、図書館なんかだと必ず置いてるので、御覧いただければと思います。

私が今日お話しさせていただいたようなことも書いていますし、要は今まで調査された成果が載っていますので、これ以外にも報告書が実は野川の流域は150冊ぐらい出ているのですが、ちょっと専門的で難しいので、こういう市史の本を御覧いただくのがいいかなと思います。通史編みたいなものもあるし、いろいろな土器とか住居とかそういうものを載せたものは、資料編という形でまとめていますので、興味ある方は手に取って見ていただければと思います。



### ③ 国分寺市域における東山道武藏路の様相

国分寺市教育委員会ふるさと文化財課文化財保護係長 増井有真

今日の講演の内容は古代道路がなぜ作られたのかその時代背景をお話します。はじめに、その主要となる制度、駿制についてをまずお話しした後、東山道武藏路の実態がどういったものなのか、私の管見の中でお話しできればと思います。また、中心となるのは国分寺市内ですが、国分寺市内に古代道路を研究するのに大変いい材料がそろっていますので、その辺をご案内ができればと思っております。

まず、7世紀の中葉頃の話になるので、当時どんな時代だったのかということをお話ししたいと思います（図1）。

世界的には、隋が滅亡して唐が建国されたのが618年ですね。これはアジアの諸国にとっては大きな影響がありました。というのは強大な統一王朝ができたということで、周辺各国は無視できな

い状況になりました。日本では遣隋使や遣唐使といったものを送りながら、いい関係を築くための体制を整えようとしていた時代です。

一方で、朝鮮半島では、百済、新羅、高句麗の3国が争っていました。663年には、百済の王朝の王様が日本に救援を求めました。当時は、唐と新羅が連合を組み、高句麗と百済と倭、倭というのはつまり日本ですね。この3つの国が同じようなグループを組んでいたという状況でした。百済の王様は、日本に対して戦況が好ましくないから助けてくれということで出兵をお願いしたわけです。日本の国は大軍を率いて、朝鮮半島へ百済を助けるために行きました。百済の西側に、白村江という場所があるのですが、そこで大きな戦いがありまして、日本はこの戦いで大敗し、逃げ帰つてくることになります。

#### 古代道路網が整備された時代

- ◎大陸・半島の動乱
- 隋の滅亡・唐の建国(618)
  - \*アジアのハーバーバランスの変容
- 中国統一王朝 → 他国は無視できない
- 遣隋使・遣唐使
- 百済・新羅・高句麗の争い
  - 唐・新羅VS高句麗・百済・倭
- 百済王朝の救援のために日本から送られた水軍が、白村江の戦いにおいて大敗(天智天皇2年(663))

#### 課題

- 唐・新羅軍に対する軍防の整備  
(水城(筑紫 福岡県)等の築造)
- 唐や新羅に習って皇帝権力を頂点とする中央集権的律令国家の確立の促進



図1 古代道路網が整備された時代

この白村江の戦によって百濟も滅亡し、新羅と唐が確固たる地位を築くわけなのですが、日本は次に狙われるは我が国だという危機感を大変募らせるわけです。見て分かることおり、朝鮮半島から対馬を経由すればすぐ日本に攻め込める状況です。これに対して日本は国防を強化しました。大宰府の近くに「<sup>アサヒ</sup>水城」と呼ばれる、今の福岡県に当たりますが、そこに大きな堤防を築いて敵からの防衛を図りました。さらに先の戦いで彼らは何を反省したかというと、兵士はいわゆる「寄せ集め」の軍隊だったんですね。今みたいに司令官がしっかりといて、その下に大佐、中佐とかそういういろいろなシステムティックな体制じゃなくて、寄せ集めの軍隊だったことが大敗した原因の1つだったのではないかと言われています。のままだと隣国にとてもじゃないけど、太刀打ちできないということで、指示命令系統の強化が課題となつた軍隊をしっかりと整備しようというきっかけにもなったのが、この戦いです。

そして、政治の面でも、天皇を中心とする中央集権的な律令国家体制を築くことが、国防の意味でも、国力の増強の意味でも大切だということに気づかされたのです。

今、出てきました律令国家というのは隋や唐で確立した法律です。律（刑法）と、令（行政法、民法）を、その国の基本的な法典とする体制なのですが、もともとは朝鮮をはじめ、周辺の国々に波及しまして、日本でも乙巳の変の後にこの体制を目指します（図2）。皆さん、645年を大化の

改新と覚えていらっしゃる方もいるかと思いますが、正確には645年の乙巳の変があった後に続く一大政治改革のことを大化の改新というので、年号的には645年は乙巳の変が起きた年ということになります。

乙巳の変は皆さんご存じだと思いますが、645年に中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我入鹿を暗殺した事件です。その後、体制を刷新し、大化の改新と呼ばれる改革を断行します。この646年から続く大化の改新によって、日本は大きく変わりました。日本の政治史、歴史の中で、2つの大きな転換期があると言われています。1つが、明治維新、そしてもう1つが、この7世紀の大化の改新を含む律令国家体制の変革です。この2つが、日本の歴史上、大きな転換期と言われています。

乙巳の変以降、日本は律令国家体制を築いていくわけですが、代表的なものは官僚制度です。中央の意思を地方へ伝える。天皇の考えた 詔 等を各司に伝え、そして国司が都司に伝える。そういったヒエラルキーといいますか、1つの情報を末端まで伝える、そういったシステムです。

もう1つは、戸籍制度ですね。例えば軍隊を組織するにしても、そもそも日本の総国民がどれぐらいいるのかが分からなければ、兵に割ける人数も課税対象者も分からないので、戸籍制度を整備する必要があります。

そして、交通網の整備です。これが後ほどお話しします駅制です。続日本紀の大化2年、646年の改新の詔には、4つの条文がありますが、その2目に載っています。

「二に日はく、初めて京師を修め、畿内國の  
諸もともちこものみやてに せきそこの らかみ・さもしり はいまと つたはま  
司・郡・閑塞・斥候・防人・駿馬・伝馬を  
置き、及び鈴契を造り、山河を定めよ。」

今の言い方になりますと、畿内を設置してそこに国司と郡司を置きなさい。そして関所を設けなさい。防人は皆さんご存じの九州防備のために各国から派遣される兵士です。また駿馬と伝馬を置き、すずしるしというの、「鈴」は駅鈴のことです。

「契」というのは、いわゆる通行許可証に近い

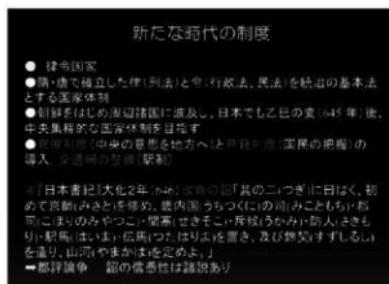


図2 新たな時代の制度1

形のものを作りなさい。山と河を定めなさい、いわゆる國の国境を定めよ、という内容です。ただ、この改新の詔については諸説あり、かつて郡評論争という一大論争が巻き起こりました。どういうものかというと、条文にあります、郡、「郡」の字、「こおり」と読むのですけれども、この「郡」という字と、もう1つの「評（こおり）」という、2つの字があります。実は、646年の改新の詔以降も、この「評」という字のほうが文書や金石文に出てくるのです。それによって、実は、大化の改新のときはまだこの「郡」の字は使われてなかつたのではないか。簡単に言うと、後世の編纂のときに脚色しているのではないかという説が出てきて、大論争になります。結果として、平城京から出てくる木簡に書かれた内容から「評」のほうを使っていましたので、論争は決着しました。

このため「続日本紀」の記述の信憑性がすごく問われた時代があったのです。ただ、内容としては、律令国家体制に向かっていく、そして、国を定めて、駅制や伝馬制を構築していったことは事実なので、そういった意味では、青写真としてこのような体制を描いていたというのには間違ひじゃないだろうと言われています。いずれにせよ、駅

## 新たな時代の制度

- 五畿七道
  - 7世紀後半から8世紀前半にかけて、国の支配体制を全国に及ぼすために、都がおされた畿内諸国(五畿)と、東海、東山、山陽、山陰、北陸、南海、西海道(七道)が整備
  - 七道は、都から各地の国府に向かう駅制にもとづく道路=驛路であるとともに、地方の行政区画もあらわす

制、駿馬と伝馬の記述が初めて出てきたのは、大化2年の改新の詔ということになります。

さて、図3に出てくる「畿内」は、「五畿」のことです。五畿というのは、畿内の5つの国のエリア、今でいう首都圏になります。それと「東海道」、「東山道」、「山陽道」、「山陰道」、「北陸道」、「西海道」、「南海道」の「七道」を整備しました。

七道は、五畿を中心として、そこから放射線状に全国へ広がるように道を整備しました。

道には大中小と3つの区分がありました。基本的に山陽道が大路、そのほかは図で点々になっているのが中路です。東山道、東海道は中路になります。この七道というのはただ単に道の名前ではなく、この道路が通っているところが行政区画になっているのです。例えば、東山道が通っている国は東山道諸国、東海道が通っている国は東海道諸国という行政区画も表しています。大化の改新があった後、7世紀後半から8世紀前半にかけて、全国にこのような道路交通網が整備されました。

次に駅制についてです(図4)。

駅制とはそもそも何なのか。端的に言いますと「古代における公使・官人による中央と地方の交通・情報伝達のシステム」です。天皇を中心とし



図3 新たな時代の制度2

た詔や命令などの情報を末端まで、国民1人1人にまで伝えるための情報伝達方法です。

もう一つは、交通制度もあります。物資を運んだり、軍隊を動かしたり、交通の方法を制度化しました。今のように手紙を送って2日以内に届くとか、電子メールで1秒後には着くという時代ではありませんので、情報伝達方法というのを駆制では特に重視しています。いかに早く天皇の意思を各國司に伝え、その国司が郡司層、そして國民に伝えることができるか。それを円滑に行うためのシステムがこの駆制というものです。

システムの内容としては、都と諸国の国府を駅路で結びます。駅路というのは七道のことです。駅路には、30里（約16キロ）ごとに駅家と呼ばれるステーションを設置しました。<sup>うきや</sup> 基本的には30里ごとですが、地形や路線に応じては、少し間隔が短くなったり、長くなったりします。例えば山岳地帯だと、16キロではなく、次の駅まで40キロかかたり。もしくは、山陽道では8キロごとに駅家を設置するようになりました。

駅家には、緊急の際に官用の通信に使用するため駅馬が置かれています。

そして各駅には国司の補助要員として駅長と呼ばれる人がいました。(図5)

先ほど、大体7世紀後半ぐらいから道路が作られはじめたというお話をしたのですが、この駅制についての法律は少しずつ改正して施行されています。757年に制定された養老律令の中に「駅令」というものがありまして、その中では大路、つまり山陽道の駅には、各駅に20頭の馬

18

- 都と諸国との国交を結ぶ路には、30里(約16km)ごとに駅馬(うまや)が設置
  - 距離は地形や路地に応じて対応(例：山岳地帯74里(40km)、山陰道15里(8km))
  - 駅馬(うまや)には、緊急の旨用連絡のために駆馬(えきば)が置かれる

図4 駅制1

を置きなさい。中路（東海道・東山道）の各駅には、10頭を置きなさい。そのほかの小路には5頭の馬を常に置いておきなさいと、それぞれの駅家で飼わなければいけない馬の数まで規定されていたことが分かっています。この駅制は、646年の改新の詔を契機としてはじまり、大体天智天皇の時代にこの制度が大きく進んでいったと言われています。道路の整備も同じく、7世紀後半から8世紀前半ぐらいにかけて進められていったことが発掘調査でも分かっています。

さて、どのように情報を伝達していくか、ということですが（図6）、基本的には2通りあります。1つは「専使式」、もう1つが「通送式」です。初めは通送式が採用されました。これは駅伝を思い出してください。箱根駅伝を見てわかるように、タスキを渡しますね。あれと同じです。

このように、通送式は機密保持にはあまり向いていませんでした。そこで主流になってくるのが専使方式です。これは特定の使者が最後の目的地

- 各駅には国司の補助要員として駅務を行う駅長が任命される
  - 養老令(ようろうりょう) 757年の班田令(べんてんりょう)に上れば、大路(山陽道)の駅家には30頭(定)、中路(東海・東山道)は10頭、そのほかの小路(北陸道・山陰道・南海道・西海道)には5頭の駿馬を常備するものと規定がある。

・駿制については、大化の改新の詔を契機とし、白村江の戦いで敗北後に天智天皇による軍事や各種制度の改革により推進

図5 駅制2

まで行きます。基本的には書簡を持っているのですが、これに、人の言葉を加えます。この書簡には書かれていることはこういうことですと追加で補足できるのが特徴です。この方法だと、機密情報の確信部分はあくまでも口頭で伝えられます。

各国の国司に直接伝えることができるのです。書簡と情報は、駅使と呼ばれる人が持ち、馬に乗って駅鈴を鳴らしながら、駅路を走っていくわけですが、どれくらいで移動できたのかというと、いろいろな書物に書いてある日付を逆算すると、急ぎの場合は大体1日160キロ移動したことが分かっています。先ほど言ったように、16キロごとに駅家がありますから、馬が疲れたら、駅家で元気な馬に乗り換えて、どんどん行くのですが、最長だと大体1日160キロ移動したと言われています。駅家は、馬を飼うだけじゃなくて宿泊施設も兼ねていますので、疲れたなら駅使はそこで休んで、次の日の朝、またすぐ出発する、そういう方法も取られました。急ぎでない普通の場合でも大体1日8駅で128キロ移動していました。この計算式は何かというと、例えば、藤原広嗣の乱であったり、そういう昔の内乱とか、戦争のときの記事を見ると、大体大宰府から奈良の都まで650キロあるのですが、最短で4日でその情報を伝わっていることが分かります。また、多賀城から奈良に対しても、800キロを7日ぐらいで移動していることから逆算すると、先ほどの数値が出てきます。

山間部は、登ったり下りたりするため馬も疲れてしまうので多少落ちると思いますが、長い距離を走っていたということがわかります。

さて、駅制とは別に先ほど伝馬といふ話が出てきましたので、伝馬制について触れます(図7)。

律令国家の人たちは駅制と伝馬制の2本柱の制度を設けて進めました。伝馬制は中央から地方へ派遣される使者を送迎する交通制度です。実は、伝馬制に関しては、まだまだ研究が分かっていないといふといふ、実際の書物にはあまり書かれていないので、不明なところが多いのですが、分かって

## 情報伝達方法

### ●車使「せんし」方式

特定の件ごとに各地で行く

(文書の確認が可能、一機密情報など)

駅使は駅路を駆駆馬に携行し、中央→地方の情報伝達にあたりどれくらい移動したか?

■速便1日160km(160キロ)以上、普通1日8駅(128km)以上

参考 大宰府→奈良650km=最短4日

多賀城→奈良800km=最短7日

### ●速送「ていそう」方式

文書を因縁ごと(駅や国)で受け渡していく(リレー)

(6世紀後半は通達が主に速だつたが、駅制の運営とともに遅延し、9世紀後半頃から専属「せんし」方式が中心で機密保持のため)

図6 情報伝達方法

## 伝馬制と伝制

### ○伝馬制 中央から地方へ派遣される使者を送迎する交通制度

→地盤間の自然条件的な運送を主体としたもの(不明多い)

→常に5頭の馬(伝馬)を配置

→伝馬ごとに5頭の馬(伝馬)を配置

→伝馬ごとに5頭の馬(伝馬)を配置

→駅馬は駅路の運営を行って駅馬の乗り換えを行う

→飛鳥時代後半→平安時代には、国司や郡守等などの駆使専用の交通制度となる

→日本、伝馬制を利用していく使者は駆使を利用するようになる

→急ぎ→駅路 急ぎでいい→伝馬路

### ○伝制 律令法には定義されない駅家が持つ交通機能

(律令国家以前からのシステム、伝馬も含まれる)

→地方から出発する使者や人々など

→飛鳥・伝馬路は重要な場所にある(出宮など)

→「伝馬路」「伝路」の用語はない(研究用語)

図7 伝馬制と伝制

いることは、郡家、つまり郡の役所に5頭の馬を配置しなさいということです。道は駅路のように専用の道を作ったというよりは、飛鳥時代の前、古墳時代にも道のネットワークはありましたので、もともと在地にあった道を伝馬路にあてていたのではないかと言われています。駅路と同じように「伝符」と呼ばれるものを持って使者はこの道を通るわけなのですが、駅路と同じく、駅がありますので、ステーションを乗り継いで使っていました。

初めは、中央から地方へ派遣される使者を送迎するものだったのですが、奈良時代の終わりから平安時代には、各国に派遣される国司や、国分寺の僧などが赴任する際に使う専用路になっていましたと言われています。本来、派遣されるための使者は、逆に駆使を利用することになります。

この2つの制度の違いを簡単に言うと、駆使は緊急度の高いもの、伝馬制は緊急性の低いものとして使い分けていたのではないかと言われています。例えば、敵の軍隊がどこまで来ているという

ような情報は、すぐに伝達する必要があるので駅路を使います。それに対して、国司が都から赴任するのに4日かかろうが5日かかろうがあまり変わらないというようなときは伝馬のほうを使ったと考えられます。余談ですがこの伝馬制とは別に、伝制というものがあるて、これはそもそも律令の法に定義されていない、もともとの地元の人たちが使っていたシステムもあったのではないかと言われています。

駅制、伝馬制、伝制、ややこしいですね。これらの道は場所によって路線が重なる場所があります。出雲だと、駅路と伝馬路と伝路が全部同じ道を使っている場合が想定されています。ただ、あくまでこれは駅制の駅路が優先されます。ですから、駅鈴を持った駅使を、伝符を持った役人が止めたりしてはいけない。とにかく、駅鈴を持っている人が第1優先者ということになります。

今、伝馬路や伝路という言葉を使ったのですが、これは歴史的な用語ではありません。続日本紀や日本書紀に書かれているわけではなくて、あくまで研究用語といいますか、考古学や古代学の皆さんが作った用語です。律令の制度の中から出てくるわけではないのですが、一応このような伝制というものがあったということをご紹介しました。

では、古代道路の実態はどのようなものだったのか(図8)、初めに言ってしまいますが、延喜式に書かれた古代の駅路を復元したら、なんと6,300キロあったことが想定されています。人によつては6,400キロという方もいます。これは第

一次の高速道路計画(昭和41年)の路線距離に匹敵します。6,300キロの道路整備が7世紀の後半から8世紀の初めに既に日本で整備されていたことは大変な驚きだと思います。

そして、駅の数は、調べた方によれば、約400ありました。402とも言われていますが、それだけのステーションを配備したことです。

古代の官道、特に駅路については有事の際の情報伝達、そして税を運ぶ人が使いました。昨日出張で埼玉県の鳩山町のほうに行ってきたのですが、鳩山町で焼いた瓦を武藏国分寺まで運んで来るという時に駅路を使っていました。もしくは、重要な任務を負った使者や地方国司の往復、そして、軍隊の移動。例えば藤原広嗣の乱の鎮圧とかですね。さらに当時、北のほうでは蝦夷の一族と戦っていましたので、そういうときに軍隊を送る道としても使われた。一方で一般の人が普通に利用できる道ではありませんでした。実際のところ、見つからないところでは通っていたと思いますが、駅鈴を鳴らしている使者を止めるなんていふ行為は絶対にしてはいけないという厳しい規制がありました。

当時の日本の地図を見ると、青森の北のほうは先ほど言った蝦夷の勢力範囲なので、ここは日本とは見られていません。あと、沖縄地方は入っていません。いわゆる日本と呼ばれる国はこの範囲です(図9)。畿内を中心とした7本の道が伸びています。上のほうが北陸道、山間部が東山道、海のほうが東海道などです。

さて、6,300キロの距離があって、約400の駅があるということなのですが、国分寺市内の東山道武藏路のことを皆さんにご存じだと思うので、古代道路がどんなものだったかイメージがつくと思うのですが、今回のように古代道路の研究が進む前は、けもの道のようなものだと考えられていました。なぜかというと、江戸時代の甲州街道、わずか3.6メートル程度ですね。それよりも1,000年も前の道路が広い訳がないと思われていたのです。しかも直線ではなく蛇行するけもの道のよう

### 古代の道路の実態はどのようなもの?…

- 駅路の研究は、当初は主に文部省の立場から法事史料の分析をもとに進められ、古代の道路は曲々としたけもの道のようないmageと捉えられていた。

理由は江戸時代の幹線道路が幅約1.6m程度の幅であったから、それより100年以上も昔の道路は、道幅も~2mで、地形の変化に左右された曲折の多い道と考えられていたから。



- これに対して歴史地理学の立場からは、地形図や草写真による分析、地名からの研究等によって、古代の道路は直線的で、広い轍を持つことなどが推測されるようになる。

図8 古代道路の実態はどのようなもの?

なものだったのではないかと言われていたのですが、研究が進んでくると最初に目をつけたのは歴史地理学の方々でした。地形図とか空中写真を分析していくと、田んぼの中に太い道と思われる跡を見つけました。そしてこれが昔の古代道路ではないかという話が進んでいく中で、太い道が想像されるのですが、この段階ではまだ想定のみでし

た。この想定を裏づけたのが考古学の発掘です。

これは昭和 22 年の極東の米軍撮影の写真です（図 10）。JR 中央線、武藏国分寺跡はこちらです。

今、大人気の鎌倉街道ですが、これは赤い線です。東山道（黄色い線）はこのように通っているのですが、残念ながらこの地図ではどう見ても東山道らしい跡はないです。場所によっては古代道



図 9 古代道路の実態



図 10 極東米軍撮影

路は残るのですが、その後木が生えてしまったり、畑の開墾などでなかなか見つけづらいことが多いです。昔の写真に落とし込むところという形になり、鎌倉街道も切通しがあるのでちょっと分かりやすいと思います。東山道はこのように通っています。

では実態が分かったきっかけは何かというと、昭和50年代半ば以降に続いた発掘調査です。高度経済成長期に発掘調査が多く行われた時代があります。それも狭い範囲の調査ではなくて、大規模ですね。土地区画、開発の大規模な調査が進む中で歴史地理学の皆さんが考えていた大きい道の想定が発掘調査で裏付けられました。

図11は、すぐ近くの泉町二丁目の調査の写真です。ここには今度国分寺市の新庁舎が建設されます。その北側には、多摩図書館、公文書館があつて、西に今はマンションがいっぱいあります。ここで東山道が発見されたのが平成7年です。

これは大々的に新聞の1面に紹介され、340メートルにわたって、古代道路が見つかったのは当時の日本で最長でした。これだけの長く広い道路が発見されたということはすごくセンセーションナルだったのですね。つまり歴史地理学の皆さん

想定した規模の道路が、考古学の発掘によって、武藏国分寺の周辺だけではなく、全国で発見され相次いで実証されたのです。東山道武藏路では平成7年より前に埼玉県所沢市の東の上遺跡で、同じように幅12メートルの道路が発見されたというのも有名です。

まず、東山道についてお話ししますと、武藏国というものは七道のうち、初めは東山道に属していました(図12)。

東山道というのは都から出まして、近江、美濃、信濃、長野を通り、長野を北上し、上野、下野、陸奥、出羽へと続く道です。いわゆる山間部を通る道で、総延長距離は約1,400キロあり、武藏国はこの東山道に属していました。

図13は東海道に編入された後の武藏国付近の地図です。上野・下野の間に武藏が入っていて、この縦の道のことを東山道武藏路といいます。なぜこの道がつくられたかということですが、上野国と下野国を通る東山道の本道から南へ大きく外れたところに武藏国府があると「統日本紀」にはしっかりと書かれています。

大事な書簡を持った使者は、上野国から下野国

## 古代道路の発掘

●昭和50年代半ば以降、全国各地で古代道路の発掘が相次ぐ。

→大規模な直線道路で、歴史地理学による研究成果を裏付けるもの。

●平成7年、国分寺市泉町二丁目(旧国鉄中央鉄道学園跡地)の調査では、東西に側溝を持つ幅12mの直線道路が南北340mにわたって発見され、文献史学、歴史地理学、考古学のみならず、交通史や土木史などの研究者からも注目を集めます。

→全国版夕刊一面に掲載、市民による保存運動によって遺構が保存された



国分寺市泉町二丁目

図11 古代道路の発掘

に直接行くことができず、1回武藏国に寄らなければいけないのです。このための往還路が東山道武藏路と呼ばれる道路になります。これに関しては「続日本紀」に記されているので、その内容を

見てみたいと思います（図14）。

上野から来て、1回武藏路を下って、また上に上がって、下野のほうに向かうということです。長いですが、大事なところなので、読んでいき



図12 七道の図



図13 東山道武藏路

たいと思います。

太政官奏す。武藏国は東山道に所属しているが、同時に東海道の交通も受け持つており、使者の往来が多くて、みんなが困っている。(いろいろ接待をしなければいけないのですね。これについては後でお話します。) 東山道駿路は、上野国新田駅から下野国足利駅につながっており、これは便利な路線である。それなのに、駅使はわざわざ行き先を曲げて、邑楽郡から、5つの駅を経て、武藏国へと赴く。そして、用事が終わった後は、再び道を北上して下野国に向かう。一方、東海道は、相模国夷参照から、下總国に達している。その間に四つの駅があって、往来が便利で近い。それなのに、相模国夷参照一武藏国府一下總国ルートを使わず、上野国新田駅一武藏国府一下野国足利駅を採用しているとは損失が大きい。私が考えたところだと、武藏国を東山道でなく東海道にしてしまえば、みんなの負担も軽減されていいのではないかですか、ということを太政官が申すわけですね。結局、これが受け入れられます。

馬に乗って密書、大事な信書を届ける特別な任を受けた人を駅使といい、駅使は駅銘を携帯して駿路をどんどん進みます。駅銘には刻みがあり、その刻みの数によって使える馬の数などが決まっているのです。身分に応じた大体2から10の刻みがあり、例えば天皇の銘は一番多い10の刻みであり、多くの馬が供給されました。このような駅家と駿路の関係は、言葉では分かりにくいと思うので、地図で見てみましょう(図15)。

東山道武藏路が最初に作られた年代は現在、7世紀第3四半期頃と言われています。この根拠となっているのは、所沢市の東の上遺跡の道路の側溝の中から出てきた須恵器の編年から推定されます。通常、住居跡から土器が出てくるとかはよくありますが、古代道路の側溝から出てくることはほぼありません。道路ですから。東の上遺跡のこの須恵器については、祭祀的な要素で意図的に埋めていると分かっています。その須恵器の年代が7世紀第3四半期頃と言われています。これは

国府が成立する前で、つまり道路が先なのです。

今の研究では、武藏国府の成立以前に既に道路が通っていたと考えています。東山道が北側を通り、東海道が南側になります。それを南北を連絡するような道路が東山道武藏路です。

先ほど言った太政官が771年に、東山道から東海道に変えたほうがいいと言うのですが、その3年前の768年(神護景雲2年)3月にもう一つお話をがあるので、地図を見ながらご説明します(図16)。

下總国井上、浮島、河曲、この3つの駅と、武藏国乗瀬、豊島の2駅は、東山道・東海道の両方を受け持つており、使者を送り迎えするのが非常に多く、そこで中路に準じて馬を10頭配備することにしたいというのです。でも話としては少しおかしいですね。本来は、上野国から来た使者は東山道武藏路を通って武藏国府を行った後、下野のほうに向かわなければいけないのですが、768年の時点では、東海道から来た後に相模国から北上するルートを通ってしまっているみたいです。本当は東海道と東山道ってそれぞれルートが違うので交わることがないはずなのに、河曲、浮島、井上、豊島、乗瀬のこの辺り、みんなは便利だと使い始めてしまったようです。それが先ほどの太政官奏すの中で言っていた、武藏国府は東山道に属しているが同時に東海道の交通も受け持つており、という部分につながっていくわけです。つまり、本来のルートを外れて、便利なルートを使っている人たちが多くなってしまったのです。それによって、はじめはこの道は中路ではなく、小路と呼ばれる支路だったのですが、それを中路並みに10匹ずつ馬を置きなさいというのが768年のエピソードです。つまり771年に太政官が言う前に、相模国から北上するルートが実は確立していた、というのがこの文書で分かります。既にこういうルートができているのだから、武藏国は東海道に配置したほうがいいのではないか、というのがこのエピソードの内容です。

相模国から来て国府を経由した後に、北上する

## 東山道武藏路についての記述 太政官奏す…

(続日本紀 宝亀2年(771)10月 条  
(中村太一「日本の古代道路を探す 幸運家のアウトバーン」2000年より軽翻)

(大意)武藏国は東山道に所屬しているが、同時に東海道の交通も受け持つており、使者の往来が多くて、民衆が負担に耐えかねている。東山道駅路は、上野國(こうすけのくに)新田(にった)に駅から下野(しもつけ)国足利(あしかが)駅につながっており、これは便利な路線である。それなのに、駅使はわざわざ行き先を曲げて、上野国邑東(おとうら)郡から、五つの駅を経て武藏国へと赴く。そして、用事が終わって後に、再び同じ道を戻って下野国に向かう。一方、東海道は、相模(さがみ)国夷多(ひさま)駅から、下駄(しもうら)国に達している。その間に四つの駅があるて、往来が便利で近い。それなのに、相模国夷多駅-武藏国府-下駄国ルートを使わず、上野国新田駅-武藏国府-下駄国足利駅を採用しているには、損害が非常に多い。

私たちが考えたところでは、武藏国の東山道所轄を改めて、東海道に所属することにすれば、官僚も民衆も便利になり、人も馬も負担が軽減されるでしょう。

\*駅使(えきし):駅馬に乗乗用することが許された公的な使者。駅使は駅頭を执行し、駅頭で提示することで駅馬の提供を受けることができた。鈴には使者の位置によって定められた刻(こく)という刻みがあり、刻みの数により供給される駅馬の数が規定された。

図14 東山道武藏路についての記述 太政官奏す



図15 駅路の変遷1



図16 駅路の変遷2

ルート、夷參、乗瀬、豊島、井上を通って行くルート。恐らく東山道も武藏路を通ってこういうふうに行くルートも使っていたんではないかというのが分かります。これが771年以前の768年（神護景雲2年）の状況です。太政官が奏してくれたので武藏国ルートを変えましょうというのがこの771年（宝亀2年）以降のルートです。本来、使者は東山道武藏路を南下していくのをやめて、上野国に行った後、そのまま下野国に行くのが東山道ルート。東海道ルートは相模の国府から武藏国府を経由して下総国に行き、常陸、そして上総と別れるということになります。

先ほど飛ばしたのですが、昔の東海道ルート（図16）をよく見ると、海を渡っています。駅路は、全てが陸路ではなく海路も含まれるので。

当時は、三浦半島の走水から船で対岸に渡るルートでした。気象条件、いろいろなことも含めて、海が荒れていると出られないということもあり、最終的にはさつきの便利だと言われる往還路、東京湾沿岸の内陸ルートに切り替わりました。

まち歩きだとよくクイズをするのですが、皆さんには先に言ってしまいます。下総と上総が上下

が逆な理由がこれです。本来、都から近いほうが「上」なのです。上手、下手の「上」なのです。

なので、昔のルート、771年以降のルートを見ると、相模国の後、武藏国に行き、下総、上総なので、本来こっちが上なのです。都に近いほうなのです。ただし、一番初めのルートは、相模国府の後は、上総を先に通ったので、駅路は走水から対岸に行く海ルートでなければ、上総と下総の名前は逆転していたのです。下が下総で、上が上総だった可能性もあるのですが、駅路の一番初めの設定のときに三浦半島から対岸へ渡るルートだったので、相模国に次に来るのは上総で、その次が下総、こういうルートになったということです。

どうして上総と下総が逆なのか。これはぜひボランティアでガイドするときに現地で使ってください。

最終的には、先ほど出てきた「延喜式」の頃には、ルートがまた少し変わります。相模国府を抜けた後、武藏国府に行く北上するルートに、大井駅という新しい駅が加わります（図17）。この駅は今の品川区の大井で、最終的にこの東京湾沿岸の内湾のルートが確立していくということ

## 駅路の変遷



宝亀2年以後の交通路



『延喜式』(907年)の交通路

図17 駅路の変遷3

になります。

駅路の変遷では、武藏国が東山道から東海道に変わるというのが1つ大きな契機になります。端的に言うと、東山道から東海道に変わった瞬間に、東山道武藏路は駅路ではなくなります。ただ、後ほど説明しますが、その後も東山道と東海道をつなぐ南北の連絡通路として平安時代の終わりまで使われたということになります。

さて、ここまで来たので、武藏国のお話を少します。武藏国は、埼玉県全域、東京都全域に、神奈川県の横浜、川崎地域を加えた広大な範囲でした（図18）。「延喜式」の記述によると国の格は大国です。758年（天平宝字2年）に今の新座のところにあった新羅郡が追加になり、全21郡になります。武藏国分寺の出土瓦からは、この新羅郡を除く20郡分の郡名が入った瓦が見つかっ



図18 武藏国

### 武藏国府

●国府  
律令制のもと、諸国に置かれた役所。国府の行政は、都から派遣された国司があたる。  
※天皇の意思を国司に伝えてコントロールする⇒地方豪族支配

●武藏国府は、今の府中市(国府の中)にあり、武藏国府関連遺跡の範囲は、東西6.5km、南北最大1.8kmの広大な範囲に及ぶ。

→これまでに1,000棟を超える堅穴住居跡が見つかっており、7世紀末から8世紀初頭には国府のマチが成立し、役所の官庁街である国衙は8世紀前葉頃には建設されていたと考えられている。

図19 武藏国府

ています。最終的にはその後葛飾郡が下総国から編入して、近世には 22 郡になるのですが、古代はこの 21 郡が武藏国の範囲です。

国府についてです（図 19）。国府は律令制のもと各に置かれた役所で、今の都道府県庁にあたります。行政を執り行うため都から国使が送られたのです。武藏国の国府の場所は、今の大國魂神社の近隣一帯になります。国府というものはこの大きなまちの広がりなのです。まず、真ん中にあるのは「国庁」と呼ばれる役所の中枢部で、国司が政務を執り行うところです。その周りに国衙と呼ばれる官庁街があり、それ全体を形成するまちの広がりを「国府」といっています。

ですから一言で国府といっても、その全体を指しているのです。今の新宿でいいますと、東京都庁と副都心の全体を「国府」、東京都庁街が国衙、都庁のいわゆる知事がいる部分が「国庁」と呼ばれるところになります。国府の広さは、東西 6.5 キロ、南北も約 2 キロ、1.8 キロあります。

府中市で大変長い間、調査が進んでいて、今はもう少し数が増えていますが、4,000 棟を超える堅穴建物が見つかっています。

はじめの堅穴建物が作られたのが 7 世紀末から 8 世紀初頭で、その頃にこのまち全体の景観が形成されました。国衙が建設されたのは 8 世紀の前半ではないかと言われており、7 世紀第 3 四半世紀に作られた東山道武藏路のほうが先行しているということです。道路があつて、そこからその近くに国府が造られる。もちろん、道路を通すときどきの場所に国府を置くかというはある程度決



国衙地区

武藏国府跡は、1009 年（寛治）に指定

国衙の範囲 大國魂神社境内からその東側にかけてのおよそ東西 200 m、南北 300 m の範囲と推定。史跡登録地からは建物 2 棟が発掘された。

図 20 国衙地区

めていたと思うのですけれども、そういった前後関係があります。

今、現地に行くと、大國魂神社の東側に国衙地区の見学施設がありまして（図 20）、2009 年に国の史跡に指定されました。

この柱は、当時立っていた柱の位置を示しているものです。柱の奥にガラス貼りの建物があり、柱がガラスに反射し、向こうにも柱が建っているような、倍に見えるという相乗効果を狙っているようです。よかつたらぜひ見てみてください。もう 1 つ、府中本町の東側にも、国司館地区が整備されていますので、ぜひ見てきてください。

先ほどの話に戻りますと、東の上遺跡から出土した 7 世紀第 3 四半期頃の土器から道路が先につくられ、それを基盤とした都市計画がたてられたようです。上野・下野を通る東山道の本道の発掘調査でも大体 7 世紀後半の土器が出ているので、この頃にはできていたのだろうと考古学的には想定しています。

大きな謎の 1 つに、東山道武藏路はそもそも武藏国府の辺りで止まっていたのか、という疑問がよくあるのですが、結論から言うと、今の段階では南につながっていた。つまり、武藏国府以南も東海道までつながっていたと見えています。多摩市の打越山遺跡というところでは、切通し状の東山道武藏路の延長が見つかっています。時期的にもほぼ合うので、そもそも最初から東山道・東海道を結ぶ道として東山道武藏路が計画されたのではないかと考えられています。

2 つの謎について、先ほど 5 つの駅を経て、武藏国に至るという話だったのですが、5 目の駅が見つかっていないのです。先ほどの図に戻ります（図 16）。新田駅から数えると 5 個目の駅が武藏国府の近くにあったのではないかと言われています。具体的に言うと、上の 2 つは分かつていないのですが、3 つ目が「驛長」の墨書き土器が出てきた川越市の八幡前遺跡で、その次が東の上遺跡、所沢市ですね。約 16 キロごとと想定した場合もう 1 つないと 5 駅にならないのですね。

以前、府中市の郷土の森博物館がリニューアルしたときに行ったら、ここに駅家が想定されていました。つまり、東山道武藏路沿いの国府の近くに駅家がもう1つあったのではないかと想定しています（図21左）。

先ほど言ったように国衙ができるのは道路の後

なので、先にこの駅家があつて、そこから東に伸びる道路を経由して国衙の政府に行ったのではないかということです。確定ではないのですが、実際に遺構が若干出ていて、5つ目の駅がこの国衙の近くにあったのではないかと府中市では想定しています。郷土の森博物館に行くと、模型があり



図21 古代武藏国府



図22 東山道武藏路

ますので、ぜひ見てください。

国分寺市域に移り、上空から見た東山道武藏路です（図22左）。武藏国分寺跡、もとまち公民館、国分寺街道、武藏野線などがわかります。広域でみると多摩川、富士山。東芝の工場を突っ切っていますけれども……という状態です。

地図（同図右）で見ると分かりやすいです。武藏国府、国分寺の関連遺跡があり、武藏国府の関連遺跡があると、東山道は恋ヶ窪谷を渡った後、国分寺崖線を下って、南下してくる。国衙政府は少し離れたところにあるので、武藏路から東に直行する道路が、実際に検出されています。こういう位置関係で道が出ています。

発掘された古代道路がどんなものだったかということを最後におさらいしておきます。（図23）、まず直線道路で、ひたすら真っすぐです。

もちろん、部分的に多少曲がるのですが、直線道路なのです。これは効率よく、人や馬で物を運んだり走ったりするのにとても重要です。一般的には道幅は12メートル、都の周辺では最大24から42メートルと言われています。先ほど言った伝馬路などは3から6メートルの幅があります。

東山道武藏路を見ていただければ分かると思うますが、真っすぐです。



都の周辺でこれだけ道路幅が広い理由のひとつとして、「見栄」があげられます。なぜこのようなものを作ったかというと、直線道路で太い、幅広道路というのはやはり国家の威信を示すにすごく重要な役割を持っていました。百聞は一見に如かずで、直線で幅の広い道路を目にするとき、やはり日本の国はすごいなと思うわけです。中でも山陽道はさらに道が広くつくられました。なぜかというと、外国の使者が通るからです。外国の使者が通るところだけ太い道にして、しかも、駅家は藁ぶきではなく、瓦葺です。壁は白く塗って、立派な駅家を整備していました。これは、外国から来た使者がそれを見て、日本はすごいなと思わせるためだと言われています。ほかの道は12メートルに対して、太いところだと20メートルぐらいありました。

もう一つ、広い道路の理由というのは、軍隊の移動のためです。当時、1個大隊が大体1,000人ぐらいあったと言われていますが、その1,000人の軍隊を移動するのにやはり細い道だと効率が悪い。韓国の歴史ドラマをよく見る方は分かると思うのですが、細い道で、丘の上からいきなりガサガサと出てきて、弓矢でえいやと一網打尽にされるイメージがあると思うのですが、太い道だとそ

### 発掘された古代道路

- 直線道路は、国府と都を最短で結び、効率よく人や馬が移動するのに重要な役割
- 一般的には、駅路が幅12m、都の周辺で幅24~42m、伝路や後の駅路(9~10世紀)は幅3~6m
- ※古代の道路は直進性が重要視される

- (1)国の力 → インフラ整備にあらわれる  
道や水(川)などを整備することは、安定した社会を築くためにも必要。
- (2)駅路(官道)は、時折訪れる外国の使者を都へ案内するための道でもあり、幅員の広い直線道路は、まさに国家の力を内外に示すためにつくられた。
- 大路(たいろ)である山陽道では、瓦葺・白壁の駅家を設置(『日本後記』大同元年(806))
- (3)軍事的な役割 ⇒ 7~8世紀の軍隊は騎兵・歩兵計1000人を1軍団とした。  
→大量の人を正確に素早く移動させる(対半島、対蝦夷)

図23 発掘された古代道路



図24 国分寺市域の東山道武藏路の調査

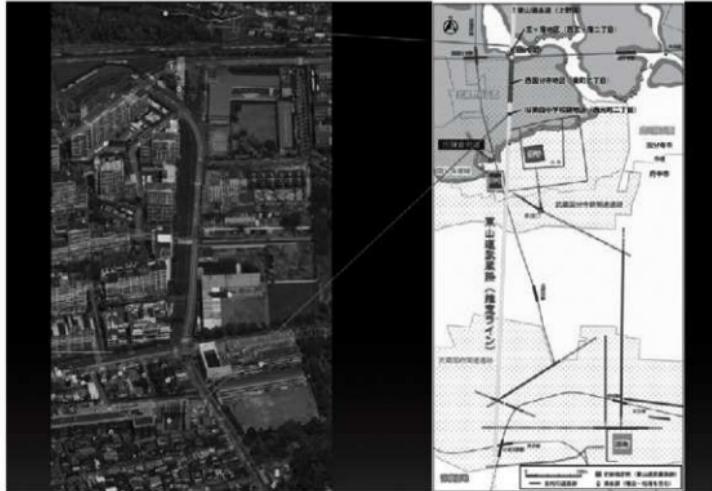


図25 航空写真

ういうことできませんので、軍隊を動かすには防衛の意味でもすごく効率がいいということです。

図24は国分寺市の地図に発掘調査箇所をプロットしたものです。図が小さくて少し見にくいくらいですが、いろいろなところで調査をしていることが分かっていただければと思います。北は東志ヶ窪六丁目から、南は西元町三丁目の間で発掘調査を行っております。この間も、もちろん東山道武藏路が通っておりますので、たくさん遺構が

残っているのですが、全てを調査をしているわけではありません。それにもしても部分的ではあります、結構な数の調査を行っています。

初めに、図25はGoogleから引用した航空写真、今は整備されている場所がここです。写真が少し古いで、これは多摩図書館建設時の頃です。道が真っすぐ伸びており、姿見の池、中央線があり、今は歩道として整備されていますが、こここの道が東山道武藏路、少し離れて歴史公園が

あるという、状況ですね。

東山道武藏路の特徴は、道路の両側に1メートル程の側溝と呼ばれる溝が掘られています（図26）。溝の真ん中から反対の溝の真ん中までの距離が約12メートルある。これを今の道路に換算すると大体4車線分です。なので、2車線、2車線の対向道路に近い、とても広い幅です。写真を見てもらうと、道路より東山道のほうが広いのがわかります。歩道のほうが広いのは何ですかと聞かれたら、ぜひ昔の古代道路です、12メートルもあったとお答えください。

側溝の深さはまちまちですが、大体50センチから1メートルの間ぐらいいの深さです。

側溝の形を上から見てみると、部分的に掘り残されている部分、上に出っ張っている部分があり、このような掘り方を土坑連結式といいます。端から順番に掘るのではなくて、Aさんここ掘ってください、Bさんここ掘ってください、Cさんここ掘ってくださいと、それぞれが掘るのです。

AさんとBさんの間に残った部分をちょっと掘り下げる、そうするとこういうところが残る、これが特徴です。土坑を連結した、隣の穴と穴を最後につなぐのが特徴的ですね。ですから、側溝という名前はついていますが、排水を目的にしていません（図27）。

このような出っ張りがあったら水が流れないので

で、境界を明示したものです。あくまで官路の範囲を示したもの、ここからは駅路、特別な任務を帯びた人、特別な仕事の人以外は入ってはいけませんよという境界を示したものです。写真の上に昔の懐かしい中央線車両も写っていますね。

側溝の形の特徴は、大体2通りがあります。断面形状が「逆台形」と呼ばれるものと、「Y字」です。

泉町の東山道武藏路をみると、側溝に幾つか特徴があります。これは、ロームブロックの整地層と呼ばれ、下ができるだけ平らにするために、側溝を掘った後、土をまた投げ入れて、整地している層が出るという特徴があります。その後、火山灰や風で散った土など、いろいろなものが自然に溝にたまります。この土を「自然堆積土」と言います。この自然堆積土の上に黄色いロームブロックでバックしているという状況も確認されています。泉町の場合は、1期、2期、3期、4期あり、第3期と呼ばれるときには、また側溝を掘り直しています。

側溝の断面形状が、逆台形またはY字に掘られているというのがこれですね（図28）。Y字というのは、下が細くなり、上が末広がりのY字の形です。ここにも下層にロームブロックが入っているのです。

武藏国分寺跡、217次で調査したときの写真（図29）ですが、関東ローム層の茶色い土よりも上層

## 平地の東山道武藏路

- 道路の両側に0.8~1.5メートル幅の側溝を伴う
- 側溝の心々距離は約12メートル
- ※高速道路1車線3メートル×4の幅

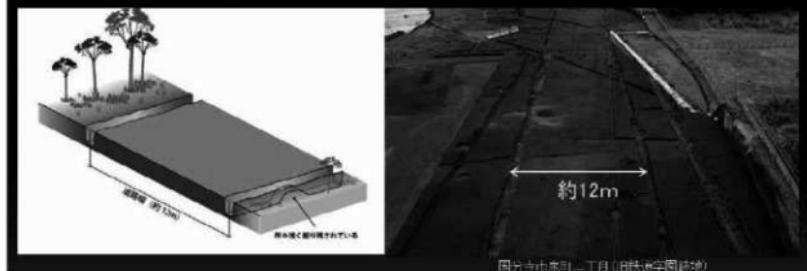


図26 平地の東山道武藏路！

## 平地の東山道武蔵路

- 剣溝は部分的に途切れる箇所がある  
→ 排水を目的としない

- 路面の幅(範囲)を示したものと考えられる。



国27 平地の東山道武蔵路2

## 平地の東山道武蔵路

- 剣溝の断面形状は逆台形または「Y」字
- 剣溝覆土の底部にロームブロックを主体とする整地層がある



国28 平地の東山道武蔵路3

## 平地の東山道武蔵路

- 剑溝の断面形状は逆台形または「Y」字
- 剑溝覆土の底部にロームブロックを主体とする整地層がある



国29 平地の東山道武蔵路4

の黒っぽい土で、いわゆる我々が言うⅢ b 層というところから、掘りはじめています。こちらもどちらかと言うと、Y 字に近いです。これが東山道の底になります。掘った面より少し上に整地をするというのが特徴です。

国分寺市の地形については、前回の野口先生のところにもお話をあったと思うのですが、国分寺崖線と開析谷という2つのものがあります。古代の多摩川の流路が削ったこの面は国分寺崖線というのですが、いわゆる恋ヶ窪谷、さんや谷、殿ヶ谷戸谷と言われるこの谷は崖線とは呼びません。開析谷といいます。これは、いわゆる水が流路として残り、時間をかけて周りとの高低差が生まれたことにより谷が形成されたものです。

もしガイドされるときは、恋ヶ窪谷やさんや谷は開析谷とご案内いただければと思います。一見、同じような深さなので分かりにくいのですが、2つの地形があるということです。**図30**は断面です。野川があって、湧水が出ているところなのですが、谷はそれぞれ独立して形成されています。今度は東山道武藏路が、沼地をどういうふうに攻略したかを恋ヶ窪谷で見てみましょう。ここで

は大変珍しい土木技術が確認されておりまして、敷粗粒工法と言われる工法を用いた版築道路になっています。

東山道武藏路は南北方向に通っています。現在地のプロットをしますと、こちらが調査区と当時の写真です（**図31・図32・図33**）。敷粗粒工法と呼ばれるものは、一番初めに私がお話しした「水城」、大宰府政府を守る水城というところに使われた技法と同じです。まず沼地に丸太を敷いて粗粒と呼ばれる葦や木の枝などを木杭で固定します。次に繊維方向を揃えて写真のように丁寧に並べます。（**図34**）、その上に石を敷き詰め、動かなくして、さらに、関東ローム層の土と黒色土で交互に版築するといった工法です（**図35**）。

そうすると、こういう土橋状の構造物ができます。この上をこのように渡っていたのではないかと想定しています。

ここを全部止めてしまふと水がどんどんあふれていって、土留めより水位が上にいってしまいますので、一部は水で流して、そこは橋を渡していたのではないかと考えています。

この粗粒という、木の枝や葦を並べる方法は、

## 湿地帯の東山道武藏路の様相

### ●開析谷

国分寺市内には「恋ヶ窪谷」、「さんや谷」、「殿ヶ谷戸谷」、「本多谷」と呼ばれる高低差が10 mにもおよぶいくつかの深い谷（開析谷）がある。これらの谷は武蔵野ローム形成時に周辺の流水を集めて上面に窪みをつくり、その後の立川ローム形成時にも継続して開析が進んだことによって形成されたもの。

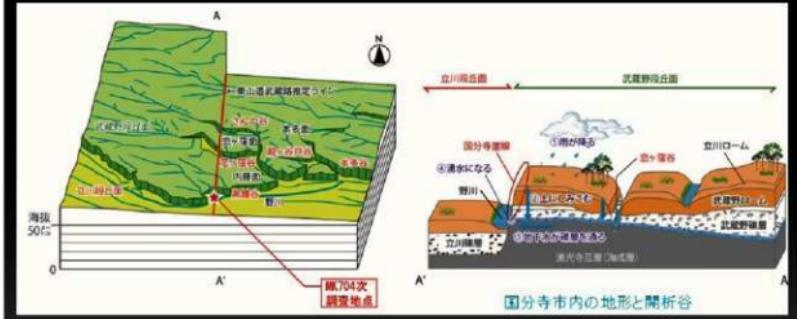


図30 湿地帯の東山道武藏路の様相



図31 敷粗朢工法による版築道路1

敷粗朢工法による版築道路

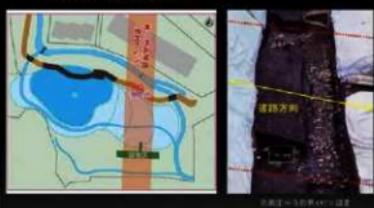


図32 敷粗朢工法による版築道路2

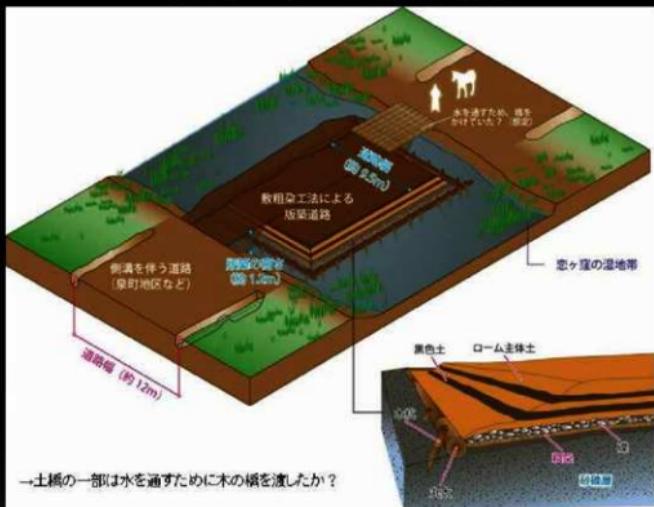


図33 敷粗朢工法による版築道路3



図34 敷粗朢工法による版築道路4

## 敷粗朢工法による版築道路



- 丸太で枠をつくり木杭でおさえる
- 粗朢(アシや木の枝)を敷き、10~20cmの礫を敷きつめる
- ローム主体土と黒色土を交互に積み重ねる(版築)
- 範囲は想定で東西9.5m、高さ約1.2m

図35 敷粗朢工法による版築道路5



図36 斜面地の東山道武蔵路！

これは当時の最先端土木技術です。つまり九州の国防のために使われるような技術が、この東国でも採用されていたということにとても驚きました。それだけ律令国家というものが、技術や情報をきちんと中央から地方に伝えていたということがこの土木技術を見ても分かると思います。

これが沼地の攻略方法です。先ほどお話したように道路は直進性が重視されますので、よく言われますが山を切り、谷を埋め、とはまさにこのことです。

次に、斜面にどのように道路をつくったかというお話を。

泉町2丁目に遺構再生展示施設と呼ばれるものがあります（図36）。こちらの模式図（図37）のように、ここは崖を大幅に切り開いて道を通しています。本来、ここは恋ヶ窪の谷に向かって12メートルくらい下っていく地形ですが、のままだと人も馬も大変です。そこで、切通し状にすると傾斜を原地形より緩く上っていくことができます。発掘調査ではそういう跡が出ています。実際、現地へ行っていただくと分かることと思います。

発掘した最終形態の、黄色い剥ぎ取りの標本が展示してあります。剥ぎ取りでは表現していませんが、実はもう一面、硬化面と呼ばれる土が上に貼ってありました。表面にあるデコボコの上を歩いていたわけではなくて、その上にちゃんと土を1尺整地しているのです。その状況がこの図です（図37左下）。ここがもともとの原地形で、さらにこの薄い黒い層が硬化面です。人がその上を歩

いていたので硬化したと考えられます。

中央には30～50cmのぼこぼこした丸い穴があります。これは波板状圧痕と言われて道路の敷設の際によく使われる技法です。道路修理の痕跡とも言われたり、もしくは浸水の施設とも言われています。なぜかというと、切通しの道は水が真ん中を流れ、道路の中央がどんどん削られてしまっていて歩けなくなってしまう。ここでの調査で分かったことは、水が流れやすい中央の部分に穴を掘った後に、水がしみ込みやすい土を充填しています。そうすると雨が降ってもスッと大地にしみ込む。どんどんしみ込む。そのための工法だったのではないかと思います。これを波板状圧痕と言っています。遺構再生展示施設を見ると、穴が見られますが、その中はちゃんと、浸透性の高い土を入れて、さらにその上を黒い土で埋め、人は実際には、黒い土の上を歩いていた、というのが分かっています。ちなみに、これ全部手掘りでやります、重機がないので、とんでもなく大変な作業だったと思います。

一方で、関東ローム層の地点分析ができるわけじゃないので、これは確証はないですが、恐らく恋ヶ窪谷の沼地の版築を使った土は、切り通した際に掘って出た土をこっちに持ってきてていると思います。これなら一石二鳥です。

ここまでが恋ヶ窪谷の部分のお話なのですが、一方で、前回野口先生のお話がありましたら、東山道はどのように南側の国分寺崖線を下りていったかを見てみましょう。

これ実は私が720次の調査で掘ったのですが、こちらは自然の地形を利用しています（図38）。

どんな自然地形かというと、場所は西元町2丁目付近。第四小学校を真っすぐ下りて、ここは国分寺崖線のふもとです。調査をした結果、昔の開拓谷をそのまま利用していたということが分かっています。先ほどの恋ヶ窪谷は人海戦術でたくさん土を掘って、切通しにしていましたが、こちらは自然の谷を利用しています。

今現地に行っても分かりにくいのですが、昭和



図 37 土木工事による切通し状道路



図 38 斜面地の東山道武藏路 2



図 39 斜面地の東山道武藏路 3

28年の地図(図39)にはこの開析谷の地形がしっかりと残っています。

ここには湧水源があり、湧水源由来でこういう谷が発生するのです。図では、この辺を通っているということが分かっています。古代の人がこの地形を計算に入れていることに驚きました。

東山道を通すときに2か所大きな工事をすると労力倍かかりますから、片方の谷は自然地形を利用して、もう一方の谷だけ工事をすることにしたのです。相当用意周到な事前準備がなければこういうことはできません。綿密な古代道路の計画があった上でここを通したというのが分かるわけですね。大体、ここは斜度で7、6度なので緩やかです。先ほど泉町地区のこの切通しのところが大体10度と言われていますので、それに対してすごく緩やかな斜度がそもそも自然についていた。

そこを狙って道路を通したというのが分かっているということです。切通しで10度の斜度に対して、こちらはもうちょっと緩い角度だったということです。当時の崖線下を調査したときの図面です(図40)。面白いことに、道路に側溝がないのです。水びたしになるような地域だったので、先ほどの敷粗朶工法とまではいかないのですが、礫や瓦を敷いて、すごく硬い地盤を作っていました。

図41ですね、こういうふうに礫を敷き詰めて水びたしになってもちゃんと上を歩けるようにしっかりと礫敷の道路を作っているというのがここで分かると思います。

続いて、ガイドに役立つ小ネタのご紹介。場所は、泉町から少し南に行ったところの市立歴史公園です。旧第四小学校があったところなのですが、ここは平成18年に発掘調査をしたときに、なかなか面白い遺構が出ています。当時の写真です(図42)。ここでは第1期と第3期の側溝が出てるのですが(図43)、一つは道路の側溝を壊してS1788という住居跡が出てるのと、道路側溝の脇で、SX281という特殊遺構が発見されたものです。性格がよく分からない遺構にSXという遺

構記号をつけます。SIというのは住居跡の記号ですね(図44)。

ここで須恵器の壺、お茶碗のような形状の器を合わせ口にしたもののが潰れた状態で出てきたのです。実際に出てきたのが(図45)です。

これが道路の脇から出ています。

当時は潰れた土器が出てきたぞ、ということぐらいしか分からなかったのです。いろいろ調べたところ、「宇治拾遺物語」という平安時代の書物に記述にたどりつきました(図46)。

安倍晴明のお話を簡単に訳しますと、御堂閑白がある時、お寺に入ろうとしたのですが、飼っていた犬が袖を引っ張り、お寺に入れないようになります。これは何か怪しいということで晴明を呼び、調べさせたところ、何か地面に埋まっていると。地面を掘ってみると、合わせ口にした土器が出てきた。それはこよりで結んであり、これはどうやらあなたを呪おうとしたもの、それを犬が呪われないように止めたという物語です。

平安時代には土器を2つ合わせ口にするというものががあったことがこの記述で分かりました。

出てきた杯は、上と下と口がほぼぴったり合う須恵器を選んでいます。下の須恵器には○に「久」と書かれています。この○に「久」という漢字が記された出土品は、武藏国分寺跡ではそれまで類例がなかったのですが、全国で1件だけ出土例がありました。多賀城の山王遺跡という祭祀に関する遺跡でこれが出てきたのです。国分寺市教育委員会でいろいろ調べたのですけれども、どうやらこれは「道饗祭」という当時の儀式に関連しているのではないかということがわかりました。

「延喜式」などの文献(図47)を見ますと、平安京では都の4隅に「八衛比古」、「八衛比亮」、「久那斗」の3つの神様を祭って、魑魅魍魎とか鬼とかそういう悪いものが入らないようにするという儀式を行っていたのが分かっているのです。今、コロナで大変なことですが、当天然痘が流行したときもこの道饗祭が行われていました。それが「統日本紀」に載っています。天平7

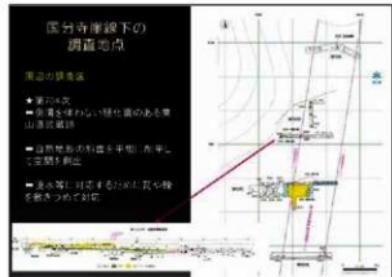


図40 国分寺崖線下の調査地点



図44 祭祀の痕跡か?



図41 斜面地の東山道武蔵路



図45 ④墨書土器



図42 東山道武蔵路沿いの祭祀の痕跡1

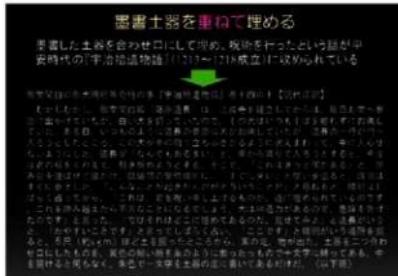


図46 宇治拾遺物語

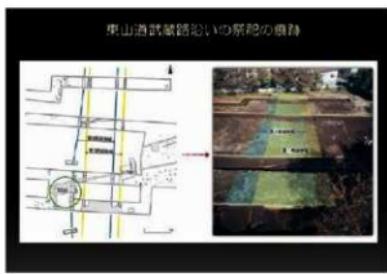


図43 東山道武蔵路沿いの祭祀の痕跡2



図47 道路の祭り「道饗祭」

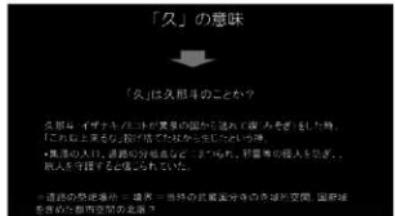


図48 「久」の意味

年8月の条、大宰府管内で流行した疫病の拡大を防ぐために山陽道諸国の国守もしくは介はひたすら斎戒し、道霊祭を行って防ぐように。当時は、病気も道を通じて入ってくるという考え方だったので。鬼や魑魅魍魎、疫病、全部が道を通じて入ってくる。だから道でこういう儀式をすることによって、それ以上疫病が拡散しないように行っていた、それが道霊祭なのです。

さて、ここに出てくる3つの神様の1人に「久那斗」という神様がいます(図48)。この神様は、イザナギノミコトとイザナミノミコトの昔のお話に出てきます。黄泉の国のお話です。イザナギノミコトが黄泉の国から逃げ帰ってくるとき、投げた杖から生じた神様と言われているのです。

集落や道の分岐点とかに置いて邪気が入らない

ようにするないようにするという、そういう意味合いを持った神様なのです。

つまり、この「久」という字は、久那斗の神様を表していて、この場所で祭っているものではないかと想定しています。

では、なぜ邪氣や悪霊や鬼が来ないようにという儀式をこの場所でやったのかというと、恐らくはここが武藏国分寺の境界の北限(図42)だからです。つまり、北からやってきた邪気が、これより南にある神聖な武藏国分寺に入らないように、この場所で祭祀を行ったと想定しています。

場所は、西元町2丁目の第四小学校の西側です。

ここが武藏国分寺の北限、ここから先は神聖な空間、ここから先に入行ってほしくないという思いが多分込められています。もう一か所、平成7年に東山道武藏路を調査した泉町2丁目からも同じようなものが出ていているのです(図49)。これも特殊遺構のSX13という土坑から壺が出ていているのです。久那斗の「久」などの墨書きはないにしろ、恐らくこれにはそういった境界での祭祀的な意味があったのではないかと思っています。では、なぜ器なのかというところなのですが、魑魅魍魎はおなかをすかせてやってくるので、そこにご飯を置



図49 東山道武藏路沿いの祭祀の痕跡3

いておくと、食べて満足して帰ると考えられています。そういう意味から器の中に食べ物を用意して退散させる。文字通り「道餐」。晚餐の「餐」なのです。この道餐祭により、魑魅魍魎たちが退散していくのを狙っているのです。ぜひ現地でご案内いただければと思います。

もう1つ、武藏国分寺に関連するところで言いますと、東山道武藏路とは違うのですが、府中市

域のところで、「参道口」というものが出ています（図50）。これは東山道武藏路とは別に、武藏国府から国分寺に向かうための道路の分岐点のところが調査で出ています。この参道口を真っすぐ南下すると国衙なのです。国衙の政府から北上し、途中、北西に向かって、真っすぐ行くと武藏国分寺の僧寺に入ります。

僧寺の中軸線上に真っすぐ伸びているので、間



図50 参道口1 東山道武藏路と武藏国分寺の位置



図51 参道口2 『古代遺跡を掘る』国分寺市教育委員会 2017より転載)

遠くなく国分寺に向かうための参道口ということが分かっています。

参道口を上から見ると、Y字に分かれていますが、片方が尼寺の方面へ向かいます（図51）。もう一方は僧寺の中庭に向かっているのです。ここに門柱状造構があり、入口に門があったのではないかと想定されています。2回建替えがあり、都合3時期あったと言われています。この門の造構の外側に柵列のようなものが見つかっているので、柴垣のようなものがあったのではないかと考えられています。

現在の参道口は公園になっており、路面標示しているので、分かりやすくなっています。参道の幅は9.9メートルありました。門は冠木門と言われる、上に横に柱を渡す門だったのではないかと考えられています（図52）。その根拠は国宝の「額田寺伽藍並条里図」という8世紀の中頃の図に描かれています（図53）。

これが国宝の額田寺伽藍並条里図、奈良時代のもので、国立歴史民俗博物館が所蔵しています。

図54が当時の額田寺の絵図を描いたものなのです。絵図の年代は756年を上限として、天平宝字年間と言われています。ここに冠木門が描かれているのです。したがって、同じような年代のお

寺の道路の入り口にはこういった冠木門があったのではないかということで、先ほど武藏国分寺の参道口にもこういう門があったのではないかなど想定します。インターネットで歴民のホームページに行くと実物を写真で見れると思いますのでよろしかったら見てください。

武藏国分寺の変遷のほうに移りたいと思います（図55）。

泉町では4時期の変遷が見つかっているのですが、最も古い段階は先ほど言ったように7世紀第3四半期の頃に作られた1期目の道路です。

幅は12メートルで、側溝を伴うというものです。

先ほどお話をしたように東山道武藏路自体は771年に、東海道に参入されたことで、官道、駅路としての役割を終えるのですが、その後、平安時代の終わりまで使われ続けていたということが分かっています。第4期の変遷と断面図を示しながら、大まかな流れをお話します（図56）。

まず初めに、第1期（青色）は、両側に側溝を伴って、この薄い青い部分を道路として使っていました。

第2期は、先ほど上層に関東ローム層を充填していると言いましたが、断面図のように第1期に掘った側溝の上に凹レンズ状に関東ローム層の土

## 参道口

- 参道は幅9.9mの柵列の内側に約5.6mの道路（中央部が凹地）。
- 参道口は武藏国分僧寺と東山道武藏路（尼寺方面）に分かれる分岐点
- 9世紀後半以降に複数回建替えられた門柱状造構
- 国宝「額田寺伽藍並条里図」（756～765年？製作）との共通性

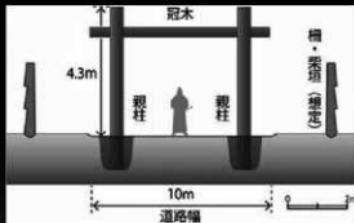


図52 参道口3

## 参道口



図 53 参道口4 (『古代遺跡を掘る』国分寺市教育委員会 2017より転載)

## 参道口



図 54 参道口5

## 武藏国分寺と東山道武藏路の変遷

泉町地区の東山道武藏路

(旧国鉄中央鉄道学園跡地、泉町二丁目)

- 平成7年から本格的に発掘調査が行われ、長大で直線に延びる道路遺構が発見される

- 最も古い段階の道路跡は、道幅約12mで南北方向にまっすぐ走るもの
- ※ 武藏国は宝龜2年(771)に東海道へ所属替えとなる

駅路としての使命を終えるが、発掘調査の成果から、その後も武藏国内の南北交通路として平安時代の終わり頃まで使用されていたことがわかる



図 55 武藏国分寺と東山道武藏路の変遷

を埋めたようです。自然ではなく意図的に埋めています。確定はできませんが、771年の配置替えによって官道ではなくなつたということを示すために、わざわざローム層の土を埋めたという考えもあります。

さらに、第3期は道路幅を9メートルにするために新たに側溝を掘り直します。

第4期は側溝を伴わない、蛇行した道に変わります。時期ごとに丁寧に見ていきます。

第1期(図57)は、12メートル幅の道路で、国分寺市内だけではなく、北は埼玉県の所沢市や坂戸市、南は府中市でも見つかっています。

路で、国分寺市内だけではなく、北は埼玉県の所沢市や坂戸市、南は府中市でも見つかっています。多摩川を南に渡った対岸の多摩市の打越山遺跡というところでは切通し状ですが、基本的に東山道武藏路はずっと変わらず12メートル幅の道路です。全国的にも大体12メートル幅の道路が駅路として敷設されています。

第1期の頃は、国分寺市内では集落が見つかっ

ていません。周りには住んでいなかったということです。その後道路の両脇に尼寺と僧寺ができるので、道と寺院が一体となってつくられたように見えるのですが、道路を作った当時は人里はなかったという状況です。道路を通すときに重要なのは湧水です。旅人が喉を潤すために必要な湧水を意図的に狙って道を通しています。先ほど、国分寺崖線の地形をどういうふうに通したかというところで湧水のお話をしましたが、例えば税として荷物を運んでいる人たちが途中で息絶えでは大変なのでなるべく水にたどり着けるように計画して道をつくっています。これが第1期です。

第2期(図58)は先ほどお話したように側溝の上層に黄褐色の関東ローム層を充填して整備補修を行った時期と言われています。ただ、これは東山道武藏路全部に見られるわけではなく、分かっている限りでは、一番北端は狭山丘陵の八国山を超えません。(図59)その南側の小平や東村山地域ではこの関東ローム層でバックしている状況は見つかっています。なぜ八国山より北側はそ

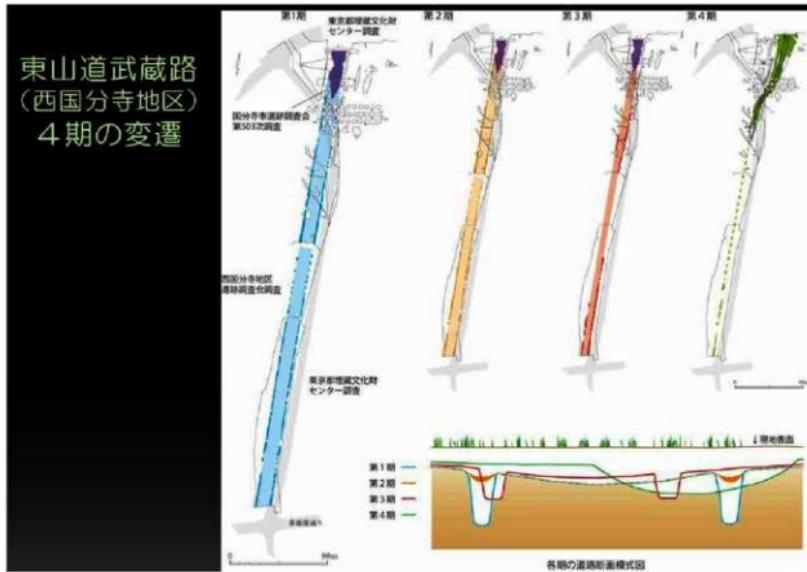


図56 東山道武藏路の4期の変遷（西国分寺地区）

## 東山道武藏路の時期区分

### 第1期

- 東山道武藏路敷設時の道路で、両側に側溝を有する幅約12メートルの道路

◎他の地域でも同一の道路構造と規格が確認されている  
■国家主導の道路敷設(7世紀第3四半期)

- 東山道武藏路が敷設された時期の集落は武藏国分寺周辺で見つかっていない
- 東山道が通る付近に湧水を利用した水場は想定されるが、基本的に人が居住するような拠点はなかった
- 市域で1期の側溝と確実に切り合う構造はいまのところ9世紀代



図57 東山道武藏路の時期区分1

## 東山道武藏路の時期区分

### 第2期

- 両側側溝の上層に黄褐色土(ローム土等)を充填し、整備・補修を行ったと考えられる硬化層がみられる時期

- 側溝上面を歩くために補修したといわれるが、もし側溝の上が道なら馬や資材を運ぶ荷車も側溝の上を歩いたのか?
- 硬化面=路面なのか?
- 凹レンズ状に淀んだ上は歩きやすい?
- 雨で泥が溜まっている側溝上を歩くか?
- 全ての人が側溝上を歩いていたとは考えにくく、道路利用の幅はあくまで1期に順じた12メートルと想定される

- ◎市域で確認される範囲は武藏野段丘面のみ
- ◎市外では小平市・東村山市でも確認されているが、八国山以北では未確認



図58 東山道武藏路の時期区分2

## 東山道武藏路の時期区分

### 第2期 黄褐色土検出状況



図59 東山道武藏路の時期区分3

ういったものをやっていないのかはわかつていません。これが第2期です。

発見された当時は、この上層に充填した関東ローム層の上面の土が固くしまっているので、この上を道として人が歩いたのではないかと言われていたのですが、どうなのがなということで意見が分かれているところです。恐らくこれは意図的に補修や整備をした痕跡だと考えております。

こちらは国分寺市外の第2期の様子です(図60)。関東ローム層の土を埋めているのがわかります。

この第2期の補修の理由については先ほどお話をした八国山の北側では見られないということが一つのポイントと考えられます。それは、悲田院の設置にまつわるお話です。「続日本紀」の天長10年(833年)に多磨郡と入間郡の境に、悲田院、悲田所を設置するという記述があり、それに付随して道路を再整備したという説もあります。もう一つは、武藏国分寺が再建される845年の頃に再整備したのではないかとも考えられています。側溝内に堆積した土の火山灰を分析すると、9世紀第3四半期頃との結果も出ています。いつ関東

ローム層で上をバックしたかというのは確定できませんが、恐らく771年の東海道の配置替え以降の何らかの整備段階で実施したと思いますが、検討を重ねる必要があります。

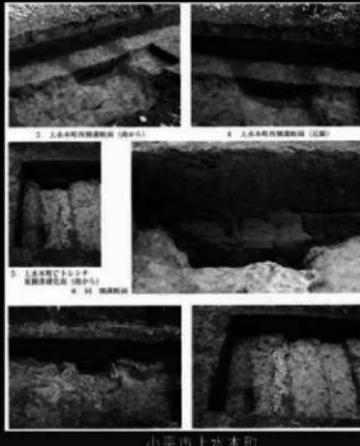
続いて第3期です(図61)。

第3期は第1期の12メートル道路とほぼ重なるように、9メートルの幅で側溝を新たに掘り直しています。側溝は40センチぐらいの深さしかなく、浅いです(図62)。第2期が八国山より南だったのに対し、第3期の掘り直しはさらに限定的で今のところ恋ヶ窪谷より南の中央線以南からしか出ていません。

つまり切通し状の場所より南側に限定されているのです。第1期から第4期までの変遷が泉町では見つかっていますが、ほかの地域では第1期だけのところ、第2期のところ、第3期もあるところなど、様々ですね。何でこういう状況になっているかというと、武藏国分寺と関係しているのです。国分寺の再整備等に伴って恐らく道路を敷設し直していると考えています。

なぜエリアが限定されているのかというと、この古代道路が武藏国分寺に入りするための重要な

## 東山道武蔵路の時期区分



### 第2期 黄褐色土検出状況

#### 第2期の補修・再整備の時期

- 補修が東山道武蔵路全域に及ぼない
- 国家主導ではなく、武藏國or多磨郡主導
- =官道としての役割を終える宝龜二年(771)の東海道への所属換え以降に整備

- 小平市小川町の硬化帯(ローム土)下層の火山灰分析

■9世紀第3四半期頃

- 八国山縁地内の須恵器編年

■9世紀中葉

- ◎『続日本後紀』天長10年(833)の多磨郡と入間郡の郡境に飢えや病気に苦しむ旅行者の一時救護所と宿泊所としての悲田所の設置の記事  
◎武藏国分寺の再建期(845年以降)

図60 東山道武蔵路の時期区分4

## 東山道武藏路の時期区分

### 第3期

- 1期の道路に重複して敷設された心谷9メートル(他地点では最大12.4m)の両側側溝をもつ道路
- 側溝も浅く、約4センチメートルの深さ
- ◎武藏国分寺の寺院地北方からJR中央線以南のみに限定

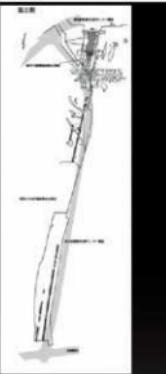


図 61 東山道武藏路の時期区分 5

## 東山道武藏路の時期区分

### 第3期



図 62 東山道武藏路の時期区分 6

## 東山道武藏路の時期区分

### 第3期



図 63 東山道武藏路の時期区分 7

な役割も果たしていたからでしょう。武藏国分寺跡の附で東山道武藏路跡が国に史跡に追加指定されたのは、武藏国分寺を語る上で、東山道武藏路が重要な構造だったからです。

こちらは、9メートル幅を拡大した部分です(図62)、12メートル幅よりも短いですね。第3期は寺院地北辺から中央線以南までですね。ちなみに寺院地南辺以南は出ています。武藏国分寺に至るこの北のエリアだけに第3期は限定されています。(図63) (図64) もうですね。

旧第四小学校の跡地のところも同じです。第1期と第3期があります。第3期は武藏国分寺周辺だけで、恐らく武藏国分寺の再整備に合わせてやっていると考えられます。道襲祭の痕跡から出土土器の年代は10世紀後半なので、さらに新しい時期になります。このことから、第3期に関しては、10世紀の終わりには掘り直した溝も大部分埋まり始めていたのではないかというのが発掘調査の状況から想定できます。

第3期の図65は、現在の第四小学校の場所にあたりますが、図のようにたくさんの住居跡や掘立柱物跡が出ています。武藏国分寺が再建される9世紀の中頃から11世紀にかけてこういった

建物跡が寺院地の北側で急速に増えます。それまでこの辺には住居がなく、人が住んでいなかったのに、再建期以降、たくさんの建物が建てられるという状況です。この再建期に合わせて第3期の側溝が作られ、その道の周辺にこういった集落も築き始められる様子を見ると、第3期の道路の役割は、単なる古代道路としての役割というよりは、国分寺に付随する道路、今でいう参道的な役割、要は国分寺が管理する道路になっているのではないかと考えられます。

最後に、第4期です(図66)。

これは先ほどの旧鉄道学園跡地で発掘調査をした泉町です。第4期は直進性は失われて、側溝はなく、ところどころこういう波板状压痕などの補修の痕跡等を伴いながら部分的に固い硬化面のある蛇行した道に変わっていくということです。

10世紀中頃の土器が近くから出ていることや、平安時代末の溝に道が壊されているので、第4期の道はその頃には廃れているという状況が想定されます。

古代道路の出発点が地方と中央との交通・情報通信システムでしたので、律令国家が次第に衰退していくと、スポンサーがいなくなってしまいま

## 東山道武藏路の時期区分

### 第3期

- 寺院地区内北辺溝CD42を第3期の側溝が切っている
- 旧第四小学校跡地の調査では、3期の西側側溝を切るS×281特異構造が検出され、10世紀後半の須恵器杯が合わせ口状態で出土(道襲祭などの祭祀)
- 10世紀初めに敷設~10世紀後半には側溝が一部埋没



整備された旧第四小学校跡地



図64 東山道武藏路の時期区分8

す。それまでは税の一部として、農作業がないときなどに地元の人たちを借り出して道路の補修をしたり、維持管理していたのですが、だんだん貴族政治が衰退していき、律令国家制度が維持できなくなってくると、道路も徐々に廃れていってしまうのです。その結果、直進性を失ったこのよう

な蛇行した道路になっていきます。

これが第4期の波板状压痕と呼ばれているものです（図67）。

これが泉町地区で見られる第4期の東山道武藏路の様相です。第1期の真っすぐな格好いい道路に対して、このように自然地形に逆らわない、け



図65 東山道武藏路の時期区分9

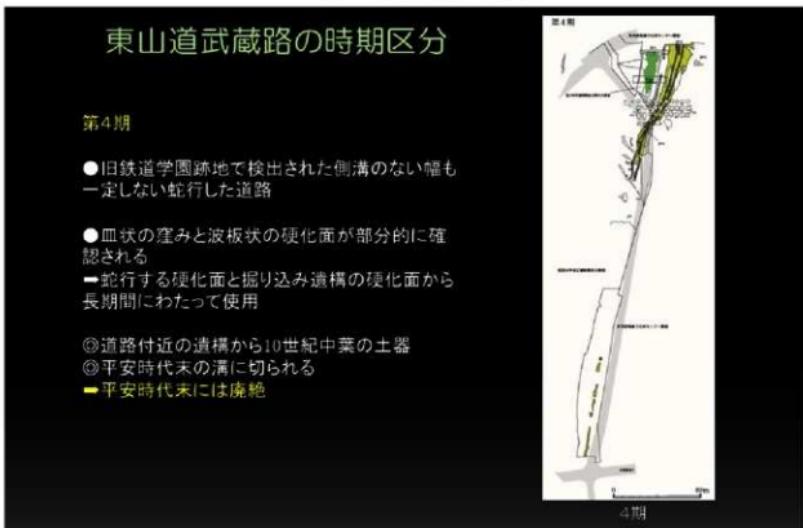


図66 東山道武藏路の時期区分10

もの道のような道に戻っていってしまう、そういった状況です。

他の地域の波板状压痕の検出状況です（図68）。波板状压痕自体は先ほどの泉町の部分で出ていましたが、これは僧尼寺中間地城と呼ばれる、僧寺と尼寺の間を通っている場所の道路でもたまたま見られます。ただそれはあくまでこぼこしたところを補修した痕跡であり、道路と断定するには難しいです。今でも砂利道で地面に穴に空いてしまっているところを埋めたりしますが、それと同じような痕跡は見つかっています。

いずれにせよ、律令制度の衰退後は古墳時代に使っていたようないわゆる伝馬路というような道に次第に変わっていきます。もともと古墳時代の道というのは、自然地形に逆らわないで、川を回避したり、山でも通りやすいところを通ったりしていたので、人間が手を加えなくても歩きやすい場所が道になっていました。なので、平安時代の終わりに向かうにつれて、この第4期のように地形に沿った道に徐々に付け替えられています。

中世の道はどのような道かというと、市内に伝鎌倉街道があると思うのですが、これは実はこの辺りではめずらしく大規模に切通しをしているのです。国分寺崖線を大規模に切り開いて道を通していきます。ここは鎌倉街道の中でも上ツ道と呼ばれる道です（図69）（図70）。切通しは現地で120メートルほどが残っています。

東山道武蔵路は平安時代の終わり頃になると、ほぼほぼ忘れ去られてしまい、使われなくなりました。鎌倉時代に入ると、鎌倉街道のようなものが新たに付け替えられて、人々はそちらを使うようになります。直進性道路は失われて、こういった道に中世になると変わっていきます。

昔の鎌倉街道、昭和33年はこんな感じ（図71）でした。

伝鎌倉街道は、今でこそアスファルトで舗装していますが、切通しの両側に木が生えているようなこういう状況でした。今、大河ドラマで大変人気があるようで、いろいろな方がまち歩きで訪れています。



図67 東山道武蔵路の時期区分 11



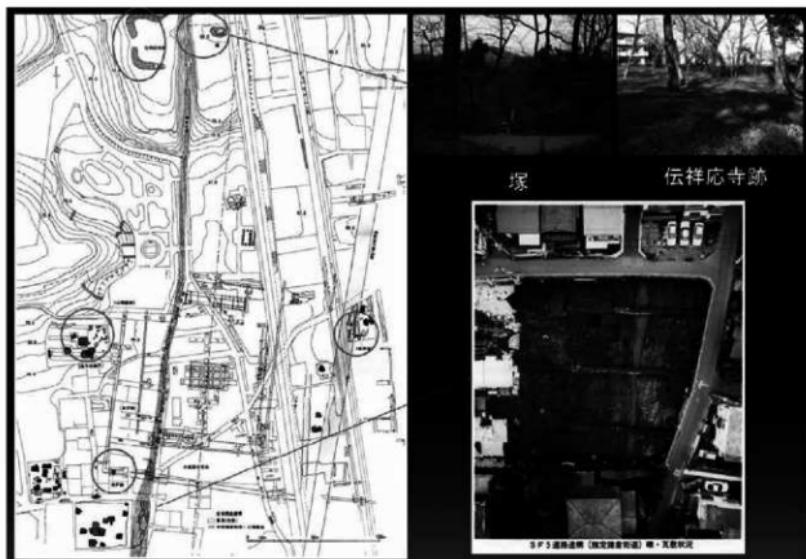


図 72



図 72、伝鎌倉街道の切通しの西側には、伝祥應寺跡、東側には塚跡があります。鎌倉街道は尼寺の伽藍地を貫いているので、この道が通っていた時期には尼寺はすでに衰退しきっていたというのが分かります。伽藍の中を道が貫いていますからね。この鎌倉街道以外にも周辺に中世の遺構が幾つか見つかっており、この道路を通すためにもいろいろな道路工法が使われていたのが分かっています。

本日はここまでのご案内になります。ご清聴ありがとうございました。

#### ④ 古代武藏国分寺の伽藍—今日的理解に至った経緯—

国分寺市教育委員会ふるさと文化財課史跡係長 依田第一

令和4年は武藏国分寺跡が国の史跡に指定されて100周年の節目を迎え、国分寺市では様々な記念行事を開催しておりますが、本講座の第4回目は、これまでの長い調査・研究の歴史を振り返りながら、古代武藏国分寺の伽藍配置の捉え方が、どのような経緯をたどりながら今日的な理解に至ってきたのか、お話をしたいと思います。

## 1. 古代武蔵国分寺のカタチ

**図1**をご覧ください。武藏国分寺の伽藍は東側に僧寺、西側に尼寺が並び、その間を古代官道である東山道武藏路が南北に縦貫しています。そして、僧寺・尼寺の双方に建っていた堂舎とその規模は、次に述べるような特徴を備えています。

まず、僧寺は、①講堂—金堂—中門—南門が南北一列に中軸線を捕えて並び建ち、②その中軸線の東側には鐘楼と東僧坊が、対する西側には経蔵と西僧房がシメントリーに建っています。③これらの建物を中門から両翼に延びる掘立柱塀（後に築地塀に建て替え）と大小複数の溝で囲い、遮蔽された内側の東西約 156 m × 南北約 132 m の範囲を「伽藍中枢部」と呼称しています。そして、④「伽藍中枢部」の外側南東で、金堂から約 200 m もの距離を隔てた位置に七重塔が建ち、⑤「伽藍中枢部」と七重塔、金堂・講堂の中軸線北側延長線上に建つ礎石建物（北方建物）と国分寺崖岸、麓の湧水群を東西 356 ~ 384 m × 南北 365 ~ 428 m にわたって溝で囲んでいますが、その範囲を「伽藍



図1 武藏国分寺の伽藍配置

地」と呼び、⑥「伽藍地」のさらに外側にも東西約626～716m×南北536～582mの範囲を溝で囲繞した「寺院地」が広がっています。「寺院地」の西端は東山道武藏路に接し、⑦金堂・講堂の中心から南へ約500mの中軸線上には、武藏国府へ続く参道口があり、参道上には門も建っています。

一方の尼寺は、①僧寺「伽藍中枢部」から南西方向へ約500m離れた場所に占地し、②尼坊（講堂？）—金堂—中門が南北の中軸線に沿って並び、③中軸線の東側には鐘楼、西側に経蔵が想定され、

④これらの建物を中門から両翼に延びる掘立柱塀と溝で囲んでいますが、その東西約88m×南北約123mにおよぶ遮蔽した範囲を「中枢部」と呼び、⑤さらに「中枢部」の外側にも一回り広い範囲（東西約150m×南北約160m以上）を溝で囲む「伽藍地」があり、「伽藍地」の南辺中央付近に南門の存在が想定されています。

以上が古代武藏国分寺の伽藍の特徴（=カタチ）ですが、これが一般的な国分寺のあり方なのかどうかを探る意味で、関東地方を中心とした他の国

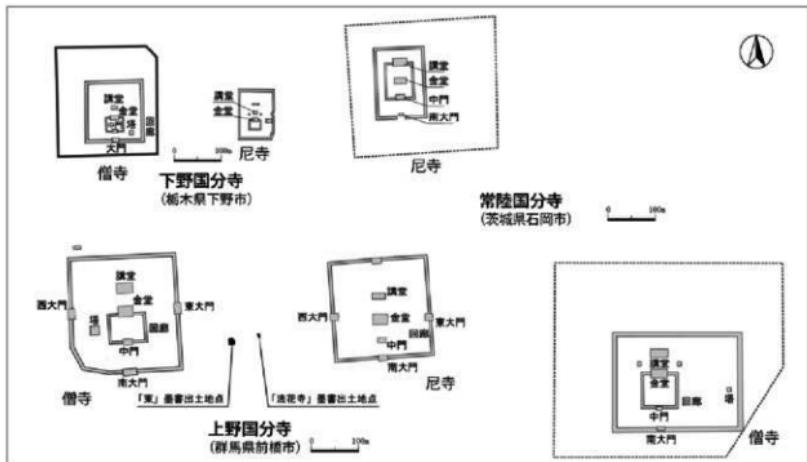


図2 上野・下野・常陸国分寺の伽藍配置

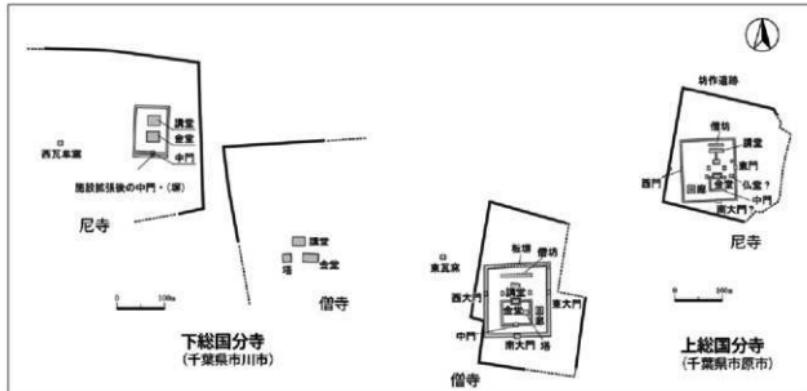


図3 上総・下総国分寺の伽藍配置

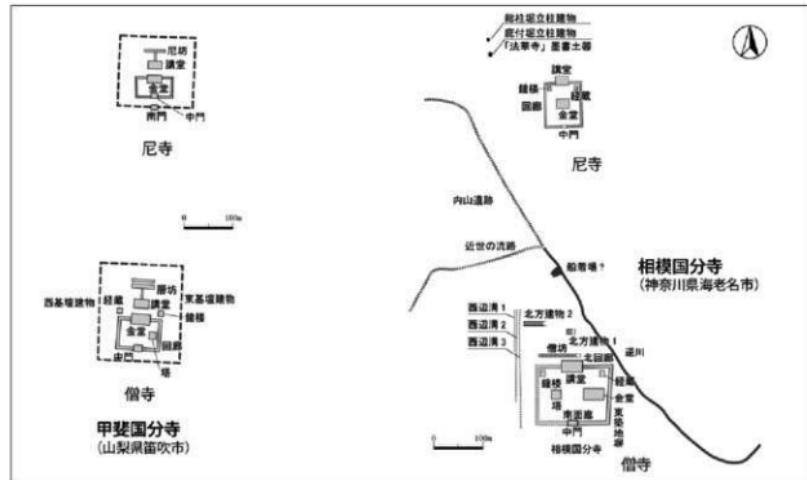


図4 甲斐・相模國分寺の伽藍配置

国分寺の事例を比較してみてみましょう（図2～4）。まず、図2は現在の北関東地方にあたる上野・下野・常陸国分寺をお示しました。一見して規模ですかね、僧寺と尼寺の位置関係、金堂・講堂・塔・中門といった主要な建物配置が違う、ということがおわかりいただけるかと思います。例えば、上野・下野では西側に僧寺、東側に尼寺を配しますが、常陸は僧寺が南東、尼寺が北西にあります。建物に注目すると、どこも中門と金堂を廻廊で結んで、その北側に講堂を置いていますが、塔は上野では廻廊の西、下野と常陸は廻廊の東側にあり、廻廊との距離をみると下野では近接し、常陸は100m以上も離れた位置に建っています。

図3は現在の千葉県域に含まれる下総・上総国分寺の伽藍配置です。下総は東に僧寺、西に尼寺を置く点では武藏と一緒ですが、上総はその逆です。建物配置は、下総の場合、左に塔・右に金堂、その奥に講堂を置きます。しかし、上総は中門と金堂を廻廊で繋ぐ点で下野・上野・常陸と一緒にしています。

図4は、どちらも南側に僧寺、北側に尼寺を配する甲斐と相模國分寺の事例です。甲斐は中門と

金堂を繋いだ廻廊の内側で右手方向に塔を置きますので上総に近く、一方の相模は左に塔、右に金堂、その奥に講堂を置く点で下野に近似していますが、中門と講堂を廻廊で結んで、金堂ではなく講堂に廻廊が取り付いている点では、独特の伽藍配置をしている印象があります。

図5は高校生向け社会科教科書の副読本で、山川出版社『詳説日本史図録』に掲載されている伽藍配置の変遷図です。日本で一番古いお寺と言われていますのは、奈良県明日香市にある蘇我馬子が氏寺として建てた飛鳥寺ですが、それにやや遅れて聖徳太子ゆかりの四天王寺や法隆寺があり、これらは6世紀末から7世紀初頭頃に創建されました。さらに大化の改新後、天武天皇が后（後の持統天皇）の病気平癪を祈願して建てたと伝わる藥師寺が7世紀後半、そして聖武天皇ゆかりの国分寺總本山にあたる東大寺ですが、元々は文武天皇が藤原京に建てた大官大寺が遷都に伴って平城京へ移転してきた大安寺などは奈良時代を代表する寺院です。こうした中央の大寺院に倣って地方の古代寺院には様々な伽藍があり、伽藍配置はその時々の仏教思想の影響が現われているとも言えますが、大雑把に伽藍の時代的な移り変わり

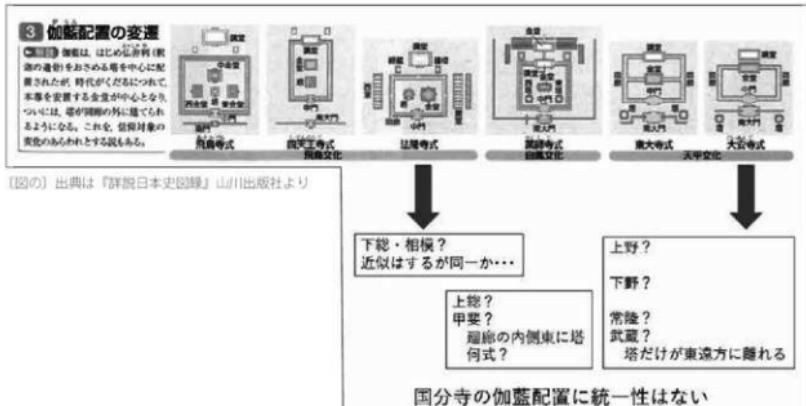


図5 伽藍配置の変遷と関東近国の国分寺

をみると、初期には中門・塔・金堂・講堂が南北に並列していたものが、塔と金堂が横並びとなり、そして塔だけが中門と金堂を繋ぐ迴廊の外側へと離れていく傾向が読み取れます。これを先にみてきた近国の国分寺の事例に照らすと、總本山の東大寺を模した伽藍というの意外にも無いようで、下総と相模は法隆寺式に似ています。上野・下野・常陸・武藏は明確に合致する中央寺院の伽藍は見当たりませんが、敢えて近いタイプを見出すとすれば、中門と金堂を結ぶ迴廊の外側に塔を配置している点で大安寺式ともいえるでしょうか。その一方で、迴廊の内側に塔を置く上総や甲斐は薬師寺式に近く、武藏に比べるとやや古そうな印象にも映ります。いずれにせよ、国分寺の伽藍配置は全体的な統一性に欠けるということは明らかだと思われます。

さて、国分寺は、天平13年(741)に聖武天皇が発布した詔に基づいて鎮護国家を目的として造営された寺院ですが、全国の国分寺を見渡しても天平時代の伽藍がそのまま今日まで残っているところはありません。武藏国分寺の場合、江戸時代の縁起(医王山縁起)によると、元弘3年(1333)に新田義貞が鎌倉幕府と繰り広げた分倍河原の合戦で戦火を蒙って全焼したことが伝わっていますが、この伝承が歴史的事実を反映しているか否か

はともかく、奈良・平安時代に大きな伽藍を誇った古代の武藏国分寺は、いつしか後世に姿形を大きく変えてきました。それは、江戸時代に当時の国分寺村を訪れた多くの知識人たちが、往昔の寺院跡を偲ぶ様子を書き記した書物のなかから読み取ることができます。つまり、今から約200年前には、さきに紹介したような古代武藏国分寺のカタチや、伽藍を構成する個々の建物が認識されていた訳ではありませんでした。

## 2. 近世地誌類にみる古代武藏国分寺のイメージ

### ~約200年前の伽藍認識~

江戸時代後期には国学の影響もあって全国で地誌編さんが盛んとなり、多摩地域にも多くの地誌が知られています。ここでは、代表的なところで『新編武藏風土記稿』、『江戸名所図会』、『武藏名勝図会』の3冊に着目しながら、当時の人たちが古代の武藏国分寺をどのように捉えていたか、それぞれの内容を見ておきたいと思います。

まず、江戸幕府直轄の教学施設でありました昌平坂学問所が文政13年(1830)頃に完成させたと伝わる『新編武藏風土記稿』ですが(図6)、「国分寺村」の項を開きますと、村内に所在する寺院として国分寺・薬師堂・仁王門・寶塔蹟の4つを掲げています。そこには、今(文政年間)の国分

寺には建物は一棟しかないけれども、昔の堂塔伽藍は遺跡と化して、僅かに煙のなかに残っていること、薬師堂は昔の堂舎の跡の上に建っていること、国分寺から約100m離れた南方の煙にある大きな平石は昔の七層塔の心礎のようだけれど、本来の位置を留めているのか、あるいは他所から移動して持ってきたものかは判断できない、といったことを述べています。

二つ目の『江戸名所図会』は、神田の町名主で

あった斎藤月岑が天保7年(1836)に発行した一種の観光ガイドブックで、国分寺の遺跡に関わる記述として仁王門と七重塔について触っています(図7)。今日、僧寺の中門あるいは南門に比定している場所に該当するのか詳細はわかりませんが、寺の南方の煙にある礎石は仁王門の旧跡であるといい、さらに寺の東南には穴を開いた六角形の礎石があって、これは『新編武藏風土記稿』の記述と同様に層塔の旧跡であるとして紹介してい

### 『新編武藏風土記稿』

#### (卷之九十二 多摩郡之四)

##### ○国分寺村

###### 寺院

###### 国分寺

今なお一宇の寺院たりといへども、古の堂塔伽藍のおもかげは、遺跡となりて僅かに阡陌のあいだにのこれり

###### 薬師堂

村の西岡の上にあり、往古の堂跡なりといふ、

###### 仁王門

此の門近世までの薬師堂なりしを、再興の時きり縮めて仁王門になせしと云う

###### 寶塔頭

国分寺より一町餘、南の陸田中に平石一枚あり、大きさ大抵四尺許、中心圓穴あり、徑一尺、深さ四尺餘、是古へ七層塔の礎石にて、圓穴は心柱の穴なるべしといふ、然れどもこの所もとよりの舊跡か、或は外より搬出せしをここに移し置しものか、今つまびらかにならず



図6 新編武藏風土記稿

### 『江戸名所図会』

**医王山国分寺** 最勝院と号す。国分寺村にあり。府中より北の方十八町を隔つ。當寺は天平年間行基菩薩草創する所にして、聖武天皇の勅願所なり。中興開山を教心阿闍梨と号す。今は新義の真言宗なり(以下、略)

##### 仁王門の旧跡

寺前半町あまりを隔てて、南の方の煙の中に、その礎石を存せり。—今の中門・南門？



##### 層塔旧跡

国分寺の少し東南半町あまりを隔ててあり。草樹繁茂する所の少しの圓なり。方九尺ばかり六角に礎を据ゑたり。往古その塔の中真を収めたるものなりとて、中に三尺ばかり石にて疊たる空穴ありて内に水をたたへたり。

—塔の心礎であることを認識

図7 江戸名所図会

ます。

三つ目の『武藏名勝図会』は、八王子千人同心組頭の植田孟縕が文政6年(1823)に発行したもので、古代の武藏国分寺に関しては、国分寺伽藍跡、七層大塔趾、大塔心柱礎、往古三仏堂跡、薬師堂、法華寺跡の6項目を立て、さきの2冊に比べると詳細な記述を残しています(図8・9)。要点をかいつまんで見てていきましょう。

まず、「国分寺伽藍跡」は二カ所にあることを

指摘しています。この「国分寺伽藍跡」は、今でいうところの僧寺を指していると思われますが、一つは丘(国分寺崖線)の上にある「薬師堂」付近です。この場所は、丈六の釈迦如来と丈二の薬師・阿弥陀如来を祀っていた「往古三仏堂」、すなわち天平年間に建てられた金堂の跡であろうと推定し、その大きさは、現存している礎石の配列状況から四間×七間の建物として復元しています。もう一つは、丘を下りた南方の畑に大きな礎

#### 『武藏名勝図会』(多摩郡之部巻四 府中領 世田谷領)

**国分寺伽藍跡** いまに府中領国分寺村と号し、府中駅より北に当たり、行程凡そ廿町許。ここに上古の大伽藍の跡あり。礎は各々大石にて、その跡に列をなし、歴然として上古のままなり。但し、御藍の跡二ヶ所あり。丘陵の上にいま薬師堂あり。ここは上古の御藍の空跡にて、礎石の間を四間安置きて、一行に七つ並びにて廿八間なり。横手もこの数の組く並びて、廿八間四面なる金堂なりとみゆ。その礎のところに、いま薬師堂を安置す。その地より南の一段低き地に大石の礎、これもまた列居し、いまは陸田となり、或は芽生いたるところもあり。大石跡かしく難く、ここは上古の国分寺伽藍跡など云。



又云国領に二寺を造立せられ、金光明寺と称し、尼寺を法華寺と号せり。國史にも国領の寺なれば「国分の二寺」と載せられたるを、諸国のみ同じければ末世に至りて終に寺号をば称せず。国分寺と称えて寺号にはなしたれ。上世この両寺は相去ること遠きにもあらぬようなれば、法華寺の跡いまだ知れずといえども、国分寺より西に同様の古瓦出るところあり。その地より往古鐵筋の仏像を掘りだせしゆえ、上人は地名を黒金と喚う。その仏像は六所の社地に安ずるもの足なり。或説に極樹野川影向寺は旧跡にて、靈験の薬師を安ず。當國の法華寺の跡はこれなりといえど、また當國の薬師寺なるべしという説もあり。ともに憶かなることは知りがたし。

**七層大塔趾** 国分寺廢跡より辰巳の方にて、二町余を隔てて、その趾は田園の傍にあり。

**大塔心柱礎** 右の大塔の心柱の礎なり。い主陸田の傍にあり。

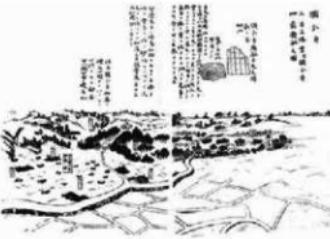
真中に心柱の丸穴ありて、深さ三尺余、底廣一尺余。

図8 武藏名勝図会(1)

#### 『武藏名勝図会』(多摩郡之部巻四 府中領 世田谷領)

##### 往古三仏堂跡

天平年中(729~49)御造立の金堂なり。本尊は丈六の釈迦、丈二の薬師と阿弥陀なり、この三尊を安置す。古えは廿八間四面の堂なりと見えて、四面毎に礎石を一つ窓ありて、一行に七つあり、廿八間なり。ここにいまの薬師堂を造立せしと古に、この内の礎石を散集めて、いまの堂七間半四面を造営せり。その余はこの堂の傍にあり。容易に動かし難く大石なり。



##### 薬師堂

中古以来造立せし堂七間半四面。古えの金堂の跡なり。

(以下略)

##### 法華寺跡

この寺跡知れず。村内西の方にて、国分寺跡より四、五町へ出てたるところに古瓦の土中より出る地あり。国分寺の古瓦と同じければ、そここそは法華寺の跡なるべし。国分寺のことはみな人の知るところなれども、この寺のことは称する人少し。この寺院は天平年中に聖武天皇御発願にて造立なきしめ給うところなり。国分寺とこの寺とを懸号して「国分の二寺」と称す。毎年正月八日より七ヶ日の間、この寺に於て最勝王経を転読せさせ給うこと延喜式にも見え侍りぬ。

図9 武藏名勝図会(2)

石が点在している一帯で（おそらく、今の金堂・講堂付近）、これらの大石は固着していく動かすことが困難なため、上古の国分寺伽藍跡であろうと伝えています。

また、この付近と同じような古瓦が出土する西方の地には、府中六所宮の鉄仏が昔掘り出された場所があり、「法華寺跡」すなわち尼寺の旧跡であろうと示唆しています。この鉄仏は、国の重要文化財に指定されている鉄造阿弥陀如来坐像で、現在は府中市の善明寺に安置されていますが、『武藏名勝図絵』編さん時の文政年間当時は、六所宮すなわち大國魂神社にありました。なお、尼寺跡の比定地については、横樹郡野川村（川崎市宮前区野川）の影向寺に充てて考る先行学説もあることを付記しています。一方で、国分寺の南東約200m離れた畑の傍には「七層大塔跡」があり、そこには深さ90cm、直径30cmの「大塔心柱礎」が見えていることを記しています。現地には礎石しか残っていないのに、「七層」の「塔」跡だと認識していることは注目されます。

これらの地誌類の記述から、今から約200年前の江戸時代後期の人々が思い描いた古代の武藏国分寺は、国分寺からみて南東へ離れた場所に七層塔跡が存在し、穴を開いた大きな礎石は塔の心礎であったこと、薬師堂付近は伽藍の中心地で金堂跡に想定されていたこと、丘（国分寺崖線）下の畑に分布する礎石群も伽藍の跡で、特に仁王門の前身となる門の跡であること、西方の国分寺村黒鉄の地は川崎市の影向寺とともに、尼寺候補地の一つであること、が認識されていた様子を、まずは押さえておきたいと思います。

### 3. 明治・大正時代の調査・研究

～100年前の史蹟指定時における伽藍認識～  
さて、文明開化による欧化主義や廢仏毀釈の風潮が進行していた明治時代初期の日本では、それまでの伝統的な文化や価値観が軽視され、社寺の財宝や建造物など数多くの文化財が消失・破壊の危機に直面しましたが、御雇い外国人教師として

東京大学に赴任していたアーネスト・フェノロサや助手の岡倉天心たちは日本の古美術保存の必要性を強く訴え、社寺・古文書・絵画・彫刻・工芸品・書跡等の調査を積極的に推し進めました。

その後、明治22年（1889）に上野で帝室博物館が開館し、8年後の30年には文化財保護の原型法となる「古社寺保存法」が制定されると、33年には帝国古蹟取調会という組織が立ち上がり、主として天皇や忠臣義士関係の史蹟を中心に、その顕彰活動を通じながら国威の発揚や人心教化が進められました。この帝国古蹟取調会は全国的な史蹟の調査保存団体でもありますし、会が発行する会誌『古蹟』には、後に国の指定文化財となつていく数多くの記念物が紹介されています。

その一つ、明治36年（1903）刊行の『古蹟』第二卷第二号に、当時文部省の図書審査官でありました重田定一が「武藏国分僧寺の廃址（圖入）」という論文を寄稿しています。重田は同年1月25日、東京帝国大学の柴田常恵（後、内務省・文部省嘱託）と一緒に国分寺村を訪問し、仁王門南方の畑に点在する68個の礎石を「近きものは尺度」、「遠きものは測歩」で測量図を作成し、礎石の分布状況を整理・観察して具体的な堂舎の存在を考えました（図10左）。これによると、「南門」・「金堂」・「講堂」・「北門」が南から北へ一列に並び、その西側に「僧房」、「南門」から東へ離れたところに「鼓樓・鐘樓」と「七重塔」が描かれています。冒頭にみた伽藍配置の今日的理説と比べますと、重田が「北門」を想定する場所は、現在考古学的な裏付けはとれていないのですが、「南門」を想定する場所は中門、「鼓樓・鐘樓」を想定する場所は塔跡2にそれぞれ該当します。堂舎の考え方は今日的理説と部分的には異なりますが、国分寺崖線下に点在する礎石の分布状況を丹念に測量して、門と金堂・講堂が南北一列に建ち並び、塔が東へ離れた位置に建っている、という伽藍景観を復原したはじめての研究成果でした。

その後、大正時代に入ると紋章学者として著名な考古学者の沼田頼輔が重田説に異を唱えます。

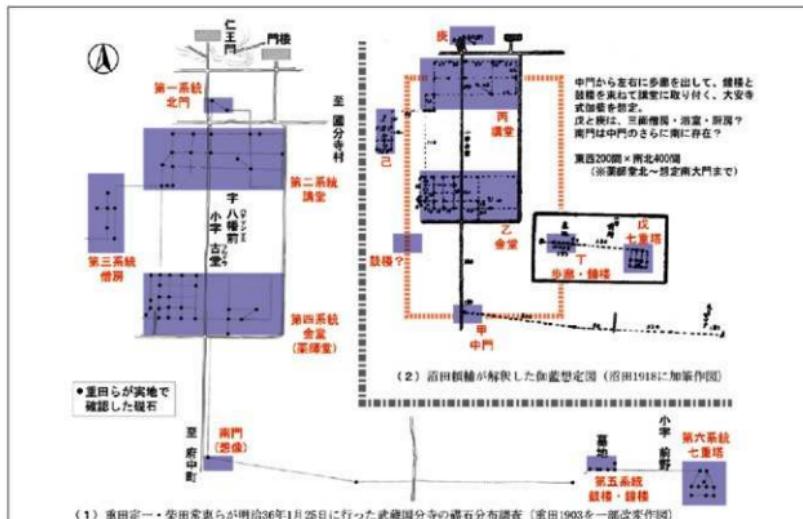


図10 重田定一・柴田常吉および沼田頼輔が想定した伽藍配圖

武藏國分寺の文字瓦研究も進めていた沼田は、大正7年（1918）に『武藏野』第一巻第一号で「武藏國分寺遺蹟考」と題する論文を発表し、国分寺伽藍の原型を法隆寺と大安寺の大きく二つの系統に分けて捉えたうえで、法隆寺の形式を踏襲する相模國分寺は国分寺の中でも比較的古く、武藏・常陸・下野國分寺は大安寺の形式に基づいたものであると評価しました。また、重田らの礎石分布調査は、近世の地誌類で金堂跡に比定されてきた薬師堂付近までを対象に含めていないため成果は不十分であるとしながらも、重田説の南門は「中門」であり、本来の南門は「中門」のさらに南方に存在することを予測しました（図10右）。さらに「中門」と「講堂」は「廻廊」で繋げ、廻廊上の東と西にそれぞれ「鐘楼」と「鼓樓」が乗りり、そして廻廊の外側には「三面僧房・浴室・厨房（食堂）」を配置し、「塔」は大安寺の如く単独に離れて占地するという伽藍配置案を復原しました。「廻廊」は後の発掘調査で存在を否定されますが、「中門」と「南門」の位置関係は今日的な理解に繋がる見解を示したことになります。

さて、日本の美術工芸品は「古社寺保存法」に

よって保護が図られてきた一方で、国土の開発によって史跡や天然紀年物の破壊が進んでいる現状を憂慮して、沼田論考公表後の翌大正8年には「史蹟名勝天然紀年物保存法」が施行されました。この法律は、内務大臣が指定する史跡・名勝・天然紀年物に対して現状変更行為に一定の制限をかけることで、国が文化財保護の方策を講じることを目的としたものですが、法律の施行を受けて当時の東京府は府下に所在する史跡等の実地調査を各地で行い、大正12年（1923）から昭和13年（1938）までの約15年間に一連の調査成果を『東京府史蹟勝跡調査報告書』（全14冊）として刊行しています。

じつは、その第一冊目となる報告書では「武藏国分寺跡の調査」が取り上げられ、当時の国分寺跡に関する総合的な調査・研究成果が、府の嘱託職員であった稻村坦元と後藤守一の二人によって沿革・遺址・遺物の3章にわたる構成立てでまとめられました（稻村他 1923）。このうち稻村が著した「第二、遺址」の項から、100年前の当時、遺跡をどのように捉えていたのかを見てみたいと思います（図11）。



本文目次		
第一、沿革		
甲、徳川幕府時代以前		
乙、徳川幕府時代		
丙、法流及信仰		
第二、遺址		
甲、大塔址		
乙、金堂、講堂、僧房址付南大門址		
丙、北院址		
丁、西院址		
武藏国分寺址踏査報告書		
(東京府史蹟名勝天然記念物調査委託 鶴尾順敬)		
北多摩郡四分寺村国分寺遺跡調査報告		
(元東京府刺繡 萩原一郎)		
第三、遺物		
甲、佛像	乙、青石塔婆	丙、寺領
丁、瓦坪 (イ、縫合口、瓦、八、草花瓦)	一、平瓦	
水、文字瓦 1、郡名を記せる文字瓦	2、人名を記せる文字瓦	
附、武藏国分寺瓦窯址		

図11 「東京府史蹟調査報告書」第一冊「武藏国分寺址の調査」(左:表紙、右:目次構成)

まず、現地に残る礎石の表面観察から、先の『新編武藏風土記稿』では、塔の心礎は後世に動いた可能性を示唆していましたが、心礎をはじめ幾つかの礎石は極めて安定して据わっている状況を確認しました。そのうえで、奈良時代に創建された中央寺院の諸堂配置を参考にしながら、金堂・講堂・僧坊・大門等の位置は推定出来るとし、国分寺は専ら国家の安寧を祈禱する道場であることから、南大門の正面に金堂、背後に講堂を置き、その側に僧房と廻廊が存在したであろうことを指摘しています(図12)。

また、国分寺崖線上の薬師堂周辺に点在する礎石群は、後世に崖下から移動・運搬されたものであろうとして、これまであまり注意が注がれてこなかったのですが、少なくとも二棟以上の建物が存在し(図13の「北院」)、また国分寺の主要な堂舎は崖下の平地にあって、一部は崖線の上にもおよんでいたことを予測しました。

そして、薬師堂の西方数百メートル離れた崖線上の「金佛堂」と呼ばれるあたり(現在の伝祥応寺跡)にも礎石が数個あり、これまでの学者は全く注意を払ってこなかったけれども、今回実地調査した結果からは国分寺創建期の遺跡として考えられるとし、さらに南崖下の平地で「鐘撞堂」と呼ばれるあたり(現在の尼寺金堂跡)にも礎石と瓦片が散在し、これらの付近一帯には数棟の建物



図12 磚石分布から想定した伽藍  
(稲村他 1923 をもとにトレース)

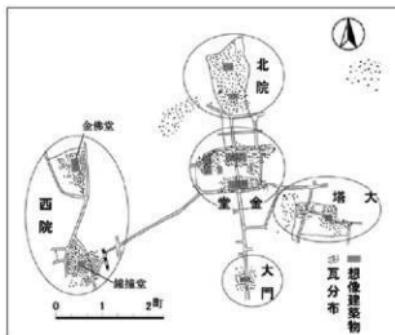


図13 史蹟推定図  
(稲村他 1923 をもとに加筆トレース)

が存在していただろう、と述べています。

以上のような所見を踏まえながら、大正9年10月18・27・29日、11月7日に内務省史蹟名勝天然記念物保存調査員や東京府嘱託の高橋源一郎らと遺跡を踏査して、国分寺の遺跡は宇前野（現在の僧寺金堂へ七重塔あたり）の国分寺崖線下の一段低い平地部分だけではなく、字黒鐵（現在の尼寺金堂あたり）や、さらには国分寺崖線上の高台にある薬師堂付近にまでおよんで、從来から様々な学者が示してきた範囲よりも頗る広く捉えられる、と評価しました。その結果、「史蹟名勝天然記念保存法」に基づいて国の史蹟に指定する区域は、小字前野・黒鐵の平地から丘の上にも広げ、その中を①大塔、②金堂・講堂・僧房、③大門、④北院、⑤西院の、大ざっぱに5箇所に区分することが妥当だとしました（図13）。なお、『武藏名勝図会』でも指摘されていた黒鐵の地を尼寺と見立てる可能性については「確たる根拠が乏しい」として、国分寺附属の一院（西院）として位置づけました。要するに、武藏国分寺跡が国の史蹟に指定された100年前当時は、現在の僧尼寺全体を「僧寺」として捉え、金堂・講堂・僧房のある中核エリアの北側と西側に付属院を想定し、「尼寺」の存在は明確ではありませんでした。

#### 4. 昭和時代の調査・研究

##### ～様々な伽藍復元案と発掘調査の成果～

###### (1) 建築学者の太田静六による伽藍復元

その後、昭和10年代に入ると後に九州大学名誉教授となった太田静六が、礎石や瓦を中心とした從来からの考古学的なアプローチではなく、建築学的な観点から国分寺創建当時の伽藍規模を検討しました（太田 1935・38）。

太田は、まず遺跡の範囲を段丘斜面を挟んで上下両段に広がる東西六・五町、南北五町余の規模として捉え、これを「中院」・「塔院」・「北院」・「西院」という仮称区分でゾーニングし、さらに「西院」は斜面上下の二箇所に細分して、丘上にある北側は「金佛堂」、南側の低い地は「鐘撞堂」と地元住人が呼称していることを紹介します。先の東京府の調査で西院は僧寺の付属院としていましたが、太田は「西院」のうち「金佛堂」を尼寺の重要な候補地であろうと推察しました（図14）。

そのうえで、僧寺伽藍の特徴としては甚だ大規模で、かつ完備した唐式伽藍配置を保ち、主要伽藍は南北一直線上に整然と配置されて、「南大門」を潜ると右手に「東塔」を仰ぎ、正面には「中門」がみえ、門の左右からは「回廊」が起って「金堂」

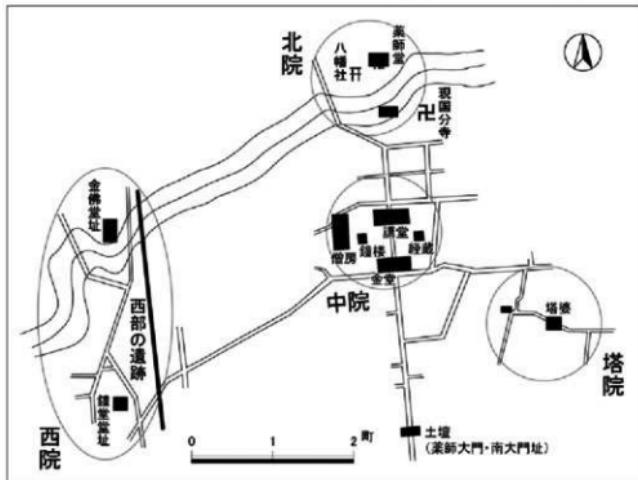


図14 太田静六による遺跡の捉え方（太田 1938 をもとにトレース）

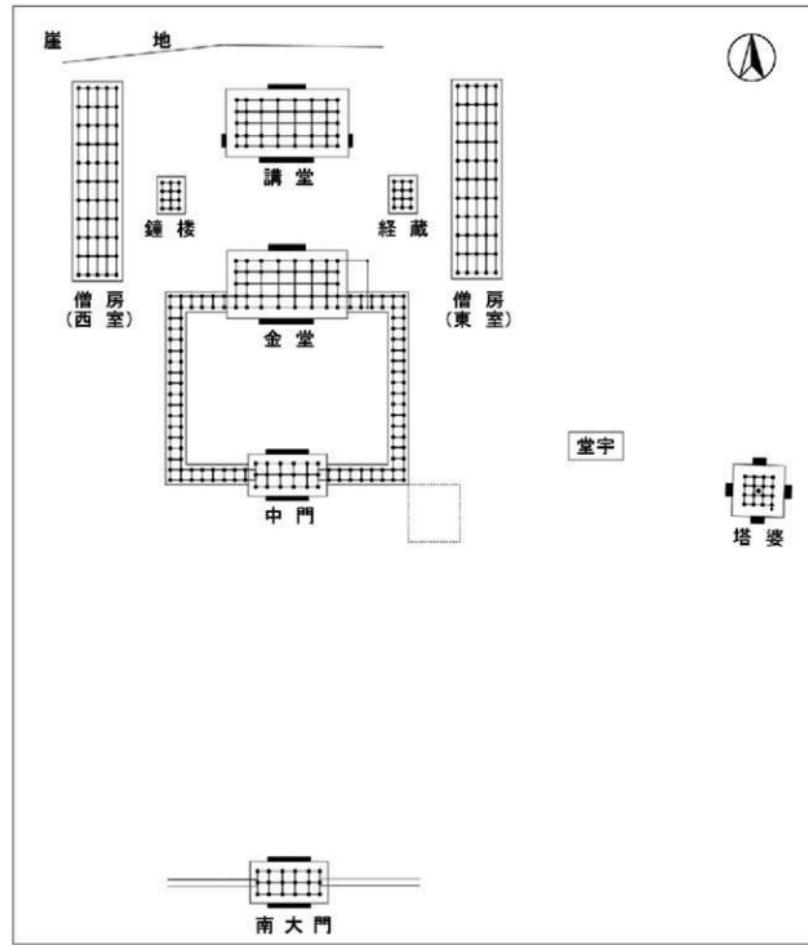


図15 太田静六による伽藍復元図（太田1935をもとにトレース）

に連なる。「金堂」の背後には「講堂」が聳え、その間左に「鐘楼」、右に「経蔵」を配し、さらにその外側には「東西両室（僧房）」がある伽藍配置案を復元しました（図15）。

太田によると、全国の国分寺の伽藍配置は一定の規則ではなく、四天王寺式・東大寺式の実例もないけれども、法隆寺式・薬師寺式・興福寺式に倣う例はあるといい、そのなかで廻廊内には建物を建てず、東塔を一基、廻廊の外へ建立した形式である興福寺

式が最も多く、武藏国分寺はその最も壮大にして完備した代表例であるとして評価をしました。

## （2）佛教史学者の石村喜英による伽藍復元

昭和35年に、佛教史学者として知られる石村喜英は、それまでに公表してきた数々の論考を編みなおして、大著『武藏国分寺の研究』（明善堂書店）を上梓しました。そこでは、東京府の調査報告書発刊以降に「検出資料も極めて豊富となり、

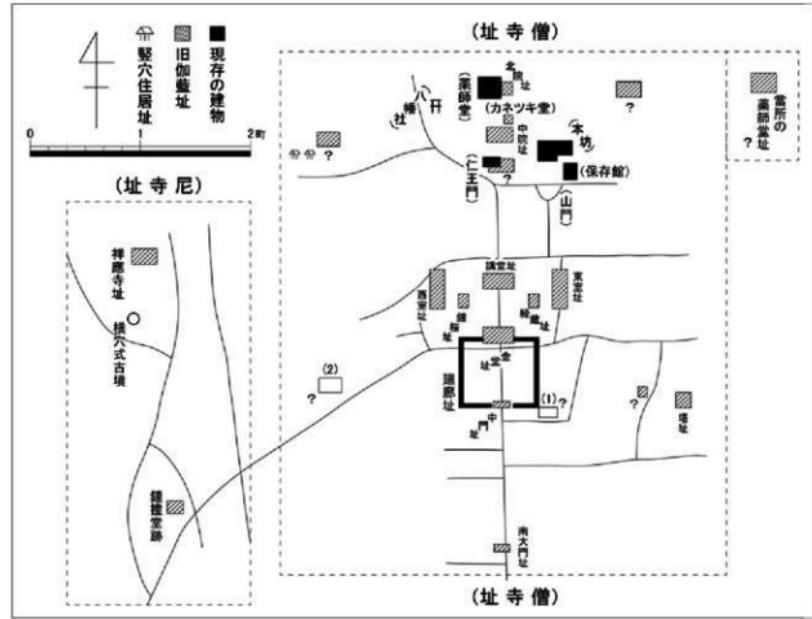


図 16 石村喜英作図の僧尼両寺伽藍推定図（石村 1960 をもとにトレース）

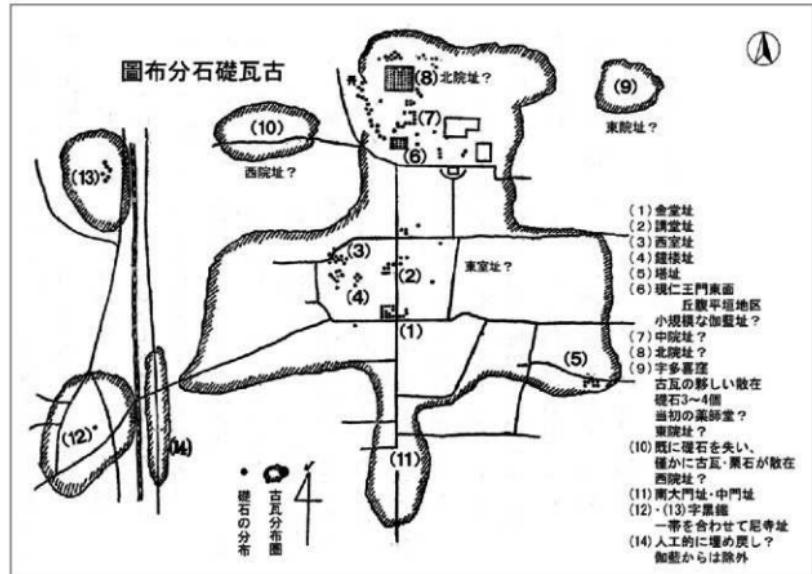


図 17 石村喜英による礎石・古瓦の分布図（石村 1960 をもとに加筆）

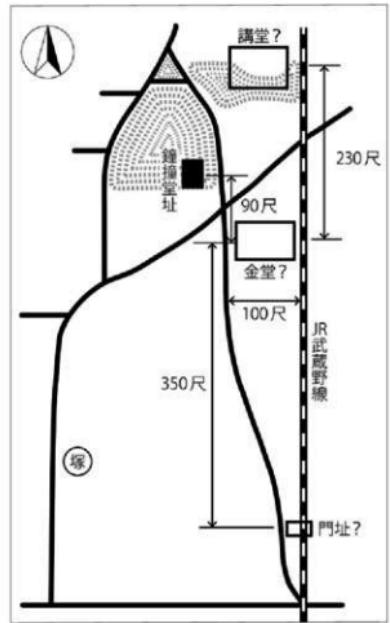


図18 石村喜英作図 尼寺伽藍推定図  
(石村1960をもとにトレース)

従来の諸研究では、武藏国分寺研究は必ずしも充分なものとはいえないものの認められるに至った(同書)として、①創建、②変遷史、③遺跡の研究、④古瓦の研究、⑤遺物の研究、⑥武藏国分寺研究史考、の全6章の項目立てからなる総合的な研究を行いました。同書「第三章 遺跡の研究」によると、武藏国分寺の伽藍を次のように捉えています。

僧寺尼寺を通じて伽藍址のなかで現在でも存在が明確となっているという建物は、図16に示したように僧寺が16字、尼寺が2字の合計18字を数え、この他にも現在では隕滅している建物が2つ想定されています。このうち、回廊の南東外に描かれている「(1)?」は地表下ほぼ一尺、僧寺回廊址の西方に単独で離れて建つ「(2)?」も同じく地表下に赤土を突き固めた土壇址があつて、「(1)?」は東西方向に長い長方形を呈する建物としています。2つの建物は、性格や規模、名称

を与えることは出来ないけれど、どちらも雑舎<sup>ざっしゃ</sup>で、この他にも同様の建物がさらに発見される可能性はあり、全体として極めて壮大な規模をもつ国分寺であったと復元しています(同書96頁)。なお、この2箇所の土壇址は、現在もまだ考古学的な確証が得られてはおりません。また、図16の前提として、礎石・古瓦の分布状況を石村自身が再調査しており、その結果が図17に示されていますが、先の稻村担当による分布図(図13)に比べ、瓦の分布がより広い範囲で捉えられています。さらに、尼寺については図18のとおり伽藍を示していますが、詳細は後ほどご紹介いたします。

### (3) 発掘調査に基づく伽藍・寺域の確定

#### ①市内における初期の発掘調査

これまで、礎石や瓦の分布調査やその調査に基づく建築学的な考察、さらには現地形の地表面観察を主眼に行われた調査・研究が中心でしたが、ここからは遺跡の考古学的な発掘調査に話題を変えたいと思います。

まず、国分寺市内で行われた初期の発掘調査について少し触れておきます。昭和61年に発行されました『国分寺市史 上巻』によりますと、市内初の発掘調査は、おそらく昭和12年(1937)に東京帝室博物館の後藤守一が恋ヶ窪遺跡で発見した縄文時代の敷石住居跡だろうと思われます。後藤は先ほどお話をましたが、大正12年に東京都が刊行した『史蹟勝地調査報告書』で出土遺物、特に瓦塼をまとめた人物です。恋ヶ窪遺跡の調査で、市内に縄文時代の集落跡があることが判明しました。そして、戦後の昭和22年(1947)1月には都立国際高校考古学研究会や塩野半十郎らも恋ヶ窪遺跡を、翌23年4月に学習院大学の市川健二郎が羽根沢遺跡(現日立中央研究所内)で縄文時代の住居跡を発見していくことに繋がっていきます。さらにその翌年にも、国分寺住職の星野亮勝が多喜窪遺跡で縄文時代の竪穴住居を調査しますが、この住居から出土した勝坂式土器や石器類は昭和50年に国重要文化財の指定を受け、現



写真1 多喜座遺跡で発見された古代の竪穴住居跡（昭和24年頃）



写真2 甲野勇



写真3 多喜座遺跡の発掘調査風景（昭和24年頃）

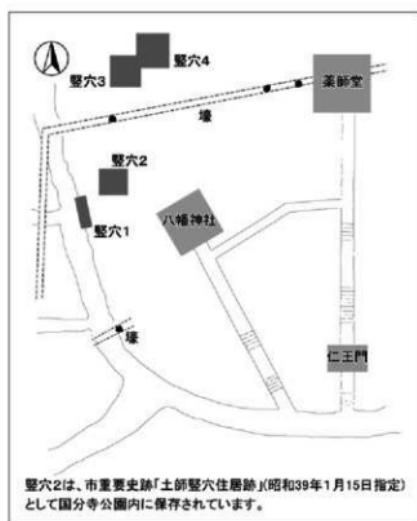


図19 昭和31年の甲野勇調査地点（国分寺薬師堂西）



写真4 薬師堂西側の発掘調査風景（昭和31年頃）  
(写真1～4 画像提供：くにたち市郷土文化館)



写真5 国分寺市重要史跡土師豊穴住居跡  
2022年筆者撮影



写真6 日本考古学協会による金堂・講堂の発掘調査



写真7 錫入れ式



写真8 金堂雨落石敷調査風景

在は東京国立博物館で公開されています。

多喜窪遺跡は薬師堂西方の国分寺崖線線上に立地する遺跡ですが、星野亮勝が調査した同年に、都立国立高校の松井新一と国立音楽大学の甲野勇らも近くで奈良・平安時代の堅穴住居を発掘調査で発見しました。国分寺の北西側の台地上に、当時の庶民たちが暮らした集落跡が存在することを明らかにしたわけです（写真1～3）。さらに昭和31年（1956）にも、再び甲野は薬師堂西脇で堅穴住居4軒と大きな堀跡を調査しますが、これにより薬師堂の下部には古代の堀が走っていることも判明しました。なお、検出した住居の1軒（堅穴2）は昭和39年1月15日に市の重要史跡として文化財指定されました（図19、写真4・5）。奈良・平安時代の堅穴住居は、今までに武藏国分寺関連遺跡から約700棟以上見つかっています。

## ②国指定史跡地内での発掘調査

その調査と並行して昭和31・33年には石田茂作を代表者とする日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が、国指定史跡地内で僧寺金堂・講堂、中門東側の堀や溝といった区画施設、南門等を対象に発掘調査を行い、寺院構造が良好に残っていることを確認しました（図20・写真6～8）。その後、昭和39～44年にも早稲田大学の滝口宏を团长とする調査組織が僧寺金堂・講堂の再調査、中門および中門西側の区画施設、鐘楼、七重塔、北方建物、伽藍地区画溝、南大門推定地の南方、尼寺（金堂・尼坊）、伝祥応寺跡、塚を対象として精力的に学術調査を展開し、史跡を構成する主要な伽藍建物の詳細を次々と解明していきました（同図・写真9～15）。こうした調査成果を継承して市では、昭和49年に武藏国分寺跡遺跡調査会（現在の国分寺市遺跡調査会）を組織し、市立第四中学校建設に伴う発掘調査（武藏国分寺跡第1次調査）以降、開発に伴う事前の発掘調査・学術調査・史跡整備のための確認調査を現在も継続して実施中です。昭和60年頃までの調査成果は『国分寺市史 上巻』でまとめられていますので、ご興味がある方はご覧ください（福田1985）。因みに、令和4年8月現在で市内の発掘調査地点は約780箇所以上を数え、武藏国分寺に関連する遺跡も南に接する府中市域にも広がりますが、府中市栄町三丁目の都営住宅建設に伴う発掘調査では国分寺の参道口（道路・門柱状遺構等）が見つかり、平成17年には国史跡として指定されています。

## ③滝口宏の学術調査と伽藍・寺域の確定

さて、昭和39年度以降、武藏国分寺の発掘調査を主導してきた滝口宏によって、伽藍・寺域の様相が整理されていきました。

一つは、西院址中心伽藍の解明です。かつて「鐘撞堂」と呼ばれた一帯では、国指定史跡地であつたにも関わらず、突如、宅地開発により掘削・切土工事が行われてしましました。そこで、滝口らが緊急調査を行い、東西80尺×南北60尺の掘り

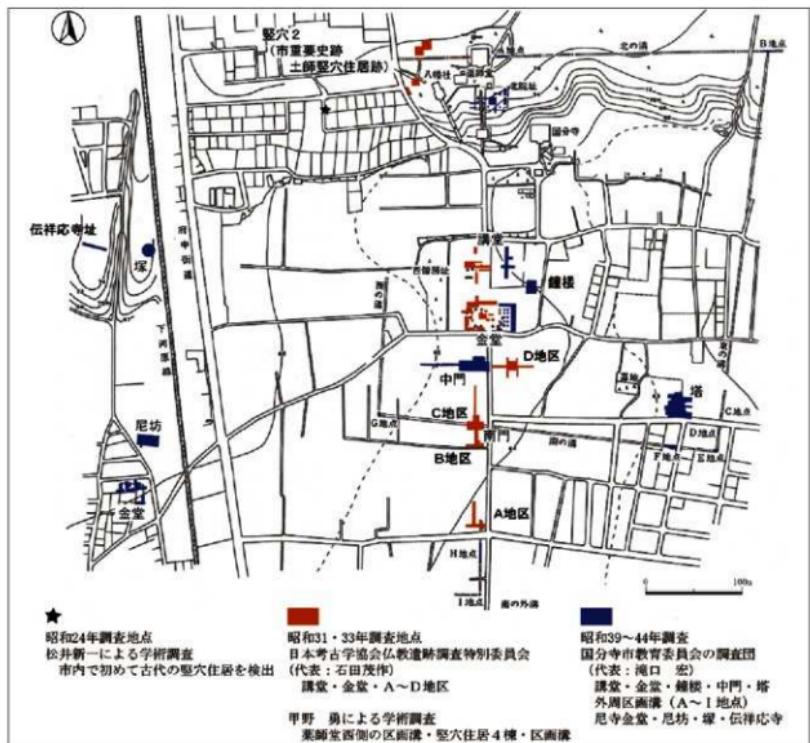


図20 武藏国分寺跡周辺で戦後～昭和40年代前半頃までに行われた発掘調査地点

込み地業を伴う基壇版築を確認し、そして基壇上に間口 60 尺 × 奥行 40 尺（桁行 5 間 × 梁間 4 間）の建物を想定しました。この建物は甲斐国分尼寺の金堂（間口 68 尺 × 奥行 46.8 尺）や、薩摩国分尼寺の金堂（間口 36 尺 × 奥行 28 尺）との比較検討により、武藏国分尼寺の金堂に比定されました。

これまで武藏国分尼寺の所在地をめぐっては、〔A〕黒鐵説（現西元町四丁目）、〔B〕京所説（現大國魂神社の東側に所在する京所廃寺・多磨寺）、〔C〕善明寺説（黒鐵出土の由緒をもつ鉄像阿弥陀如来像を安置）、〔D〕養則寺（影向寺）説（橘樹郡家に隣接する古代寺院）などがあり（写真16～19）、このうち有力視されてきた黒鐵説でも、大正12年の東京府の調査では僧寺との距離が近すぎることから付属院（西院）として把握され、

石村喜英も鐘撞堂一带に金堂と講堂を想定しましたが(図18)、確証を得るまでは至りませんでした。滝口の発掘調査によって、以後、尼寺金堂であるとする見解が定着することになりました。

二点目は塔址の調査で、一辺 60 尺四方の基壇規模と、塔心礎は基壇上に正位置で乗っていて、後世に動いていないことを確認しました。また、塔は一度焼失した後、再建されていることも判明しましたが、これは『続日本後紀』の承和 12 年 3 月 23 日条にみられる、前男衾郡壬生吉志福正が 10 年前に神火で消失した七重塔再建を願い出て許可された、という正史の記事を考古学的にも裏付けることになりました。

三点目は鐘楼址の調査です。講堂の東側に現存する礎石を中心とした範囲で発掘調査を実施した



写真9 七重塔標柱



写真10 七重塔基壇外周の調査風景



写真11 七重塔心礎



写真12 昭和40年頃の僧寺金堂と遺跡案内板



写真13 伽藍地南東区画溝調査風景



写真14 尼寺尼坊の調査風景



写真15 昭和39年頃の尼寺金堂付近

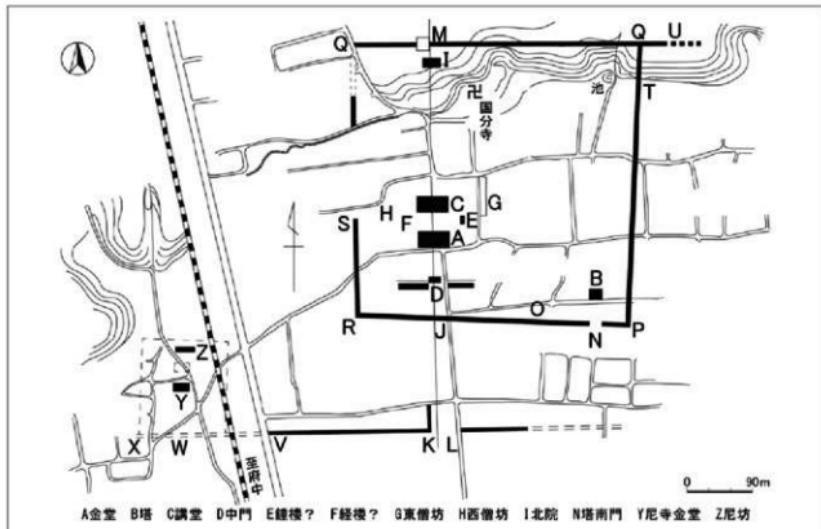


図21 滝口宏が想定した武藏国分僧・尼寺の伽藍と規模（滝口 1968 をもとにトレース）

ところ、南北3間×東西2間の礎石建て建物が判明し、明確な根拠こそ示してはいませんが、これを「鐘楼址」だとして推定しました。太田静六は講堂・金堂の東には経蔵、西に鐘楼を想定しましたが（図15）、滻口はその逆の案を示しています。

そして、四点目は寺域の規模の確定です。僧寺金堂の中心から南へ約279mの位置で、東西に走る溝を発見しました。この溝は尼寺金堂の中心から約85m東の付近にまで延び、総延長距離は900m近くにもおよびますが、滻口はこれを武藏国分寺の南限としました。溝のちょうど中間地点は金堂・講堂・中門の伽藍中軸線にあたります。その一方、金堂の中心から北へ約270mの位置にも東西方向に走る溝があり、こちらを武藏国分寺の北限と想定しました。そして、この東西900m×南北550mにおよぶ一帯を武藏国分二寺の範囲すなわち寺域であると結論付けました（図21）。

以上お話しでまいりました経緯があって、冒頭図1でお示した武藏国分寺の伽藍配置が認識さ

れて、今日的な理解へと繋がっているわけです。なお、本日のお話には含めていませんが、僧尼寺の中間を南北に縱貫している東山道武藏路については、前回の講座内容をご参照ください。ご清聴ありがとうございました。

#### 【おもな参考文献】

- 石村亮司 1925「武藏國分尼寺の位置について」『史述と美術』第20輯第7号  
石村亮英 1960『武藏國分寺の研究』明善文書店  
稻村塙元・後藤守一 1923『東京府史蹟勝跡調査報告書 第一冊「武藏國分寺址の調査」』東京府  
太田静六 1935「武藏國分寺の伽藍配置に就て（1・2）『建築世界』第19巻第11号  
太田静六 1938『武藏國分寺復元考（上・中・下）』『考古学雑誌』第28巻第5・7・10号 考古學會  
重田定一 1903「武藏國分僧寺の廐址（圓入）」『古蹟』第二卷 第二號 帝國古蹟調査会発行  
滻口 宏 1964『昭和39年度武藏國分寺調査概報』  
東京都国分寺町  
滻口 宏 1966『武藏國分寺圖譜』国分寺市教育委員会  
滻口 宏 1968『武藏國分寺址調査私見』日本歴史考古学会編『日本歴史学論叢 第二』雄山閣  
滻口 宏 1991『第九「武藏」角田文衛編『新修国分寺の研究 第二巻 地内と東海道』吉川宏文館  
沼田頼輔 1918『武藏國分寺遺跡考』『武藏野』第一巻第一号  
福田信夫 1985『49年以降の発掘調査の成果』『国分寺市史 上巻』国分寺市史編さん委員会

【かつての尼寺候補地】



写真16 影向寺（川崎市宮前区）  
2023年筆者撮影



写真17 影向寺の塔心礎（影向石）  
2023年筆者撮影



写真18 善明寺（府中市本町）  
2023年筆者撮影



写真19 京所庚寺・多磨寺付近（府中市宮町）  
2023年筆者撮影

## ⑤ 武藏国分寺跡の史蹟指定とその背景

東京公文書館課長代理（史料編さん担当）・認証アーキビスト 西木浩一

ご紹介頂きました東京都公文書館の西木と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私どもの館は、実は令和2年4月にお隣の西国分寺駅、都立多摩図書館の並びにオープンをいたしました。今度は市役所が、新しく2年後ぐらいですかね、移ってくるその隣ということになるのですけれども。移転オープンと同時にちょうどコロナの影響で、事実上閉館みたいな形で、スタートダッシュは残念だったのですが、ようやく展示ですか講座というのもできるようになってまいりました。またこれからいろいろご利用頂く機会も増えるかと思っております。東京公文書館、西国分寺に移ってきて、館に来たことがあるという方、ちょっと手を挙げていただい……。さすがに今日の皆さん。ありがとうございます。半分近くの方がご利用頂いているようですけれども、残り半分の方のゲットを目指して、最初に東京都公文書館の紹介ムービーがございます。7分ぐらいなのですが、最初にそれを御覧いただきたいと思います。

（動画上映）

ありがとうございました。私は公文書館のなかで史料編さん担当というセクションに属しています。基本的には江戸時代の資料集『東京市史稿』という江戸の資料集を作るのが主な仕事で、ちょうど今年で30年目を迎えます。そういうわけで、専門は江戸時代で、しかも対象は江戸で、今日お話しするのが専門外と言えば専門外なのですけれども、今のビデオの中にもありましたように、東京都公文書館には東京府と東京市、明治元年（1868）から昭和18年（1943）に至る東京府の公文書と、それから明治22年（1889）に東京市と

いうのが、東京府全体の中の市街地部分に成立します。この『東京府・東京市行政文書』というのが全部で33,807冊、これは関東大震災と、それから戦災もくぐり抜けて、戦時中には文書疎開というのを行って守り抜かれた史料群がございまして、今日はそれらを少しご紹介しながら武藏国分寺跡の史蹟指定の背景についてお話をしたいと考えております。

最初に江戸時代、それから史蹟指定を受ける大正期まで、武藏国分寺跡がどんな状況であったのかということを江戸期の地誌ですとか、それから大正期、ちょうどこの史蹟指定の時期に東京府が編さんいたしました報告書等がございます。そこに掲載されている史料から様子をうかがってみた

### 1 江戸期～指定時に至る国分寺跡の状況

#### ■江戸期の地誌・名所記に描かれた国分寺跡

- (1) 植田孟緒『武藏名勝圖会』巻三・四  
「國分寺 上占三佛堂并國分寺伽藍廢社之圖」
- (2) 『新編武藏風土記稿』巻九十二  
「國分寺境内圖」
- (3) 『江戸名所圖会』第九冊  
「國分寺伽藍旧蹟」

#### ■史蹟指定前後の写真

東京府編『東京府史調査地図調査報告書 第一卷』  
(大正12年)

図1 江戸期～指定時に至る国分寺跡の状況

いと思います（図1）。

最初に見るのが『武藏名勝圖会』です。植田孟緒という人は、八王子の千人同心の頭をしていた幕臣であります。八王子の千人同心の人たちの中には、なかなか文化人が多くて、19世紀に入つて幕府が地誌の編さん事業を行っていくときに、いわば調査員のような形でこれに携わる人が数名いらっしゃったわけなのですが、その中でも最も精力的に活動したのが植田孟緒という人物になり

ます。もともとは四国の伊予国の吉田藩という藩の藩医の子どもとして、江戸の藩邸で生まれております。江戸藩邸ですね。その後、養子として八王子千人同心の組頭、植田という家の養子に入っている人物です。この後にご紹介します『新編武蔵風土記稿』といいます幕府の官選の地誌の編集作業に当たりまして、そこで得られた様々な情報、主に多摩郡についてまとめたのが『武藏名勝図会』という史料になります（図2）。これは刊行されたものではないのですが、多摩地域にはたくさん写本が残されておりまして、東京都公文書館にもその中の1冊があります。

礎石群が見える崖線の下の、割と平らな部分、それから崖線を上がっていく傾斜地の中に国分寺、現在のお寺さんが見えたりしている様子がうかがえます。つまり、耕作地の中に礎石の跡ですか、それからちょっと字が小さいのですが、古い瓦というのが何か所か書かれているところがありまして、一部の古い瓦とか礎石が露呈している、耕地の中に史蹟が頭を見せているという状況が江戸時代に観察されていたことが分かります。

同じことは『新編武蔵風土記稿』に記されている図からもうかがえます（図3）。こちらは幕府の官選の地誌でありまして、文化7年（1810）に編集作業、調査作業が始まりまして、約20年かけて、文政11年（1828）にひとまず完成している。ですから、文化年間から編集作業自体は始まっていたということになります。幕府に上程された幕府公式の地誌になるわけです。

ここでは上のほうに小さな文字が書かれていますが、礎石が、要するに7つずつ並んでいて、その間がそれぞれ四間、間が空いているという形で、礎石についての測量を行って、先ほどのよりもやや細かい観察記録がそこに付されております。それから、ここには「古瓦塚」と書かれておりまして、恐らく露呈していた瓦が1か所に集積されているような、そういう地点も観察されていることが分かります。これも全体としては国分寺村の耕地の中に、主に畠、麦等を作っているところです

が、その中にこういう礎石、瓦が露呈しているという状況が見て取れます。

その辺りをもう少しはっきり描いた絵がこちらになります（図4）。これは『江戸名所図会』という、江戸と、それから江戸から日帰りあるいは1泊で行けるぐらいの距離を描いた名所案内の中定版というような史料になります。天保5年（1834）、それから、ちょっと間が空いて、7年に後編ができて完結するものであります。この『江戸名所図会』というのは、長谷川雪旦という挿絵画家がおりまして、大変リアルに挿絵を書いてくれているということで、それぞれの地域の描かれた名所の詳細を知ることのできる、大変貴重な史料となっているわけであります。ここにかなり大きな礎石が1つごろんと転がっていたり、この辺りに瓦がちょっと描かれていたりしますけれども、その場所というのはまさに麦等なのでしょうかね、ここで耕作している人がいて、上のほうにもこの地域のお百姓さんが見えますけれども。これは鳥よけ、鳥害を防ぐためのガラガラと鳴るようなものですね。まさに耕作地の中に、畠の中に、こういう国分寺の遺物がごろんと置かれている。そこでちょっと旅姿の人が地元の人に様子を聞いているという風景が描かれております。

実は指定を受ける時期まで、この状況が基本的には変わらなかつたのだろうと思います。こちらが史蹟指定された翌年、大正12年（1923）に刊行されました『東京府史蹟勝地調査報告書』という東京府の刊行物に掲載された写真であります

（図5）。ちょうど先ほどの『江戸名所図会』そのままですよね。耕地の中にかなり巨大な礎石がある。江戸の中では、よく大名屋敷の発掘調査などありますけれども、やはり国分寺の礎石というのはかなり立派な、そういうものと比べても大きなものです。こうした状況が見て取れるわけです。いわゆる耕地ですから、恐らく何人の土地の所有者というか、地権者というか、そういう人がいて、その中にこういう史蹟があるということですから、保存という観点から見ると、ちょっと危な

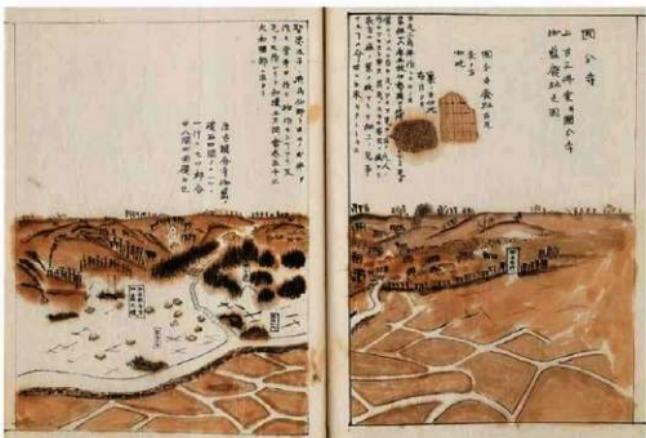


図2 『武藏名勝図会』(東京都公文書館所蔵)

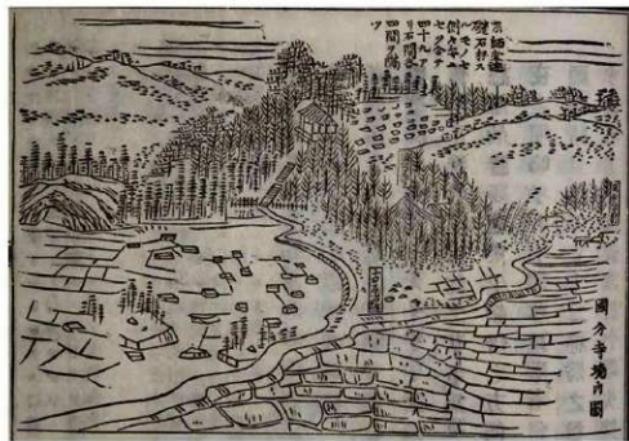


図3 『新編武藏風土記稿』卷九十二

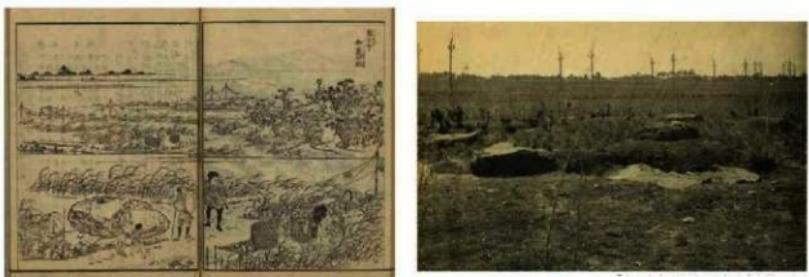


図4 『江戸名所図会』第九冊

図5 『東京府史蹟勝地調査報告書』第一冊

い状況がずっと続いているということがうかがえるのではないかと思います。

こうした史蹟というものが、今にこうして100周年ということで振り返って、様々な連続の学習会とかシンポジウムが催される、そういう形で残されてくるに至った経緯というものをここでたどっていきたいと思います。近代日本における文化財保護法制ということで、主に法律を中心に流れを押させていきたいと思いますが(図6)、言つてみれば美術品、工芸品についてどのように保存をしてきたのか、近代日本の中でどのように保存してきたのかということ、これをたどったもの

- 明治4年(1872)5月23日  
「古器旧物保存方」太政官布告
- 明治30年(1897)6月5日  
古社寺保存法
- 昭和4年(1929)3月28日  
国宝保存法
- 昭和8年(1933)4月1日  
重要美術品等/保存ニ関スル法律
- 大正8年(1919)4月10日  
史蹟名勝天然紀念物保存法

図6 近代日本における文化財保護法制

になります。

最初に、図7は東京都公文書館の『御布告留』という史料に収載されております、明治4年(1871)5月に出された「古器旧物保存方」という太政官布告、当時の法律ということになります。いわゆる明治維新からそれに続く激動の時代に、江戸時代以前の伝統的な文物というものがかなり軽視される、いわゆる文明開化という風潮の中で、古臭いもの、意味のないものとして殊さらに廃棄されたり、毀損されたりという状況が生まれておりました。それから法律には具体的に書かれていませんけれども、いわゆる神仏分離令というのを背景にして、廢仏毀釈というのが進んでいきます。特に寺院における仏像というものが壊されたり、古物商に売られたり、貴重な文化財が散逸するという大きな流れが起きておりました。

それに対して新政府自身がそれはいくら何でも駄目だろうと、文明開化という大きな流れは政府自身作ってきたわけでありますけれども、だからといって、貴重な、今までの伝統的なものを全て否定してはいけないということで出されたのが、

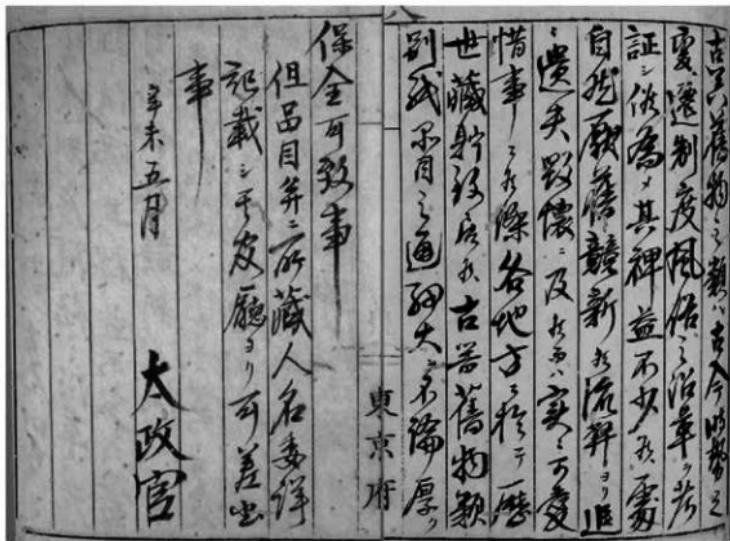


図7 古器旧物保存方『御布告留』1月～6月

こちらの法になります。図8が一応書き起こしたものになります。「古器旧物之類ハ、古今時勢之変遷制度風俗之沿革ヲ考証シ候為メ其裨益不少候處」ということで、歴史資料として古器旧物はとても重要な意味を持っていることをまず書いています。その後のところ、3行目の真ん中、「自然旧を厭い新しきを競い候ヨリ」、明治維新以降の何でも新しいものを好んで、古いものを廃棄していく、それを「流弊」と、誤った傾向と明確に批判しているわけですね。「流弊ヨリ追々達失毀壊に及び候ては」、これらの貴重なものを持ったり壊したりしては、「実々愛惜すべき事に候条」、大変もったいないことであると。「各地方に於いて歴世貯蔵致居候」、歴史的に大切に保存してきた、そうした古器や旧物類を、「別紙品目通り細大に論ぜず厚く保全致すべき事」ということで、ただし書きのところ、「品目井に所蔵人名委詳記載し、其官庁より差出すべき事」と書かれておりまして、とにかく古いものをちゃんと大事に保存するために、どういう品目がその地域、あるいはその家に持たれていて、所蔵人は誰であるのかというものを明確に詳しく調べて、調査書を提出せよということを命じております。

このときに品目として書き上げられているのは、後でご紹介します「古社寺保存法」という、今日の文化財保護法につながる法律の対象が、どちらかというと、美術、工芸品にかなり限定されていくわけでありますが、それよりは相当広い品目がここでは挙げられております。いわゆる書画とか骨董品、これは江戸時代以来、書画、骨董品をともに共有して楽しむという、そういう文化が広がっておりますが、そういうものも含まれております。それから石器とか勾玉とか、それからまさに国分寺などでもうですが、古い瓦という考古的な遺物もこの時の古器、旧物の品目に加わっております。そのほか楽器ですか衣服ですか調度品ですか、それからおもちゃ、玩具、かなり広い範囲のものをこのときは対象として、前提として書き上げを命じているということになりま

古器旧物之類ハ、古今時勢之変遷制度風俗之沿革ヲ考証シ候為メ其裨益不少候處、自然厭旧競新候流弊ヨリ追々達失毀壊ニ及候ては、實々愛惜すべき事に候条、各地方ニ於テ歴世貯蔵致居候古器旧物類別紙品目之通り細大ニ論ぜず厚く保全致すべき事にかけて、府県による調査・報告がなされ、但、品目井に所蔵人名委詳記載し、其官庁より差出すべき事と目録が作成される。

図8 古器旧物保存方 書き起こし

す。この布告が明治4年5月になされまして、翌5年にかけて、各府、県、東京府ですか神奈川県とか、県から調査報告が実際にそこで行われまして、目録が作成されていったということが分かっております。

ですから緊急避難的に大事なもの、家で持たれている、あるいは地域で持たれている古器、旧物を、明治初年の古いものを何でも意味がないとみなす少々荒っぽい危険な、貴重なものをなくしてしまう、そういう状況から救うという、緊急避難的な意味を持つ太政官布告が、明治4年に早々に出されております。1つの文化財保護の前史といいますか、今日の文化保護法につながる前史として、こういうものがありました。

この法律を受けて、明治13年(1880)ぐらいからは社寺に対する補助金が出されるようになっていきます。これは、いわゆる文化財を指定して、それに対して廃仏毀釈等を経てかなり傷ついている、特に寺院ですけれども、社寺そのものの経営を支えるといいますか、間接的に文化財的な所蔵物も守っていく、そういう制度も明治10年代に展開していきます。

それからもう1つ、法律として文化財保護が本格化する1つ手前の段階で、いわゆる博物館というものが構想されていく流れの中でも、また宝物の取り調べというものが全国的に行われてきました。

日本の博物館は、最初は実は博覧会に出展するものをまず展覧しようという発想から始まりまして、その後はどうちらかというと、官業、いわゆる

産業を振興する色彩の強いところから始まって、明治 22 年（1889）に宮内省に今の博物館、東京国立博物館の前身であります帝国博物館ができていく流れをとるわけありますが、帝国博物館の初代の総長になります九鬼隆一<sup>くきりゅういち</sup>という、この方は薩摩出身で、博物館あるいは美術製作のずっとトップ、最前線を走る人物です。この人とか美術史家の岡倉天心による美術品調査が、明治 15 年頃から開始されておりまして、明治 21 年 9 月にそうした動きを公式なものとして、宮内省に「臨時全国宝物取調局」というのが設置されます（図 9）。こうした中で、日本美術の発見といいますか、それと保存、さらにそれを紹介していくという博物館への展開の動きが背景にあります。

#### 臨時全国宝物取調局

- 九鬼隆一（くきりゅういち 後の初代博物館長）・岡倉天心（おかうちてんしん）らによる調査が明治 15 年頃から歓然的に実施される。
- 明治 21 年（1888）9 月、宮内省に臨時全国宝物取調局が設置される。
- 精力的に全国調査を実施し、古文書・絵画・彫刻・美術工芸・書簡のカテゴリーごとに分類・評価していく。
- 明治 21 年～30 年 総計 215,091 点を監査

図 9 臨時全国宝物取調局

その中で精力的に全国調査を実施し、古文書、絵画、彫刻、美術、工芸、それからいわゆる書、書籍、こうしたカテゴリーごとに分類し、評価していくことを行っております。明治 21 年から 30 年の間に 215,091 点を実際に監査して、優秀なものにはいわば品評というか、評価を与えるということを続けていたといいますから、大変精力的な動きをされていたということが分かります。これは「古社寺保存法」ができる前ですが、こういう形で地域の美術品、工芸品へのアプローチが行われていたことになります。

そして満を持す形で、明治 30 年（1897）に「古社寺保存法」という、これはまさに現在の文化財保護法につながる源流といいますか、原点と評価されている法律になります。図 10 に掲げている史料は、『御署名原本』と言われる国立公文書館が所蔵している公文書です。明治 19 年までの法律は、先ほどの最初に古器旧物保存法というのをご紹介したように、太政官から布告されるのが法律の形式だったのですが、内閣制度が確立するときに、法律というのは天皇の署名と、天皇が要するに法律を公布するということを裁可する、それを公文書の上でも形式で表示して、これも明治天

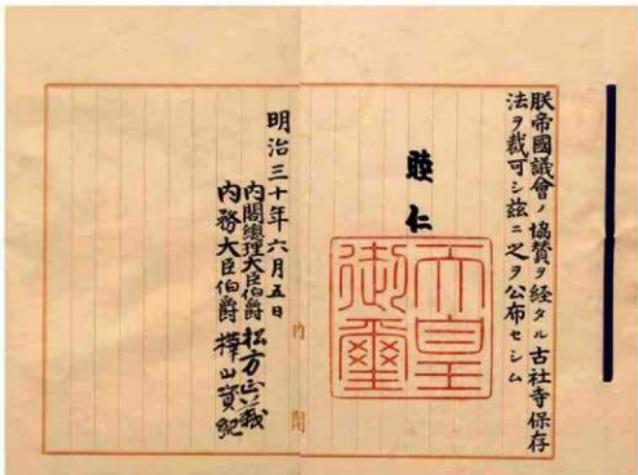


図 10 古社寺保存法 御署名原本 国立公文書館所蔵

皇のお名前が書かれて、その下に「御璽」<sup>ごじょく</sup>が押されていますね。「御名御璽」というのが押されて、さらにそこに内閣総理大臣、それから担当の大臣が決まっている場合には、その主務大臣が副署する、署名を添えるということですね。そういう形式で正式に公布するということになりました。ですので、もう明治30年といいますと、こういう御名御璽で法律の形式が定まって以後のものになります。「朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル古社寺保存法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム」と、こういう形式が取られていくわけです。

では、その具体的な内容はどういうものかといふと、図11に少し整理して並べましたが、まず第1条で、古い社寺の建造物、宝物類の維持費として古社寺は内務省に保存金の下付を出願することができるということが定められております。その出願を受けると、どのように判定するかということですが、国費補助は「歴史ノ証徴」<sup>しよこうひき</sup>、歴史資料として何かその時代を語るということですね、それから「由緒ノ特殊」、何か特別な由緒が宝物類あるいは建造物に付与されているかということと、それから作品そのものの「製作ノ優秀」と、こういうことについて古社寺保存会に諮詢する形をとりました。先ほどの岡倉天心ですか、それから伊東忠太<sup>いとうちゅうた</sup>という建築家など、美術、工芸、建造物の専門家集団が古社寺保存会というのを結成しております、ここに諮詢、諮問して、補助金を交付する価値がありますよ、ということを古社寺保存会で認めたものについて内務大臣が決定していくと、こういう形になっております。

こうした歴史の証徴、または美術の模範となる建造物や宝物については、これまで古社寺保存会に諮詢をして、内務大臣が国宝、美術品、いわゆる宝物類については国宝、それから建造物については特別保護建造物というものに指定し得ることがうたわれております。こうした指定を受けた貴重な物件については、処分・差押えを禁止する、当然縛りはかかるわけです。それから、これはやはり博物館政策との関連が強く意識されており

- 建造物・宝物類の維持費として古社寺は内務省に「保存金」の下付を出願できる。
- 国費補助は「歴史ノ証徴」「由緒ノ特殊」「製作ノ優秀」について古社寺保存会に諮詢して、内務大臣が決定する。
- 歴史の証徴又は美術の模範となる建造物や宝物は、古社寺保存会に諮詢して、内務大臣が「国宝」「特別保護建造物」に指定しうる。
- 当該物件について処分・差押えを禁止
- 博物館への出陳を義務化

## 図11 古社寺保存法

りまして、こういう指定をされ、保存金を下付された貴重なものについては博物館へ出陳する、博物館での展示ということも半ば義務化すると、こういう内容を持った法律です。

ところが、この法律は決定的に弱いところがありまして、というのは貴重な建造物、それから美術工芸品は何もお寺さんとか神社だけが持っているわけではないんですね。それ以外のものをどういうようにカバーしていくか、という大きな問題が生じてまいります。例えば、江戸時代の城、これは大名家であったり、あるいは府県が管轄していたりするのですが、かなり大規模な修築、お金を要するものであっても、古社寺保存法ではカバーできないわけであります。そうしたものをどうするかということを導入されたのが、「国宝保存法」というものになります（図12）。

「国宝保存法」の特徴としては、1つは先ほどちょっとご紹介しましたように、從来、特別保護建造物と、建物については特別保護建造物、それから国宝というように、美術工芸品については国宝と、「古社寺保存法」の下では、このように2つのカテゴリーに分かれていたものを、「国宝保存法」では国宝という大きなカテゴリーで包括しています。こうした全体性といいますか、一括性、包括性というものが新しい法律の1つのポイントになります（図13）。

国宝の指定基準ですか手続は、実は從来どおりであります、古社寺保存会から国宝保存会という専門家集団の名称に変わります。けれども、そこに諮詢をして指定していくという流れについ

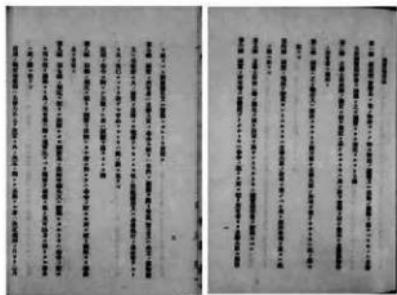


図 12 国宝保存法

- 従来、特別保護建造物と国宝に分かれていたのをすべて国宝とした。
- 国宝の指定基準や手続きは従来どおり
- 「指定」という文言を初めて用いる。
- 国や地方公共団体、個人所蔵の物件が指定の対象となる。
  - ⇒姫路城、名古屋城、徳川家靈廟等を指定
  - ⇒空前の指定ラッシュ

図 13 国宝保存法

- 史蹟とは
  - ・歴史に残った事跡。歴史上の出来事にゆかりのある場所、建築物、建物のあった跡
  - ・遺跡のうち、規模、遺構の状況、出土遺物等において歴史上・学術上の価値が高く、日本の歴史の正しい理解のために欠くことできないもの
- 名勝とは
  - ・景色のすぐれた地。風光明媚で知られる場所。勝地。名所、園庭、桃源、峠谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が國にとって藝術上又は觀賞上価値の高いもの。
- 天然記念物とは
  - ・學術上価値の高い動植物・地質試物、およびそれらの存在する地域で、その保護保存を指定されたもの。

図 14 「史蹟名勝天然記念物保存法」の制定

では、大きくは変わっておりません。

それから、「国宝保存法」では第1条を読んでみますと、「建造物、宝物其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ証徴又ハ美術ノ模範ト為ルベキモノハ主務大臣国宝保存会ニ諮問シ之ヲ国宝トシテ指定スルコトヲ得」とありますて、指定という言葉、これは今の文化財保護法につながるところであります、まず大前提として指定しますということが第1条に譲われるようになってきました。古社寺保存法のときは、古社寺は保存のために下付金を請求することができるというのが第1条でスター

トしておりますて、ちょっとそのところがもともた、すっきりしていない部分があったわけですが、明確にまず指定する。指定したものについて修復、保全のための補助金を下ろすという、すっきりした形に変わってきたと言えます。「指定」という文言を、初めてまず第1条で用いたということですね。

国や地方公共団体、個人所蔵の物件が新たに指定の対象となった。つまり社寺以外の所蔵者の物件が対象となりましたので、例えば姫路城はここ7、8年前にまた大規模な修築を完成させましたけれども、このときに実は姫路城はかなり傷んでいたんですね。それが守られた。それから名古屋城ですか、徳川家靈廟というのが芝の増上寺にありました。ちょうどイメージとしては、日光東照宮があの増上寺にあったと考えていただければいいと思います。ああいう靈廟群がかなりきらびやかな、最高級の彫刻を施したものがありまして、特に2代将軍秀忠の靈廟というのは日光東照宮と並んで、昭和7年（1932）ですか、国宝に指定されていたのですね、戦前において。ところが、昭和20年（1945）5月の大空襲で、東京は3月に下町が空襲を受け、今も3月10日にいろいろな行事が行われます。それから山の手中心に5月10日に大空襲を受けるのですが、このときに壊滅的に増上寺の靈廟というのは焼けてしまうのですね。その後プリンスホテルが建ったり、戦後の早い時期にはゴルフ場ができたり、ボーリング場ができたりというのが、あれは秀忠廟のあったところなのですね。ですので、今ではかつて東照宮に匹敵するような建物が、あの芝にあったということがほとんど記憶にとどめられていないのですけれども、そういう大変な建造物が実は建っていたということでありまして、それらが国宝に指定されて保存の策が講じられたというのが、「国宝保存法」以降の重要な動きであります。

今までお話をしまいましたけれども、言つてみれば建造物そのもの、それからそこで持たれている美術品、工芸品が対象の保存に関わる流れ

を今ご説明しましたが、この法律では国分寺跡の史蹟というのは、ちょっとカバーされないわけですね。もともとあった古代の寺社、それ自体は廃絶してしまっているわけでありますし、先ほど見ましたように畑の中に顔を見せてる礎石ですか、それから瓦というもの、何か大事なものだという認識は恐らく持たれてきたのでしょうかけれども、こうした「古社寺保存法」、それから「国宝保存法」という流れの中では位置づけることができないものがありました。

そこで、もう1つのムーブメントとして「史蹟名勝天然記念物保存法」というものができています(図14)。この制定に至る流れというものは、国分寺の史蹟を考える場合には重要な要素になります。史蹟、名勝、天然記念物。史蹟とは歴史に残った事跡、歴史上の出来事にゆかりのある場所、建築物、建物のあった跡で、これは一般的な定義ということになるかと思います。それから、もう少し法律的に何をカバーするかという観点で見ると、遺跡のうち、規模、遺構の状況、出土遺物等において、歴史上・学術上の価値が高く、日本の歴史の正しい理解のために欠くことのできないものというのが史蹟、狭義の史蹟となります。

史蹟の「蹟」という字は、今もっと簡単な「跡」という字を使いますけれども、今日のお話の中では、法律の名称がこちらの、今、責任の「責」と書くほうになっていますので、基本この字を使ってまいりたいと思います。

それから名勝というのは景色の優れた地、風光明媚で知られる場所、勝地、名所、これは一般的な定義になります。なかでも庭園であったり、橋梁であったり、峡谷、海浜、山岳、その他の名勝地で我が国にとって芸術上または観賞上価値の高いもの。これを名勝と呼ぶということになります。

それから天然記念物というのは、学術上価値の高い動植物・地質鉱物及びそれらの存在する地域で、その保護保存を指定されたもの、これを天然記念物と呼ぶと言われております。

この中で国分寺跡は史蹟に該当する、史跡に現在の文化財保護法で指定されているわけあります。図15をご覧ください。どのようなものが、現在の文化財保護法の下で史跡として指定されているのかというのがカテゴリー化されております。

まずは貝塚ですか、遺物包含地と言われるようなものですね。これは千葉県の加曾利貝塚ですか、それから登呂遺跡、高松塚古墳。こういった

【史料】④—指定類型の実例	
【題目】	【史跡指定の実例】
1 貝塚、遺物包含地、住居跡、古墳、神籬石(こうりいせき)、その他の類の遺跡	加曾利貝塚(千葉)、登呂遺跡(静岡)、高松塚古墳(奈良)、高須城石碑(福岡)
2 郡城跡、宮跡、大学府跡、国都跡、城跡、防皇、古祀場、その他政治に関する遺跡	平城宮跡(奈良)、大宰府跡(福岡)、近江国御路(滋賀)、姫路城跡(兵庫)、元寇防壘(福岡)、圓ヶ原古戦場(岐阜)
3 寺社の跡または旧境内、經塲、摩羅併、その他の祭祀信仰に関する遺跡	武藏國分寺跡(東京)、東大寺旧境内(奈良)、御熊山(あさみやま)寺跡群(三重)、白井磨羅併(大分)
4 墓廟、墓室、塔、私塾、文庫、その他教育学習に関する遺跡	高島聖堂(東京)、旧文武学校(長野)、松下村塾(山口)、旧豊岡(しげたに)学校(岡山)
5 墓園跡、墓參道跡、その他の社会事業に関する遺跡	旧島原藩墓園跡(長崎)、北山十八間戸(奈良)
6 開港、一里塚、車本街道、桑栗利脚、道路、宿駅、市場跡、その他産業交通土木に関する遺跡	白河開港跡(福島)、日光杉並木樹道(群馬)、九谷磁器窯跡(石川)、萩反射炉(山口)、石見銀山遺跡(島根)、草津宿本陣(滋賀)、高麗川一之船入(京都)、若宮大路(神奈川)
7 墓塚ならびに伴	行基廟(奈良)、成野長矩廟および赤穂義士廟(東京)、多胡碑(群馬)
8 田宅、園池、井泉、樹石むよび特に山麓のある地域の類	本郷寅長住宅・同七跡(三重)、小石川後楽園(東京)、嵐山(京都)、老蘇(おいそ)森(滋賀)、大日堂・ナフミカシ廟(山口)
9 外国および外国人に関する遺跡	玉泉寺(静岡)、小泉八雲旧宅(島根)、出島和蘭商館跡(長崎)、吉利支丹墓碑(長崎)

注—指定理由が複数ある史跡(たとえば元寇防壘—2,9による)、また同時に名勝の指定を受けるもの(たとえば風山—史跡・名勝)もある。

図15 史蹟の実例 (現行文化財保護法)

## 史蹟保存に向けた諸潮流

### ■史蹟保存行政の源流

明治 5 年（1872）4 月 大蔵省布達

「荒蕪除地」払い下げに関する連し「於各地方古来ヨリ声誉ノ名所古蹟等ハ素ヨリ国人ノ賞観愛護スペキ者ニ付、右等ノ場所ハ明リニ破壊伐木セザル様篤ト注意可致事」を布達

### ■内務省地理局の事務章程に規程

各地方からの出願に対し調査・保存・顕彰を承認

### ■日露戦後～1910年代の画期性

#### (1) 史学会・考古学会の活動

・明治 4 年

考古学会が「史蹟保存の謹」を内務省に提出

・明治 45 年

史学会『史学雑誌』に史蹟保存に関する意見書を同載

#### (2) 植物学者三好学

→天然記念物という概念を導入・紹介

帝国議会への建議案提出運動を展開

#### (3) 「史蹟及天然記念物保存ニ關スル建議案」

明治 44 年 3 月貴族院・衆議院に提出・可決

図 16 史蹟保存に向けた諸潮流

ものが史跡として残されています。2番目は都城跡、宮の跡ですね。それから大宰府の跡、平城宮の跡ですか、福岡の大宰府、それから国衙というのがなかなか残っているところは少ないわけでありますけれども、こうしたところが2番目のカテゴリリーですね。3番目、社寺の跡または旧境内その他ですが、ここに武藏國分寺跡が表の筆頭に書かれております。図 15 の出典は『国史大辞典』という歴史関係の分厚い本格的な辞典が20冊ぐらいありますが、そちらの史蹟保存のところに書かれています。武藏國分寺跡がまさに「社寺の跡」として指定されている代表的な史跡で扱われているということがよく分かるかと思います。

いわゆる美術工芸品や建造物に対して、少し遅れてから 20 世紀近くになってから、史蹟保存についての、これを残さないといけないという潮流が生まれてくるわけですが、その前史がなかったわけではありません。史蹟保存行政の源流と指摘されているのが、明治 5 年（1872）4 月の大蔵省の布達であります（図 16）。

これは「荒蕪除地」、いわゆる耕地としてもほとんど使われていない荒れた地、これを払い下げ

るときに、これに関連して「於各地方古來ヨリ声誉ノ名所」、名のある名所、「古蹟等ハ素ヨリ国人ノ賞還愛護スペキ者ニ付、右等ノ場所ハ」、これ口偏に刀と書いて、「みだりに」と読みます、あまり使わない字ですけれども。「場所ハ明リニ破壊伐木セザル様篤ト注意可致事」という布達がなされております。ですから、史蹟をトータルに保存しようという、そういう意図を持った法律ではないのですが、荒蕪地という、荒蕪除地、もう税金もかかるような荒れた土地がある人に、払い下げをするときに関連して古跡とか名所というのは、みだりに壊したり、貴重な木を切ってしまったりしないように注意しようというのがありまして、これを根拠にいろいろ内務省等で、その地域の名所や史蹟に一定の保存の歯止めをかけていくという流れができたと伝えられています。

その後、内務省地理局の事務章程、庶務規程といいますか、役所には当然その役所が管轄すべきお仕事の内容というのが示されているわけですが、その中に各地の名勝とか史蹟の保存に関わることというものが書き込まれてきます。実際、内務省地理局において各地方からこういうものを守りたい、あるいはそこに説明の碑を建てたいとか、そういう出願があったときに、そうした史蹟、名勝の調査とか保存とか顕彰ということについて、内務省地理局がいいよ、やっていいよという承認を与える形で、間接的に保存する仕組みがある程度動いていたということになります。ただ、やはり法律的な根拠というものが明確に規定されていたわけではありませんので、かなり危険な状態というのを続いているということは間違いないところであります。

これ、なかなか国宝とか美術工芸品などもそうですが、日清戦争の後にやはりこういうものをちゃんと守らなければいけないというのがあつて、日清戦争は明治 27 ～ 28 年（1904 ～ 5）ですね。その後にやはり物の考え方として、日本固有の美術品とか工芸品というのをきちんと守らなければいけないという、そういうムーブメントとい

いますか、主張といいますか、というものがあつて、明治30年の「古社寺保存法」に結びついていくわけであります。一方、史蹟とか名勝、天然記念物については、日露戦争の後にかなり大きなムーブメントが起こってきてるということが從来指摘されております。

史蹟や天然記念物、それから名勝を保存する流れが幾つかあるわけありますが、1つは学会において特に史学会という、これは歴史・文献史学のほうでは大きな役割を占める、今も東京大学の中に史学会というのが置かれていますけれども。それから考古学会。こうした学会の活動の中で、明治44年(1911)に考古学会が史蹟保存の儀という決議文を作りまして、内務省に提出するという動きがあります。

それから翌明治45年には史学会が、史学会の機関誌であります『史学雑誌』に史蹟保存に関する意見書というのを掲載しております。史学会は国に決議文を提出するということはしないのですが、その代わりに黒板勝美という、現在の東京大学の史料編さん所の基礎を築いた歴史家、歴史編さんに当たった方がいらっしゃいまして、彼を中心

心にしたかなり本格的な意見書というのを『史学雑誌』に掲載しております。

実は、こうした動きが法律として結実していく上で決定的な役割を果たしたのは、歴史関係の人ではなくて植物学者の三好学という人物でありました。この方は東京帝国大学で学んで、ドイツのライツツィヒ大学に留学をされています。そうした中で、欧米、ヨーロッパにおける史蹟ですか天然記念物の保存に向けた、彼らの精神的な考え方方に触れて、その後日本に戻ってから植物学者として大活躍をします。例えば「生態学」という言葉は、この方が日本語に訳して導入したと伝えられています。それと同じように、天然記念物という概念を導入し、紹介したという点でも大きな役割を果たした方になります。同時に帝国議会に対する建議案の提出という、かなり流れを作り出して政治的にも動く、そういう点でも大変才能を發揮した、いわゆる学者として没頭するだけでなく、そういうムーブメントを作り出すという点でも、大変大きな役割を果たした人物らしいのですが、この方が建議案の提出ということを展開しております。

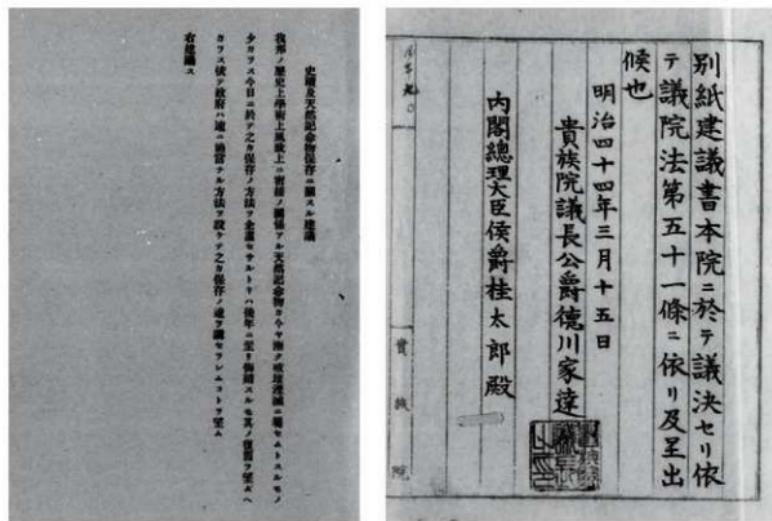


図17 史蹟及天然記念物保存ニ關スル建議案

この人は植物学者ですので、あくまでも天然記念物というところで頑張ってきたわけですけれども、一方ではこういう歴史学会等の動きもありましたので、三上參次という歴史学者が天然記念物に関する建議案というところに、史蹟も加えて一緒にやるべきだというアドバイスをしたと言われておりますて、明治 44 年 3 月に「史蹟及天然記念物保存ニ關スル建議案」(図 17) というのが、貴族院、ついで衆議院に提出され、可決されています。同図右は徳川宗家を継いだ徳川家達という人が、当時の貴族院議長だったんですね。貴族院から内閣總理大臣に、こうした建議書というものを議決して提出しますということがついています。

具体的にどういうものかというものが同図左に書いてありますて、文字が小さいですかね。「史蹟及天然記念物保存ニ關スル建議」とということで、「我邦ノ歴史上學術上風致上ニ密接ノ關係アル天然記念物ガ今ヤ漸ク」、「漸ク」というのは次第にという意味合いで使われる言葉です。「漸ク破壊せんれつ滅ニ属セムトスルモノ少カラズ、今日ニ於テ之ガ保存ノ方法ヲ企画セザルトキハ後年ニ至リ解析スルモ其ノ復旧ヲ望ムベカラズ」。もう今失ったら元には戻せないのだということですね。「依テ政府ハ速ヤカニ適當ナル方法ヲ設ケテ之ガ保存ノ途ヲ講ゼラレムコトヲ望ム」というのが建議案の内容になっております。こうした建議に向けた大きな動きというものを踏まえて、これを法律にしていくまでの、また様々な受け皿、潮流というものが芽生えていくことになりますが、ここで一旦休憩を挟みます。

#### (休憩)

先ほど、いわゆる学会での学者たちの建議案というお話をしましたが、もう 1 つ、国としても実は史蹟、名勝等の保存に向けての動き、これを推し進めようというのが内務省を中心のございました。それは地方改良運動、この一環として史蹟名勝保存ということを位置づけようという発想なのです(図 18)。日露戦争、勝利をいたしました、

日本はその点では国際社会の中に割って入ったといいますか、大国の 1 つとして位置づいた、そういう大きな画期を迎えたわけありますが、実態としてはかなり多大の戦費によって財政破綻というのを迎えておりまして、特にこれが地方にまで及んでおりました。

同じ時期に、いわゆる農村部では地主さんというが寄生地主化して、地主・小作の階層分化といいますか、そういう形での社会矛盾というのも激化しておりました。それからせっかく日露戦争に勝ったにもかかわらず、その講和の結果、思いのほか取るもののが少なかったではないかという不満が生じ、かなり動搖した社会状況となりました。そういう中で動搖した民心というものを国家主義的な方向で統合する、そのことをを目指して内務省主導で進められた運動が地方改良運動と呼ばれております。具体的には、明治 22 年に市政町村制という法律ができて、憲法体制を支える地方自治の在り方というのが規定されました。そこで町村合併も進んだのですが、実際には江戸時代以来の旧村といいますか、村の秩序がまだ根強く残っていて、母体となる地方自治体が弱いまといいますか、財政的にも、まとまりでも、なかなか国を下支えする強固なものになっていないのが実情でした。例えば、旧江戸時代以来の村ごとにあった神社を、新しく数か村合併させた上で 1 つの村に 1 つの神社を置くとか、そういうところまでを目指しながら、国を支える地域づくり、村・町を作るという発想で様々な施策が行われたわけあります。そのときに地域のシンボルとして史蹟や名勝を位置づけていくという発想が、実は内務省の内部にもありました。地方改良講習会ですか、地方長官会議などで、明治 42 ~ 43 年辺りに、史蹟名勝保存に関する話題、議題というのが提案され、明治 43 年(1910)には具体的に法案の審議、このような法案を今考えているということまで地方長官会議で示される動きがございました。そういった意味では民間の史学会とか考古学会のような動きと、それから国内の内務省等の動き、これら

が連動する客観的な状況、背景というのと一方では生まれていたわけあります。

そういう中でさらに史蹟・名勝・天然記念物の保存に向けて、大きな役割を果たす団体が結成されます。こちらが、その名もずばり、後の法律のとおりなのでけれども、「史蹟名勝天然記念物保存協会」というのが明治44年(1911)12月10日に設立されております(図19)。会長になったのが紀州徳川家、旧和歌山藩、その当主でありました徳川頼倫という元殿様、この方が会長になります。多くの学者、それから先ほど言いましたように官僚、内務官僚と、文部省系の官僚も含まれています。さらに政治家、ジャーナリスト等を統合する形で組織化された、かなり強力な協会になります。一民間団体というよりは、かなり強力な布陣を作っている保存協会です。

当初から様々な史蹟・名勝の調査等を活発に行っていますけれども、特に大正3年(1914)以降、組織を充実させまして、会報『史蹟名勝天然記念物』という雑誌のタイトルでけれども、こういう会報を刊行・発行したり、定期的に講演会を開催したり、それから各地団体へも出張って、出張講演を行ったり、併せて調査視察をするという活動を本格化させてきました。その結果として、大正8年(1919)に「史蹟名勝天然記念物保存法」という法律が施行されるわけですが、実際の法律ができるときというのも、この協会の支援の下に内務官僚が作成し、保存協会の会長である徳川頼倫ら貴族院議員の提出により成立しているということになりますので、実質的に法律の制定に向けて大きな役割を果たしたというのが、こちらの協会になります。

今日の国分寺史蹟との関連で、今まであまり注目されていなかったと思うのですが、史蹟名勝天然記念物保存協会の主要メンバー3名が関わって、東京府において法律の施行以前に史蹟保存に向けて大きな動きを行いました。そのことをこれからご紹介していきたいと思います。

徳川頼倫、先ほど言いましたように、史蹟名勝

#### (4) 内務省の施策

- ・地方改良運動の一環としての史蹟名勝保存
- ・…日露戦争後、多大の戦費による財政破綻の立直しと、社会矛盾の激化、講和への不満などで動搖した民心を、国家主義で統合することを目指して内務省主導で進められた官製運動
- ・地方改良講習会や地方長官会議での指導・説明  
史蹟名勝保存法案の審議(明治43年)

図18 内務省の施策

#### 明治44年(1911)12月10日設立

- ・紀州徳川家当主・徳川頼倫(とくがわよりみち)を会長とし、学者・官僚・政治家・ジャーナリスト等を統合して組織化
- ・大正3年(1914)以降、組織を充実させ、会報の発行、講演会の定期的開催、各地団体への出講演と調査視察を本格化させる。  
⇒大正8年の「史蹟名勝天然記念物保存法」は、本協会の支援のもとに内務官僚が作成し、徳川頼倫ら貴族院議員提出により成立

図19 史蹟名勝天然記念物保存協会

天然記念物保存会の会長であった人(図20)。それから井上友一という人、これは内務官僚で、後に東京都知事になる人です(図21)。それから戸川安宅、この方は旧旗本なのですが、保存協会の幹事を務めておりまして、史蹟調査の中心であると同時に、機関誌・刊行物の編集発行等で中心になっていた人物です(図22)。井上友一も実は会の発足時から協議員等で関わっております、常務理事というのですか、要するに専任的に働く理事なども務めていて、保存協会の中心人物がありました。3人が実はトリオになって、東京府における史蹟保存に大きな役割を果たしたわけであります。

最初に徳川頼倫というのはどういう人かご紹介します(図20)。明治5年に田安徳川家に生まれました。徳川というのは、御三家は皆さんよく聞いたことあると思います、尾張と水戸と、それから紀州、これが御三家であります。ところが3つの家だけでは、もしかすると將軍を継ぐ人間が足りなくなるかもしれないということで、いわばそのサブといいますか、御三卿というのが作られま

すね。これが田安と清水と一橋です。3つの家が作られまして、だからみんな苗字は徳川さんなのですね。一橋とか田安さんという苗字ではなくて、江戸城の近くの田安門というのが北の丸公園の辺に今も残っていますが、あの辺に住んでいたから田安徳川家と言われるわけです。徳川頼倫は、その御三卿の1つである田安徳川家にもともと生まれた人であります、明治12年（1879）に紀州の徳川家に養子に入っております。のちに15代の当主となるわけです。時代は変わって明治ですので、当主といつても殿様として家を継いだわけではないですが、15代の紀州徳川家当主になります。明治29年（1896）にケンブリッジ大学に留学しております。そういう国際的な教養というのも積んでいます。

明治35年（1902）に現在の港区ですが、飯倉の旧紀州藩屋敷の中に「南英文庫」といいますけれども、紀州藩以来の貴重な書籍をたくさん所蔵されていましたので、これを基にした私設図書館であります「南英文庫」を設立しております。こういう貴重な書籍を広く共有することにとても理解のある方で、後には日本図書館協会の総裁なども務めるわけであります。私設の図書館でしかれども、恒久的に公開していく発想の「南英文庫」を作っております。永井荷風などの文化人もここに入り浸っていたとご自分で書かれています。

明治39年（1906）に家督を相続して、当時は、貴族院議員は家督相続すると、そのまま議員としても維持ということでありますので、貴族院議員になっております。そして明治44年（1911）に、先ほどご紹介しました史蹟名勝天然記念物保存協会の会長になります。ですので、実は南英文庫は協会の拠点になってきました。また、予算もほとんどこの殿様といいますか、頼倫の拠出が大部分を占めていたと言われています。そうそうたるメンバーが加わっているのですが、据野の会員自体はそんなに多くなくて、100名程度だったと書かれています。ただ、理事とか評議員とかいうところに、先ほど申し上げましたように、学者

あり、政治家あり、ジャーナリストあり、それから官僚あり、そうそうたるメンバーが含まれていたということになります。

それから、図21は井上友一という人で、これは東京府知事時代の肖像画、絵ですね。東京都公文書館が歴代の府知事とか市長の肖像画というのを引き継いでおりまして、ちょっと一部傷んでお顔がまざい方も、顔がちょっと崩壊している方もいらっしゃるようですけれども、この人は何とか大丈夫ですね。もともと加賀藩主の家に生まれた、金沢で生まれた方であります。東京帝国大学の法科を卒業して、エリート内務官僚ですね。内務省で地方局府県課長というのをかなり長く務めて、その後、ちょうど保存協会に関わる頃には、内務省の神社局長というのを務めていました。明治44年、先ほど言いましたように、保存協会の設立に深く関与して、大正3年（1914）、この会が機関誌を発行したり、かなり活発に動き出すときには保存協会の常務委員という形で運営の先頭に立つ、そういう立場にあったと。大正4年（1915）4月に東京府知事となっています。これが1つのポイントです。

それから、図22は戸川安宅という人であります、保存協会の幹事として全国的な史蹟調査をしたり、会誌の発行をしたり、自らそこにつくさん文章を書いています。大活躍されていますね。面白い経歴を持った人です。もともと3,000石というのは、旗本の中ではかなりレベルの高い、高祿の家になります。安政2年（1855）に戸川家、戸川安行という旗本の子として江戸で生まれています。明治初年には彰義隊に参加しているということですから、かろうじて生き延びていたわけですね。

この年の6月に旗本としての知行地があった、備中国早島（岡山県都窪郡早島町）というところに移っています。明治3年になって東京に戻ってきたようで、大学南校、続いて慶應義塾、それから築地学校というのは外国人宣教師らが行っていた学校ですね。明治7年には洗礼を受けてキリスト

ト教徒になっており、明治 16 年以降日本基督協会麹町協会の牧師を務めているという人物です。

それから、私などよくこの人の名前を聞いていたのは、明治 30 年から『旧幕府』という雑誌を刊行いたします。これは勝海舟などの協力を得て、旧幕臣に、当時の江戸時代の制度についてヒアリング調査をして、それを『旧幕府』という雑誌にずっと掲載・連載していくのです。明治 20 年代の後半ぐらいから江戸を見直すといいますか、一旦、明治維新によって否定された幕府ですか、江戸のなるものを見直そうという、そういう風潮がかなり広まっていく、その中でそれを主導した人物の一人であります。

その後、明治 34 年に南葵文庫の主任学芸員に就任しておりますので、この辺りから徳川頼倫との関係というのが正式にもつながりができるわけであります。当初どこで知り合ったのかはちょっと分かりませんけれども、そういうつながりもあって、明治 44 年、史蹟名勝天然記念物保存協会幹事として調査・刊行事業に主力としてこの人が関わっていきました。図 22 の左の漫画が面白いと思うのですが、これは国会図書館のホームページからもダウンロードできますが、『現代名士の演説振』という面白い本がありまして、大正に出た本なのですが、それにこういろいろな当時の名士の演説する姿が描かれております。今ちょっとご紹介したように、なかなかユニークな経験を持ったこの方については、次のように書かれています。

まず、この人は「頭の前がすごく高くて、後ろが低い」という、失礼なことが書いてある。絶壁というやつなのですかね、頸が。とにかく頸が長い。大体、面長というのが旗本顔ですね。殿様顔などとも言われます。庶民は丸顔で鼻が上がっていて、武家は面長が多いといいます。徳川の増上寺の発掘調査のときには、将軍の遺骨も調査されていますのが、確かに面長ですし、頭も長いのですね。前後というか、丸顔ではなくて面長なのですけれども、この方もそういう意味では旗本顔

徳川頼倫・井上友一・戸川安宅と東京府における史蹟保存



徳川頼倫 (とくがわ よりむち)
明治 16 年 (1873) 由安瀬川に生まれる。
明治 17 年 紀伊徳川家に養子 (後、15 歳当主)
明治 29 年 ケンブリッジ大学に留学
明治 35 年 版画商の邸内に南葵文庫 設立 (なんごくみんこ しゆうがんかく)
明治 39 年 帝國圖書天然紀念物保存協会 会長選出
明治 44 年 史蹟名勝天然紀念物保存協会 会長。南葵文庫が創立
大正 2 年 日本国書籍協会会長

図 20 徳川頼倫・井上友一・戸川安宅と東京府における史蹟保存



井上友一 (いのうえ ともいち)
明治 4 年 (1871) 加賀藩士井上重盛の長男として金沢に生まれる。
明治 26 年 東京帝国大学法科卒業、内務省に入る。
明治 31 年 内務省右司局房県課長
明治 41 年 内務省右司局長兼地方局府典説課長
明治 44 年 史蹟名勝天然紀念物保存協会の設立に関与
大正 3 年 (1914) 保存協会常務委員
大正 4 年 (1915) 4 月 東京府知事となる。

図 21 井上友一 肖像画



戸川安宅 (とがわ やすいえ)
安政 2 年 (1855) 10 月、3,000 石の旗本戸川 実行の子として江戸に生まれる。
慶応 4 年 5 月 影張島に参拝。6 月、領地 のあつた南中国半島に移る。
明治 3 年 大学南校、続いて慶應義塾、獨逸地学校で学ぶ。
明治 7 年 流氷を受けキリスト教徒に。
明治 16 年以降、日本基督教會 施設教会の牧師
明治 30 年～ 雑誌『旧幕府』を刊行
明治 34 年 南葵文庫の主任学芸員就任
明治 44 年 史蹟名勝天然紀念物保存協会幹事として調査・刊行事業に従事

図 22 戸川安宅

ですね。

それから「氏の手つきも妙だ」と書いてあります。演壇に登っても手を振ったり卓を叩いたりすることは一切ない。右の手を握り、左の手でこれを覆うような形容（図のごとく）と書いてあります。これをされる。または左右十指を、10 本の指をことごとく組み合わせておられるときもある。それで演説の始めから終わりまでじっとして、神妙に胸に当たるままだから、遠くから見ると、まるで何んでいるかのごとく見えるというのです。牧師さんでこうやって手を結んで、大人し

くしゃべっているのかというと、必ずしもそうではなくて、「氏の顔面が」、「純江戸っ子型であるとともに、また純江戸っ子弁であるから」言葉のほうですね、「非常に言葉に富んでいる。べらんめえから遊ばせ言葉までかみ分けて飲み込んでおられるので言い回しが誠に巧みだ」ということで、なかなか演説の名人だったと書かれております。話の内容もともとユーモアが、皮肉があつたり、品のいい話しぶりだったと紹介されております。なかなかの人物だったわけですね。今、紹介した3人が、実はトリオで東京府の史蹟保存に関わるというお話です。

明治44年4月に、井上友一が東京府知事に就任したということを先ほど申し上げました。**図23左**は東京都の公文書なのですが、大正4年11月25日、徳川頼倫が東京府史蹟名勝天然記念物保存費という目的で、東京府に金壱千円を寄付しているということが公文書から分かりました。**図23右**はそのことを受けて、寄附したので一定の賞与を与えるというのがこの公文書でありまして、井上友一知事から文部大臣に宛てて、このように寄附を受けたので賞与を与えますよということを申請している、上申している、そういう公文書なわけありますが、何のことはない、保存協会の会長が寄附をして、それを受けた府知事が同協会の専務理事なのです。

さらに、それに具体的に寄附金を受けて調査活動を行うのが戸川安宅なのです。先ほどの戸川ですね。史蹟名勝及び天然記念物調査嘱託旅費の件というのが**図24**の公文書です。「戸川安宅ニ史蹟名勝及天然記念物調査ヲ嘱託セラレ候ニ就テハ調査ノ為市内及郡部へ出張ノ場合ハ左ノ区分ニ依リ旅費ヲ給セラルコト」云々とありますて、つまり千円が寄附されて、それを受けたのは府知事です。この日にちというのが大正4年11月18日で、もう嘱託の話が出ていますから、さっきの寄付日が11月25日という話でしたけど、もう話はできてしまっているわけです。言ってみれば殿様と府知事と、それから元旗本の戸川さんがトリオで、

東京府の史蹟名勝天然記念物のための調査云々に働いていくということが始まっているわけあります。

では、具体的にどういうことをしたのかといいますと、戸川安宅による調査というのは、東京府における史蹟、名勝、それからいわゆる名木というか木、こういうのも含めて、そこの実地調査を行いまして、それぞれの史蹟、名勝の場所に札、「おおやけ」の「ふだ」と書いてあります、これは公文書の用語でこのように表現されているのですが、札を設置しまして、札にそれぞれの史蹟、名勝、天然記念物の由来、歴史的経緯、そういうものを解説する解説書を書いていくわけですね（**図25**）。これをざっと50か所について、もう大正4年の段階で完了したと、『史蹟名勝天然記念物』の雑誌に報告が掲載されております。50の最後の幾つかを掲載するときに、会誌の第1巻13号、大正5年9月20日号において、これで50か所については一旦終わりました。さらに17か所、具体的に挙げて、ここはまだ今まで具体的に札は立っていない、史蹟としてきちんと対応できていないのだけれども、さらに史蹟指定に向けて、候補地として、例えば霞が関の跡を挙げています。ここは現在の外務省付近ということになります。当時ももちろん外務省が建っているのですけれども。これは今では全く海が見えませんが、江戸時代においては霞が関というのは結構坂になっていました、その上からずっと江戸湾を望める景勝の地でもあったわけであります。錦絵などにも描かれているような、そういう霞が関跡というところも史蹟として位置づけていたらどうかと。それから牢屋敷の跡などですね。戸川の発想は、かなり江戸に偏るので、やはり旗本ですからね。

江戸的なものをかなり中心に、それから犬屋敷というものは、現在の中野駅とか中野サンプラザなどの辺りに、元禄年間に犬小屋、要するに生糞憐れみの令で犬が殺されたりするといけないので、犬を収容するための広大な犬屋敷というのを作りましたが、その跡などというのも史蹟としたらど



図 23 東京府における史跡保存活動の展開

#### ■ 保存活動の実態



(『史蹟天然紀念物』第1卷9号 大正5年1月20日号)

図 24 東京府における史跡保存活動の展開 保存活動の実態

#### 東京府の保存活動と武藏国分寺

■ 戸川安宅による調査、東京府における公札の設置が50箇所について完了

■ 会誌第1巻13号（大正5年9月20日号）において追加設置の候補地が列挙される。

##### ※ 史跡指定に向けた1つの時期

- 鶴ヶ岡駅（外務省附近） 一橋駿郎邸（一ツ橋内）
- 桜の井戸と桜の井戸（參謀本部前並土手下）
- 宅屋敷社（小伝馬上町） 宛塚（宛町）
- 宝宮彦益角の草庵址（茅場町） 石川島（佃島）
- 渋野内匠頭部跡（京橋明石町） 切支丹屋敷跡（小日向）
- 了翁禅師の寿像（上野輪王寺） 善濟寺（立川）
- 大屋敷跡（中野 仲間堀） 虫塚（上野根木町勤善院）
- 国分寺（武州国分寺） 首尾の松（高等工業学校）
- 吾妻の森（吾妻森） 大河内輝貞（上野公園、図書館構内）

図 25 東京府の保存活動と武藏国分寺

うかということを言っています。こういった候補の中に、実は武州国分寺というものが挙げられていました。逆に言うと、これは大正4年、5年の段階でありますから、近代以降、考古学者による調査というのは、武藏国分寺に対して既に数回繰り返されているはずであります。皆さんもその辺りは詳しくていらしてたり、史蹟として一円的に何か対処していくことは、恐らく戸川安宅が実地調査を行った段階であまり行われていなかっただろうと思われます。そこで彼は新たに史蹟として、何か公札、札を立てて、注意を喚起して、面として保存していくのかな、そういう方向に持っていくかないとまずい、と恐らく感

じたのだろうと思います。

大正8年(1919)に法律ができ、その3年後に史蹟指定を武藏国分寺は受けるわけですが、それに先行する形で、東京府の活動として、武藏国分寺に説明板が立てられたわけです。これがその後の武藏国分寺史蹟指定に向けた1つの画期といえますか、何か動きというものが地元の人にも恐らく認識させられる画期になったのではないかと推定できます。

そんな形で法律ができる大正8年の前年、大正7年10月26日の官報に東京府による「史蹟天然紀念物勝地保存心得」が掲載されました(図26)。このときの府知事も、やはり先ほどの井上



- 法律制定の前年に東京府が独自に制定・公布
- 保存対象の網羅性が画期的

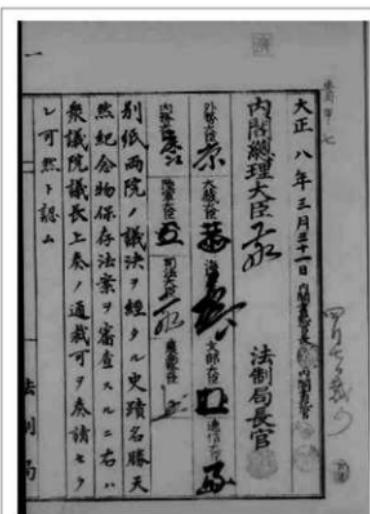
#### I 史的紀念物

- 1 史料
- 2 史蹟

#### II 天然紀念物

- 1 動物
- 2 植物
- 3 地質
- 4 勝地

図 26 東京府「史蹟天然記念物勝地保存心得」



■土地の開拓、道路の新設、鉄道の開通、市区の改正、工場の設置、水力の利用等ノ他百般ノ人為的原因等による史蹟・名勝・天然紀念物を保護する法が初めて制定される。

- 1 史蹟・名勝・天然紀念物を、内務大臣が指定し、保存に関する地域を定めて一定の行為を禁止または制限し、さらには必要な施設を命ずることができること
- 2 内務大臣は地方公共団体を指定して記念物の管理を行わせることができること
- 3 現状変更等の制限および環境保全命令の規定
- 4 違反に対する罰則

図 27 「史蹟名勝天然記念物保存法」の公布

友一なのです。文面を読みますと、井上友一という人はまさに内務官僚として、先ほどの地方改良運動を進めてきた中心人物であります。その辺のところがよく読みとれます。「愛郷ノ精神ハ、郷土を愛する精神は「其ノ郷土ニ保有セラルル史的紀念物天然紀念物勝地等ニヨリテ涵養セラルルコト大ナルノミナラズ国家的思想又之ニ源流ス」ということです。要するに愛郷精神史的記念物、天然記念物等により養われ、さらにそれが国家的思想にまで昇華していく、そういうまさに内務官僚的な発想が強く表れていると思います。「故ニ今日民地ノ局ニ当リ訓育ノ職ニアル者ハ常ニ其ノ郷土ニオケル史的記念物天然記念物及勝地ノ保存ト愛護トニ意ヲ致シ其ノ学術上ノ価値ヲ明ニシ進ンデ之ガ利用ノ途ヲ講じ其ノ研究ヲ怠ラザルコトヲ要ス」云々と書かれています。こういう東京府独自の心得という形で、史蹟、名勝、天然記念物の保存について東京府が法に先立て布告を行っているということです。

段階から武藏国分寺などもこういう1つの流れといいますか、史蹟指定に向けた流れというのが生まれて、法律の公布が大正8年4月10日になりますが、その流れに乗っていくのではないかと思ひます。

「史蹟名勝天然記念物保存法」の公布の前提にあるのは、図27は建議案の最初の文章ですけれども、「土地の開拓、道路の新設、鉄道の開通、市区の改正」、市区改正というのは今日の言い方でいうと都市計画のことです。市区の改正、工場の設置、水力の利用其ノ他百般ノ人為的原因等による史蹟・名勝・天然記念物、これの破壊です。これを保護する法が初めて成立されたということになります。まさに近代化、いわゆる開発至上主義といいますか、そういう中で史蹟や名勝や天然記念物が傷ついている、毀損されている。そういう状況に対して、これを防ぐというので大正8年4月、先ほどの美術工芸品を中心とした法律の流れとは別に、今、申し上げてきたよう

年月日	事項
大正7年10月26日	東京府、史的紀念物天然記念物勝地保存心得を告示
大正8年6月1日	史蹟名勝天然記念物保存法施行
大正9年10月18日	内務省が史蹟名勝天然記念物保存課設立と東京府権限による国分寺跡解合調査を実施。同月27日、昭和11年7月にも実施。
大正11年6月19日	東京府内務部、史蹟開拓のため国分寺村大字八幡前、前野・黒木における国分寺跡地所持を調査し提出するよう国分寺町に通告する。
大正11年6月27日	国分寺村長、国分寺町寺地所の地目・地番・反別・所有者について調査書を提出する。
大正11年10月12日	内務省が小渕27号により武藏國分寺社を史蹟天然記念物として指定する。
大正11年10月27日	内務省、史蹟武藏國分寺社の管理者を国分寺村とする件につき東京府に回答を求める。
大正11年10月30日	内務省、史蹟武藏國分寺社の保存に関して所有者等に通知保存に関して注意させるよう東京府知事に通達する。
大正11年12月13日	内務省、史蹟武藏國分寺社の管理者を国分寺村とし指定書を発行する。
大正11年12月14日	北多摩郡長、国分寺村長が国分寺社史蹟管理者に指定することにつき差し支えなき旨を東京府に回答する。
大正12年1月6日	東京府内務部、武藏國分寺社土地所有者23名及び、国分寺村長当該地所警察官署充ての注意事項、禁止事項並道場を決定する。
大正12年6月12日	内務省、史蹟名勝天然記念物指定に関する説明及び保存の要件を所有者・管理者・警察官署に通告する。
大正12年11月15日	内務省、武藏國分寺社付近地域の内、金堂社、碑社の隣である部分は国有に買収することとし、東京府知事に区域認定、買収価格の評定、所有者との評議を行なうべく照会する。
大正12年12月26日	武藏國分寺社指定地域の内、国有に買収する土地の買収額算定のため、学院課長から土木課長に協力を要請する。
大正13年3月4日	東京府内務部土木課長、国分寺村大字国分寺字前野・八幡前の坪当たり土地価格を回答する。
大正13年4月1日	武藏國分寺社指定地域の内、国有に買収した土地の登記が完了する。
大正13年10月	武藏國分寺社の標示用柱柱、注家書、説明書を建立する。
大正15年7月19日	東京府学務部長、国分寺村長に對し、史蹟武藏國分寺社の保存施設について具体策を示し、国庫補助を前に設計見積書2通の提出するよう通告する。国有買入地への芝生・小樹種付け、金堂社等5ヶ所への原木立柱建立。
昭和2年9月28日	東京府学務部長、武藏國分寺社に芝生の種付け、小樹の植込みを施設し、種費見積の回報を国分寺村長に回報する。

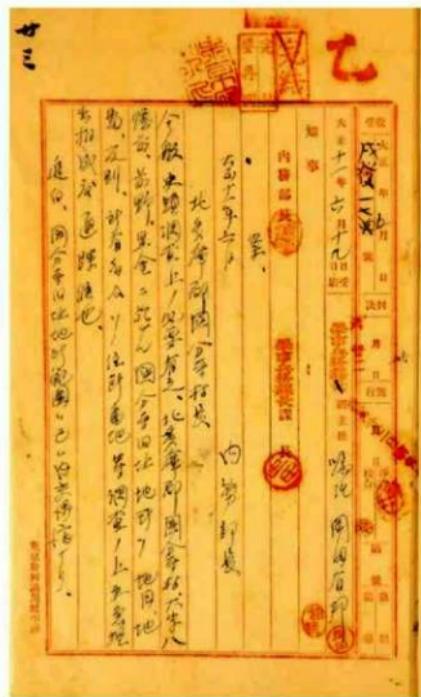
図28 武藏國分寺史蹟指定の動向

な様々な潮流がまとまる形で、法が公布されたということになります。

この法律の内容は、史蹟、名勝、天然記念物を内務大臣が指定し、保存に関して地域を定めて一定の行為を禁止または制限し、さらには必要な施設を命ずることができるということです。それから2番目として、内務大臣は地方公共団体を指定して、記念物の管理を行わせることができる。それから現状変更の制限、環境保全命令への規定と

いうのが含まれていて、違反に対する罰則規定も盛り込まれている、そういうものになります。

この法律を受けて、武藏國分寺での史蹟指定の動きがあるわけあります（図28）。ちょっと小さくて申し訳ないです。大正7年（1918）10月、先ほどの東京府の保存心得が告示されます。翌8年6月1日に保存法が施行されました。そして大正9年10月には、内務省史蹟名勝天然記念物保存調査員と東京都嘱託による国分寺遺跡合同調査



■大正11年（1922）6月

東京府内務部の指示により、国分寺村において、国分寺址（字前野・八幡前・黒金）の地目・地番・反別・所有者を調査  
■国分寺址

面積：28,927坪 筆数：159筆

（畠135墓地13山林9堂宇地19原野芝地1）

土地所有者：23名

（その他表記31名あり）



図29 東京都教育委員会所蔵文書に見る  
史蹟指定の動向（1）土地調査

図30 （2）地権者への注意

というのが実施されています。10月18、27、29、11月7日にも実施されておりまして、この調査報告書が冒頭（図5）で紹介しました写真等にも含まれていくものになります。大正11年6月19日には東京府の内務部が史蹟調査のため、国分寺村大字八幡前・前野・黒金における国分寺旧址地所を調査し、提出するよう国分寺村長に通告する。それから6月27日には、国分寺村長が地所の地目、地番、反別、所有者について調査書を提出する。こういう一連の動きがあつて、大正11年10月12日、内務省告示第270号により武藏國分寺跡を史蹟天然記念物として指定する。これが100年前の史蹟指定ということになります（図29）。

今回、実は東京都の教育庁で所蔵されている資料をお借りして調査することが許されました。再来週（10月21日）からですか、東京都公文書館で、国分寺市教育委員会さんと東京都公文書館の共催の企画展をやります（213頁参照）。その時には東京都教育委員会の所蔵資料というのも初めて公開して、ご紹介することになっております。幾つかだけご紹介します。

図29は、大正11年6月の土地調査、国分寺跡といわれている指定地域内の土地について調査が行われております。面積としては28,927坪。その中の土地を細かく1筆1筆誰が所有して、そこは畠地であつたり、山林であつたり、墓地であつたりという地目が決まっているわけですから、全部で159筆に分かれています。畠は135筆、墓地が13筆、山林が9筆、堂宇地、それから原野、芝地というのが1つずつということに分かれておりまして、土地所有者が23名、名前が明記されている人だけで23名いました。お寺さんの国分寺さんも含めて。それから国分寺ほか9名みたいな記載が、お名前がはっきり書かれていない人もほかにあるのですが、史蹟指定される全体のエリアがこのように23名以上の方々に分かれて所有されていた、という状況が見えます。

こちらの公文書は、史蹟指定の際に地権者に注意を与えるということで、礎石等を勝手にいじ

くったりしないでねということが、この法律ができた上で改めて注意喚起されているというものが図30の史料になります。特に、土星、土壤、礎石、その他の現状変更を許可せざることということです。それから瓦についてですが、「採取ハ之ヲ禁ズ」ということで、改めて注意喚起されている公文書です。

それから管理者指定です。先ほど言いましたように国が指定するわけですが、その管理者は地方公共団体に委ねるというのが、法律の第5条に定められております。武藏國分寺の史蹟の場合は、国分寺村を管理者とするということに最終的に決着します。図31の公文書は、今はなくなっていますが北多摩郡という行政区画がかつてはあります。北多摩郡長が東京府の内務部長宛てに、国分寺跡史蹟管理者指定について、国分寺村に管理者指定の権利を、これを「サシツカエ之ナキ」ということで、管理者として国分寺村を指定することで構わないですよということを返答している公



- 史蹟天然記念物保存法第5条により管理者を指定
- 国分寺村を管理者とすることについて、差し支えない旨を北多摩郡長から東京府へ回答
- 実際には、すでに前日（大正11年12月13日）付で、国の指定書が発行されていた。

図31 (3) 管理指定者

文書になります。

それから図32は、史蹟指定の後、大正12年(1923)11月15日付で、先ほど申し上げましたように、史蹟指定を受ける土地全体の中に23人も地権者がいますから、大変錯綜した土地所有状況なわけです。ですので、これを一円保存していく上ではかなり支障が生じるということで、指定地域のうち金堂跡・講堂跡・塔跡・礎石のある部分については、国有地として買収して保存するという国の意向が示されております。内務省からは東京府知事に対して、区域の調査、買収価格の評定、所有者との協議を行うよう求めている、そ

ういう公文書になります。地権者との協議が固まつたら、これは11月15日付ですけれども、年度内で、つまり3月までに話をつけてねということが、この公文書には示されているところであります。

このように武藏国分寺史蹟指定というのは、重要な史蹟であることは早くから認識されていて、考古学者らによる調査というのは明治以降も散発的に行われていたわけでありますけれども、これを史蹟として一円的に保護していくという動きが当初からあったわけではない感じられます。その1つの画期となったのが、明治40年代から大正にかけての、史蹟・名勝・天然記念物を保存していくという様々な潮流の動き、とりわけその中でも保存協会のメンバー3人がトリオを組んで行った東京府の取組、これが恐らく地域にとっても1つの大きなきっかけを作ったのではないか、流れを生み出していたのではないかと思われます。

そういう中で法律が施行されて、やはり指定するためには、きちっとした調査をしないといけませんので、法律ができてすぐに指定というわけにはいかないのです。法律ができる初年度には、実は天然記念物が数点指定されているだけなのです。それから翌年に福岡の大宰府が初めて史蹟として指定されまして、さらにその3年目に武藏国分寺が指定を受けています。やはりこれは貴重なものという認識があるから、いち早く取り組まれて3年目にして指定を受けています。つまり、こうした史蹟というものが様々な開発の危機などを乗り越えて今あるというのは、決して当たり前のことではない。こういう長年の様々な関わった人たちの営みの帰結として、今こうして残されて、私たちは100周年という記念すべき年を迎えるのだろうと思います。今日お集まりの皆様は、ガイドさんをされたり、さらにそこに加わろうという



#### ■錯綜した土地所有状況

⇒管理上の困難

■指定地域の内、「金堂跡・講堂跡・塔跡ノ礎石アル部分」を国有に買収して保存する。

■内務省から東京府知事に対し、区域の調査、買収価格の評定、所有者との協議を行うよう求める。

■大正12年11月15日付、年度内の予算執行を予定

図32 東京都教育委員会所蔵文書に見る  
史蹟指定の動向（4）国による指定地買収

## 武藏国分寺 史跡指定100年にあたって

■重要な史跡であり、考古学者らによる調査は行われていたものの、史蹟としての一円的な保護は構想されていなかった。

■近代化・開発に伴う史跡などの破壊への危機感から史蹟名勝天然紀念物保存協会が誕生、この会による東京府への働きかけが、武藏国分寺跡の保存運動を起動させた可能性

■新たな100年に向けて

図33 武藏国分寺 史跡指定100年にあたって

事で学ばれている方もいらっしゃると伺っていますけれども、次の100年に向けて、これを守り、さらにより一層活用を進め、ここから学びながら地域を作っていくという、そういう新しい、次へ向けてのステップとなるような節目の年になることを祈っております（図33）。

最後に、先ほどちょっと申し上げましたけれども、10月21日の火曜日から12月20日の金曜日まで、東京都公文書館の企画展示室におきまして、「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～」という共催企画展を開く国分寺市教育委員会さんと開催させていただきます。私も昨日今日と、こちらに歩いて公文書館から来ましたけれども、雨さえ降っていないければ、なかなか気持ちのいい道を通って、お鷹の道を通って行ける場所でございますので、まだご利用されていない方も半分以上いらっしゃいましたので、ぜひこの機会に東京都公文書館にお越しいただければありがたいと思います。最後にちょっとお願ひと宣伝を申し上げて、今日の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

事務局 先生、ありがとうございました。私も公文書館へ行って、それから企画展示室を何回か見ているのですけれども、本当にいい施設です。特に国分寺のような、美術館・博物館が枯渇してい

る地区とすると、得がたいぐらいにいい施設ありますので、ぜひとも足を運んでいただければと思います。

質問タイムなのですけれども、何か質問ある方いらっしゃいますか。

聴講者 今日は本当に大変興味深いお話をどうもありがとうございます。それでお聞きしたいことはたくさんあるのですけれども、1、2点だけ。先ほど徳川頼倫さん、それから井上友一、戸川安宅、この3人トリオから始まったというお話で、戸川安宅による調査で、会誌第1巻の13号で追加設置の候補地が列挙されると。その中に国分寺が入ったということなのですが、ほかには江戸的なものがいろいろ入って、その中に国分寺ということで、これ、なぜ国分寺が入ったかという、その理由というか、それは分かるのでしょうか。江戸時代から名所図会などいろいろありましたので、また明治になって考古学的な調査もされていましたのですけれども、戸川安宅による調査、会誌第1巻13号に追加の候補地として列挙された理由が分かりますか。

西木 すみません。会誌を見る限りでは、簡単な報告でただ場所が列挙されているだけなのです。ですので、もしかするとほかのところで何か書いているものがあるかもしれないのですけれども、今のところ私は国分寺をなぜ取り上げたかという

のは把握できていないです。それで同じ戸川という人が、大正3年（1914）に『東京府史蹟写真帳』という写真帳を作っているのです。これを見ますと、北多摩郡では小金井桜が取り上げられているのですけれども、その段階では国分寺は挙げられていないのです。ですので、恐らく北多摩郡も調査しているのですね、彼は。国分寺も見ていて、ただやはりまだ先ほどの写真のような荒漠とした土地のありようを見て、これは何かしないといけないと感じたのではないかと、それは推定なのですけれども。

**事務局** 大丈夫ですか。終わった後、言ってきてください。ほかにございますか。では私からの質問もいいですか。すみません、史蹟の記念の話なのですけれども、糸偏の「紀念」と、「記す」の「記念」は、例えばこれ多分いろいろあったと思うのですけれども、その辺で何か理由は。

**西木** 意味としては同じだと思います。あれ、どこで変わるのでか、切替えは、法律は。戦前は多分糸偏の方が使われていて、それで例えば先ほどから紹介している会誌などでも混同されるのです。個人ではごんべんを書いたりする人がいて。だからもともとの意味としては、違はないと思うのですけれども、法律としては、糸偏が戦前の法律が使われていますので、その下にあっては基本こっち（糸偏）が使われていたのでしょう。少なくとも戦後の法律は言偏ですので、今は基本言偏で表記です。ちょっとその辺は、史蹟の「蹟」という、「あと」という字もいろいろ字が使われますよね。どのように統一したらいいか、こういう字とか「跡」という字も、それから足偏に「止まる」と書く字もありますし。「せき」は足偏に「責任の責」と、今ある普通の「亦」と書く。ちょっとその辺の使い分けは難しいところがあるかと思います。基本意味としては同じで、要するに考えていいかと思います。

**事務局** ほかに何か。

**聴講者** すみません、短くしますから。開館当时、首を長くして待っていた一女性です。やっと今回

このような席を頂きまして、お話を伺うことができました。誠にありがとうございます。それで、企画展のときには結構すばらしいパンフレットを頂けるのですが、今回の展示においても何かパンフレットは作っておられますか。

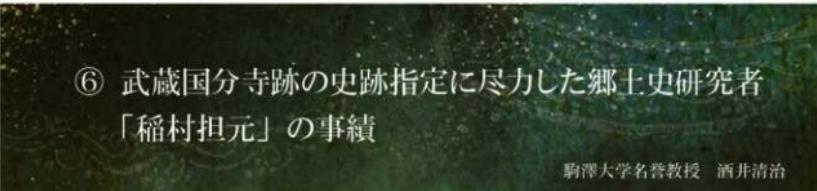
**西木** 図録を作っています。図録を主に作っています。

**聴講者** 手元に残るのは、本当にいいことだと思います。

**公文書館職員** ありがとうございます。普及啓発担当しています。図録のほうなのですけれども、開催したその日にすぐにお渡しするには、実を言うと、ちょっと納期がずれてしまったのですね。その翌週に来ていただけだと、もう気持ちのいい図録をお渡しすることができます。

**聴講者** 2回行ってもいいですよ。

**公文書館職員** どうぞぜひ来てください。それまではA3を2つに折って、パチンと留めたやつしかお渡しできないので、できれば2冊を手にしていただければ助かります。よろしくお願ひします。



## ⑥ 武藏国分寺跡の史跡指定に尽力した郷土史研究者 「稻村坦元」の事績

駒澤大学名誉教授 酒井清治

＜講師紹介＞皆さま、こんにちは。ただいま御紹介に預かりました、国分寺市教育委員会・教育長の古屋真宏でございます。

本日は日曜日のお忙しいなか、「第48回東京都遺跡調査・研究発表会」に足を御運び下さいまして、誠にありがとうございます。会場市を代表いたしまして、一言、御挨拶を申し上げます。このあと、改めてご紹介を差し上げたいと思いますけれども、駒澤大学名誉教授の酒井清治先生には「武藏国分寺跡の史跡指定に尽力した郷土史研究者『稻村坦元の事績』と題する公開講演をお願いしておりますが、武藏国分寺は大正11年に国の史跡に指定されまして、昨年・令和4年で100周年の節目を迎めました。都内でお同じ年に指定された国の史跡には、北区の西ヶ原一里塚、文京区の湯島聖堂、港区の浅野長矩および赤穂義士墓などがあり、皆さまも一度はお出かけになられた史跡があるかと思われます。国分寺市では、今年度は一年間を通じまして、さまざまな記念事業を行つて参りましたが、本日の行事も史跡指定100周年を記念して開催しているところでございます。

さて、これから御講演をしていただきまます酒井清治先生を御紹介申し上げます。今回の行事を開催するにあたりましては、東京都さんから、ちょうど1年前に、公開講演は、国分寺に縁のある有識者の先生に御登壇・調整願いたい、との御相談が寄せられました。私どももいたしましては、まずは、遺跡調査・研究発表会という性格上、考古学が御専門で、かつ、武藏国分寺の史跡保存整備委員として、長年にわたって御指導を頂いております酒井先生に御相談してみよう、と考えまして、そのうえで、どのような内容の御話しさを先生にお

願いするかを、打診するにあたり色々と思案いたしました。

酒井先生は、この場で改めて申し上げるまでもございませんが、古代の須恵器・瓦研究の第一人者で、武藏国分寺の瓦についても御研究成果をたくさん御発表されていらっしゃいます。

昭和24年に岐阜県でお生まれの先生は、駒澤大学で考古学を学ばれました後、昭和55年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団へ入職し、以後17年間にわたりまして埼玉県内の遺跡の発掘調査に従事されました。その途中、埼玉県立歴史資料館や国立歴史民俗博物館での御勤務経験を挾みまして、平成9年に母校である駒澤大学の考古学研究室へ教員としてお戻りになられました。大学の教員時代にも、研究室の学生さんを引率されながら、各地で古代寺院の発掘調査に携わられ、令和2年に御退職されて、現在は駒澤大学名誉教授の御立場で、国分寺市や府中市をはじめ、全国で精力的に御研究活動を続けていらっしゃいます。また、すでに御存知の方もおられるかとは存じますが、昨年12月16日の報道発表で、国の文化審議会が、武藏国分寺の瓦を生産した窯跡でございます埼玉県比企郡鳩山町の南比企窯跡群を、国指定の史跡にすべし、と答申を出しましたが、酒井先生は鳩山町教育委員会の「南比企窯跡群学術評価委員会」の副委員長もお務めでいらっしゃいます。

ところで、会場の皆さまは、稻村坦元という方を御存知でしょうか？今から100年前、武藏国分寺が国の史跡指定となりました時に調査報告書をまとめた東京府の職員です。稻村坦元さんは、その後、故郷の埼玉に研究フィールドを移して、埼玉県史の編さんに携わったり、様々な文化財調査

を牽引されてこられました。

武藏国分寺跡が史跡指定 100 周年を迎えた年に、東京都と国分寺市の共催行事で、古代寺院と埼玉県の遺跡に造詣が深い酒井清治先生に、100 年前、東京・埼玉の遺跡を股にかけて踏査をされました稻村坦元さんの御話を伺いたいと御相談を申し上げましたところ、先生から御快諾をいただきまして、本日をお迎えすることになりました次第でございます。大変貴重な機会でございますし、私自身も 100 年前に活躍された一人の研究者の姿勢を学びたいと思っております。それでは、酒井先生、よろしくお願ひいたします。



図 1

ただいまご紹介にあづかりました酒井と申します。よろしくお願ひいたします。今日は別刷の資料（酒井清治発表参考資料「稻村坦元年譜・著作目録」185～189 頁）があると思いますが、その資料を基に、今日は稻村坦元とはどういう人物だったのかということをお話しさせていただきます。

私は埼玉県に勤務する前、考古学の中でも古墳時代を専門に勉強しておりまして、埼玉県に昭和 55 年に勤めたときには、まだ稻村坦元の名前は全く知りませんでした。しかし、埼玉に勤めて事業団で各部会を作ろうということになって、高橋一夫さんが歴史部会を作ることになり、私もその一員となりましたが、高橋さんによれば『新編埼玉県史』を作るにあたって古代寺院と瓦の研究をしてほしいという依頼でした。私たち全員が瓦について素人でしたが、古代寺院、瓦の資料を探したところ、（旧版の）『埼玉県史』に稻村坦元が

古代寺院あるいは窯跡のこと、さらには寺院関係のものを、窯跡の分布図も載せていて、それを参考にいろいろな資料作りをした記憶があります。

もう 1 つは、柴田常惠という方がこれから出でますが、埼玉県立歴史資料館（現埼玉県立嵐山史跡の博物館）に國學院大学所蔵の拓本資料のコピーがありまして、その拓本を使って『埼玉の古代寺院報告書』を作成した記憶があります。それが現在の関東古瓦研究会の基になっているということです。

今日は亡くなられた方の敬称を省いてお話をさせていただきますけれども、図 1 は『武藏国分寺跡歴史公園ガイドブック』というのが国分寺市教育委員会から発行されており、この表紙を使わせていただきました。左側に「国史跡指定 100 周年」という文字が入っていて、ちょうど良いと思いまして。画面中央が金堂ですね。南側が中門、北側は講堂になりますし、東側が鐘楼、そして国分寺崖線の上の部分に北方建物があるわけですが、そういう伽藍の状況が写真からよく分かると思います。

では、「はじめ」ということで、武藏国分寺は大正 11 年に、先ほど教育長さんがお話しされたように、「史蹟名勝天然紀念物保存法」によって国の史跡指定を受けました（図 2）。東京府は『東京府史蹟勝地調査報告書』という報告書のなかで、武藏国分寺の「実地調査を遂げ、其の結果を報告し、以て史蹟保存の主旨を徹底せんとす」という言葉を序言に書いていますが、稻村坦元と後藤守一によって翌年 3 月に「武藏国分寺跡の調査」を刊行いたしました。武藏国分寺跡は令和 4 年、国史跡指定から 100 周年を迎えたわけです。武藏

#### はじめに

- ・武藏国分寺跡は大正 11 年(1922)10 月 12 日、「史蹟名勝天然紀念物保存法」により国の史跡指定を受けた。
- ・東京府は「(武藏国分寺跡) 実地調査を遂げ其の結果を報告し以て史蹟保存の主旨を徹底せんとす。」として、稻村坦元、後藤守一によって翌年 3 月「(武藏国分寺跡の)調査」が刊行された。
- ・武藏国分寺跡は令和 4 年、国史跡指定から 100 周年を迎えた。
- ・武藏国分寺跡の調査、報告に関わった稻村坦元の事績を紹介する。

図 2

国分寺跡の調査報告に関わった稻村坦元の事績をこれから紹介していきます。

図3は報告書の写真ですが、左側が序言の記載です。その序言の最後のほうに、先ほどお話をしました「史蹟保存の主旨を徹底せんとす」という文言が記されております。

稻村坦元がどういう人物だったのかというところをお話したいのですが、様々なことを行っているので、6つのことに分けてお話をていきたいと思います(図4)。

稻村坦元の主要事績ですが、一つ目は曹洞宗の僧籍としてという、お坊さんだったということです。二つ目は曹洞宗史を中心とした宗教史研究を行っています。三つ目は東京府・東京都、および埼玉県における史蹟・文化財の調査報告、自治体史執筆・編纂、文化財保存活動を行っています。四つ目として郷土史研究会の運営と活動を行っています。五つ目として郷土史研究の執筆を行います。六つ目として金石文の執筆、撰文といふものがあります。

まず一つ目からです。曹洞宗の僧籍としてですが、明治26年(1893)生まれで、明治39年に福井県大野町洞雲寺で出家しました。後に岐阜県八幡町悟竹院で稻村活元につき、嗣法しました。法統を受け継いだわけです。大正10年(1921)に東京府の嘱託になっていますが、大正15年、千葉県君津郡天神山村(現富津市)で見性寺の住職となり、昭和45年(1970)に退隠しております。このお寺に30年間勤められたわけです。昭和41年には曹洞宗大本山永平寺副監院を務めております。副監院というのは大本山の事務を監督する2番目の役職であります。ちなみに稻村坦元は、昭和63年(1988)に94歳で亡くなっています。

二つ目として、曹洞宗史を中心とした佛教史研究であります。大正7年、曹洞宗大学、現在の駒澤大学ですね。私が勤めていたところであります。そこを卒業後、曹洞宗研究生となります。東京帝国大学史料編纂官補の鷺尾順敷について日本佛教史を専攻します。鷺尾は東京府史蹟名勝天然紀念物調査嘱託として、武藏国分寺の報告書に踏

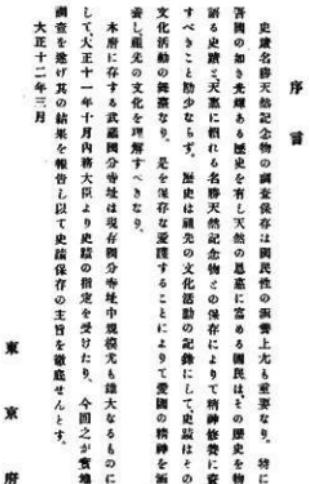


図3

■(2)曹洞宗史を中心とした仏教史研究

- ・大正7年(1918)、曹洞宗大学(現駒澤大学)卒業
- ・卒業後曹洞宗研究生となり、東京市龍谷大学史料編纂室補助員等職につき日本仏教史を専攻する
- ・曹洞宗史料の踏査を重ねて、道元ほかの眞蹟を世に出しその複製を『禪苑墨華』と題し大久保道舟と共に刊行する
- ・大正15年(1926)に曹洞宗史典史料編纂委員会が設けられ事務をにらう
- ・大正5年(1916)から昭和初年にかけて宗教関係の論考を発表し『曹洞宗布教叢書』などにも執筆する
  - ・大正5年「修行力の真義」
  - ・大正12年「道元禪師筆の断定」
  - ・大正13・14年「山陰、西海九州、九州に於ける曹洞宗史料」

図4

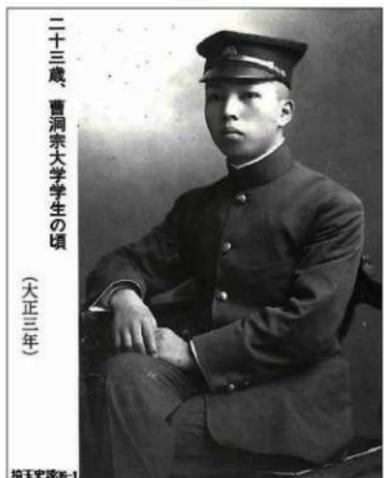


図5



図6<sup>\*1</sup>

出典: 国立国会図書館デジタルコレクション



図7<sup>\*1</sup>

出典: 国立国会図書館デジタルコレクション

査報告を執筆しております。稲村坦元は山陰や九州等の曹洞宗資料の踏査を重ねて、永平寺寺宝の道元ほかの眞蹟を世に出しました。その複製を『禪苑墨華』という名で大久保道舟とともに刊行いたしました。大正15年には、曹洞宗史典史料編纂委員会が設けられ、事務を担います。大正5年から昭和初年にかけて宗教関係の論考を発表し、『曹洞宗布教叢書』などにも執筆をいたしました。図4の下にある文献なんかがそうなのですが、これ以外にもたくさんあります。図5は稲村坦元が23歳のときの曹洞宗大学、学生の頃の写真ですね。大正3年であります。曹洞宗大学(現駒澤大学)一覧を見ると大正7年に卒業したこと、大正10年には研究生になっていることが確認できます。図6が『禪苑墨華』であります。永平寺にあった資料を本にしたわけですが、左側の頁の奥付には、大正14年4月の発行、非売品、稲村・大久保が編集者となっています。図7が内容ですが、道元禪師筆で「法語」、教えを説いたものですね。それから図8が道元禪師筆の「普勸坐禅儀」という書であります。こういうものが収録されています。図9は曹洞宗の布教叢書、布教の手引書みたいなものですが、こういうものにもたくさん執筆されております。

続いて、三つ目として東京都(都)、および埼玉県における史跡・文化財の調査報告、自治体史執筆・編纂、文化財保存活動について。稲村は大正10年2月に東京都史跡保存調査嘱託として、昭和3年(1928)には埼玉県の県史編纂主事、主任と書いてあるものもありますが、両方を兼務したわけです。東京都と埼玉県に分けて、これからお話をいきたいと思います。

東京都のお話ですが、稲村は大正8年、「史蹟名勝天然紀念物保存法」公布後の大正10年2月に東京都内務部学務事課史蹟保存調査嘱託となり、大正12年に後藤と共に「武藏国分寺址の調査」『東京府史蹟勝地調査報告書』第1冊を刊行します。続いて、後藤と3・4・10冊を刊行し、他の編者を含めて共編で2・5・6・7・9冊を

刊行しました。後藤とたくさんこの執筆を続けて  
いるということあります。

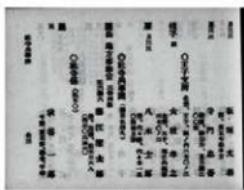
大正 15 年 7 月、稻村坦元は矢吹活禪と「史蹟  
名勝天然紀念物保存協会」の再建を図り、東京支  
部幹事となりました。保存協会の初代会長、徳川  
賴倫が大正 14 年に死去したため、内部大臣が  
新たに会長となり、顧問は渋沢栄一で、保存協会  
が再興しました。史蹟名勝天然紀念物保存協会は  
明治 44 年に徳川賴倫を会長として設立され、保  
存協会の支援のもと、大正 8 年に「史蹟名勝天然  
紀念物法」が成立したわけです。先ほどの話のよ  
うに徳川賴倫が死去したために、新たに稻村坦元  
もそこに加わって再建を図った、というお話であ  
ります。図 10 が昭和 3 年 3 月 31 日の東京府職  
員録であります。稻村坦元は「史蹟係」に名前  
が出てきますか、「内務部社寺兵事課」の「史蹟  
係」の嘱託として載っています。そのときは、この  
職員録は最初に話した大正 10 年「学務兵事課」  
とは違って、「社寺兵事課」に所属していたこと  
になります。先ほどの報告書（図 3）「武藏国分  
寺址の調査」の中身を見ていただくと、図 11 の  
写真左側が金堂であります。そして右側が大塔  
跡（七重塔）です。当時はこのような桑畠の中に  
あり、礎石はちゃんと残っております。図 12 は  
100 年前と今の金堂の比較写真で、保存整備はこ  
のようにならかにできましたが、100 年前の礎石  
が現在もそのまま残っているということが分かり  
ます。図 13 は講堂の写真ですが、講堂も礎石が  
残っていて、現在はこのように整備されています。



図 8 第 1  
善勸生祥儀  
入室後本抄門主元版  
善大造木同道子假外  
宗亲自不候其力也院  
全體也云度成其信傳  
其段之不滿也也也也也  
善天也善傳也也也也也  
失心道也座也輪也也也  
之一个度也走也沈也高



図 9



東京府内務部史蹟係 昭和 3 年 3 月 31 日

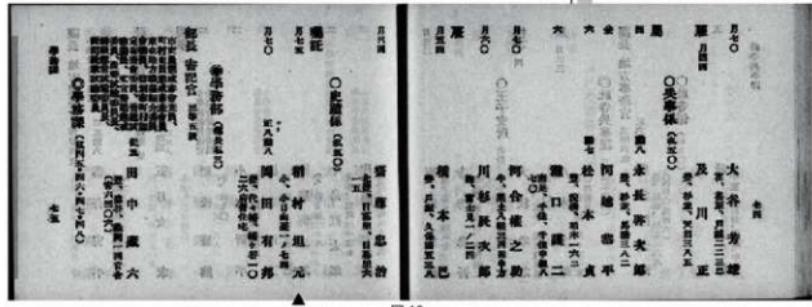


図 10

図 14 は東京府の、先ほどの「武藏国分寺址の調査」報告書の目次であります。ちょっと字が細かくて見にくいと思いますが、詳しく見ていただきますと、国分寺のことだけではなくて、徳川時代からの沿革も載っています。さらには、直接古代の国分寺とは



図 11  
東京府史蹟勝跡調査報告書第一番より

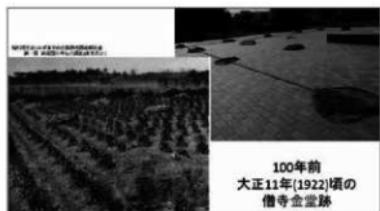


図 12



図 13



図 14

関係がありませんが「青石塔婆」を取り上げ、武藏国分寺の瓦窯跡のことも載せてあります。これは稲村坦元が、青石塔婆や瓦窯についても非常に興味があったようで、稲村坦元は板碑のことを「青石塔婆」と呼んでいましたので、ここでその用語を使用しているようです。瓦窯は、南多摩窯跡群の一大窯と瓦戸窯がここに取り上げられています。

続いて、図 15 は「武藏国分寺址の調査」報告書の中にある図ですが、金堂を中心南東に大塔が、西に西院がありますが、西院が今の尼寺ですね。金堂の北側が北院です。今、北院の付近で堅穴住居跡を国分寺市が掘っておられるそうです。北院にも 2 棟の建物があったと推定されているのは(図 16)、瓦もたくさん出てくる、そして礎石も残っているというところから考えられています。ただ、西院は国分寺と同じ瓦が出るのですが、当時は尼寺とまだ考えていなかったようです。図 17 は金堂ですね。そして僧房とともに礎石から存在を考えているところであります。

図 18 は稲村坦元が報告している板碑であります。既に「青石塔婆」という用語を使っていて、板碑研究が始まっていたようです。この報告書の本文を読みますと「当国分寺境内の西の一画地、字黒崎より発見せるものの數十あり」と、板碑が数十あったよう。そのうち、図 18 の右側が正中 3 年(1326)阿弥陀三尊來迎青石塔婆です。左側が応安 7 年(1374)天蓋華瓶附青石塔婆です。報告書には、この他計 16 点の板碑を一覧で掲載されております。

続いて、東京府の関連調査として、大正 14 年に南多摩郡南村高ヶ坂、現在の町田市ですが、日本最初の敷石住居跡を 48 歳の柴田恒富、37 歳の後藤守一、32 歳の稲村坦元、22 歳の森本六爾らが発掘して、成果は『東京府史蹟勝跡調査報告書』の第 4 冊・5 冊に掲載され、大正 15 年の翌年に国の史跡として早いうちに指定されています。この「高ヶ坂」という地名は、現地名は「こがさか」に統一されているようですが、調査当時

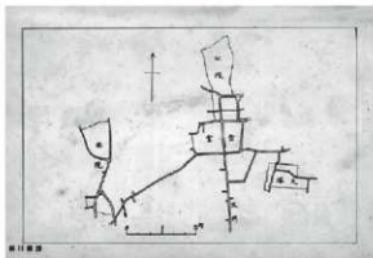
は「こうがさか」と呼ばれていたようです。図19がその報告書になりますが、右側の写真が第4冊に載っている高ヶ坂の牢（牢）場遺跡の敷石住居跡あります。そして、左側の写真が高ヶ坂八幡平の敷石住居です。

続いて図20が第5冊で、左上が高ヶ坂牢場遺跡の敷石住居跡平面図で、左下が高ヶ坂八幡平の敷石住居跡平面図ですね。そして、右上が地鎮祭の写真であります。牢場遺跡と稻荷山遺跡は接しているのですが、八幡平遺跡は北800メートルにあり、縄文時代中期から後期の敷石住居であります。この遺跡を発掘した経緯について、稻村は大正13年の秋頃、高ヶ坂で敷石が出るとの報告を受け、現地で小学校の校長先生であった山本亀三とともに鉄棒で突くと、いたるところで石の手応えがあるので、三尺四方ほどを掘ると、地表下2尺5寸くらいのところに平坦な川石が敷き並べてあることが分かったようです。このことは稻村坦元が後藤守一の追悼文の中に書いているのですが、大正13年の調査には後藤は行っていないようで、報告書第4冊の文章を書いています。

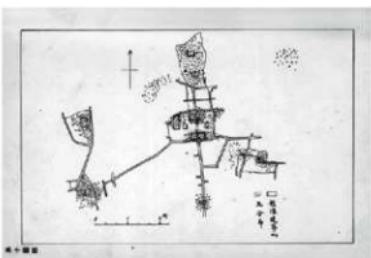
大正14年5月1日に後藤と稻村が高ヶ坂へ調査に赴きますが、農繁期のため10月まで発掘を延期したようです。打ち合わせの行き違いで後藤の出張を待たずして、小学校長の山本亀三などによって牢場遺跡の発掘は終わってしまいましたが、稻村が半ば以上の発掘を監督していたようです。牢場遺跡の発掘の報を内務省の児玉九一と史蹟調査委員の柴田常恵の出張を仰ぎ、10月から柴田常恵の指導の下で発掘が行われ、稻荷山・八幡平遺跡の発見が続いたようです。現在、牢場遺跡と八幡平遺跡は見学者ができ、稻荷山遺跡は埋め戻されているようです。

次へ行きます。図21が東京都南多摩郡日野古墳上にて、という大正15年の写真ですが、稻村坦元は左側ですね。中央に映っているのが柴田常恵です。ちょっと私は右の方を存じていないのですが、分かる人はおられるかもしれません<sup>※3</sup>。

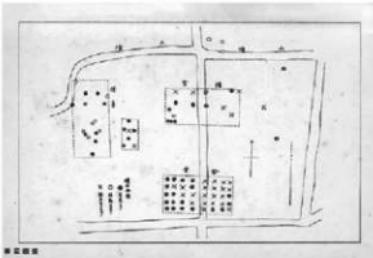
続いて、東京府の報告書の一覧表です（図



東京府史蹟地調査報告書第一冊より  
図15



東京府史蹟地調査報告書第一冊より  
図16



東京府史蹟地調査報告書第一冊より  
図17



東京府史蹟地調査報告書第一冊より  
図18



高ヶ坂八幡平遺跡

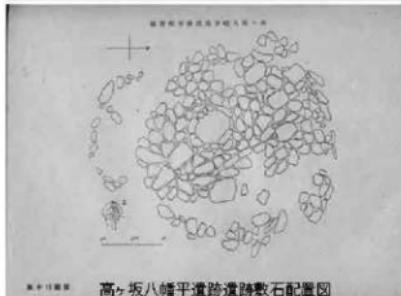


高ヶ坂牢場遺跡

『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第4冊  
南多摩郡高ヶ坂石器時代住居址 大正14年  
国会図書館デジタルコレクション

図 19<sup>※2</sup>

高ヶ坂牢場遺跡敷石配置図



高ヶ坂八幡平遺跡敷石配置図

『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第5冊  
南多摩郡高ヶ坂石器時代住居址 大正15年  
東京都都立図書館デジタルアーカイブ TOKYOアーカイブ

図 20

22)。そこにありますように、後藤守一と稲村坦元が一緒に書いているものが多くあります。天然紀念物のことを書いたり、あるいは府下における重要な遺跡を続けています。そういう中に、第6冊からは「府下における重要な遺跡並びに国分寺、特別史跡建造物」を報告しております。後で見ますが「府下における仏塔建築」として浅草寺・増上寺が戦災で焼け、「天王寺」は寛政3年に再建されて、戊辰戦争の戦火を免れたのですが、昭和32年に「谷中五重塔放火心中事件」で五重塔は焼失してしまったのです。幸田露伴の小説『五重塔』にも取り上げられていますが、図23左が五重塔内壁の壁画であります。残念ながらこれも燃えてしまったわけですが、焼失文化財の記録として重要であります。図24は現在の天王寺跡の写真ですが、塔の基礎が谷中墓地の中に残っています。

稲村は、昭和18年、政府による金属回収に際して、都下及び埼玉県内寺社所蔵重宝類の回収免除のために調査を行ったり、都内の重要美術品等の疎開業務など、文化財の保護を担当しました。戦後も、文化財重要美術品調査員として進駐軍による刀剣回収につき、重要美術品該当作品の調査に従事されています。昭和24年には都の史跡国宝調査員になっています。

昭和25年6月に文化財保護法が公布され、8月に施行されています。この後は、東京都の文化財調査・報告書となります。昭和25年に東京都の文化財専門委員会が設置され、後藤守一が初代の会長になっています。稲村は昭和29・30年に小河内村の文化財総合調査に継続して入っておりました。さらには報告書として、昭和30年、都文化財調査報告書第2冊として、「武藏の青石塔婆」を報告し、昭和31年には都下の三宅島、御藏島文化財調査を3年にわたりて開始して、伊豆諸島の総合調査を続けています。専門員を中心にして約14の分科で後藤が団長でした。稲村の後藤追悼文には、「3年間の調査を終えてから後藤の体の具合が悪くなつたと記されていて、昭和35年に



東京府南多摩郡日野古墳上にて（大正11年）

図21

- ・【東京府史跡調査報告書】第1冊「武藏御分寺社の調査」稲村  
昭元・後藤守一共編 1923年（大正12）
- ・【東京府史跡名勝天王寺の古物調査報告書】第2冊「天然記念物老松  
大木の調査」稻村昭元・吉井義次共編 1924（大正13）
- ・【東京府史跡名勝天王寺の古物調査報告書】第3冊「府下に於ける重  
要なる史跡」稻村昭元・後藤守一共編 1925年（大正14）立川  
善光寺・立川城跡・南足立郡伊丹町の蛭塚・北豊島郡若狭郡静岡  
寺・大出山高尾神社ほか
- ・【東京府史跡名勝天王寺の古物調査報告書】第4冊「府下に於ける重  
要なる史跡」稻村昭元・後藤守一共編 1926年（大正15）  
多摩村カスミノ山、八王子村八王子城跡・南多摩郡原ヶ坂石器  
時代住居跡・神奈川深大寺及深大寺城跡・玉川町上毛毛高寺ほか
- ・【東京府史跡名勝天王寺の古物調査報告書】第5冊「府下に於ける重  
要なる史跡」稻村昭元・後藤守一・田辺泰井編 1927年（昭和  
2）
- ・【東京府史跡名勝天王寺の古物調査報告書】第6冊「府下に於ける重  
要なる史跡」稻村昭元・後藤守一・田辺泰井編 1928年（昭和  
3）



図22

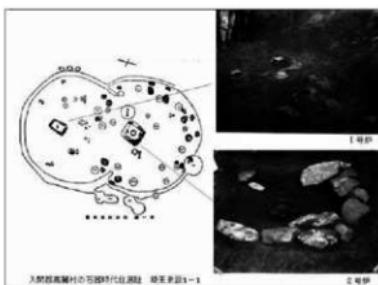


図23



図25 勤務実習記録（昭和6年春） 埼玉史談36-1

図25



入間郡高麗村の石器時代遺跡 埼玉史談36-1

2号標

図26

後藤は亡くなっています。

稲村は、昭和33年から、このように文化財専門委員として多くの報告書を書いております。35年には東京都の推薦で功労者として表彰されたりしております。じつは、昭和39年に東京都教育庁を70歳で退職後も東京都文化財専門委員として、昭和43～46年まで西多摩地域の中世史跡、秋川流域の文化交流遺跡、葛西地区の史跡、荒川流域地区の史跡の調査・報告を続けました。稲村は東京都・都の文化財に43年間勤め、退職後も専門委員として6年と、約50年間東京の文化財に関わっていました。

次に埼玉県に移ります。埼玉県が昭和天皇の即位に関わる御大典記念事業として県史編纂を企画し、稲村は柴田常恵の推薦で昭和3年に県史編纂主事（主任）となります。東京都の嘱託も兼務しております。

秩父宮御台臨に際して、柴田が足立郡新郷村新貝塚、現在の川口市で発掘しましたが、昭和6年にも柴田・稲村で県史編纂のための発掘を行



入間郡高麗村石器遺跡発掘記念（昭和4年6月30日） 埼玉史談36-1

図27

っています。新郷貝塚は明治26年に鳥居龍藏により調査が行われ、昭和18年には東京帝国大学医学部解剖学教室と鈴木尚が発掘調査をしていて、それぞれの調査を合わせて3軒の住居跡と伸展葬3体を含む5体の人骨が出土しています。

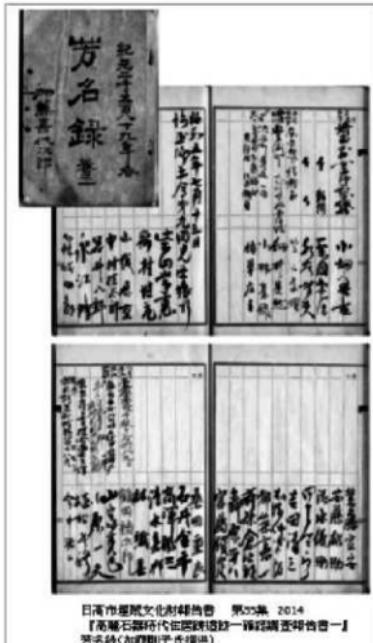
昭和4年に稻村坦元は入間郡高麗村、現在の日高市で石器時代住居跡の発掘を行います。この報告は『埼玉史談』の創刊号に載っております。昭和3年、後藤小学校長から土器や石器が出る場所があると聞いて、加藤喜代次郎の烟を調査しました。縄文時代中期の住居跡が瓢箪形に切り合って2軒発掘したようです。出土状況や出土遺物の点数も記述しており、埼玉県としては最初期の発掘にも関わらず、詳細な報告がなされていました。県内で初となる縄文時代中期の住居跡が発見され、昭和26年に国指定の史跡となっています。

その後も地主さんの加藤喜代次郎が発掘を続け、多くの研究者が見学に訪れてています。加藤は当時としては珍しい航空写真も撮っております。

図25は最初の発掘であった新郷貝塚の発掘風景ですね。奥の左が柴田常恵で、右が稻村坦元であり、人骨が出ている状況です。図26が入間郡高麗村、現在の日高市の石器時代住居跡ですが、炉がございます。瓢箪形の住居跡の左がI号炉、そして右がII号炉です。II号炉の左側の炉石がないのは、恐らく住居跡の切り合いでII号炉の方が古いのだろうと思います。図27は発掘作業の風景写真です。後列の左から二人目が稻村坦元、三人目が柴田常恵ですね。前列左から二人目が加藤喜代次郎です。この人が稻村の発掘を継続して調査を続けたようです。図28は加藤喜代次郎が発掘時に書いてもらった芳名録です。右上の左頁には、「埼玉郷土会第9回見学旅行」として、最初に柴田常恵、次に稻村坦元の名が記されています。そして、次に図29の芳名録右側の右頁二人目に和島誠一の名前が載っていて、左頁には「東京考古学同好会第一回研究旅行」として田沢金吾、大場磐雄、池上啓介、森本六爾、八幡一郎、甲野勇、江上波夫、駒井和愛、末永雅雄、広瀬栄一と、

そういう鉢々たるメンバーの名前が記されています。

息子さんの稻村徹元さんは、『武藏野における社寺と古文化』(稻村坦元論文集・1999年発行)のあとがきで、稻村坦元が「来県当初十年ほどの間には、『なぜ他県の者が埼玉の歴史をいじるのか』との声をたえず耳にしつつ、修史の要を説き、資料調査をした」という当時の史料収集の難しさ



日高市埋蔵文化財報告書 第25集 2014  
〔高麗石器時代住居跡追跡一修復調査報告書一〕  
芳名録(加藤喜代次郎提供)

図28

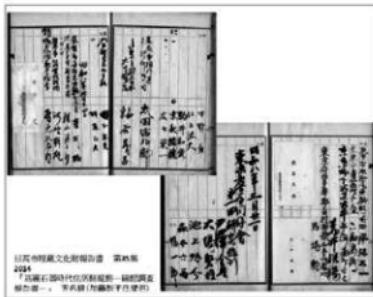


図29

を記されています。

昭和4年から6年は県史編纂史料に資するため、柴田と共に『埼玉県内古記録をあつめた『埼玉叢書』3巻を刊行しています。柴田を監修顧問、稻村は編集主任として、昭和6年に『埼玉県史』の第2巻「奈良・平安時代」を発刊します。昭和14年までに第3巻鎌倉時代、第4巻関東管領時代、第5巻江戸時代前期、第6巻江戸時代後期、第7巻近代を順次刊行していきます。第1巻「先史原始編」はほぼ原稿の完成を見ましたが、戦争のために印刷不能となってしまい、昭和26年になってやっと刊行できて、翌年、稻村は県史編纂嘱託の任を降ります。東京府・都と埼玉県の兼務は23年間続いたわけです。

図30が昭和3年に作った県史編纂事業工程図であります。これから埼玉県史を作るもとの書類であるわけですね。図31が稻村坦元と柴田常恵によって最初に作った『埼玉叢書』で、昭和4～6年までに第1～3巻、のちに昭和45年に第4～7巻を増補しています。そして図32が『埼玉県史』、この第2巻から第7巻までは昭和6年から14年までに出されたのですが、左端が昭和26年に出された第1巻の「先史原始編」であります。図33の図は2巻の「奈良・平安時代」に載せられた奈良時代の瓦窯所在地であります。図に窯跡の分布が示されていますが、東金子窯跡群の新久窯の名前が見えます。坂説秀一先生が掘られた窯ですね。そして、亀井村には、先ほど教育長さんからお話をありました、新たに国史跡指定となった南比企窯跡群で、ここに泉井窯とかの窯跡が載っています。図34は亀井村で南比企窯跡群にあたりますが、須恵器と瓦の窯跡分布図であります。昨年、国の史跡指定の対象になった新沼窯ですね。こちら金沢窯と書かれたところは、かつて國立大学の大川清先生が調査した窯で、小谷窯とか広町窯とありますのは鳩山町教育委員会の渡辺一さんがゴルフ場の建設に伴って調査しました「鳩山窯跡群」です。いずれも武藏国分寺の瓦を焼いています。亀井村の北の方にも、ちょっと

時代は新しくなりますが、たくさんの窯跡が分布しています。これらは須恵器を焼いた窯跡です。図35は現在の寄居町の末野窯跡群ですが、この瓦窯で作られた瓦も約50km離れた武藏国分寺に供給されています。すいぶん北の方からも武藏国分寺に供給されたことがわかります。昭和17年には東京都の水道貯水池候補で、埋没から文化財が多い埼玉県比企郡平村、現ときがわ町を救おうということで、『埼玉史談』特集号を出して文化財保護を目指します。昭和18年には埼玉県史蹟名勝天然記念物の調査員、昭和21年には埼玉県重要美術品調査、昭和23年には埼玉県水害対策編集委員、文部省近世庶民史料地方調査員などを嘱され、昭和32年には、埼玉県文化財保護審議委員となり文化財保存活動に携わります。昭和41年には、多年の文化財保存調査の功績により勲四等瑞宝章を受けました。

四つ目は、郷土史研究会の運営・育成に携わり、投稿もおこないました。武藏野会（昭和23年に武藏野文化協会）、埼玉郷土会（昭和25年に埼玉県郷土文化会）、浦和談話会、多摩史談会、日本郷土会、葛飾史談会などです。なかでも深く関わったのは埼玉郷土会で、県史編纂事務所とともに県立図書館内に設けられた組織です。総裁は県知事が、会長は県内務部長、顧問を柴田常恵、稻村坦元は常任幹事と県史編纂主任として『埼玉史談』を発行するなど、県と民共同の郷土史研究を推進していました。その会の規則第三條に「本会は埼玉県内の史蹟、史料、遺物等の研究及び保存を計り、愛郷の思想を養うを以て目的とす」とあるように、地域郷土史の振興、文化財保護、月例見学会により啓蒙・普及活動を主導していたといえるでしょう。

昭和25年には埼玉郷土会から埼玉郷土文化会となり、稻村が会長となりました。稻村は、東京府へ入ってからまもなく武藏野会へ入会し、大正15年に幹事となり編輯に携わったようです。戦後の武藏野文化協会の『武藏野』にも、都の文化財調査員、同理事として執筆を続けています。図

36が『埼玉史談』の創刊号であります。稻村が編集、発行になっています。図37は埼玉郷土会設立趣意書で、「埼玉郷土会を設立し、県下における史蹟、史料、伝説の研究保存を計る目的とする」とあります。

五つ目として、郷土史研究の執筆があり、有元修一によれば、稻村坦元の著作・論文は300数十余編に及ぶようです。執筆分野は『埼玉史談』をみると、1：郷土史・文書・史料、2：銘文・板碑、



図33



図30

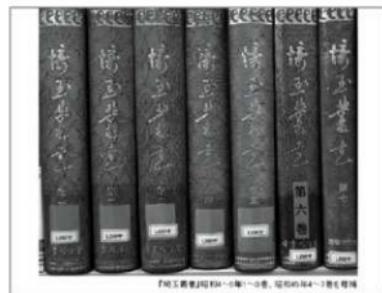


図31

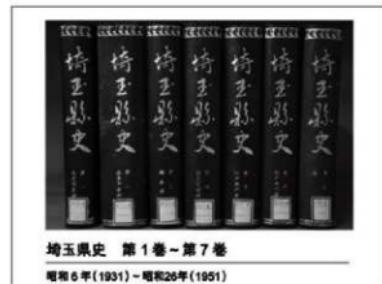


図32



図34

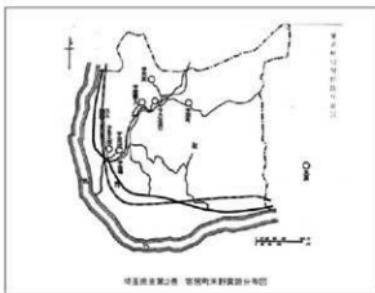


図35

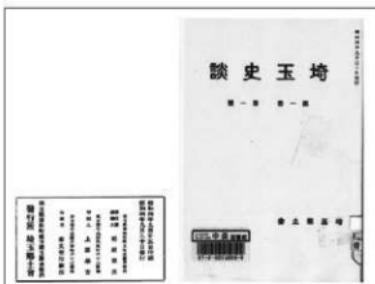


図36



図 37



玉川兄弟銅像 昭和33年9月  
東京都文化財専門委員 稲村坦元撰

図 38

3：人物、4：建築・美術・彫刻、5：名所・旧蹟の順に多く、郷土史、青石塔婆（板碑）、社寺、人物、仏像が多い傾向にあります。

稲村坦元の著書としては『武藏史料銘記集』といいうのがあり、仏像、彫刻、器物、墓塔、棟札、経巻の奥書、肖像画の贊に至るまで、武藏に関する年号のあるものをまとめられています。ここには、「郷土史家はその郷土に現存する資料をありのままに研究者に提供するのが任務であると信じるので、生のままの表現として私見や憶測を加えないこととした」とあります。稲村の考え方を知ることができます。また、青石塔婆（板碑）を「史料」として扱っていることも注目して良いと思います。

六目として、金石碑文の執筆・撰文があります。稲村坦元は埼玉県や東京都において、多くの史跡等の碑文の執筆や撰文を行っています。史跡碑、人物顕彰碑、墓碑、由緒碑などがあります。そういう碑によって郷土史の周知や啓蒙、文化財保護を意図していたのではないかと思います。埼玉県埼玉村古墳群の碑や、東京都羽村にある玉川兄弟碑がありますが、そのほか27箇所におよびます。図38が玉川兄弟の銅像であります。この裏側になりますが、昭和33年、東京都文化財専門委員稲村坦元撰と書いてあります。図39が昭和14年、前年史跡指定となった埼玉村古墳群ということで、柴田常恵が撰、稲村坦元が書を揮毫しています。こういうもので顕彰、啓蒙していくこうとしていたわけです。

稲村坦元の注目すべき業績の一つに、青石塔婆の研究があります。稲村坦元は、先の大正12年の「武藏國分寺址の調査」で、すでに板碑を「青石塔婆」として使用していますが、昭和4年『東京府史蹟保存物調査報告書』の第6冊でも、東村山村徳蔵寺元弘供養塔婆、貞和青石塔婆を報告しています。稲村は、昭和6年『埼玉史談』2巻5号に「北武藏郡龍興寺発見の青石塔婆に因んで板碑の呼称を排す」で、騎西町、現在加須市龍興寺の文永8年（1271）銘の板碑に「青石率都婆」と

いう銘文がみられることから、板碑は当時率都婆であり、「青石塔婆」の名称を提唱しました。

千々和到は江戸時代の文人が名付けた「板碑」という名称が「碑」や「記念碑」を思わせるのに對して、稻村は板碑の本質が「卒塔婆」であることを名称の上でも明確に意図されたとします。現在は、各地の板碑研究が進むと青石以外の石材が多いことから、「板碑」・「板石塔婆」と使われることが多くなるといわれています。

あがた 畑敏夫は『歴史考古学』29号に「稻村坦元における青石塔婆研究の軌跡」を書いています。稻村の「青石塔婆」の提唱について、石材の相違から全國的に使用できない、すでに江戸時代から使われた「板碑」をいまさら変更する必要は無いなど反論が出てきたようで、そのため稻村も「板碑」と併記することが多くなってきます。また、稻村は「板石塔婆」の名称が板碑に比べ本質を言い表した適切なものとしましたが、埼玉県教育委員会の『埼玉県板石塔婆調査報告書』で「板石塔婆」について、「県が統一的に使用されているため、これに従った」としています。それに対しては、「板石塔婆」を考察・提唱した(稻村の)研究史的な業績についての認識の片鱗すらみられない、批判しています。

また、稻村の注目される業績として、昭和初年に埼玉県下の地域研究者と「青石塔婆調査票」による資料収集を行ったことが挙げられます。その成果の一部は『埼玉史談』、『埼玉県史』に掲載されました。しかし、埼玉県教育委員会で出した『埼玉県板石塔婆調査報告書』では、昭和初年の稻村の板碑塔婆に何の言及もされていないことを読者は気づかれるだろう、と千々和到は書いております。稻村坦元の「青石塔婆調査票」を使用しなかったのは、稻村坦元が板碑の調査に郷土史研究者を組織しており、埼玉県で板碑調査をした時代の雰囲気から、私は、在野の研究をあまり評価していないかったためだと推測します。

千々和到は、稻村坦元の「青石塔婆調査票」が、地域に密接した研究者の調査成果であり、現所在

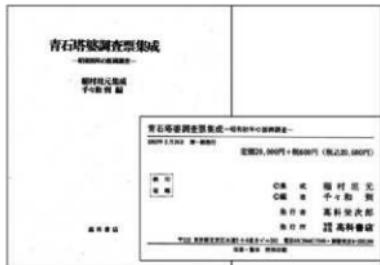


埼玉古墳群碑 昭和14年10月  
柴田常恵著並撰 稲村坦元書

図39

地や出土品、発掘資料が詳しく書き込まれているなど、重要な指摘・史料的価値があると述べております。こういうものが、県の調査には1つも加えられていないかった。その点を指摘しております。

この調査票を調べると、板碑は合計3,012枚を数えるようです。千々和の尽力によって平成5年『青石塔婆調査集成—昭和初年の板碑調査』として高科書店から刊行されましたが、高科書店が、じつは主人が失踪してしまって閉鎖されたため、一般にこの本が流布しておりません。私が探したところによれば、国立国会図書館と国文学研究資料館だけに収蔵されていて、埼玉県や東京都の図書館には全く収蔵されていないため、身近での活用が難しいことが大変残念だと思いました。せっかく千々和さんが作っていたいたのに、残念なことがあります。図40が集成した本です。図41がその中身で、右が稻村たちの当時の「青石塔婆調査票」で、左が青石塔婆集成本の内容です。図42は埼玉県立博物館（現在の埼玉県立史跡と民俗の博物館）に収蔵されている、稻村坦元コレクションで、昭和46年と54年に稻村坦元が拓本などを寄贈していて、2,280点あるそうです。図43



40

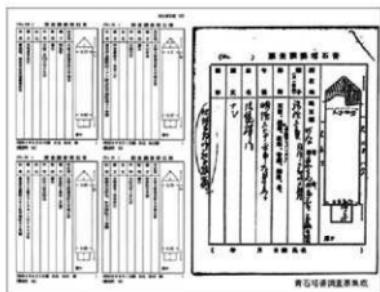


图 41

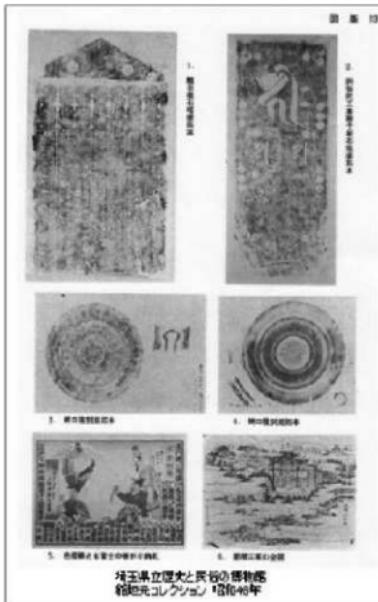


圖 42



埼玉県立歴史と民俗の博物館 稲村坂元古墳群

图 43

がお子さんの稻村徹元さんが埼玉県立博物館に寄贈した拓本32点であります。ちなみに、蔵書は埼玉県立熊谷図書館に稲村文庫として収蔵されているようです。

最後に、柴田常恵、後藤守一、考古学との関わりです。図44にずっと言ってきたことを書いてあるのですが、柴田は内務省地理課嘱託で考查員(官)、稲村は後藤と東京府史蹟保存調査嘱託として業務上の接点がありました。稲村は後藤にも府嘱託職員を引き受けたよう頼みに行き、帝室博物館で後藤や高橋健自に指導を受け、実物実見や、調査の同道で考古学の知識を深めたようです。稲村は大正10年に「永平寺国宝鐘銘」を『考古学雑誌』に投稿していますので、すでに考古学との分野とも関わりを持っていたようです。

稲村と後藤は、大正11年10月からはじめた武藏國分寺跡で一緒に調査を行い、稲村は寺跡の実測調査に土木技師を手伝わせ、後藤には瓦の調査を依頼したようで、翌年報告書を刊行しました。

大正14年には、稲村、柴田、後藤、森本が南多摩郡南村高ヶ坂を発掘し、その後も稲村・後藤は共編として府報告書を作成していきます。

稲村は、柴田の推薦によって昭和3年埼玉県史に関わりました。稲村は昭和4年に入間郡高麗村、現日高町で石器時代住居跡、さらに新郷村現川口市で柴田と共に県史編纂事業として新郷貝塚の発掘をしていて、県内の古墳調査には後藤が委嘱されておりました。昭和7年～8年頃には、石田茂作、柴田、稲村で古寺址研究会を作り、古寺を踏査しております。柴田の瓦は長瀬総合博物館に寄贈されていて、県の指定になっているのが339点ですが、これは現在埼玉県立さきたま史跡の博物館に収蔵されています。國學院大学所蔵の「柴田常恵写真資料目録Ⅰ」にも、「稲村担元ヨリ」の写真が含まれています。また、稲村と後藤は戦後も都文化財専門委員として西多摩郡、伊豆諸島の調査を行っています。

このように稲村坦元、柴田常恵、後藤守一との関係は深く、稲村は二人との調査を通して考古学

### ■ 柴田常恵、後藤守一、考古学との関わり

- ・大正8年(1919)に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が公布され、柴田は内務省地理課嘱託で考查員(官)、稲村は後藤と東京府史蹟保存調査嘱託として、業務上の接点がある。
- ・稲村は大正10年(1921)2月に嘱託となり、帝室博物館で後藤や高橋健自に指導を受け、実物実見や、調査の同道で考古学の知識を深めた(「武藏野」後藤守一追悼号)。
- ・博物館監査官であった後藤は、大正11年4月に府嘱託となり、10月から武藏國分寺跡の調査に入り、稲村は寺跡の府土木技師を手伝わせ「実測調査、後藤は瓦の調査を行い、大正12年(1923)報告書を刊行した。
- ・大正13年(1924)報告書、稲村は南多摩郡高ヶ坂で敷石がぐるとの情報を得て出掛け、振り下げで敷石へられた状況を権院御報告書第4回)。大正14年10月、柴田・後藤・森本らと再発掘する(報告書第5回)。
- ・稲村と後藤は、共編として都報告書を作成する。

図44

に精通していったようです。

最後に、稲村坦元は東京堂で出した『日本考古学辞典』(日本考古学協会編)で、10項目を書いています。八幡一郎は、その序で「日本考古学協会員に執筆を分担するよう計画された」と記していましたことから、日本考古学協会事務局に何って稲村のことを調べてみたところ、稲村が昭和25年に「会員調査表」を出しており、日本考古学協会の会員になっていることが確認できました。図45は昭和35年3月の会員名簿ですが、稲村が下から3行目に載っています。図46は稲村が昭和25年に会員になるために提出した会員調査表で、日本考古学協会は昭和23年に誕生していますから、その2年後です。ガリ版(臍写版)で刷った調査表で、ここに「会員調査表」とありますし、個人情報に関わるところは私がマスキングしてお示ししておりますが、当時は上質紙がない時代で、藁半紙に書いて会員に申請したようですね。用紙は見て分かるように、既に朽ちかけている状況であります。こういうものを、ぜひ日本考古学協会でも保存して歴史史料として公開してほしいなと思っています。

最後に簡単にまとめをいたします(図47)。稲村は僧職にあり、仏教史料調査・研究により仏典に精通して、東京都(府)・埼玉県の史跡、文化財の保存に関わり、武藏における郷土史研究の第一人者の1人といえます。その学問に対する姿勢は、僧籍あるいは仏教史研究者としての基礎が根底にあり、東京・埼玉を含めた武藏の史跡、文化



図 45

日本考古学協会提供



図 46

日本考古学協会 会員調査表 日本考古学協会提供

・稻村は、柴田の推薦により埼玉史跡審議會に渡り、昭和4年(1929)入間郡高幡村(現日高市)石器時代住居跡を発見。昭和6年(1931)足立郡新井村新井貝塚(川口市)を柴田と共に「東史跡審議會」として開催する。浜の古湯廻遊には後藤が登場される。
・昭和7・8年頃に、石田慶作、柴田、稻村で古寺址研究会を作り古寺を調査する。柴田は瓦の收集を53年間行い、「長瀬綜合博物館旧蔵 指定文化財『古瓦』」に339点がある。
・稻村は、後藤と都文化財専門委員として、昭和30年(1955)前後に西多摩郡、伊豆諸島の調査を行っている。
・稻村坦元は、柴田英志、後藤守一とともに調査を通して考古学に精通していくようで、日本考古学協会が創設し2年目の昭和25年(1950)には日本考古学協会員になっていることが確認できた。

図 47

財に関わるなかで、考古学も含め多方面に関心を持ち、自ら赴いて調べ、正確に捉える視点を持ち、稻村坦元の郷土史研究を形作ったと言えると思います。

その過程で、昭和4年に始まった『埼玉史談』を現在まで継続させたこと、そのなかで現在、確か令和3年で通巻331号、65巻になっていると思いますが。そのなかで講演会、展覧会、座談会、見学旅行等を続け、さらには自らの執筆により文化財の保護、啓蒙普及活動を指導したことは、稻村坦元をさらに評価すべき人物であることを改めて再確認しました。

しかし、今回調べてみてわかるように、稻村坦元が残した、書いたものは膨大にあり、一部しか紹介できませんでした。有元修一さんによると、三百数十の書いたものがあるということでした。ちょっとそれを調べることを到底考えませんでし

たけれども。あと、稻村坦元を偲ぶ文章を見ますと、多くの人は見学旅行や談話会で大変感銘を受けて、稻村を慕っていたことが分かりました。

駆け足でお話しして、稻村坦元の、本当は板碑研究のさらに先を御話したかったのですけれども、時間がなくちょっと飛ばしてしまいました。これでお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

#### 【注】

※1 (図6、7、8) の出典は、道元 著 ほか『浮庵墨華』、浮庵墨華刊行会、大正14。  
国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/967424> (参照 2023-03-16)

※2 (図19) の出典は、東京府編『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第4冊(府下に於ける重要な史蹟2)、東京府、大正15。

国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/983862> (参照 2023-03-16)

※3 (図21) 写真は日野市指定史跡「上人塚」で、右端の人物は立川民藏である(立川事務局調べ、日野自動車株式会社2014『日野市指定史跡 上人塚の調査』p.3より)

## 稻村坦元年譜・著作目録

稻村敬元編『武藏における社寺と古文化』(稻村坦元論文集) 一九九九

他に「稻村坦元先生年譜及著作目録」が『埼玉史叢』稻村坦元先生特集号第三六卷第一号 一九八九 にある。

## ■ 年 譜

- 明治 26年  
7月 19日。『へん!!』。同月十九日口瘡の発出は六月一日  
翌年には同月十九日を誕生日と自叙した。酒井幹大  
野町に生まれる。石川安政三男、幼名は雄太。母、  
お母さん。石川氏の祖は林氏といい近畿東間に、英源  
へ現候車市北源から。真宗教徒手傳に入りたて大  
野町に移りへんといふ。
- 35年 3月 大野町御茶寺(吉野院)、大河原金につき出家くら  
候草野人傳御行徳御行徳につき御行徳御(通号)  
は大河原元子。
- 44年 1月 父父高義七十一年にして御行徳(通号)は昭和八年十二月、  
八十二歳にして歿す。
- 45年 3月 酒井県立大野中学校卒業。学生会主事。三氏と上京、東洋  
大学(東陽光学大学)入学。本郷寮板、長嶋寺に寓す。
- 大正 7年 7月 曹洞宗大野中学校(現第一中学校)卒業後は曹洞宗寺  
学生を命ぜらる。東洋大学大野中学校高等部修業  
にこじて口不似故父を尋ね。山崎・大村等の茶室守候  
を諮詢する。
- 8年 4月 『史蹟名勝天然記念物保存法公布』。
- 10年 2月 東京都史跡保存委員会議長。
- 12年 5月 「東京府史跡保存委員会」正門開設。また、この年に
- 12年 4月 佐藤市長を監督役に高木政(現前田市)にて収貯の敷石  
生垣等を築田幸三。佐藤市一はかと園主(これが園主初  
の石垣時)に敷石の生垣施設の發見。
- 13年 4月 不夜城(みやこまつり)と相模。当頃、小石川小日向  
台町つゝで下野下草野郷の内から同地廻町(赤羽)に遷  
住す。
- 14年 4月 大学在学中より各地に書籍古文書の踏査を重ねたが、  
水平寺寺主さまである宗祖道院はかの真跡を認定してその複  
製『御茶寺』(大河原先生著)を行。
- 15年 7月 この年、中野を鎌田松之助(今井松之助)の耳傳と学友矢  
吹忠徳(ちひき)から、東京文部省監修しなる。實業宗良美  
科園長。
- 15年 10月 千葉朝勃(鎌田天神山)に「元承年間開拓といふ萬葉山  
是姓任事に號す。(昭和四十五年追記)
- 昭和 2年 10月 佐藤市長を日本文部省に議長としての就職を受取(後  
年、東京府議会の議長)。田辺春は令賀主として特  
別係長選舉に當り。
- 3年 4月 埼玉県立農業大学(現埼玉県立農業大学)にて研修を受ける。相  
模玉前で農業大学令賀主として研修を受ける。相  
模玉前で農業大学令賀主として研修を受ける。

- 4年3月 国立美術館を訪問。  
4年5月 埼玉県土会を開催。県立美術館を中心とした施設（美術館）開館式にて、県内の人見同様による舞士古事記を披露。九月歌舞伎「埼玉忠臣」開幕（十七年九月まで刊行。最後「武蔵野忠臣」として復刊）。  
6月 附下寺羽より浦和市原町に移る。この年、埼玉石川安吉（仙台の葉子酒井氏佐助）三男清（前半誕生のち後元と改名）を養育子とする。  
6年 埼玉忠臣ら人見忠政に賛成するため「埼玉忠臣」（狭田一著）刊行。  
5年10月 県立美術館の同好者による講和説明会を開催（昭和十七年八月から二十六年七月）、第二十三回まで続行。  
6年12月 「埼玉忠臣」刊行開始。第一回は「第一卷 桑良・平安時代」（第一卷は、考古学上の成果を知識未有とした「桑原國留和二十六年刊」）。  
以後、「第三卷 藤倉時代」（昭和八年十一月）「第四卷 関東管領時代」（九年十一月）「第五卷 江戸時代後期」（十一年三月）「第六卷 江戸時代後期」（十二年五月）「第七卷 近代」（十四年五月）を順次刊行。  
11年11月 豊島名勝天然紀念物保存会設立（十五周年記念に際し、地方公認として文部大臣より表彰）。  
17年9月 東京都の木造駒木船修理所これまで埼玉県比企郡平村を移す（同じくこの年、その頃が文化財に貢献したことを説く）。
- 27年11月 埼玉県教育委員会「教育文化功労者顕彰」。  
28年6月 埼玉県文化記念事業会員登録。  
31年7月 東京府による継子・三宅義・源蔵文化賞受賞。  
以後数年、毎年この賞を受ける。  
31年10月 「江戸城城五百年記念大東京祭開催」。  
32年4月 埼玉県文化功労者顕彰受賞。  
33年6月 東京府文化功労者顕彰受賞。  
34年7月 埼玉市記念植樹十一年春市道桜吹雪祭典に文化功勞  
35年1月 降く「義理の木」植樹。七月五日能楽記念式典舉行。  
35年1月 文化功労者顕彰式にて「東京府文化功労者顕彰」に  
よる功労賞として表彰。  
38年1月 埼玉新聞より「埼玉王文化賞（高麗酒門）」受賞。  
39年3月 東京府教育賞「貢献賞」（五月よりは二年、毎年日本全国書類収集の達成度木（浦和市居住、浦和諸説会会員）  
旧姓の名前を贈る）  
40年5月 育樹市長紹介書を横浜市本郷町「氏主堂」に、横浜市  
長「東路の住友」贈り謝辞。贈呈。  
41年1月 多年ぶりに文部省文化功労者顕彰の功績ありとして、前回  
贈呈式を受贈。「十二月」後藤近松にて舞鏡と「武蔵  
忠臣抄記念」（東京堂出版）出版祝賀会開催。  
東京・埼玉を対象とした全国文修会・文修説会（振興）  
の舞鏡会記録を取らぐ舞鏡会（こじはやの会）も舞鏡会  
を全国「埼玉忠臣」以舞鏡を発起するほか、百余点  
を含めた舞鏡版の刊行を実現するにいたるまで全国とし  
たが実現しなかった。
- 18年6月 「埼玉忠臣」特別号刊行。（同誌は今にして休刊）  
18年7月 「東京忠臣」市合版として印刷となる。所載の文庫圖書購  
入券・購入券等は教育局に属す。  
18-19年 聖母行政府の一環としての文庫圖書刊行運動に随して、東京  
都下および埼玉県内公社所蔵文庫の回取充盈のため  
の調査および専門文庫新築品等の撰画業務に当たる。  
**（歌手公選）**  
21年3月 文部省重要美術品出図書賞。五月には埼玉県重要美術品  
圖書も相当。その後は新たに連続車による刀剣回収作業  
に対し、その重要美術品圖書賞作品の圖書に從事。  
23年2月 「埼玉県木琴記」圖書受賞。  
25年5月 文部省文化部賞受賞。  
25年12月 繁前の大正忠臣を復活した埼玉県忠士文化会が結成され、会紙に掲載される。（翌年六月第1回見本。懇親  
会「武蔵野忠臣」を「十七年二月刊行」二十一年五月、  
四回目より舞鏡の「埼玉忠臣」に復す。）  
26年3月 「埼玉忠臣第一卷 安政忠臣時代」刊。全七巻を完結し、二十七年六月、県史編纂事務所解かれること。  
27年3月 東京新聞社による毎月1回の「文化功労者」はじまる。（一七回昭和四十一年五月まで刊行）  
この間から、東京地下、三重野間に而面接の結果、  
同地域歴史の振興につどかる。
- 44年9月 駿府市にて、埼玉県忠士文化会の建立四十周年記念祝  
賀会開催。  
45年4月 埼玉忠臣記念図書記念館（いまだ）開館（いよいよいよい  
建物（約1100席。郷村文庫として別室）  
46年10月 大宮市にて埼玉忠士文化会第十五周年記念祝賀会  
46年7月19日 埼玉県忠士文化会創立三十周年記念祝賀会。社団費  
後の各局。  
46年8月 埼玉忠士文化会奈良忠徳会名誉会員に選出。  
50年6月24日 駿府忠士祭奉事（櫻見市内美木寺經へ入社）加賀。  
53年4月17日 埼玉忠士文化会第十四回舞鏡会開催。舞鏡山所在  
の市忠義庵、自作絵軸の舞鏡に贈歌。

《数据C端》



- 5年4月 御初に名残を留むる通語帳(表一一一)  
5年11月 小川大慶寺の六角塔に銘文(鎌王史稿一一一)  
5年12月 福澤寺に御持を記載して(寶圓茶全榮壽金經一七)  
6年1月 久保田神社及び大慶寺日吉の記 竹浅生(鎌王史稿一一二三)  
6年3月 人文文政史より見る大宮(鎌王史稿一三四)  
6年5月 北坂玉勝院寺後院の寶石寺等に因て新廟の移転を  
　　増す(鎌王史稿一四五)  
6年7月 宝治三年在福澤通事寺如意三藏 竹浅生(鎌王史稿一四六)  
6年7月 六角塔建立にその額記題に就いて(考古學報一三一  
　　一七)  
6年9月 長久寺の写經—史料的考察に就いて(鎌王史稿三  
　　二)  
6年12月 杉山俊松の信宿について(杉山俊松園會稿一)  
6年 地方史資料とその史料 岸川誠謙・栗原千重子に就いて(栗  
　　原千重子 川越慶元大手町源流)  
6年 東京府下の新しくて古(鎌王史稿五七一)  
7年1月 3月 久喜茶全榮寺のそのもの(鎌王史稿三一三一)  
7年7月 青石寺塔頭の移転に就いて(鎌王史稿三一六)  
7年7月 山口村日吉堂の記 竹浅生(鎌王史稿三一六)  
7年9月 輪光寺通事院の記(鎌王史稿四一)  
7年11月 鎌能院附の宝持探詔(鎌王史稿四一)  
8年1月 鶴和町見度院通事院の記(鎌王史稿四一)  
8年3月 石豆瀬保保青石寺等塔頭に就いて(鎌王史稿四一)  
8年3月

- 8 年 7 月 菊野町坊敷屋の貞和・1年青石万方(姫王中経 四一六)  
8 年 11 月 仙堂寺藤原の萬業兼ゆと姫王 川口泰振共著(姫王中経 五二一)  
8 年 11 月 江州河井郡鹿子守における茶の煎歌の歌歌(春明)  
9 年 2 月 鶴若の第一集(鶴若 三一)  
9 年 3 月 年貢附近の郷土史料(姫王中経 五一四)  
9 年 3 10 年 3 月 聞覚院と上杉氏一(木瓜く源谷等士会  
11 三)  
9 年 5 月 鹿丸中興と貞辰(姫王中経 五一五)  
9 年 7 月 國宝金剛佛坐像を主導に數以て(姫王中経 五六)  
9 年 7 月 北都式庭寺古跡(姫王中経 五一六)  
9 年 11 10 年 1 月 姫王孫の治水と開墾(上一ト)(姫王中経  
六一ー一)  
10 年 6 月 寺院の門前より朝敵寺や(西山公経 四一六)  
10 年 9 月 異姓御館事と後醍醐天皇の生れ(姫王中経 七一)  
10 年 11 月 山東大氣の報書に係る大國忠光墓誌並行文(佐野  
11 一ー一)  
11 年 3 月 姫王に対する切支丹茶役の清状 金齋常安共著(姫王  
中経 七一四)  
11 年 5 月 小糸・小室・岡戸の史料見学記 竹瀬生(姫王中経  
七一五)  
11 年 7 月 大木田源輔公と武藏 小川元吉共著(姫王中経 七一六)  
12 年 6 月 聞覚院方の仏教文化(西山公経 六八)  
12 年 7 月 河村利家と其の妻の新來(西山公経 天慶記念館 一一六)  
12 年 7 月 丹波守田町坊吉田の記 竹瀬生(姫王中経 八一六)

- 12年 9月 出版よりり見だる埼玉文化（埼玉史稿 九一）
- 12年 9月 鎌谷じとる（鎌谷博士会報 二二）
- 13年 3月 武藏上野史料の相互移動 桐川龍造著者（埼玉史稿 九一四）
- 13年 5月 西京新報と大宮水戸报社行春報開幕（埼玉史稿 九一五）
- 13年 7月 歩説ふ金石證談（東陽米菴 一〇〇）
- 13年 8月 金剛寺不動尊像の背説（多摩安政 六一三・三）
- 13年 9月 水戸社勧業貿易展開の記 竹添生（埼玉史稿 一〇一）
- 13年 11月 青石塚の因定（園部 一七一）
- 14年 3月 朝鮮の酒田代二事（埼玉史稿 一〇一四）
- 14年 5月 平井春闇山東流と藤原の行跡 竹添生（埼玉史稿 一〇一四）
- 15年 2月 國家に於ける御殿長子像（園部 三三一）
- 15年 3月 第一回埼玉縣主官僚家庭文化の大會の開催 竹添生（埼玉史稿 一〇一四）
- 15年 5月 金剛寺川川町御殿長子像 竹添生（埼玉史稿 一一一五）
- 16年 1月 勝利城に就いて 竹添生（埼玉史稿 一〇一三）
- 16年 11月 小手相撲六國戦を中心とする古史記摘要（新馬士記 一〇一三）
- 17年 4月 奈良時代御殿長子像の位置に就いて（埼玉史稿 一三一三）
- 17年 9月 安政の御殿社会平井（埼玉史稿 一三一四）特集号
- 17年 10月 平井伊勢御殿の開拓（新馬士記 一〇一四）
- 17年 12月 武藏府公文式研究（新馬士記 一〇一四）
- 18年 2月 武藏府公文式研究（多摩安政 一〇一四）
- 18年 2月 松平義典公の逝世に及ぼせる感に影響（日本学術研究 三一一）
- 18年 8月 「真園文化の傳承研究会」
- 18年 10月 三河平井伊勢御殿と平井義典（園部 五一〇）
- 18年 12月 武藏府公文式に関する記録（多摩安政 一〇一四）
- 18年 11月 文豪梅雨御殿と御殿が御殿の位置に就いて（文豪を讀む会総合講 一八一）
- 18年 9月 本門寺山門の金に文（新馬士記 一九一）
- 18年 10月 鶴林院正林御殿和歌伝（埼玉人六一九）
- 22年 3月 武藏府公文式（新 一三一）
- 22年 5月 埼玉博士会回顧（新 一）
- 22年 10月 外洋父の古絵を前にて（勝利）（新 一三一）
- 22年 12月 江口龍溪寺の御殿（新馬士記 三三）
- 23年 1月 丹那野村と御殿（丹那野村社報）
- 23年 1月 桂木と治木（桂木木 一〇一三）
- 24年 3月 金剛寺の御殿（東京青年少年情報 一一一）
- 24年 5月 勝利の古絵と御殿の整理（新馬士記 六）
- 24年 9月 武藏府の奈良時代文化（新馬士記 一〇一四）
- 25年 5月 武藏府の文化史（東京都市教育 二二）
- 25年 12月 佐倉市中の御殿と奈良文化（新馬士記 一三一三・四）
- 26年 8月 畠山御殿の因定（新 一五一八）
- 26年 11月 奈良御殿の因定（奈良御殿 四四）
- 27年 1月 埼玉御殿の歴史（新馬士記 一）

- 27年 2月 金剛寺御殿の回顧（新馬士記 一一）
- 27年 4月 金剛寺御殿の回顧（新馬士記 三三一・四）
- 27年 6月 井出御殿御殿御殿出山御殿（新馬士記 一三一）
- 27年 7月 金剛寺の御殿（新馬士記 三一）
- 27年 9月 大久保御殿御殿御殿（新馬士記 三三）
- 28年 2月 父父宮の御殿（新馬士記 一六）
- 28年 4月 牛出御殿の御殿（新馬士記 三三一）
- 28年 8月 金剛寺の御殿（北史）
- 29年 6月 金剛寺出山御殿（新馬士記 一）
- 29年 10月 江口御殿の御殿（新馬士記 一）
- 29年 6月 金剛寺の御殿（新馬士記 三三一・四）
- 29年 9月 日本の御殿（新馬士記 一）
- 30年 1月 小林の御殿（新馬士記 三三一）
- 30年 10月 金剛寺御殿御殿（新馬士記 一）
- 31年 2月 金剛寺の御殿（新馬士記 三三一）
- 31年 3月 国立新美術館御殿御殿（新馬士記 三三一）
- 31年 4月 正理寺をめぐらして（村越・田代）（新馬士記 三三一）
- 31年 5月 大田御殿御殿（新馬士記 一）
- 32年 6月 大田御殿御殿（新馬士記 一）
- 32年 8月 例説化の御殿（新馬士記 一）
- 32年 10月 御殿御殿御殿（新馬士記 一）

- 33年 1月 東京御殿文化研究会（新馬士記 一）
- 34年 3月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 34年 3月 佐川千秋の御殿（新馬士記 一）
- 34年 6月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 34年 6月 文化御殿御殿の令（新馬士記 一）
- 34年 8月 佐川千秋の御殿（新馬士記 一）
- 34年 10月 小谷山御殿（新馬士記 一）
- 34年 12月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 35年 1月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 35年 2月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 35年 3月 佐川千秋の御殿（新馬士記 一）
- 35年 4月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 35年 7月 丹那御殿（新馬士記 一）
- 35年 10月 奈良の文化院と御殿（新馬士記 一）
- 36年 1月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 36年 2月 三河平井伊勢御殿（新馬士記 一）
- 36年 3月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 36年 6月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 36年 6月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 36年 8月 金剛寺御殿（新馬士記 一）
- 36年 8月 三河平井伊勢御殿（新馬士記 一）
- 36年 10月 埼玉に於ける田代の御殿（新馬士記 一）
- 37年 1月 金剛寺御殿（新馬士記 一）

- 一月号)
- 昭和 5 年 5 月 塔玉文化の土壤(1) (塔玉文庫 九—1)
- 昭和 7 年 7 月 狩牛書常光院御教 (塔玉文庫 九—1)
- 昭和 8 年 2 月 塔玉御文の本と特徴 (山縣人良編 7)
- 昭和 8 年 5 月 新進作家の本と特徴 (新進文庫 四 1—11)
- 昭和 8 年 7 月 青石等著作の本と特徴 (塔玉文庫 10—1)
- 昭和 8 年 8 月 藤田金次郎著「塔玉」 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 9 年 1 月 塔玉の著者別本 (塔玉文庫 10—11)
- 昭和 9 年 2 月 塔玉の著者別本 (塔玉文庫 10—11)
- 昭和 9 年 6 月 関東豪傑の記念版 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 10 年 10 月 井上謙三著「塔玉」 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 10 年 11 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 11 年 8 月 平賀英治にゆかりの著者別本 (塔玉文庫 11—11)
- 昭和 12 年 1 月 塔玉の著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 12 年 1 月 塔玉の著者別本 (塔玉文庫 11—11)
- 昭和 12 年 2 月 塔玉 (塔玉文庫 日付不詳)
- 昭和 12 年 7 月 実業団体被記載本 (実業文庫会員 二—1)
- 昭和 12 年 7 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 12 年 7 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 12 年 9 月 中山の本と塔玉著者別本 (つらわ文化 1—8)
- 昭和 12 年 11 月 美術館に見る人物 (塔玉文庫 11—14)
- 昭和 12 年 12 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—13)
- 昭和 13 年 7 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—13)
- 昭和 13 年 7 月 立教日報に見える塔玉の筆跡 (塔玉文庫 11—11)
- 昭和 14 年 1 月 田原市立図書室本著者別本 (塔玉文庫 1—1)
- 昭和 44 年 4 月 大蔵文庫と書 (つらわ文化 11—1)
- 昭和 45 年 1 月 玉川土木文庫の着目 (東京文庫 海岸山越先端研究)
- 昭和 45 年 1 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 45 年 4 月 配送実績十文紀念刊行十年の歩み (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 45 年 7 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 45 年 10 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 46 年 1 月 関東豪傑の記念版 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 46 年 5 月 東洋古文書の出生地について (文庫新 五 1—1—1)
- 昭和 46 年 6 月 伝説古文書の伝説 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 46 年 12 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 47 年 10 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 48 年 1 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 48 年 10 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 49 年 4 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 49 年 7 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 50 年 10 月 本屋における書の分類 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 50 年 4—7 月 本屋著者別本 (塔玉文庫 11—1—1)
- 昭和 51 年 2 月 その後の塔玉著者 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 52 年 1 月 北全集著者別本 (北全集) (塔玉文庫 11—1—1)
- 昭和 52 年 7 月 草野源藏著者別本 (草野源藏) (塔玉文庫 1—1)

—11)

- 昭和 52 年 7 月 例外にあたる文化財 (塔玉文庫 11—1—1)
- 昭和 54 年 1 月 美術館に見る人物 (塔玉文庫 11—1—4)
- 昭和 54 年 12 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1—3)
- 昭和 55 年 7 月 塔玉著者別本 (塔玉文庫 11—1—3)
- 昭和 56 年 7 月 塔玉文化・第三十六回西山町記念講習式く日本百選著者別本 (塔玉文庫 11—1)
- 昭和 57 年 1 月 本の心から (塔玉文庫 11—1—4)
- 昭和 57 年 7 月 「多摩博士研究の会」 懐古 (多摩博士研究 五六八回 立教三十周年記念特集)
- 昭和 57 年 10 月 堀越河宣雄の著者について (塔玉文庫 11—1—3)

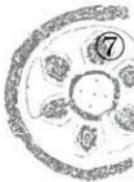
### （著者・編者）

- 昭和 6 年 7 月 青石等著 (板垣) 「日本考古図像大成」 日東書院
- 昭和 11 年 9 月 板垣 (青石等著) 「仏教考古学講述」 雄山閣出版 (昭和四十五年復刊)
- 昭和 14 年 11 月 南朝秘史 谷口義共著 新田柳井書会
- 昭和 18 年 6 月 新田氏勅王事蹟に関する著者別著者について 大政報
- 昭和 26 年 11 月 下北村史 著者一三郎共著 塔玉著下北村史著者別
- 昭和 30 年 3 月 横川町史 著者一三郎共著 塔玉著横川町

- 昭和 30 年 4 月 東京の史蹟と文化財 豊島實共著 その他
- 昭和 34 年 10 月 武藏野の青石等著 塔玉著者別本 (昭和十三年三月、東京都教育委員会「東京都文化振興委員会報告書」) 三十九年六月、四十八年十月と内容・付録資料・図版を異なる各版があり、後掲の黒氏論文に詳しく述べる。
- 昭和 41 年 11 月 東京中経出版 塔玉著者別本 (昭和八年九月、正誤、補正可否)
- 昭和 53 年 1 月 塔玉著者別本 (昭和六年九月、塔玉著者別本) のうち、相当執筆参考用圖の復刻

\* 東京府・塔玉著者のかの著者による公刊書

- 東京府史蹟名勝天然記念物院藏本 (昭和十五年) (第 1 号は「東京府史蹟名勝天然記念物院藏本」)
- 圖書叢書「伊く野やみのふらと東京府」明治法律叢書 (昭和十五年) (著山家共著) 「野や花林津井社説」在原津社譲付 (昭和十九年) は、監修書・分担執筆書「考古学辞典」「国史大辭典」「塔玉著人傳記」等、および「津井圖書」(大久保道子著)と並んで大正十四年(1925)はかなり書籍系関係著者とともに存命中だ。前掲の「津井圖書」指出の「塔玉著者」(田原)と併せ、後掲の「塔玉著者」を参照されたい。



## フィールドワーク「史跡武蔵国分寺跡を歩く」

漁邊曲子（国分寺市教育委員会）

講師：小川祐満・武藤功（国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア）

時間	会場		
9:30	受付開始		
10:00	第6回歴史講座（ボランティア養成講座）開始 ・挨拶 ・本日の流れ ・諸注意 ・講師紹介 ・イヤホンガイドの装着説明		
	① グループ	② グループ	
10:15	万葉植物園（5分） ・櫻門	10:10	おたかの泡湧水園 ・武藏国分寺跡資料館（20分） ※メインは資料館
10:20	武藏国分寺跡（20分） ・講堂 ・金堂 ・中門	10:30	万葉植物園（5分） ・櫻門
10:50	武藏国分尼寺跡（10分） ・金堂 ・仏壇展示 ・尼坊	10:35	武藏国分寺跡（20分） ・講堂 ・金堂 ・中門
11:10	文化財資料展示室（5分） ※トイレ誘導（必要な人）	11:05	武藏国分尼寺跡（10分） ・金堂 ・仏壇展示 ・尼坊
11:20	七重塔跡（5分）	11:25	文化財資料展示室（5分） ※トイレ誘導（必要な人）
11:30	真姿の泡湧水群（5分）	11:35	七重塔跡（5分）
11:35	おたかの泡湧水園 ・武藏国分寺跡資料館（20分） ※メインは資料館	11:45	真姿の泡湧水群（5分）
11:55	おたかの泡湧水園内 ・旧多本家住宅長屋門の縁側に集合 挨拶、次回の説明会		

見学箇所は  で囲っている箇所を決わります。





# こくぶんじジュニア歴史検定

国分寺市では、平成29年度以来、市内在住・在学の小学5・6年生を対象として、国分寺の歴史や文化財の学習を深めるために、時間内で30問（四択一式）を解く「こくぶんじジュニア歴史検定」を実施しています。令和4年度は9月3日に行いました。参加された子ども達は皆、熱心に問題に取り組み、成績優秀者は10月22日に開催した記念行事にて、教育長から表彰されました。

連続歴史講座を受講された皆さんも、ぜひチャレンジして下さい。（最終頁に解答があります）



武蔵国分寺跡史跡指定100周年記念



## 検定問題



☆問題はすべて選択問題です。1~4の番号で答えます。

☆問1から問30について、問題文をよく読んで答えを1つ選んでください。

☆解答用紙の解答欄には、選んだ番号にそれぞれ〇をつけてください。

☆解答時間は40分です。

国分寺市教育委員会　ふるさと文化財課

1. 次の文章は国分寺市内の遺跡について述べたものです。( )に当てはまるものの組み合わせとして、正しいものは次のうちどれでしょう。

今からおよそ(あ)の縄文時代中ごろ、気候が温暖化したことで食料が増え、国分寺市域も他の地域同様、人々が定住して大集落をつくるようになりました。国分寺市では(あ)より古い時代から、わき水が出ていいる国分寺崖線周辺に集落をつくり、狩りや(い)をして暮らしていたことが市内の遺跡からわかり、縄文時代の遺跡からは石器や(う)など当時の人々が使った道具や住居跡が発見されています。

- |                 |        |        |
|-----------------|--------|--------|
| 1 あ - 4~5000年前  | い - 掘溝 | う - 土器 |
| 2 あ - 約3万5000年前 | い - 船作 | う - 鉄器 |
| 3 あ - 4~5000年前  | い - 船作 | う - 鉄器 |
| 4 あ - 約3万5000年前 | い - 牧畜 | う - 土器 |

2. ハケと呼ばれる国分寺崖線は、豊かな緑と崖線下のわき水をもち、恵まれた自然環境を保っています。この地形は、川の流れが長い時間をかけて作り上げました。地形を作った現在の川の名前として、正しいものは次のうちどれでしょう。

- 1 神田川 2 多摩川 3 荒川 4 利根川

3. わたしたちが通っている学校がある国分寺市は、かつて武藏国と呼ばれていた地域のなかにあります。武藏国 の範囲として一番近いものは、次のうちどれでしょう。

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 東京都・山梨県・埼玉県の一部 | 2 東京都・千葉県・茨城県の一部  |
| 3 東京都・埼玉県・千葉県の一部 | 4 東京都・埼玉県・神奈川県の一部 |

4. 東山道武蔵路の交通について述べた文として、正しいものは次のうちどれでしょう。

- 1 東山道本道と武藏国府をつなぐ道として東山道武蔵路がつくられ、主に役人が利用した。
- 2 東山道本道と武藏国府をつなぐ道として東山道武蔵路がつくられ、主に近隣に住む人々が生活のために利用した。
- 3 幕府と各地方を結ぶ道として東山道武蔵路がつくられ、武士がさかんに利用した。
- 4 幕府と各地方を結ぶ道として東山道武蔵路がつくられ、行商のためにさかんに商人が利用した。

5. 武藏国分寺がはじめて建てられたのは、今からおよそ何年前のことですか。一番近いものは、次のうちどれで しょう。

- 1 900年前 2 1100年前 3 1300年前 4 1500年前

6. 聖武天皇は日本社会が混乱していた時に、仏教の力を借りて国を治めようとしてそれぞれの国に国分寺を建てるように命令(=国分寺建立の詔)を出しました。仏教の教えを説いた人は、次のうちだれでしょう。

- 1 キリスト 2 卓弥呼 3 ムハンマド 4 釈迦

7. 聖武天皇が国分寺建立の詔を出した時代として正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 飛鳥時代 2 白原時代 3 奈良時代 4 平安時代

8. 国分寺建立の詔の内容として正しいものは、次のうちどれでしょう。

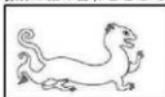
- 1 国ごとに五重塔をつくり、お経を10部写しなさい。  
2 僧寺には30人の僧侶を住まわせなさい。  
3 尼寺には10人の尼僧を住まわせなさい。  
4 郡司はいつも国分寺を監督しなさい。

9. 国分寺建立の語には、尼寺の正式な名前が書かれています。正式な名前として正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 法華眞言之寺 2 大般若經之寺 3 平等之寺 4 金光明四天王護國之寺

10. 武藏国分寺が今の場所に選ばれた理由の1つに、この場所が四神相応の地であることが考えられています。右の図は伝説上の動物である四神「白虎」です。白虎が守っていた方角と場所の組み合わせとして正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 東 — 作物がよく育つ場所 2 西 — 東山道武藏路  
3 南 — 野川 4 北 — 国分寺崖線



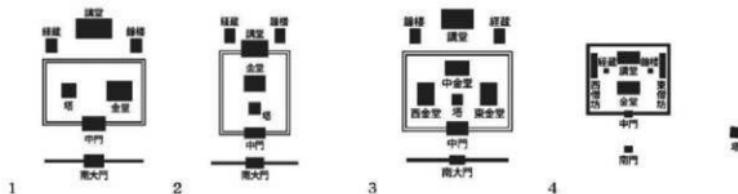
11. 武藏国分寺の主な建物が完成するまでに、どれくらいの期間がかかったと考えられていますか。一番近いのは次のうちどれでしょう。

- 1 16年 2 36年 3 56年 4 76年

12. 国分寺を監督した郡司は、国府で役人として働いていました。国府を現代の場所に例えた場合に当てはまるものは、次のうちどれでしょう。

- 1 國土交通省 2 都道府県庁 3 国会議事堂 4 最高裁判所

13. 武藏国分寺の僧寺の建物の配置(=伽藍配置)は、次のうちどれでしょう。



14. 武藏国分寺の中には、様々な役割をもつ建物がありました。建物の名前と役割の組み合わせとして正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 金堂 — 仏像が置かれている建物 2 講堂 — 大事なお経を保管しておく建物  
3 繼接 — 経典の勉強をしたり、修行する建物 4 経蔵 — 時間を知らせる鐘をつるした建物

15. 武藏国分寺がつくられた頃に作られた焼き物として間違っているものは、次のうちどれでしょう。





16. 次の文章は武藏国分寺の建物について述べたものです。( )に当てはまるものの組み合わせとして正しいものは、次のうちどれでしょう。

武藏国分寺の中心となる建物は、大陸からもたらされた高度な技術が使われています。金堂では、地盤を強くするために地業と呼ばれる基礎工事を行い、その上に( )を置き、柱を建てることで、しっかりと崩れにくい建物となっています。このような建物の構造を( )建物といいます。土台となる基壇の上面には( )と呼ばれる現在のレンガのようなものを敷いていました。

- |         |     |        |     |
|---------|-----|--------|-----|
| 1 あー擁立柱 | いー埠 | 2 あー礎石 | いー瓦 |
| 3 あー擁立柱 | いー瓦 | 4 あー礎石 | いー埠 |

17. 国分寺の造営事業の労働の中心となった人として、正しいものは次のうちどれでしょう。

- 1 僧侶 2 農民 3 貴族 4 武士

18. 次の文章は武藏国分寺跡の調査について述べたものです。( )に当てはまるものの組み合わせとして正しいものは、次のうちどれでしょう。

本格的な発掘調査は、今から66年前の( )31年にかけてからです。それまでは地上のようすを觀察するやり方が中心でしたが、土を慎重に振り起こし、むかしの人たちの生活の痕跡を調べました。調査がすすむと、武藏国分寺は( )ことがわかりました。

- |        |                          |
|--------|--------------------------|
| 1 あー大正 | いー全国に建てられた国分寺のなかでもっとも小さい |
| 2 あー昭和 | いー全国に建てられた国分寺の平均的な大きさである |
| 3 あー昭和 | いー全国に建てられた国分寺のなかでもっとも大きい |
| 4 あー大正 | いー全国に建てられた国分寺のなかでもっとも大きい |

19. 武藏国分寺跡からは、当時の僧侶や役人が使用したと考えられるものが見つかっています。奈良時代から平安時代、貴族や役人の服装の一部として使われたものは、次のうちどれでしょう。



1

2

3

4

20. 次の文章は武藏国分寺の建物について述べたものです。( )に当てはまるものの組み合わせとして正しいものは、次のうちどれでしょう。

武藏国分寺の造営事業には、つくられた当時の高度な技術が使われています。例えば、建物の重さに耐えられるように、異なる種類の土を交互に突き固めて土を積み上げる( )と呼ばれる方法によって建物の土台となる基壇が築かれました。この工法の様子は( )の金堂にある基壇の( )のはぎ取り標本観察施設で実際に見学することができます。

- |        |       |        |       |
|--------|-------|--------|-------|
| 1 あー礎石 | いー尼寺跡 | 2 あー版築 | いー僧寺跡 |
| 3 あー礎石 | いー僧寺跡 | 4 あー版築 | いー尼寺跡 |

21. 武藏国分寺の建物のために使用された瓦は、建物が再建されたり修理の時に使われたりしたものとされることがあります。使用された瓦の量として考えられるのは、次のうちどれでしょう。

- 1 10万枚 2 50万枚 3 100万枚 4 500万枚

22. 武藏国分寺の七重塔の高さはどのくらいあったと考えられていますか。次のうちどれでしょう。

- 1 30m 2 45m 3 60m 4 75m

23. 右の写真は東京都の文化財に指定されている觀世音菩薩立像です。7世紀後半の文化（=白鳳文化）の中でつくられたと考えられ、僧寺と尼寺の間を南北に通る東山道武藏路付近から発見されました。この仏像の素材として正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 銅 2 木 3 土 4 石



24. 下の写真は武藏国分寺跡から出土した瓦です。宇瓦（軒平瓦）は、次のうちどれでしょう。



25. 右の写真は国の重要文化財に指定されている仏像で、現在は年に1度の10月10日に見学することができます。この仏像が安置されている建物として正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 国分寺樂部堂 2 須音寺 3 金剛神社 4 八幡神社



26. 現在の国分寺の中にある万葉植物園は、万葉集にててくる植物を集めてつくりました。名前の由来となっている万葉集を説明しているものは、次のうちどれでしょう。

- 1 合戰（武士の戦い）についてかかれた物語集 2 天皇・貴族をはじめ庶民が詠んだ古代の歌集  
3 貴族が毎日の生活をしてした日記 4 進去の出来事を順番に並べて説明した歴史物語

27. 現在の国分寺が所蔵する『医王山経起』によると、武藏国分寺は（ ）と鎌倉幕府方との間で行われた戦いによって焼失しました。（ ）に入る人物は、次のうちどれでしょう。

- 1 足利尊氏 2 北条早雲 3 北条時宗 4 新田義貞

28. 鎌倉時代の道路である伝鎌倉街道は、武藏国分寺のある場所の上を通っています。ある場所として正しいものは、次のうちどれでしょう。

- 1 僧寺 2 尼寺 3 東山道武藏路 4 参道口

29. 恵ヶ瀬村分水は、全長43kmの( )上水から、新しく水路を分けて水を流した分水です。( )に入るのは、次のうちどれでしょう。

- 1 浅川 2 野川 3 多摩川 4 玉川

30. 次の文章は、恵ヶ瀬村分水について述べたものです。( )に当てはまるものの組み合せとして正しいものは、次のうちどれでしょう。

恵ヶ瀬村分水は、江戸に幕府が開かれてから約50年後の1657年につくられ、( あ )に利用されました。分水は、約300年のあいだ利用され、( い )40年代に入るとその役目を終え、水の流れは途絶えました。

- 1 あ - 飲み水用 い - 明治 2 あ - 農業用 い - 昭和  
3 あ - 飲み水用 い - 昭和 4 あ - 農業用 い - 大正

### こくぶんじジュニア歴史検定

## 解答用紙

受験番号

氏名

\*問題文の指示に従い、問1～問30の答えに当てはまる番号に○をつけてください。

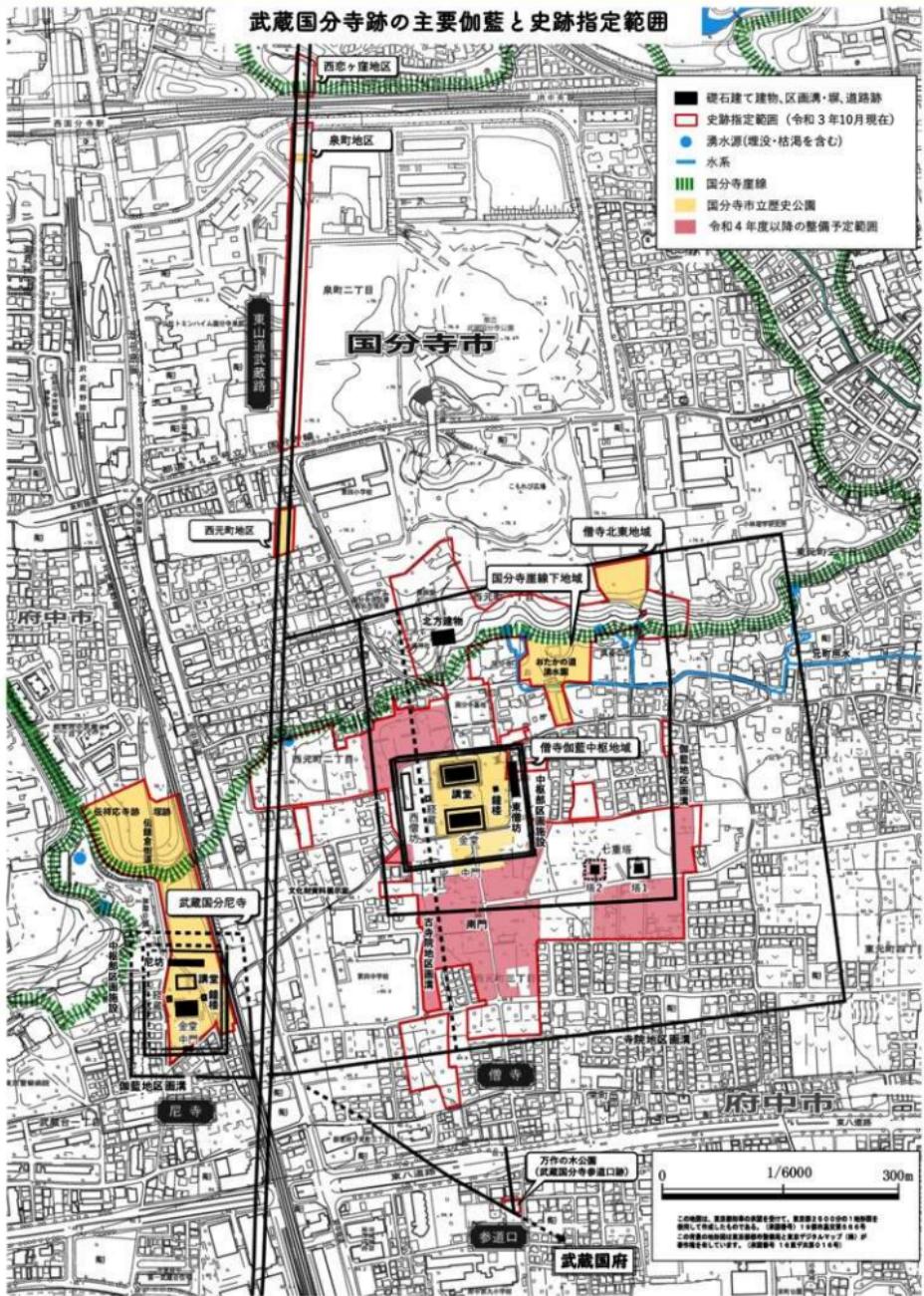
問1	①	2	3	4
問2	1	②	3	4
問3	1	2	3	④
問4	①	2	3	4
問5	1	2	③	4
問6	1	2	3	④
問7	1	2	③	4
問8	1	2	③	4
問9	①	2	3	4
問10	1	②	3	4

問11	①	2	3	4
問12	1	②	3	4
問13	1	2	3	④
問14	①	2	3	4
問15	1	2	③	4
問16	1	2	3	④
問17	1	②	3	4
問18	1	2	③	4
問19	1	②	3	4
問20	1	2	3	④

問21	1	2	③	4
問22	1	2	③	4
問23	①	2	3	4
問24	1	2	③	4
問25	①	2	3	4
問26	1	②	3	4
問27	1	2	3	④
問28	1	②	3	4
問29	1	2	3	④
問30	1	②	3	4

■ 25問以上…ゴールド 24問～11問…シルバー 10問以下…ブロンズ

## 武藏国分寺跡の主要伽藍と史跡指定範囲



# 伽藍中枢部周辺地域の基本設計

## ■ 対象範囲全城

- ① 史跡内の回遊性の向上
- ② 利便施設の適切な配置
- ③ 防犯防災対策の検討
- ④ 持続管理の軽減対策の検討

平成21年2月に策定した「史跡武藏国分寺跡(僧寺地区)整備実施計画」に基づき、国史跡武藏国分寺跡の第一期整備として示された事業計画のうち、伽藍中枢部周辺【中門地区・南門地区・北方(推定中院)地区・塔地区】を対象に、保存整備工事の基本事項を定めた指針です。南北の伽藍中軸線をより明確化し、史跡の範囲・広がりを示せるようになるとともに、より市民に親しまれ、活用される史跡とする整備目標を掲げました。

対象範囲全城で、史跡内の回遊性向上、利便施設の適切な配置、防犯・防災対策や持続管理の軽減対策の検討を行ってまいります。

## ■ 北方・推定中院地区 令和8~10年度

伽藍中枢部の北側は、法隆寺所蔵「大吉蔵経文」の奥書にある「中軸跡に比定され、国分寺崖下には大型掘立柱建物、須恵器大型を据えた特殊な建物跡のほか、伽藍中枢部の北西部を遮断する築地塀・溝跡、伽藍地西辺区画溝などが発見されています。これらの遺構を整備するとともに、現在、史跡へのメインアクセスが北側のJR国分寺駅・西国分寺駅からである現状を踏まえて、史跡主要部へのエントランスとして史跡全体、および周辺の開通道路(武藏国分尼寺・東山道式蔵路)の案内に行える空間といたします。

## ■ 伽藍中枢地区

大部分は、平成23~令和2年度に施工して整備を終了しました。中門東側の南東部は南門地区の整備工事にて整備し、講堂北側の北西部の2箇所については、武藏国分寺の整備を進めております。



## ■ 南門地区 令和4~7年度(右ページ部分)

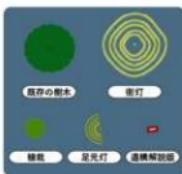
武藏国分寺の南側正面入口にあたり、基本設計の中心となる地区です。一部道路を廃道し、南門跡および参道跡を整備することにより、伽藍中枢地区に向けた視認性を確保するとともに、伽藍地南辺区画溝を表示して寺院(伽藍地)の南限を示します。さらに南方に離れた参道口方面(府中市栄町)への導線を誘導し、南門地区西侧に隣接する市立第四中学校付近は修復工事に比定されているため、その歴史性を踏まえた活用(体験学習・市民交流活動等)が行えるよう整備を進めます。

## ■ 塔地区 令和11年度~

国分寺のシンボルである七重塔が存在した地区です。武藏国分寺では、二つの塔遺構が発見されており、礎石が現存する塔跡1の本格的な整備は将来整備を行う予定ですが、平成15年に新たに発見された塔跡2や伽藍地区区画溝を表示することにより、伽藍地の南東隅にあたる当該地区に塔が存在したことを標記化させます。また、塔の南側は苑院・花園院に比定されていることから、道路の一部廃道を検討するとともに適正な樹木間伐等の綠地整備を行い、歴史性を踏まえた活用(体験学習・市民交流活動等)が行えるよう整備を進めます。

## 南門地区の実施設計（令和4～7年度）

■令和4年度  
完了  
南門地区全域の修景工事



### 西側エリア 令和5年度工事予定

ヤマグワ  
カスミザクラ  
ソメイヨシノ

伽藍地区画溝

ソメイヨシノ  
カスミザクラ

古代寺院空間の景観の演出や  
周辺住宅地の隣りとして植栽を行います。

### 参道エリア 令和6年度工事予定

南門・木橋

### 東側エリア 令和7年度工事予定

伽藍地区画溝

カスミザクラ  
ソメイヨシノ  
ソメイヨシノ

参道

南エントランス広場

0 25m

※写真はイメージです。

大型地形模型 (+VR・AR)



遺構解説板



名称標識



南門・木橋



四阿(あずまや)



南門地区 整備完了後



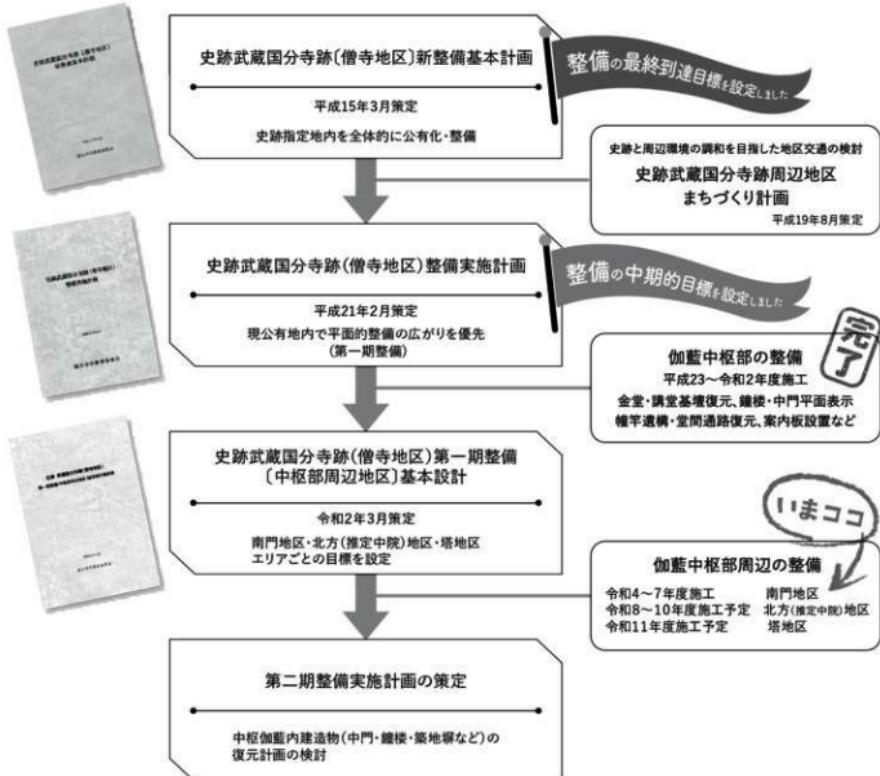
# 史跡整備事業の概要

僧寺地区的史跡整備は、平成15年3月策定の「史跡武藏国分寺跡(僧寺地区)新整備基本計画」に基づいて、当初は20ヶ年を事業期間と定めて着手しました。新整備基本計画には、史跡指定地内全体を公有化したうえで、現道を廃止し、中門・鐘楼・築地塀などの建造物復元を目指すことをうたっています。

しかし、史跡整備に先行して実施した発掘調査で新たな遺構の発見や、指定地の公有化事業の進展、東山道武藏路跡の国史跡としての附指定、開発に伴う僧寺北東地域や国分寺崖線下地域の追加指定など、その後、史跡を取り巻く様々な環境変化があり、具体的に着手可能な実行計画として、平成21年2月には「史跡武藏国分寺跡(僧寺地区)整備実施計画」を定めました。

そこでは、指定地内の現公有地内で、遺構の平面的な整備を広げ、史跡を広く体感できる姿を整備の中間的目標とし、まず平成23～令和2年度に伽藍中枢部の整備工事を行いました。

今後は、伽藍中枢部周辺地域に对象を広げて、整備実施計画で目標とした現公有地内の史跡整備を推進してまいります。



史跡武藏国分寺跡は、大正11年(1922)に国の指定を受けてから、令和4年(2022)で100周年を迎えることになりました。国分寺市のシンボルの一つでもあり、創建後1300年の歴史を語り継ぐため、この先の100年に向けて歴史公園の整備・活用に取り組んでまいります。

## 令和4年度に実施した主な武藏国分寺跡史跡指定100周年記念事業

事業名	
1	武藏国分寺跡史跡指定100周年記念オープニングイベント
2	おたかの道湧水園無料開放（オープニングイベント特別開放）
3	ゴールデンウィーク子どもイベント「なぞときbingo」
4	恋ヶ窪公民館歴史講座「国登録有形文化財となった沖本家住宅」
5	国分寺市ふるさと文化財課愛護ボランティア養成講座、もとまち公民館連続歴史講座
6	国分寺市新庁舎建設に伴う発掘調査現場見学会
7	文化財資料展示室のリニューアル
8	市外文化財めぐり（甲斐国分寺跡）
9	夏休み子どもプログラム「ぬりえ」
10	特別企画展「史跡武藏国分寺跡100年のあゆみ」
11	市史等の特別価格販売
12	夏休み子どもプログラム「レプリカをつくろう」
13	史跡指定100周年記念缶バッヂの作成
14	史跡指定100周年記念のぼり旗、横断幕、掲示シールの作成及び掲出
15	夏休み子どもプログラム「拓本教室」
16	ぶんじ子どもフェスタ「史跡ぬりえ」
17	武藏国分寺跡資料館・文化財資料展示室・東京都公文書館 3館展示スタンブラー
18	こくぶんじジュニア歴史検定
19	バナーフラッグの掲出
20	令和3年度に史跡指定100周年を迎えた諸国国分寺跡のパネル展示
21	むさしのガーテン紀行 オープンカフェ「ミニガイド」
22	市内文化財めぐり
23	おたかの道湧水園無料公開
24	幡の作成
25	秋の子ども向けイベント「拓本教室」
26	秋の子ども向けイベント「歴史なぞときクイズラリー」
27	秋の子ども向けイベント「レプリカをつくろう」
28	東京都公文書館との共催企画展「史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～」
29	武藏国分寺跡史跡指定100周年記念講演会
30	本多公民館歴史講座（第1回）「本多難軒と国分寺の地域医療」
31	本多公民館歴史講座（第2回）「玉川上水と国分寺市内の分水」
32	観光考古学会パネルディスカッション「武藏国分寺跡の保存と観光活用」
33	武藏国分寺跡史跡指定・住田正二先生誕100周年記念シンポジウム「武藏国分寺の造営と文字瓦」
34	光公民館歴史講座「二五穴と胎内掘りの技術」
35	令和4年度文化講座「思いを描く天平の華 武藏国分寺のはなし」（市民生活部文化振興課主管課事業）
36	第48回東京都遺跡調査・研究発表会
37	並木公民館歴史講座「玉川上水と『上水記』」

①

②

③

④

⑤

⑥

フ  
ィ  
ー  
ル  
ト  
ワ  
ー  
クジ  
ュ  
ニ  
ア  
使  
用  
規  
定登  
録

100周年記念事業

## 武藏国分寺跡史跡指定100周年記念行事（文化財関連事業）

史跡武藏国分寺跡の価値と保存について  
オープニングイベント記念講演会  
主催：国分寺市・国分寺市教育委員会

国登録有形文化財となった沖本家住宅  
志ヶ窪公民館歴史講座  
主催：国分寺市教育委員会連携企画

新庁舎建設に伴う発掘調査現場見学会  
主催：国分寺市・国分寺市教育委員会ふるさと文化財課  
ティケイトレード株式会社

武藏国分寺の成り立ちと史跡 武藏国分寺跡  
もとまち公民館 連続歴史講座

**本多雖軒と国分寺の地域医療**

武蔵国分寺跡史跡指定 100周年歴史講座①

令和4年 10月29日(土) 13:30~15:30 (開場13:00~)

会場：本多公民館 定員：100人

主な内容：本多雖軒と国分寺の地域医療について、歴史的背景やその影響などを詳しく説明します。

お問い合わせ：本多公民館 042-321-0095

**玉川上水と国分寺市内の分水**

武蔵国分寺跡史跡指定 100周年歴史講座②

令和4年 11月12日(土) 13:30~15:30 (開場13:00~)

会場：本多公民館 定員：100人

主な内容：玉川上水と国分寺市内の分水について、歴史的背景やその影響などを詳しく説明します。

お問い合わせ：本多公民館 042-321-0095

**本多雖軒と国分寺の地域医療**

主催：東京都公文書館・国分寺市教育委員会連携企画

日本語解説

会場：本多公民館 歴史講座①

主催：東京都公文書館・国分寺市教育委員会連携企画

**玉川上水と国分寺市内の分水**

主催：東京都公文書館・国分寺市教育委員会連携企画

日本語解説

会場：本多公民館 歴史講座②

主催：東京都公文書館・国分寺市教育委員会連携企画

**玉川上水と『胎内堀の技術』**

武蔵国分寺跡史跡指定 100周年記念講座 史跡講座

令和5年 3月12日(日) 13:00~15:00 (開場12:30)

会場：龍本公民館 定員：50名

主な内容：玉川上水と『胎内堀の技術』について、歴史的背景やその影響などを詳しく説明します。

お問い合わせ：龍本公民館 042-321-0095

**玉川上水と『上水記』**

武蔵国分寺跡史跡指定 100周年記念講座 史跡講座

令和5年 3月12日(日) 13:00~16:00 (開場12:30)

会場：並木公民館 定員：50名

主な内容：玉川上水と『上水記』について、歴史的背景やその影響などを詳しく説明します。

お問い合わせ：並木公民館 042-321-9971



主催：国分寺市教育委員会ふるさと文化財課・光公民館共催事業

主催：東京都水道歴史館・国分寺市教育委員会連携企画

### 市外文化財めぐり

市内文化財めぐり

特別展示  
史跡武藏国分寺跡 100 年のあゆみ  
武藏国分寺跡資料館

式図書国分寺跡 国史跡指定100周年記念イベント  
主催・国分寺市・国分寺市教育委員会

**武藏国分寺跡資料館**

## 夏休み子どもプロケラム

レプリカをつくろう  
夏・土曜のブリカつくってよう  
8月(土)  
10:00 - 11:00  
11:15 - 12:30  
13:30 - 15:30  
16:00 - 17:00

おもちゃの模型・模型スペース  
小・中学生用

ぬり絵をしよう  
ぬり絵をしている人が日記をちゃんとなど  
のり絵をしよう  
7月22(土)～8月4(日)  
8月7(土)～11(日)～13(日)～14(日)  
8月21(日)～27(日)～28(日)

作品発表会  
あなたのぬり絵を展示してアカルナイトで見ます  
8月23(日)～24(日)～30(日)～31(日)  
8/7(土)～11(日)～13(日)～14(日)  
8/21(日)～27(日)～28(日)

主催：国分寺市教育委員会ふるさと文化財課

**おたかの道湧水園**

## 無料公開

【開催期間】令和4年10月12日(水)～11月6日(日)  
【開園時間】午前9時～午後5時(入園は午後4時45分まで)

【開園料】100周年記念として、園内の10月12日～11月6日の期間は・成田市立図書館・成田市立図書室・成田市立図書室付属施設として、園内休憩所やトイレが無料になります。

【マップ】アガリにようやく現れます  
マップナビゲーションで目的地までのルートを確認して、目的地の10月12日～11月6日の期間は・成田市立図書館・成田市立図書室・成田市立図書室付属施設として、園内休憩所やトイレが無料になります。

【地図】  
100周年記念  
7月30日(土)～2128(日)  
武藏国分寺跡資料館  
10月12日～11月6日

史跡武藏国分寺跡  
100年のあゆみ  
7月30日(土)～2128(日)

おたかの道湧水園無料公開  
共催：国分寺市教育委員会ふるさと文化財課

史料に見る国分寺のあゆみ  
江戸時代の村々

令和4年10月21日(金)～12月20日(火)

主催：東京都公文書館企画展示室  
共催：国分寺市教育委員会ふるさと文化財課

史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～

東京都公文書館企画展示室  
9月～12月まで  
日程：毎週木曜日  
会場：東京文化財ワーキング2022 参加企画展

史料に見る国分寺のあゆみ～江戸時代の村々～  
東京文化財ワーキング2022 参加企画展  
共催：東京都公文書館・国分寺市教育委員会

100周年記念  
展示・講演会

100周年  
武藏國分寺跡

100周年記念  
展示・講演会

子ども向け  
イベント

文化財めぐり

展示  
スタンプラリー

主催：国分寺市・国分寺市教育委員会

武藏国分寺跡 史跡指定100周年記念講演会  
主催：国分寺市・国分寺市教育委員会

観光考古学会パネルディスカッション 武藏国分寺跡の保存と観光活用  
主催：観光考古学会  
共催：国分寺市、国分寺市教育委員会、武藏野文化協会

武藏国分寺跡史跡指定・住田正二先生生誕100周年記念シンポジウム  
武藏国分寺の造営と文字瓦

主催：国分寺市教育委員会・住田古瓦考古学研究支援委員会  
共催：公益財団法人交通研究協会

東京都遺跡調査・研究発表会

第48回

武藏国分寺跡の史跡指定に尽力した  
郷土史研究者「福村坦元」の事績

酒井 清治(東京大学名誉教授)  
平成17年9月15日

入场無料 事前申込制

福村坦元が文部省時代に手がけた  
（1）福村の「古墳と古文化」  
（2）「古墳と古文化」の著書  
（3）「古墳と古文化」の著者

会場と日程  
令和5年  
1月22日(日)  
午前10時～午後4時35分

会場  
国分寺市立すみホール  
(国分寺市南町3-30-12)

会場地図

主催 東京都教育委員会、国分寺市教育委員会  
共催 福村坦元人蔵品展示会・スポーツ文化事務室・東京都歴史文化センター

東京都遺跡調査会・研究委員会

主辦：臺東縣教育委員會、關山市教育委員會

主催：東京都教育委員会・国分寺市教育委員会  
共催：公益財團法人東京都スポーツ文化事業団・東京都埋蔵文化財センター

天平の記憶 つないだ100年 つなぐ100年



※文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用することができます。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

---

武藏国分寺跡 史跡指定 100 周年記念  
歴史講座「武藏国分寺の成り立ちと史跡武藏国分寺跡」記録集

発行日 令和5年(2023)3月31日

編 集 国分寺市教育委員会ふるさと文化財課

〒 185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10

武藏国分寺跡資料館内

電話 042-300-0073 FAX 042-300-0091

Email bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp

発 行 国分寺市教育委員会

印 刷 株式会社 タマタイプ

---

・・・ ほか未来のために今を大切に紡ぐ・・・



1997